

自閉スペクトラム障害児・者のきょうだいの心理社会的発達  
－家族内・外で体験する葛藤に着目して－

2024年1月11日

白百合女子大学大学院 文学研究科

博士課程後期 発達心理学専攻

根本泰明

## 目次

図の一覧 iii

表の一覧 iv

### 序論

はじめに . . . . . 2

### 第一章 本論文の理論的背景

第一節 兄弟姉妹ときょうだい . . . . . 4

第二節 ASD 児・者のきょうだいの特徴 . . . . . 7

第三節 同胞葛藤と背景理論 . . . . . 11

第四節 葛藤から見る心理社会的発達 . . . . . 15

第五節 ASD 児・者のきょうだいの家族内の位置付け . . . . . 17

### 第二章 本論文の目的, 構成, 方法論

第一節 きょうだい研究の問題点 . . . . . 20

第二節 本論文の目的 . . . . . 22

第三節 本論文の構成 . . . . . 23

第四節 本論文の方法論 . . . . . 28

### 本論

### 第三章 研究 I 自閉スペクトラム障害児・者のきょうだいから見た自閉スペクトラム障害 児・者と両親の関係性

第一節 問題と目的 . . . . . 34

第二節 方法 . . . . . 35

第三節 結果と考察 . . . . . 43

第四節 研究 I の全体考察 . . . . . 54

### 第四章 研究 II 自閉スペクトラム障害児・者がいることによってきょうだいが両親との 関係性において体験する葛藤過程

第一節 問題と目的 . . . . . 60

第二節	方法	61
第三節	結果と考察	67
第四節	研究IIの全体考察	80
第五章	研究III 自閉スペクトラム障害児・者がいることによってきょうだい自閉スペクトラム障害児・者との関係性において体験する葛藤過程	
第一節	問題と目的	87
第二節	方法	88
第三節	結果と考察	96
第四節	研究IIIの全体考察	115
第六章	研究IV 自閉スペクトラム障害児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する葛藤過程	
第一節	問題と目的	121
第二節	方法	122
第三節	結果と考察	132
第四節	研究IVの全体考察	153
結論		
第七章	総括	
第一節	各研究で明らかにしたこと	161
第二節	本論文の総合考察	169
第三節	本論文の限界と今後の課題	188
第四節	本論文の意義	189
文献		191
要約		199
付記		201
謝辞		202
付録		203

## 図一覧

Figure 1	本論文の構成	25
Figure 2	ASD 児・者のきょうだいから見たカップル性を中心とした ASD 児・者と両親の関係性	44, 162
Figure 3	ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する葛藤を通して本当の気持ちを出していくプロセス	69, 164
Figure 4	ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス	97, 166
Figure 5	ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する語りの葛藤を通して昇華へと向かうプロセス	134, 168
Figure 6	ASD 児・者がいることによってきょうだいが体験する葛藤過程の全体像結果図	170

## 表一覧

Table 1	研究 I 研究協力者	35
Table 2	分析ワークシート例①	40
Table 3	ASD 児・者のきょうだいから見たカップル性を中心とした ASD 児・者と両親の 関係性 概念リスト	43
Table 4	研究 II～IV 研究協力者	61, 88, 122
Table 5	研究 II 分析対象データ	63
Table 6	分析ワークシート例②	66
Table 7	ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する 葛藤を通して本当の気持ちを出していくプロセス概念リスト	68
Table 8	研究 III 分析対象データ	90
Table 9	分析ワークシート例③	93
Table 10	ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験 する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス 概念リスト	96
Table 11	研究 IV 分析対象データ	124
Table 12	分析ワークシート例④	128
Table 13	ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する 語りの葛藤を通して昇華へと向かうプロセス 概念リスト	133
Table 14	5つの家族像と各家族像におけるきょうだいの体験	176

# 序論

## はじめに

近年、発達障害の概念はすでに大衆の間に流布し、医療領域をはじめとした心理臨床の場においても家族や患者本人が「子どもは／自分は発達障害なのではないか」と心配になって私たちの目の前に現れることが少なくない。発達障害はそれほどまで身近になり、決してめずらしいものではなくなっている。

発達障害の中でも自閉スペクトラム障害に関する研究では、障害児・者だけを対象とするのではなく、その家族も対象としている (McHale & Gamble, 1989; 三原, 2000; 高瀬・井上, 2007 など)。障害が家族にもたらすインパクトは看過できないものであり、一緒に生活をする家族にも何らかのストレスや困難を抱えていることが指摘され、様々な領域での共通理解となっていると言えるだろう (Ferraiori & Harris, 2010; Tozer, Atkin & Wenham, 2013 など)。しかし、ここで対象となっている「家族」とは、その両親、特に母親が中心であり、同じ家族である兄弟姉妹が対象となることは相対的に少なかった (三原, 2000)。

家族という言葉が表す関係性は、夫婦関係、親子関係、兄弟姉妹関係といくつかの関係性が複層的に折り重なっている。これらの関係性は、心理学の領域で「こころ」を形作るものとして位置付けられ、個人によって異なる、時にやっかいなこの「こころ」というものが、実に多彩な関係性によってその形を成していくと考えられている。特に親子関係、つまり母子関係や父子関係はその人の心理社会的発達に大きな影響を及ぼすことは周知の事実であり、従来の研究、そして臨床場面で関心の的になっていると言えるだろう。しかしこの心理社会的発達という論点でも「兄弟姉妹関係」というのは少し傍に置かれてきているように思われる。兄弟姉妹関係とは、親子関係のような「タテ」ではなく、また夫婦関係のような「ヨコ」の関係でもない特殊な関係性で、「ナナメ」の関係であるとも表現される (依田, 1990)。この特殊な関係性は、本当に脇に置いておけるほど、心理社会的な発達にはあまり関与していないのだろうか。兄弟姉妹関係は親子関係に比べると相対的には心理社会的な発達に与える影響の程度は少ないと言われているが、影響を与えないというわけではない (藤本, 2009)。しかし、さらにここに障害というインパクトが合わさると、どれほどの影響が与えられるのだろうか。

ここで臨床に目を移すと、私たちが臨床の場面で会う患者やその家族は、たとえばサイコセラピーであっても、その多くが週に一度の50分だけである。場合によっては2週間に一回50分、月に一回50分かもしれない。しかし、それ以外の時間は、彼ら／彼女らは日常を送っているのである。その日常には、患者本人とその両親、そして兄弟姉妹が存在し

ている。サイコセラピーという限られた場面でさえ、患者と顔を合わせているとセラピストは様々な情緒を体験する。これが日々の生活の大部分の時間、そうした関係性にあると考えると、そこに何らかの困難が生じることは想像に難くない。

多くの心理臨床場面で支援者は「待っている側」であり、その場に現れないからといって障害児・者の兄弟姉妹（以下、平仮名で きょうだい とする）に苦悩がないとするのは早計ではないだろうかと思案する。事実、苦悩があることは患者のきょうだいのセルフ・ケアグループが多く存在していることから自明であろう。しかしこの状況は、極論を言えばきょうだいは社会から「セルフ・ケアを強いられている」とも言える。家族の中では障害児・者当人とその親が困難を抱える主人公であり、きょうだいは脇役で陽の目を見ないという従来の関係性（三原, 2000; 大瀧, 2012）にあるだけでなく、「障害がないきょうだいは自分でなんとかするように」と置き去りにされているようにも見える。

家族という文脈の中で、きょうだいが何らかの困難やきょうだい特有の体験をしていることに疑いの余地はない。そうした体験を振り返って言語的に表現可能な青年期以降のきょうだいの語りから彼ら／彼女らの体験に迫り、きょうだいが家族の中で体験する難しさや、その難しさからいかに心理社会的な発達を遂げているのかを明らかにし、その発達へと踏み出す一歩の一助となるような研究としたい。

本論文では障害児・者を持つきょうだいからのインタビューを M-GTA により多角的に分析し、さらにそれを精神分析的に考察することにより、きょうだいの抱える問題を立体的に描き出していく。



## 第一章 本論文の理論的背景

### 第一節 兄弟姉妹ときょうだい

まず初めに本論文における用語の記載を示す。

障害を持つ当人・・・障害児・者

障害児・者の兄弟姉妹・・・平仮名表記の きょうだい

家族の中に障害児・者がいない兄弟姉妹・・・兄弟姉妹

以下、このような表記で記述を進めていく。

一般的に兄弟姉妹は同じ親から受け継ぐ遺伝子のうち約 50%を共有していると言われて  
いる（安藤, 2003）。それでもその心理的な特徴は異なり，別個の人として成長していくこ  
とは周知の事実である。これは遺伝だけで全てが決まるのではなく，環境との相互作用，  
つまり関係性の質も個々人の差異をもたらす重要な要因であると考えられてきている（藤  
本, 2009）。

兄弟姉妹にまつわる研究については，藤本（2009）が包括的にまとめ，Sanders, R.の  
「Sibling Relationship」（2004）を参考に兄弟姉妹についての研究や理論について紹介し  
ている。Sander, R.（2004）は，従来の兄弟姉妹に関する心理学的研究の流れについて，  
個別の事例を用いた臨床的研究から，統計学的検定を用いた量的研究に流れていると指摘  
し，前者は精神分析的研究，家族心理学的研究が，後者を発達心理学的研究が中核を担  
っていると説明している。この中でも，Freud, S に始まる精神分析的な視点においては，  
Levy, D. M.（1936）が「同胞葛藤 Sibling Rivalry」として定式化し，兄弟姉妹関係は本  
質的に葛藤的で競争的で有り，親の愛情を奪い合う，時に相手の死を渴望するほどまでの  
強い憎しみの感情を包含する関係性であると定義づけた。

一方，発達心理学的研究の初期には，兄弟姉妹の心理的な特徴が単なる兄弟姉妹の付置  
によって左右されるという考え方が大筋であったが（依田, 1960），その後必ずしも実証的  
な研究の支持が得られていないという指摘も出てきた（白佐, 2004）。その結果，次のよう  
な批判が生じた。主な批判として藤本（2009）があげたのが，①この考え方が，兄弟姉妹  
の関係性の複雑さを過度に単純化していること，②この考え方が兄弟姉妹の関係性という  
より，個々の兄弟姉妹，すなわち個人に焦点をあてたものであるという二点である。必ず

しも出生順位や性別によって性格の差が規定されないことの背景には、きょうだい関係の複雑さに加え、社会全体が多様性の受け入れに傾倒しているからこそ起きているようにも推察される。つまり、「長男なんだから泣かないでお利口にしなさい」という圧力は、近年必ずしも家庭で見られる雰囲気ではないように思われ、そうした社会的な背景によっても結果が左右されていると考えられる。いずれにせよ、こうした批判を受け、兄弟姉妹の発達心理学的な研究は、その単純化や一般化には限界があることにも行き当たり、個別性、多様性に取り組む質的研究の重要性も再認識されてきている。同時に、ここには数量的な研究と質的研究のどちらが優れているかという不毛な議論の余地はなく、いずれも相補的であることを強調したい。

ここで生じてくる疑問は、兄弟姉妹関係からみた個人の心理社会的な発達がこのようにただでさえ多様性にあふれ、複雑であるのにもかかわらず、「はじめに」でも述べたように兄弟姉妹が障害を持っていたらどうなるのか、という問いである。遺伝と環境の日々の相互作用の中で個人が発達していくというのであれば、そこに異質なものとして存在する「障害」を前に、家族が直面する「障害」という困難を前に、きょうだいの心理社会的な発達とはどのようになっていくのだろうか。

一般的な兄弟姉妹の関係性とは他者との競争や協調など、社会的なスキルを習得する機会であると言われている（西村・原, 1996）。しかし、きょうだいの場合、その機会を獲得することに困難が生じる場合があり、「特有の悩み」が存在すると考えられている（Meyer & Vadasy, 1994）。

この「特有の悩み」を抱えているきょうだいの研究については、柳澤（2007）、大瀧（2011）や竜野・山中（2016）、桑山（2017）がレビューしたように、①きょうだいの役割について、②きょうだいを受ける肯定的-否定的影響について、③きょうだいのより深い内的な側面についてなど、いくつかの観点に分けることができる。

きょうだいの役割について着目した研究では、三原（2000）がきょうだいの役割として「家族の心理的安定、両親に変わって理解する立場、訓練のための援助者、収容施設への安易な入所を避ける」といった4点を挙げており、きょうだい家族の中での調整役としての役割を担いやすいことを強調している。また、高瀬・井上（2007）も「教育者・支援者、または親亡き後の養育代行者としてのそれから、支援される当事者に変化してきている」と指摘した。さらに、橘・島田（1998）はきょうだい53名、兄弟姉妹110名に独自

の質問項目を用いて意識比較を行った結果、昨今の日本社会における少子高齢化、地域で抱える動きから見た場合には成人後の障害児・者の「介助者」としての役割は避けられないと指摘した。これらのきょうだいの体験は、「特別な体験をしている存在」(大瀧, 2011)と表現され、きょうだいは生きていく上で様々な役割を担うことになると考えられている。

きょうだいの役割という観点からの研究の他には、きょうだいを受ける肯定的影響や否定的影響に焦点を当て、きょうだいの適応に関わる要因の検討も行われてきている。例えば、養育者が障害児・者の養育に時間と注意を費やしているために、きょうだいは寂しさや不満・孤独・見捨てられ不安を感じ、障害を持つ同胞との親の愛情の奪い合いをすることに罪悪感を抱きやすいといったことも指摘されている (McHale & Gamble, 1989; Rosenberg, 2000; 宮本, 2007)。他にも、きょうだいは兄弟姉妹と比較してストレスレベルが高く、攻撃性が強く、けんかや非行など問題行動が多く、抑うつ傾向も高いという指摘や(Breslau & Prabucki, 1987; Marks, Matson, & Barraza, 2005; Opperman & Alant, 2003), その一方で障害者のケア役割などを通じて高い社会的能力を培っていることから、肯定的な自己概念や高い自尊感情をもつという肯定的な面が強調される場合もある (Gallagher, Powell, & Rhodes, 2006; Hannah & Midiarecky, 2005)。このように、肯定的な影響／否定的な影響という見方は、どの側面を切り取るかによって影響の有無が左右されているものと考えられ、きょうだいの全体像を捉えるには至っていないと考えられる。また、高瀬・井上 (2008) も指摘しているように、きょうだいの受ける肯定的な影響／否定的な影響という一元的な考察はどちらの側面を取り上げても偏見が生じうると考えられている。

これまでの定量的研究ではきょうだいが直面する問題やその要因を全般的に捉えてきたため、きょうだいのより深い、内的な側面についての検討は不十分であるという認識も広まり、2000年代に入ってから質的研究が多く見られるようになってきた。山本・金・長田 (2000) は、重症心身障害者のきょうだい 10 名にライフサイクルの中でどのような体験をし、その体験をどのように感じていたのかを明らかにするためにインタビュー調査を行った。その結果、きょうだいは 5 歳頃までに障害児・者の障害を自覚し、小学生の時点では家事や障害児・者の面倒を見るなどの役割を担い、母親が障害児・者への付き添いが多いことから寂しさを感じ、時に身体症状に及ぶ例もあったこと、きょうだいの年齢や出生順位による違いは明確にはならなかったことを報告した。

また原田・能智 (2012) は、きょうだいを生きることとはどういうことなのかをテーマ

として青年期にいるきょうだい 2 名と第一筆者が複数回語り合い、共同構築的なインタビューから考察した。その結果、個別の経験としては多岐にわたるが、根底に通ずるものとして、障害児・者を抜きにした人生を歩むことは困難であり、障害児・者の生も分け合い自らのものとして引き受ける「二重のライフストーリー」を生きているという一面があると述べた。このように、きょうだいがその人生の様々なタイミングで特有の心理的な体験をしており、その発達に影響を与えていることがうかがえる。ただし、きょうだいへの影響を考える際に、障害の種別や程度のこととも考慮した方が、対象は限定されるものの相対的に説明力が上がるものと思われる。中でも、自閉スペクトラム障害は、社会性の障害、コミュニケーション能力の障害、想像力の障害などを特性として有しており、これらの障害によって対人関係上に問題を生じやすいと言われている。こうした特性はきょうだいとの関係、ひいてはきょうだいに与える影響も大きいものと考えられ、実際に ASD 児・者ときょうだいの間には独特なきょうだい関係が築かれる可能性が指摘されている (Orsmond, Kuo, & Seltzer, 2009)。したがって、本論文では自閉スペクトラム障害 (以下, ASD とする) に焦点を当てて検討する。

## 第二節 ASD 児・者のきょうだいの特徴

ASD 児・者のきょうだいを焦点に当てた研究では、きょうだいのさまざまな特徴やきょうだいと ASD 児・者の関係性について述べられているものが多い。

McHale, Sloan & Simeonsson (1986) では、自閉症児・者のきょうだい、知的障害児・者のきょうだい、兄弟姉妹、各 30 名に対して自身のきょうだい関係をどのように捉えているのかについてインタビュー形式でたずねたところ、3 つのグループに質的な差は自己報告されなかったと指摘した一方で、Kaminsky & Dewey (2001) では自閉症児・者のきょうだい、ダウン症候群児・者のきょうだい、兄弟姉妹、各 30 名を対象にきょうだい関係質問紙と Gilliam 自閉評価スケール、適応行動質問紙をたずねた結果、ASD 児・者のきょうだいは他の 2 群と比べて親密性や向社会行動、心のこもった配慮が少ないことが明らかとなったことに加えて、ASD 児・者のきょうだいとダウン症候群のきょうだいは障害児・者に対して賞賛する気持ちが強いこと、関係性の中で口論や競争が少ないことを指摘した。

また Tomeny, Ellis, Rankin & Barry (2016) は、45 名の ASD 児・者のきょうだいと 37

名の知的障害児・者のきょうだいを対象に、自身のきょうだい関係の捉え方が障害児・者へのサポート姿勢や人生の満足度、ストレスやうつ症状にどのような影響を与えながら違いがあるのかについて調査した。その結果、きょうだい関係をポジティブなものとして捉える割合がASD児・者のきょうだいが少ないこと、きょうだい関係をポジティブなものとして捉えているほど障害児・者をサポートする姿勢が多く、人生満足度も高いことを示唆した。また、ネガティブなものとして捉えているほどストレスやうつ症状が高まりやすいことも示唆した。

Toseeb, McChensney & Wolke (2018) は大規模なデータ収集を行い、きょうだい間のいじめの発生率と精神病理的な問題の相関を検討した。収集されたデータのうち、ASD児・者は475名で、ASDを持たない子どもは13,702名を対象に分析を行った結果、ASD児・者の方がきょうだいからいじめられる／きょうだいをいじめる傾向が強く、いじめに関与しない場合に比べて向社会的なスキルの低下や、心理的・行動的問題が増加する傾向にあることを示した。つまり、ASD児・者とそのきょうだいの関係には、その関係構築に問題が生じやすいことが示唆された。

一方で、McHale, S. M., Sloan, J., & Simeonsson, R. J (1986) は障害を持たない兄弟姉妹、ASD児・者のきょうだい、知的障害児・者のきょうだいの各30名に対して自身のきょうだい関係についてどのように捉えているのかを評価してもらい差を検討したところ、ASD児・者のきょうだいと知的障害児・者のきょうだいには障害種別によって差が見られなかったと報告した。このように障害種別によって大きな差は見られないという指摘もあることから、Shivers, Jackson & McGregor (2018) は従来のASD児・者のきょうだいと、その他の障害の比較を扱った研究のメタ分析を行った。69個の研究のメタ分析の結果、ASD児・者のきょうだいにおいて適応や注意／多動性、問題行動の外在化、コーピング、家族機能についてはあまり差がなかったが、心理的な問題や信頼感、社会機能、きょうだい関係については有意に望ましくない結果であったことを指摘した。

以上のことから、どのような側面からASD児・者のきょうだいを捉えるかによって、障害特性の差が浮き上がりやすさが変わってくるものの、総じてASD児・者との関係性において困難が生じやすいと結論づけられる。

また、Ferraiori & Harris (2010) がきょうだいへのASDが与える衝撃について、ライフステージごとに質的に検討している。きょうだいの認知発達や情緒発達は、きょうだいのASD児・者の特性によって生じる行動の捉え方、あるいはその行動を妨げようとする姿

勢に影響を与えていたこと、ASD 児・者の知的能力や適応行動、相互交流の乏しさは、きょうだい関係に大きな影響を与えており、これらの困難は成人期にも続く場合があること、きょうだいが ASD 児・者の健康維持の責任を負っていることなどを明らかにした。さらに、富永・松永（2013）は、自閉症児・者のきょうだい 10 名にインタビュー調査を行い、ライフステージにおけるきょうだい関係の変遷ときょうだい関係に影響を及ぼす要因について検討した。その結果、幼児期から ASD 児・者の障害にきょうだいは気づいており、学童期から思春期にかけてきょうだいの関わりは広がるものの ASD 児・者に対する否定的な感情を抱きやすいこと、思春期以降になると ASD 児・者への客観的な理解が深まり、青年期以降では一緒に外出したり情緒的な関わりが増えていたことを明らかにした。そして現在は肯定的にきょうだい関係を受け止めている者がほとんどであり、そうしたきょうだい関係に影響を及ぼす要因としてきょうだいに対する親の態度や、ソーシャルサポート、社会的背景を示唆した。加えて、Tozer, Atkin & Wenham（2013）は、21 名の ASD 児・者のきょうだいと、そのうち 12 名の ASD 児・者に対して、家族生活における経験と、きょうだい／ASD 児・者と共に成長していくことの特別な体験、最近の関係性や将来の希望・心配についてインタビュー調査を行い、ナラティブ・アプローチで分析を行った。なおここでのナラティブ・アプローチとは、過去～現在～未来を歴史的に繋げなおし、特定のテーマからデータにあたって研究協力者間における共通点と相違点を導き出すことを指している。その結果、きょうだいと ASD 児・者の関係性は傷つきやすく、きょうだいが幼少期にどのような経験をしていたのかがこのことを理解する上では基本的な部分であること、きょうだいは ASD 児・者のことをサポートするという義務感とともに、他の社会的・家族内義務も果たす必要があると感じていると指摘した。

Stampolitzis, Gerorgia, Antonopoulou, Kouvava & Stravroula（2014）は、ASD 児・者のきょうだいの心理社会的な特徴（自己肯定感、社会性、ASD 児・者への友人の態度）を捉えるために、きょうだい、母親、父親の各 22 名を対象に、児童・青年の自己知覚についてときょうだい間の問題についてインタビューを行った。その結果、ASD 児・者のきょうだいに情緒的・行動的問題を示す人もいたが、多くは良い関係を持っていること、日々のルーティンを変えて欲しいと思っていること、親はきょうだいがよく適応していると感じていること、友人からの受け入れには満足していないことなどを論じた。

これらの知見からは、ASD 児・者のきょうだいが ASD 児・者との日々の関わりの中で ASD 児・者やきょうだい関係の在り方が変化していくこと、その変化にはきょうだいの発

動的な変化が伴っており、それを支えるものとしての親や社会があると考えられる。きょうだい関係は、他の家族内の関係性と同様に、きょうだいと ASD 児・者の二人だけで展開するのではなく、家族全体の文脈の中に息づいていると考えられる。したがって、家族との関係にも着目しながらきょうだいの体験に迫る必要があるといえる。

こうした視座にたち、家族全体との関係について検討なされている研究もわずかにだが見られている。たとえば古川・古賀（2006）では、小学生以上のきょうだい 50 名・親 50 名を対象に、きょうだいには Olson の作成した FACESIII という家族機能を評定する尺度と日本語版孤独感尺度、Alice & Pope が作成した自尊心尺度、親の態度評価で得られた結果からきょうだいが抱く家族観を検討した。ここでの家族観とは、きょうだいからみた家族全体の凝集性や、その凝集性に影響を与える親の態度ということを示している。また、この凝集性は「家族成員がお互いに対して持つ情緒的な絆」と定義されている。結果として、きょうだいから見ると家族の凝集性の高さには親がきょうだいに同じように接することや、母親から褒められることが関係していることが示唆された。また、孤独感については母親の態度よりも父親の態度のほうが強い影響を及ぼしていることを推察していた。また谷川（2008）では家族イメージ法を用いてきょうだいが認知する家族内における位置、役割、自身の家族観、きょうだい観を捉えようとしており、結果としてきょうだいは家族との心理的なつながりを乏しいと感じ、家族との関わりについての一貫性のなさや困難さなどを示唆していた。

他方、家族全体の関係性から、ある特定の関係性に焦点づけて行われる研究として、きょうだいと母親について検討した研究、きょうだい関係について検討した研究も頻繁に見られている。

田倉（2007）は、きょうだいと障害児・者の関係と母親の養育態度との関連を調べるため、知的障害児・者、ダウン症候群児・者、自閉スペクトラム障害児・者のきょうだい 115 名に質問紙調査を行った。その結果、きょうだいが障害児・者を受容したり親和的に関わることには、母親の兄弟への積極的かつ支持的な態度と、障害児・者との関係を叱ったりするといった統制的な態度の両方が影響していること、そしてその統制的な態度が強いと、きょうだいが葛藤を抱きやすいことを示唆した。

大瀧（2012）は、軽度発達障害児・者のきょうだいが気持ちを抑え込むことが多い点に着目し、そのプロセスを 11 名のきょうだいを対象にインタビュー調査を行った。その結果、気持ちを抑え込むことにも二通りの意味があり、比較的ポジティブな意味合いの「緩和」

と「抑制」があることが示唆された。また、障害児・者に対してアンビバレントな感情を持つことも指摘した。

また Corsano, Mesetti, Guidotti & Capelli (2017) は、各 14 名の ASD 児・者のきょうだいとその母親に対して関係性で感じる難しさやインタビューを行った結果、きょうだいは複雑な感情を抱き、責任感や将来の不安、友人関係の難しさ、自身の家族の間で体験することを語ることについての困難感があることを指摘した。

さらに、Kovshoff, Cebula, Tsai & Hastings (2017) が、きょうだいとその家族全体の関係と、さらにそれを取り巻く社会といった複層的な相互作用という文脈にたち、その中できょうだいがどのような体験をしているのか、その体験を通してどのような特徴を示すのかを明らかにすることが必要であることを「The Siblings Embedded System Framework」という社会相互作用論の観点から整理して理論的に述べた。

以上のことから、きょうだいとそれを取り巻く環境としての家族や社会との間できょうだいが特有の体験をしていることが推察される。しかし十分に検討がなされているとは言いがたいのが現状であり、より丁寧に探索した知見を積み重ねていくことが求められていると考えられる。ただし、先行研究を見ての通り、障害の種別の統制が不十分であることは否めない。したがって、まずは ASD 児・者のきょうだいに絞った検討が必要であると言えるだろう。

### 第三節 同胞葛藤と背景理論

本論文では、家族全体という文脈の中できょうだいが体験していることをより具体的かつ詳細に捉えるため、ASD 児・者がいることによってきょうだいが体験する葛藤に着目する。なぜなら、先行研究をレビューする中でしばしば「葛藤」「アンビバレント」といった文言が登場するが、その中身や全体像は明らかになっていないためである（田倉, 2007; 大瀧, 2012; Hastings & Petalas, 2014 など）。ASD 児・者のきょうだいの行動上の適応に影響を与える要因には、主観的な経験や思考、感情が指摘されていることから、この「葛藤」に何が含まれているのか、きょうだいがそれをどのように意味づけているのかを検討することが重要であると考えられる（Mascha & Boucher, 2006）。

葛藤とは一般的には、相反する気持ちを同時に抱くことや、それらの気持ちの相剋と言われている。しかし本論文では、さらに他者との関係性の中で動くものとして取り上げる。



具体的には、Levy, D. M. (1936) の「同胞葛藤 Sibling Rivalry」を中心にする。(註・・・ 訳語は「きょうだい葛藤」とすることが多いが、本論文での「きょうだい」は障害児・者の兄弟姉妹のことを指すため、本論文においてこの概念を記載する時には「同胞葛藤」とする)。「同胞葛藤」は、「兄弟姉妹関係とは、本質的に葛藤的で、競争的であり、親の愛情を奪い合う、時に相手の死を渴望するほどまでの強い憎しみ感情を内包する関係性」(Levy, D.M., 1936) と定義されており、Freud, S に始まる精神分析の中で芽生えた概念である。Freud, S.自身は明確に同胞葛藤について定義づけをしたわけではないが、症例ハンスにおいて同胞葛藤と思われる状況を記述している。それは、ハンスが抱いた不安のひとつに、「お風呂で溺れてしまうかもしれない」という恐怖があったことの言及にみられる。この不安の中身は、ある日ハンスが母親が妹を入浴させている場面を見て「妹なんか溺れてしまえ」と母親の愛情を奪う対象への攻撃性と、それに伴う罪悪感から引き起こされたものであると述べていた (Freud, S., 1909)。また、『詩人ゲーテの幼少期』(Freud, S., 1917) では、ゲーテに弟が生まれた時期、窓の外へとお皿をこれでもかと投げて外の通りで割れるのを楽しんだことに注目し、これはコウノトリが運んできた弟に対する「出ていけ・片付けてしまえ」という敵意や願望の表れであると論じた。また、ギリシア神話の『アンティゴネ』もまさに同胞葛藤が引き起こした悲劇である。

一方、精神分析辞典では、「同胞葛藤 Sibling Rivalry」は「同胞間で起こる種々の心理的葛藤をさす」と定義づけられ、Levy の概念より幾分広く定義づけられている。兄弟姉妹の育児ではしばしば見られるもので、愛情や信頼と共に嫉妬や怒り、不安などの情緒、空想を体験していると考えられている。

いずれにせよ、兄弟姉妹間における攻撃性の発露は幼い頃から見られる根源的なものであり、現代の日常的にも臨床的にもありふれた関係性であると考えられる。ただし、ここでひとつ思案すべき点は、「Rivalry」が「葛藤」と訳されている点である。同じく「葛藤」と訳語が当てられることの多い「エディプス・コンプレックス」は、「Complex」、すなわち「複合体」としての意味合いが持たされている。ここでの複合体とは、子ども、父親、母親という三者関係の中で体験する攻撃性や依存愛情欲求、それらに対する処罰の不安と複数の関係性が折り重なることで生じる複雑な心理的過程のことを指している。同じ「葛藤」という訳語が当てられながらも、「同胞葛藤」は Levy の研究対象が子どもと母親であったことから母子関係が中心の力動で発達プロセスが含まれておらず、「エディプス・コンプレックス」は母子関係だけでなく父子関係を含めた力動で、尚且つ一連の発達プロ

セスがあるもののことを指していると言えるだろう。しかし、「同胞葛藤」は本当に母子関係の力動のみが動いているのだろうか？さらに「障害」という要素が入り込んできた時に同じような様相を呈するのだろうか？筆者が考えるに、すでに上記でレビューした通り、兄弟姉妹の関係性は複雑であり、単純な母子関係の話ではない。そして、きょうだいの体験はそこに「障害」という要素が入り込むことでまた別の複雑さが引き起こされているのではないかと考えられる。特に、従来の「同胞葛藤」は障害を持つ人が家族の中にいない兄弟姉妹間の力動である。障害児・者とそのきょうだいはそもそも生後の時点から土俵が異なっているのが現実である。ここに従来の「同胞葛藤」を単純に当てはめることは前提条件が異なる概念を適用していることになると考えられる。また、従来の同胞葛藤の概念ではきょうだいを家族全体の関係性から捉えられておらず、十分に検討されてきていないと考えられる。以上のことから、本論文では、「同胞葛藤」を家族全体の文脈を踏まえた上で捉え直し、さらに「障害児・者のきょうだいの同胞葛藤」がどのように展開しているのかを検討する。

また、ここで攻撃性についても触れたい。本論文における攻撃性とは、クライン派の用語としての意味を持っている。すなわち Freud, S.の欲動二元論における生の本能と対をなす死の本能の表れであり、原始的で未熟であればあるほど発達の制止を引き起こす一方で、

死の本能→羨望→嫉妬→競争心→自己主張と、攻撃性そのものが質的成熟していくことで人の心の発達を見ることを可能にした (Klein, M., 1932)。攻撃性はクライン派の中でも重要な基礎概念であり、この攻撃性が母子関係の中でどのように抱えられるかが心の発達において大きな位置を占めていると考えられている。したがって、本論文においても攻撃性がどのように表れ、扱われていくのかにも着目していくこととする。

さらに、現代のクライン派の家族論として、Meltzer, D. & Harris, M. (2013)を取り上げる。Meltzer, D. & Harris, M. (2013)は、個人と家族とコミュニティの相互作用によって生じる家族の在り方及び個人の心の在り方に関する精神分析的なモデルを提示した。精神分析理論において家族全体の文脈を捉えた家族論は数少なく、きょうだいが家族の中で体験する相互作用を整理する上でこの理論が有用であると考えられた。次に、Meltzer, D. & Harris, M. (2013)の家族論について整理する。

個人の心の成長には心的苦痛が欠かせないが、家族との関係性やその程度によって「成長すること」「安定すること」「退行すること」が生じる。Meltzer, D. & Harris, M. (2013)

は、これらの力動を生み出す家族の在り方を以下の機能から分類した。すなわち愛情の産出、憎悪の流布、希望の促進、絶望の種まき、抑うつ的苦痛のコンテイン、迫害不安の漏出、混乱の出現、考えること、である。これらの機能は無意識的にはあるが目に見える／見えない形で個々の家族成員によって実行される。これらの機能は家族成員の誰かが担うと、その人と対になる人物との間に機能的な対立、すなわち葛藤が生じてくる。これらの機能が実行されている間は家族としての形態はその質は問われるものの保たれているが、逆に家族成員の誰もがその機能を担わない場合には家族全体が停止状態となり、潜在している破局的不安と共に混沌が生まれいつる。これらの機能を、家族成員の誰がどのように担うのかによって、家族の在り方を次のように示している。すなわち「カップル家族」、  
「母権的家族」、「父権的家族」、「ギャング的家族」、「役割反転家族」の 5 つの在り方である。

「カップル家族」とは、両親（必ずしも実際の両親である必要はない）は情緒的に結合しているため、愛情を生み出し、希望を促進し、抑うつ的苦痛をコンテインし、考えるという良性機能を家族間に有している。同時に両親以外の家族成員は憎悪を流布し、絶望の種をまき、迫害不安を漏出させ、混乱を抱くことになるが、こうした悪性機能によって生じる真的苦痛をカップルが抱える必要が生じてくる。これらの心的苦痛に耐え、家族成員が成長する基盤を有している家族の在り方が「カップル家族」であると考えられる。

「母権的家族」とは、愛情の産出、希望の促進、抑うつ的苦痛のコンテイン、考えることといった機能を母親的人物が全て担っている家族のことを指している。この場合には、家族内における父親的人物の物理的・心理的な不在が生じており、母親的人物が心理的に両性的特性を持っていたり、家族が属するコミュニティがその役割を担うことによって良性機能が賦活される。しかし、そうした良性機能を母親的人物が全て担うことは困難であるため、保有できない機能はコミュニティが担うことになる。ただし、この母親的人物が男性への根強い敵意を持ってしまうと、容易く「ギャング的家族」へと変化してしまう危険性を孕んでいる。

「父権的家族」とは、父権的人物が家族中で力を持っている状態を指している。父権的人物が穏やかで母性的な特性も備えている場合には、カップル家族に似た状況が生まれてくるが、攻撃的で誇大的な性格で父権主義が押し付けられる場合には子どもたちはその支配下に置かれることになる。こうした状況下においては、しばしば父親の未婚の姉妹や祖母によって助けられることになる。また、父親的人物が教養のある人物であれば、良性機

能のいくつかを発揮することができるが、祖父母が愛情の産出機能を担うことになり、子どもたちとの結びつきも強くなる。ただし、父権的家族はその専制君主的な側面から母権的家族よりもギャング的家族へと変化しやすいリスクを有している。

「ギャング的家族」とは、母権的家族・父権的家族のいずれもがその支配的な人物の性格の成熟-偽成熟のバランス如何によって容易に自己愛的な状態であるギャング的家族へと陥落する傾向を有している。この家族の行動規範は、その上の世代である祖父母への否定的な批判を土台に築かれているため、良いと見做される行動の規範はあくまで知的な理解にとどまっており、子どもへの思いやりや、子どもの感情・不安に対する理解や感受性に欠けている。表面的な「よさ」や「自立」への期待が強力に蔓延し、時に熱心な教育方針が取られることになる。こうした雰囲気の中では良性機能はあくまで見せかけに成り下がり、表面的になってしまう。また、「よさ」や「自立」などの両親の要求が満たされないと、鋭い拒絶や罰・排除が生じてしまう。また、ギャング的家族は父権的家族・母権的家族のいずれかの特性を有しているため、コミュニティへの依存を否認する傾向にあり、善意によるソーシャルサービスや利用できる設備、法的システムを貪るかのように攻撃的な態度を持つことになる。特に、「よさ」や「自立」を満たせない弱い家族成員を守るという大義名分を掲げてコミュニティへの横暴を繰り返すこととなる。

最後の「役割反転家族」とは、片方、あるいは両方の親的人物が精神病的であるか、性的倒錯や犯罪的傾向を持つ場合に生じやすいとされている。養育者としての機能を親が果たすことができなくなる分、その役割を子ども、あるいはコミュニティが担うことになり、役割が反転して病理的につながっている家族像であると言える。

この家族論からきょうだいを捉えることで、従来検討されていなかった家族全体の文脈を踏まえた上でのきょうだいの体験を明らかにすることに繋がると考えられる。

#### 第四節 葛藤から見る心理社会的発達

そもそも、子どもが抱く葛藤にはどのような意味があるのだろうか。発達の過程で体験する葛藤の中でも特に有名なものは「エディプス・コンプレックス」(Freud, S., 1909)が挙げられる。エディプス・コンプレックスは Freud, S.が段階的に編み上げていった心理学的発達理論の中でも中核的な概念である。子どもが母親に対して自然と抱く依存愛情欲求から独占したいという思いが芽生え、その母親と近い存在である父親に敵意・憎しみを

抱き始める。この母親に向ける近親姦的欲望と父親への敵意・憎しみがあることにより、自分よりもさまざまな側面で優れている父親から去勢されてしまうのではないかと不安を抱く。この不安から母親への思いを諦めて距離をとりつつも、父親へと同一化し、規範などの良い側面を取り入れることで超自我を形成し、父親を通して社会へと向かっていくという一連の発達プロセスが描かれている。

また、クライン派においては妄想・分裂ポジションが優勢な状態から抑うつポジションが優勢の状態へと質的に変化するという心理的な発達における重要な視点が存在する。これは乳幼児期から生じる母子関係の理論である (Klein, 1935; 1946)。Klein によれば、健康な母子関係とは乳幼児から前言語的に投影される苦痛や不安、恐怖を母親が受け止め、乳幼児が受け取ることができる形にして返すことで苦痛や不安、恐怖が和らげられていく場合が多いとした。これは例えば、乳幼児が空腹から泣き叫んでいる時に母親が授乳をすることにより、空腹が和らぐといったやり取りの観察からうかがえる。ここで乳幼児は、母親が授乳してくれた、とはまだ理解することができない。なぜなら乳幼児の感覚器官はまだ発達の途上であり、その認知は「良い乳房が自分の苦痛を和らげてくれた」とだけ理解する。すなわち部分対象的な理解の仕方である。同時に、乳幼児の空腹時に母親が常にすぐさま授乳できるとは限らない。母親も一個人の人間だからである。この時の乳幼児の体験としては、不満足な状態が続き、「良い乳房」が不在で「悪い乳房」が自分に授乳してくれない、攻撃してきていると捉え、「悪い乳房」に対して敵意を向けもする。こうした「良い乳房」と「悪い乳房」と本来は同じ乳房であるはずだが対象を分裂してしか捉えることができない未熟な状態を「妄想・分裂ポジション」と名付けた。乳幼児期は、こうした満足した状態と不満足した状態を体験しながら進んでいくとされている。そしてさらに、満足した体験が不満足した体験に勝ると、不満足な状態に耐えることができるようになり、時間的な概念が捉えることができるようになり、「良い乳房」と「悪い乳房」が同じ存在であることを理解していく。そうすると、乳児は自分が実は「良い乳房」に対しても攻撃してしまっていたこと、理想的な「良い乳房」を失ってしまったと感ずることとなり、Klein はこの状態を「抑うつポジション」と名付けた。こうして「良い乳房」と「悪い乳房」と対象を部分的にしか捉えることができていなかったところから、実は同じ対象であると全体対象として捉えることができるようになっていく。また、「ポジション」という言葉が示す通り、この移行は一方的で一回限りのことではなく、ストレスがかかり退行状態になると誰でも妄想・分裂ポジションになることを示している。これがクライン

派における心理的な発達論である。

ここでも、「良い乳房」との体験と「悪い乳房」との体験の相剋から「良い乳房」との体験が勝ることが発達に繋がっていくという葛藤状態を通した心理的な発達が見て取れる。このように、葛藤とは個人の心の中で生じるさまざまな情動や攻撃性、不安を他者、すなわち環境・社会との間で相互に作用しながら心を発達させていく重要な基点になっていると考えられる。

こうした葛藤の意味合いからも、きょうだいを抱く同胞葛藤を再検討しながら、その同胞葛藤を通してきょうだいの心理社会的な発達がどのようになされているのかを精神分析的な概念を用いながら総体的に検討することは新たな切り口であり、従来にない視点であるといえる。

## 第五節 ASD 児・者のきょうだいの家族内の位置付け

ここで改めて ASD 児・者のきょうだいに目線を戻そう。ここまで見てきたように、ASD 児・者のきょうだいは、ASD 児・者がいることによって障害特性から兄弟姉妹で生じるコミュニケーションが生じにくかったり、親の関心が特に向きやすくなることで寂しさや不満を抱くという特有の体験をしていると考えられ、同胞葛藤の在り方も兄弟姉妹の場合とは異なっていることが推察される。ではそもそも、きょうだいは家族の中でどのような位置付けができるのだろうか。下記は ASD 児・者のきょうだいに限られたわけではないが、きょうだいが担う役割として従来指摘されているものである。

「成人後の介助者」(橘・島田, 1999)

「家族内の調整者」(三原, 2000)

「親の隠された思い・メッセージを受け取る人」(矢矧, 2015)

「親的役割」(清水・板倉, 2021)

ここから分かることは、きょうだいが家族の中で誰かのお世話係を担いやすいということであるが、こうした役割を担うに至る背景には何があるのだろうか。ここで重要になってくる視点は、家族という文脈であると考えられる。数井・無藤・園田(1996)は、「子どもの発達や育児状況は、母子を取りまく家族内外の状況との相互作用の中で培われてい

ることは確かである」(p.32)とし、さらに「特にパートナーである夫との関係のあり方が、母親自身の心理へ作用するのみならず、子どもの心理的機能状態へも影響を与えている」(p.32)と述べた。つまり、子どもが発達する上で両親との関係性だけでなく、両親間の関係性もまた影響を与えていると指摘している。そして数井ら(1996)は、個人の発達には家族内外における相互作用、すなわち関係性が影響を与えているとの前提に立ち、関東圏内の母子48組に夫婦関係の調和性と育児ストレス、社会的サポート、家族関係の機能度、子どもの愛着の安定性について質問紙調査を行った。その結果、夫婦関係が子どもの心理的状态に関連していることを示唆し、「子どもの発達を家族という文脈でみなければならぬ」(p.38)と結論づけた。これはきょうだいも例外でなく、きょうだいも家族の内外との関係性の中で体験するものを通して発達していくと考えられる。しかしきょうだいの場合、家族の関係性の中にASD児・者、及びASDという障害がさらなる変数として組み込まれてくる。このきょうだいを取りまく関係性を捉えるために、「家族の中の第三者性」と「当事者性」という視点を導入する。

「家族の中の第三者性」とは、「きょうだいは家族の中でASD児・者—両親の関係性を最も近くで見つめる存在という意味で第三者である」と定義づけられる。例えば、「成人後の介助者」を見ると「成人後」とあることから、ASD児・者—両親という関係性の後からくる人物として位置付けられていることがうかがえる。そして同時に、きょうだいもまた紛れもない家族成員の1人である。この意味で、「当事者性」とは「きょうだいは家族の中でASD児・者、両親と関わる存在という意味で当事者であり、またきょうだいは家族外の社会とも関わる当事者である」と定義づけられる。「親的役割」を見ると、「きょうだいが親のような」役割を担うのであり、きょうだい自身が当事者として関わっていると考えられる。誰かのお世話係を担うということは、ASD児・者—両親という文脈から見ればきょうだいは「家族の中の第三者性」から捉えることができ、ASD児・者—きょうだいという文脈から見れば「当事者性」から捉えることができる。このように、関係性とはどこに焦点を当てるかによって見え方が変わるという意味で本質的に多義的であると考えられる。

以上のことから、本研究において扱うきょうだいが体験している関係性を可視化すると、次のようになる。

- ① 父親－母親－ASD 児・者
- ② 父親－母親－きょうだい
- ③ きょうだい－ASD 児・者
- ④ きょうだい－家族外の他者（社会）

きょうだいを家族内外というこれらの関係性という文脈から捉えることによって、より詳細な検討が可能になると考えられる。



## 第二章 本論文の目的, 構成, 方法論

### 第一節 きょうだい研究の問題点

以上の議論を通して、きょうだい研究の問題点をあげると、次の通りである。

1. 一元的な見方・定量的研究の限界
2. 障害種別の統制
3. 家族の中のきょうだいという視座の乏しさ
4. 「葛藤」の曖昧さ
5. 支援の在り方

#### 1. 一元的な見方・定量的な研究の限界

肯定的な影響・否定的な影響がどれだけあるのか、という一元的な捉え方では、きょうだいが体験する問題やその要因を全般的に捉えすぎていたため、内的な側面についての検討は不十分であると言われている（竜野・山中, 2016; 桑山, 2017）。また兄弟姉妹についての研究に関する藤本（2009）の指摘は、きょうだい研究にも言えることであろう。すなわち、きょうだい関係をはじめとした家族という複雑な関係性におけるきょうだいの体験を捉えるためには、データを縮約しすぎず、直接的なインタビューを通して複雑なものを複雑なまま検討する質的研究の積み重ねが必要であると考えられる（Meaden, 2010）。しかし、直接的なインタビューを用いた研究であっても、焦点づけがなされなければ漠然とした研究になってしまうことから、あるテーマに焦点を絞りつつ、肯定的-否定的という一元的な捉え方から離れてきょうだいの体験を捉えていく必要があると考えられる。

#### 2. 障害種別の統制

これまでのきょうだい研究では、障害種別の統制が不十分であったと考えられる。これは現実的な制約の元、特定の障害のきょうだいだけを集めることには大きな困難を伴うためである。しかし、例えば身体障害児・者と発達障害児・者のきょうだいが全く同じような体験をするかどうかは疑問が残る。「障害児・者のきょうだい」という点で捉えれば共通する部分も多くあると推察されるが、可能な限り障害種別は統制した方が結果の説明力

が高まると考えられる。

### 3. 家族内・外との関係性におけるきょうだいの発達という視座の乏しさ

きょうだいが生きる家族関係は、特有の関係性にあることが示唆されているが、きょうだいが研究の対象となることは障害児・者や母親、あるいはその二者関係に比べて総体的に少なかった（三原, 2000）。また、家族内・外との関係性におけるきょうだいという視座できょうだいを理解しようとする試みは、まだまだ乏しいと言わざるを得ない（高野・岡本・神谷, 2015）。したがって、家族内における関係性や、家族外との関係性の中で ASD 児・者がいることによってきょうだいがどのようなことを体験しているのかを検討することが必要であると考えられる。また、心理社会的な問題は多く報告されているが、それに比してきょうだいの心理社会的な発達の特徴についてはまだまだ報告が少ない（柳澤, 2007）。特に、青年期から成人期にかけては自我同一性の感覚を統合していく最中であり、過去の社会、家族との関係性を整理し、将来を見据えることによって現在を位置付けていく必要があることから（Erikson, 1959; 1973）、家族との関係性の文脈からきょうだいを捉えることが重要であると考えられる。

### 4. 葛藤の曖昧さ

従来のきょうだい研究の中では、しばしば「葛藤」が登場する。例えば原田・能智（2012）は「二重のライフストーリー」というきょうだいが自身の人生と障害児・者の生をも背負った人生の両方を生きているという意味で「二重」という用語を用い、そこで「自分の人生を生きたいけれどそれだけではない」という葛藤を示唆した。他方、田倉（2007）はきょうだいが障害児・者のことを肯定的に認識する中で、「情緒的な葛藤を抱く」ことを見出した。また Hastings & Petalas（2014）は、ASD 児・者のきょうだいと母親の 94 家族を対象に、きょうだいは ASD 児・者との関係についての評価を、母親にはきょうだいの行動／情動問題と自身の抑うつについて評価をしてもらい、ASD 児・者のいない一般家庭と比較した。結果として、きょうだいはわずかに行動／情動問題のレベルが高かったが、統計的には顕著な差は示されなかった。ただし、きょうだいの中で、ASD 児・者の問題行動がより高いレベルであると、きょうだいは自分たちの関係について暖かさや近さが乏しく、仲良くしたいがそうしにくい葛藤が大きいと評価していたことを示した。

このように、「葛藤」という用語はしばしば用いられているが、一般的に持つ意味の広さ

から、「同胞葛藤」としてはその中身や全体像が十分に焦点づけられて明らかになっていないと考えられる（田倉, 2007; 大瀧, 2012）。ASD 児・者の兄弟の行動上の適応に影響を与える要因には、主観的な経験や思考、感情が指摘されていることから、まさに主観的な経験や思考、感情である「葛藤」に何が含まれているのか、きょうだいがそれをどのように意味づけているのかを検討することが重要であると考えられる（Mascha & Boucher, 2006）。

## 5. 支援の在り方

きょうだいの支援に最初に言及したのは Holt（1958）だと考えられる。その後、欧米では「Sibshop」（Meyer & Vadasy, 2008）や Sibs org UK（2021）など、障害についての心理教育や母子交流の機会を提供するプログラムが考案されている。一方、日本においては、きょうだいと母親の宿泊やレクリエーションが行われている（平川, 2004; 阿部・神名, 2013）。障害についての知識や対応を身につけるといった教育的な支援としては成立するものの（柳澤, 2007）、その実、親睦会以上になり得ていないという指摘も見られる（玉井, 2004）。したがって、より心理的な支援や環境調整を可能にするような知見が求められていると考えられる。

以上の問題点に基づき、本論文は ASD 児・者のきょうだいが、ASD 児・者がいることできょうだいが家族内・外の他者と関わる際にどのような葛藤過程を体験しているのか、その全体を整理し、葛藤を通してきょうだいが心理的にどのような側面を発達させているのかを明らかにすること、さらにその葛藤を越えるためにはどのような要因がサポートになるのかを明らかにすることを目的とする。

本論文の一連の研究を通して、きょうだいのよりリアルな体験に迫り、葛藤の最中にいる場合にはそこから抜け出すための一助としたい。

## 第二節 本論文の目的

本論文は、まず ASD 児・者のきょうだいが ASD 児・者がいることで両親－ASD 児・者の関係性をどのように認識しているのかを「家族内の第三者性」という視点から明らかにすることで、きょうだいにとっての環境としての家族を明らかにした上で、「当事者性」

という視点からその環境下できょうだいが家族内・外の各関係性（ASD 児・者，両親，社会）との間で体験する葛藤過程の全体像を整理し，きょうだいのどのような心理的な側面が発達しているのかを目的とする。同時に発達的な観点から葛藤を促進・阻害するような要因についても検討することを目的とする。さらに臨床で息づく理論である精神分析理論を通して無意識的な水準のきょうだいの家族における体験を明らかにすることを目的とする。

### 第三節 本論文の構成

本論文は，第一章の第五節で示したきょうだいを家族という文脈から見たときの関係性に沿って構成され，以下の通りとなる（Figure 1）

研究Ⅰでは，きょうだいの「家族の中の第三者性」に着目し，両親と ASD 児・者の関係を最も近くで観察する第三者と捉える。これにより，きょうだいが両親と ASD 児・者の関係性をどのように認識しているのかを捉えることを通して，きょうだいにとっての環境としての家族関係を描き出すことを目的とする。

研究Ⅱ～Ⅳでは，きょうだいの「当事者性」に着目し，家族と社会との関係性における当事者として，その主観的な体験を捉えていく。

研究Ⅱでは，きょうだいと両親の関係性に焦点を当てる。ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性の中でどのような葛藤を体験するのかを明らかにし，その葛藤を通してきょうだいの心のどのような側面が，どのように発達しているのかを明らかにする。

研究Ⅲでは，きょうだいと ASD 児・者の関係性に焦点を当てる。ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性の中で体験する葛藤は，きょうだいが両親との関係性の中で体験する葛藤とは異なることが想定される。したがって，きょうだいが ASD 児・者との関係性の中で体験する葛藤がどのようなものなのかを明らかにし，その葛藤がきょうだいの心のどのような側面に影響を与え，その側面がどのように発達しているのかを明らかにする。

研究IVでは、研究II・IIIと同様にきょうだいの「当事者性」に着目するが、きょうだいと家族外の他者の関係性に焦点を当てる。家族外の他者との関係性において体験する葛藤も、家族内で体験する葛藤とは異なる側面が見出されると考えられる。したがって、ASD児・者がいることによってきょうだいが家族外の他者、すなわち社会との関係性の中でどのような葛藤を体験するのかを明らかにし、その葛藤を通してきょうだいのどのような心の側面が発達しているのかを明らかにする。

そして総括として、研究I～IVまでを振り返り、ASD児・者がいることによってきょうだいが家族内・外で体験する葛藤の全体像と、その葛藤を通じた心理社会的な発達を精神的分析的手法と概念を用いて論じる。また、その葛藤を越えるために必要な要因についても考察する。

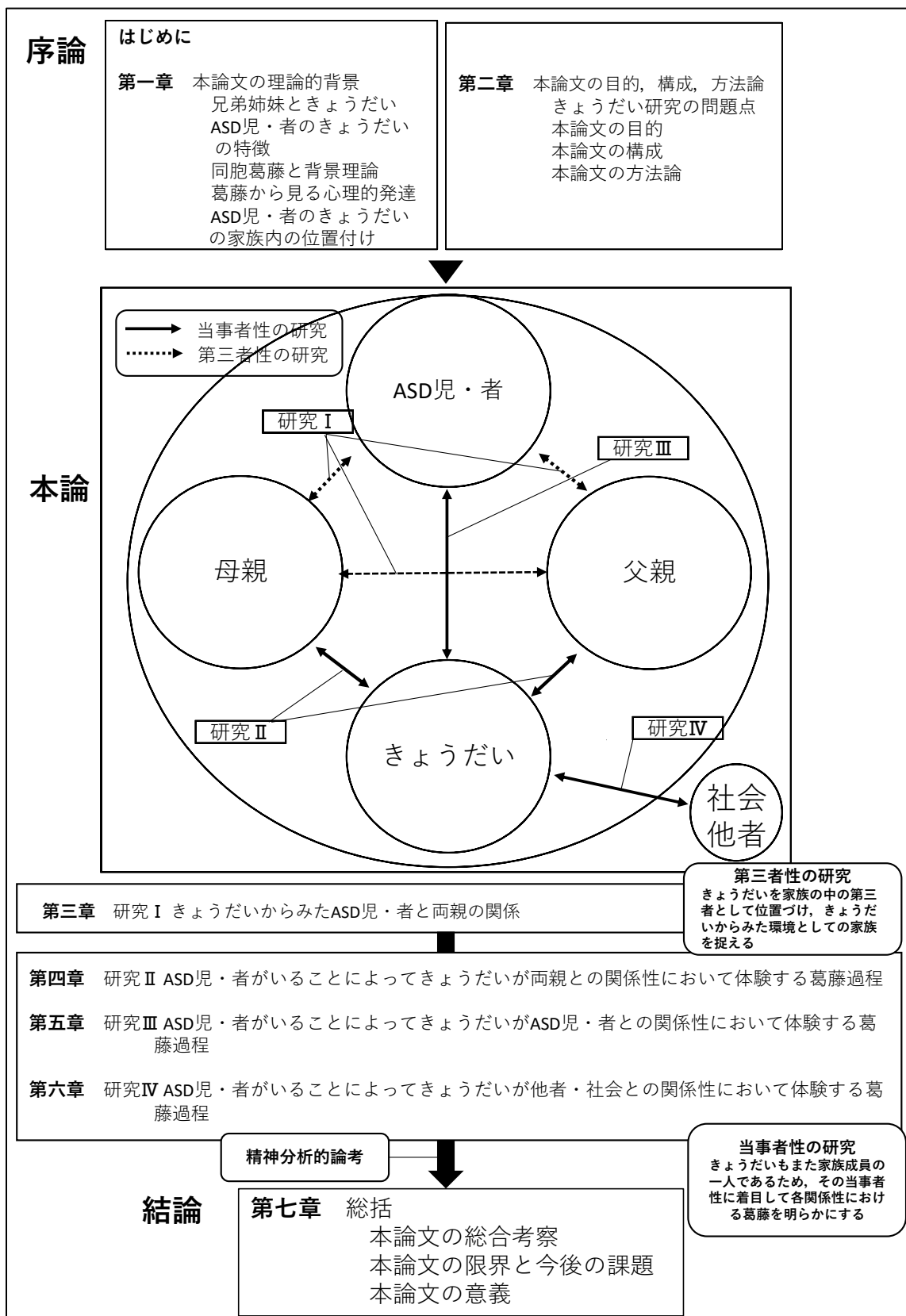


Figure 1 本論文の構成

なお、このような構成で研究を行うことには妥当性と利点があると同時に、困難をはらんでいると考えられる。

既述のように、個人の発達には家族という文脈、すなわち複層的な関係性が影響を与えているということに疑いの余地はない。例えば、きょうだいと ASD 児・者の関係性は、きょうだいと両親、ASD 児・者と両親の関係性と相互に影響しあっていると考えることは自然であろう。さらにきょうだいの場合には、ASD という変数が編み込まれてしまい、事態は複雑さを増してくる。実際、田中（2016）は、障害児の発達を考える際に、状況－関係が生み出す「ゆらぎ」が障害児の発達に殊更影響を与える可能性があることを指摘している。これは、きょうだいであっても同様であると考えられる。こうした複層的な関係性の中でどのような葛藤を体験しているのかを詳細に検討する場合、データの取り方には注意が必要である。特に、インタビューによってきょうだいに葛藤について内省を促すことは、きょうだいが抱えている痛みを少なからず想起させる。そのため、各関係性について複数回訊ねることには回を重ねるごとに痛みを掘り起こすこととなり、倫理的な問題が皆無であるとは言い難い。また、なるべく各関係性の相互作用を見失わないようにするためには、関係性をぶつ切りに尋ねるのではなく、調査協力者が自発的に語る流れを重視し、自然と語られる関係性を捉えることが重要であると考えられる。また、現実的に調査協力者に会うためには日時と場所を定めて面接の機会を設ける必要があり、調査協力者にはそのための時間を割いてもらわなくてはならない。またそうした機会を簡単に何度ももてるわけではないため、1回の面接で可能な限り必要なデータを得ようとするものである（木下，2003）。したがって、インタビューは細心の注意を払い、十分な倫理的配慮を行なった上で可能な限りまとめて実施することが妥当であると考えられる。

一方で、データを分析する際には各関係性の相互作用が生み出す複雑さゆえに、全ての関係性を同時に検討することはより煩雑となり、本来そこにあるはずのきょうだいの体験がとらえにくくなってしまおうと考えられる。きょうだいの先行研究をみると、きょうだいと ASD 児・者、あるいはきょうだいと母親と、関係性の一側面に焦点を当てながら検討がなされている（Kaminsky & Dewey, 2001; 田倉, 2007; 大瀧, 2012; Hastings & Petalas, 2014; Tomery, Ellis, Rankin & Barry, 2016; Corsano, Mesetti, Guidotti & Capelli, 2017 など）。これらの先行研究において、特定の関係性に焦点を当てることの意義がそれぞれ述べられているが、重要なことは、これらはいくまで関係性の一側面であることを踏まえ、いかに知見を統合していくかということが問われていると考えられる。臨床場面において

も、1人の個人を単一の側面だけで捉えるのではなく、複数の側面から捉えて最終的に統合することが必要であり、人を生物的-心理的-社会的な次元という複数の次元から包括的に捉えることが重要と述べた Engel (1977) のモデルは今なお有用な視点である。さらに近年は、この3つの次元に加えて4つ目の次元としてスピリチュアル的次元も含めることが論じられてきている (Sulmasy, 2002)。このように多角的な検討を通した上で統合していくプロセスは、対象を理解する上で有用な視点であるといえよう。しかし、きょうだいを対象にした研究で複層的な関係性を紐解いて検討し、最終的に統合しているものは見られない。それは、先行研究の問題点としても指摘した家族全体の文脈という視点が不十分であるということに加えて、実際的な困難も伴うためであると考えられる。なぜなら、各関係性を個別に焦点づけて捉えることで詳細な検討を行い、最終的に統合することとは、一見すると解体と統合の矛盾が生じているようにみえるためではないだろうか。

こうした議論をふまえて、各関係性を個別に焦点づけて捉えつつ、最終的に統合するために必要な点は方法論に一貫性を持たせることであると考えられる。研究全体の方法論に一貫性を持たせることにより、詳細な検討を可能にしつつも、得られた知見を統合しやすくなると考えられるためである。次節にて、本論文の方法論について述べる。



#### 第四節 本論文の方法論

本論文の方法論は研究 I～IVまで一貫しているため、この章で大枠を述べることにする。

本論文は、きょうだい研究の問題点で述べた通り、質的研究に位置付けられる。質的研究とは、量に測定できない（数量化できない）対象を「質そのもの」として捉える研究のことである（やまだ, 2008; 大谷, 2019）。ただし、質的研究が扱うのはインタビューや観察から得られた言語データであるが、「研究協力者がそのように言ったから」「研究者がこう感じられたから」と言った直感的・主観的な主張だけでは科学とは言えないと考えられる。

そもそも質的研究は、量的研究が属している「自然科学」とは異なり、データを収集し、一定の手続を持って分析し、普遍的な知見を得ることを志向する「経験科学」という枠組みに属していると考えられる（大谷, 2019）。量的研究の背後には実証主義がパラダイムとして存在しており、複雑で陰影に満ちた文脈に依存する社会的な相互作用の総体的な理解には少々不十分であると考えられる。一方で、完全に制約のないやり方では、理論的基礎の認識や共有が困難であり、研究として積み上がらない。したがって、近年の質的研究では「パラダイム・アウェアネス」（Haworth, 1984）がとりわけ重要であると考えられている。つまり、質的研究を行う上で自身の拠って立つパラダイムが何なのかを明らかにすることで、議論の焦点を内容へと導きやすくすることができる。

パラダイムとは、その研究が拠って立つ存在論、認識論、価値観などのことを指している。このパラダイムが異なることで、現実・世界・体験の認識の仕方が大きく異なってくるのである。

例えば、量的研究のパラダイムは、客観主義的存在論であり、現実や体験、事実と言ったものは主体としての人とは独立して客観的に存在しているとしている。また実証主義的認識論でもあり、客観的に存在しているのであれば、可能な限り主観性を排除してその意味を客観的に取り出すことができると考える。したがって、データ収集のインタビュー時には、研究協力者は研究者がとらえようとしている体験が研究協力者とは独立して持っているため、それを語ってもらうように研究者は主観性を可能な限り排除することでそれらを抜き出すことができると考える（大谷, 2019）。したがって、量的研究においてはパラダイムの混乱が生じ得ないため、そもそも論点となりにくい。

一方、質的研究のパラダイムは実に多様である。そのため、その研究がどのようなパラ

ダイムに立っているのかを明示しておく必要があると考えられる。

大谷（2019）はインタビュー場面を用いて、先ほどのように例を挙げている。現実や体験、事実が主体から本当に独立し得るのかという点、必ずしもそうとは限らない。なぜなら体験ひとつをとっても、主体が異なることでその体験が全くの同じ体験になることはあり得ないからである。また、目に見えない体験そのものについて考え、感じたりすることで初めて体験として形が与えられ、事実となることも捉えられる。こうした存在論は社会構成主義的存在論と言われ、現実、体験、事実とは主体と無関係に存在しているのではなく、主体同士の相互作用という社会的な文脈に基づいて共同構築される時に立ち現れるという存在論である（プラサド、2005）。また、その体験の意味は、主体がどのように意味づけているのかに、どのように解釈するのかに拠っている。このように体験の意味は解釈によって与えられるとする認識論は、解釈主義的認識論と言われている。本研究の目的と照らし合わせると、きょうだいがASD児・者がいることによって家族内・外の関係性の中で（社会相互的）、どのような葛藤体験（主観的な体験）をしているのかを明らかにし、その葛藤を通してどのような心理的側面が発達するのか、家族との関係はどのようなようになるのかを明らかにすることが目的のため、これらのパラダイムが適していると判断した。

また、解釈主義的認識論に立って質的研究を行う上で、研究者の立場を抜きにして語ることはできない。なぜなら研究の計画、インタビュー、解釈、考察と全てのプロセスにおいて研究者の影響を完全に排除することは不可能だからである。したがって、研究者は研究に影響を与えると考えられる自らの属性を明示し、研究全体を通して与える影響に自覚的であるよう努め、省察可能性を確保する。

- 筆者は臨床心理士／公認心理師として、臨床場面にて心理職としてきょうだいやその家族に相對している。
- 筆者は本論文の研究以前からきょうだいの体験に関心があり、研究に取り組んできている。
- 筆者は精神分析的なオリエンテーションを有している。

分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用した（木下、2003; 2007; 2020）。M-GTAとは、Glaser & Straussによって開発されたグラウンデッド・セオリー・アプローチを木下（2003; 2007; 2020）が修正した分析方法であり、

データを切片化せず文脈を重視しながら扱い、同時にデータに密着しながら継続的に比較分析を行なっていくことで人間の社会的相互作用を捉え、その行動や現象の説明と予測に有効な理論を対象の範囲も限定しながらデータに密着して生成していく分析方法である。

本研究は、きょうだいが ASD 児・者がいることによって、ASD 児・者、あるいは両親、周囲の人々といった人と人の社会的相互作用の中で抱く葛藤体験の全体像を明らかにすることを 1 つの目的としている。こうした社会的相互作用を捉える際に重要な点は、捉えようとする事象・行為の構造とプロセスの両方に目を向けることである。例えば質的データの分析法で用いられることの多い KJ 法（川喜田, 1986）は、構造構成主義に基づき語りの分類や構造化に適している分析法だと考えられる（青木, 2017）。しかし、本研究で捉えようとしているのは社会的な相互作用という動的な関係性であり、その構造だけでなくプロセス性も捉える必要があると考えられたため、M-GTA が適していると判断した。

また、M-GTA を用いる際にはデータをどのように位置づけ、どのように分析を進めていくのかがポイントとなるが、ここでは考案者である木下（2003; 2007; 2020）の考えに沿ってデータを扱うこととする。

M-GTA が分析の対象とするデータは、主に日常生活に根差した個人の体験が盛り込まれている「ディテール豊富なデータ」（木下, 2003; 2007; 2020）であり、そこには一人の人間の歴史や主観、感覚など様々なものデータとしてふんだんに盛り込まれている。木下（2016）は「複雑な現実を生きる人間や他の人々との社会的相互作用を理解するためには、多様性や複雑さをそのままに表現したディテールの豊富な内容がデータとして不可欠である」（p.6）と指摘している。そして分析は grounded-on-data、つまり得られたデータに基づいて行われるが、ディテールの豊富さゆえにどこから手をつけるのが妥当なのかを判断することが難しくなるという技法上の問題が生じる。この問題を解消するための装置が研究テーマと分析テーマの関係性である。分析テーマは研究テーマと異なり、データ全体とのフィット感を確かめながら絞って設定するものであり、木下（2007）は「研究テーマをデータに即して分析していけるように絞り込んだものが分析テーマであり、ひとつの研究テーマに対して分析テーマは複数ありうるという関係」（p.144）になると述べている。また、「データに対して 1 つの分析テーマで 1 つの論文にまとめ、その後新たな分析テーマを設定して論文を作成することもできる」（木下, 2020, p.74）とし、1 つの分析テーマで分析を行なったのちに次の分析テーマを分析していき、結果を比較関連させることで理論の説明力と予測力がより強化されていくとも述べている（木下, 2020）。つまり、1 人の人

間にまつわる豊富なデータとの程よい距離を維持するため、言い換えればデータの情報量に圧倒されず、かつ表面的な解釈にならないような距離感を維持するために分析テーマを個別に設定する必要があることが示唆されている。本論文で言えば、研究テーマは「ASD 児・者のきょうだい家族全体の関係性の中で体験する葛藤過程を通してどのように発達するのか」となり、分析テーマは ASD 児・者のきょうだいが各関係性（ASD 児・者－両親、きょうだい－両親、きょうだい－ASD 児・者、きょうだい－社会）の中でどのような葛藤過程を体験し、どのように発達するのか」となるだろう。木下（2020）は M-GTA の特性の1つとして「1 つの分析テーマで分析を行い、その結果を踏まえて新たな分析テーマを設定して分析するという展開を意味し、同じデータを使って行う」（p.69）ことを挙げ、これは「同じデータに対してなので、データの二次分析、再分析と思われるかもしれないがそうではなく、これは一次分析の幅の広がりとして位置付けられる」（p.74）とまとめている。こうした M-GTA の特性は、本論文の分析方法として適していると考えられる。ただし、木下（2020）は実際のところ、多くの場合が1つの分析テーマで一区切りがついてしまいやすいため、そこまでの分析を行っている研究は少ないとも指摘している。しかし、本論文においてはきょうだいの体験を多角的に検討する必要があるため、これらの M-GTA の特性から分析方法として適していると考えられる。

さらに M-GTA は研究のみならず、生成された理論は実践的な活用を促す理論であることを強調し、臨床にその理論を持ち込みつつさらに発展させていく立場をとっている。これを木下（2020）は、「三位相のインターラクティブ性」として概念化している。「三位相のインターラクティブ性」とは第一相がデータ収集（協力者－研究者）、第二相がデータ分析（データ－研究者）、第三相が分析結果の応用（研究者－応用者）と、3 つの各位相によって相互作用が生じ続け、研究と臨床を紡いでいく動力となっていくことを指している。分析結果の応用にあるように、M-GTA の分析の結果得られた概念・結果図はそれ自体で完結せず、また臨床における使用者がその概念・結果図に「当てはまるか・当てはまらないか」という単純な見方で処理することを想定されていない。使用者がより主体的に概念・結果図と関わり、自身の臨床的な体験を理解する枠組みとして活用していくことが理想であると考えられている。しかし、生成された概念を結果図という一つの形に収斂することによって理解の枠組みを提供できると同時に、その一つの形では説明しきれない現実がこぼれ落ちてしまうのも事実である。

これは M-GTA の限界ともいえ、分析の結果得られる概念・結果図が提供するのとはデー

タに基づき分析焦点者の視点を通して描かれるひとつの本筋ではあるが、臨床場面で出会う患者・クライアントは往々にしてその本筋から外れているのが現実であると考えられる。だからこそ、M-GTA では第三相を想定しているのだろう。M-GTA で生成された理論の実践化まで行われている研究は、ヘルパーの生活場面面接に焦点をあてた小嶋・鳶末（2015）の研究や障害者の就労に焦点をあてた竹下（2020）などが例にあげられる。しかし、この第三相についての研究報告はまだ少ないことが指摘されているのも事実である（木下，2020）。そこには得られた結果図と臨床に乖離が生じてしまっているのではないだろうか。たとえば、「調査に協力する」という時点で生じてくる偏りの存在は排除しきれず、無視できないバイアスとして自然と盛り込まれてしまっていると考えられ、ここに M-GTA の分析結果の応用の限界があると考えられる。

本論文において、この乖離を克服することを試みる。すなわち、M-GTA による分析の結果得られた概念・結果図を、臨床理論である精神分析理論によって再解釈し、より臨床に近い理解の枠組みを提示する。つまり第二相と第三相を、概念・結果図－研究者（精神分析的論考）の相互作用によってつなぎ、より臨床に則した理解の枠組みを提供することを目指す。M-GTA が重要視している社会的相互作用をさらに深める作業である。具体的には、第一章第三節で取り上げた Levy, D.M. (1936) の「同胞葛藤」、Freud, S. (1909) の「エディプス・コンプレックス」、Klein, M. の攻撃性 (1932)、Meltzer, D. & Harris, M. (2013) の「クライン派家族論」を背景理論として、M-GTA で得られた概念・結果図を解釈していく。このように一定の形がある構成物を解釈する試みは、Freud, S (1907) をはじめとする精神分析における伝統的な研究手法でもある。これらの研究手法の組み合わせは M-GTA が grounded-on-data の原則（木下，2020）に沿って分析されるからこそ可能な手法であり、精神分析的な解釈とデータが M-GTA によって繋がれているという関係性になる。

以上のように第三節で述べた視点と合わせて、パラダイム、M-GTA、考察における精神分析理論を一貫させるという方法論によって、きょうだいを取りまく各関係性を詳細かつ多角的に検討しながら、その全体像を明らかにすることを試みる。

# 本論

### 第三章

## 研究 I 自閉スペクトラム障害児・者のきょうだいから見た自閉スペクトラム障害児・者と両親の関係性

### 第一節 問題と目的

本研究では、きょうだいの持つ「家族内の第三者性」に着目する。きょうだいは家族の中で ASD 児・者－両親の関係性を最も身近で観察する存在と位置づけ、きょうだいが生きる環境としての家族がどのような関係性を築いていると認識しているのかを明らかにすることを目的とする。

古川・古賀（2006）は、小学生以上のきょうだい 50 名・親 50 名を対象に、Olson の家族機能という観点からきょうだいが抱く家族観について検討した。その結果、きょうだいは家族全体の凝集性の高さには親がどれだけきょうだいに関わっているのかについて母親から褒められるかどうかが影響を与えていると結論づけた。なおここでの凝集性とは、「家族成員がお互いに対して持つ情緒的な絆」のことを指している。また、高野・岡本・神谷（2015）は、重度障害者家族のきょうだい 18 名にインタビュー調査を行い、きょうだいからみたきょうだい関係と母子関係の類型化を試みた。その結果、健康な家族においてはサブシステム間の境界が明確で、適度な交流があり、かつ独立性も保持されているが、家族の中に障害児・者がいることによって境界が曖昧になったり、情緒的な葛藤が生じやすいと結論づけた。

以上のことから、きょうだいに対して親がどれだけ関わられる状況にあるのかが、きょうだいにとっての環境としての家族のあり方が左右されていることが推察される。人は個人で生まれ、生きていくのではなく、環境との相互作用をしながら心理社会的に発達していく。こうした視座に立つと、家族の中に ASD 児・者がいることが家族の在り方にどのような影響を与え、その家族の在り方をきょうだいがどのように認識しているのかを捉えることは、きょうだいの心理社会的な発達における環境の部分の部分を明らかにすることを意味している。しかし、このような視座で家族をどのように捉えているのかという視点に立った研究はいまだに蓄積が乏しいのが現状である。したがって、本研究ではきょうだいの視点に立ち、環境としての家族の在り方を分類することを目的とする。これによって、ASD 児・者が家族にいることによって形成されやすい家族の在り方を検討することが可能とな

り、臨床的にも、例えば家族の環境調整をする際のポイントを明示しやすくなると考えられる。

## 第二節 方法

### 1. 研究協力者

これまでの経過について振り返り、かつ言語的に説明が可能な年齢である、自閉スペクトラム障害児・者の青年期以降のきょうだいを対象とした（男性：3名、女性：6名、平均年齢 27.6 歳、Table 1）。

Table 1 研究 I 研究協力者

協力者	年齢	性別	ASD児・者の続柄	ASD児・者の年齢	年齢差	診断名*1	ASD児・者の住居形態
Aさん	28歳	女性	兄	31歳	-3歳	ASD+ID	同居
Bさん	44歳	女性	弟	42歳	+2歳	ASD+ID	別居
Cさん	32歳	女性	兄	34歳	-2歳	ASD+ID	別居
Dさん	21歳	男性	弟	19歳	+2歳	ASD	同居
Eさん*2	26歳	男性	弟	22歳	-4歳	ASD+ID	同居
Fさん*2	24歳	男性	弟	22歳	-2歳	ASD+ID	別居
Gさん	27歳	女性	姉	29歳	-2歳	ASD+ID	同居
Hさん	23歳	女性	弟	18歳	+5歳	ASD	同居
Iさん	26歳	女性	妹	21歳	+5歳	ASD	同居

\* 1…ASD は自閉スペクトラム障害、ID は知的障害を指す。

\* 2…EさんとFさんは同一家族である

研究協力者は、いずれも関東圏内に在住していた。地域の訓練会等に参加している家族の母親を介して筆者が直接連絡をとり、研究の目的・倫理等を口頭及び書面で説明し、同意が得られた場合にのみ対象とした。なお全ての研究協力者から同意を得ることができた。先行研究において、障害の種別や程度、出生順位、性差による影響の違いが指摘されているが、その一方で出生順位や性差による違いは見られなかったとする研究結果も得られている（Mates, 1990; 原・西村, 1998; 山本ら, 2000; Tinneke & Herbert, 2011）。こうした不一致については、いくつかの理由が考えられる。例えば定量的な研究を行う際、問う項目によって性差が現れやすいものもあれば、必ずしも性差が肝心でない場合もあるだろう。性別や年齢差を独立変数としても、従属変数に据えられるものが研究者の関心によっ



て異なってしまうため、結果が一致しないと考えられる。また、項目の内容によっては「兄」「姉」「弟」「妹」という立場を強調して問うために、こうした年齢差、性差が際立って意識化され、結果に反映される場合もあると推察される。これは質的研究を行う場合にも同様であり、これらを踏まえると「性差、あるいは年齢差が自発的に語られるか否か」が肝要であると考えられる。したがって、「兄として」「姉として」など、出生順位や性別についての言及が自発的に生じ、かつそれらによって差が出てくると考えられる場合に寄り分けた分析を行うこととした。

## 2. 調査時期

2016年6月～9月に実施した。

## 3. 調査場所

筆者が研究協力者に直接連絡をし、研究協力者が安心して話せる空間として指定した場所か、筆者が指定した場所でインタビューを行った。

## 4. 調査内容と調査手続き

フェイスシートを用いて、同胞の性別や同胞との年齢差、家族構成、同居・別居についてたずねた。インタビューの内容は、笠田（2014）や Tinneke & Herbert（2011）を参考に作成し、質問項目は臨床経験豊富な専門家に確認してもらい、修正を加えたものをインタビューガイドとした。これをもとに半構造化面接を行い、研究協力者の話の流れに沿って適宜順序を入れ替えてインタビューを行った。インタビューの内容は次の通りである。

### 現在の親・同胞・周囲の人との関係

1. 現在、障害のある同胞とどのように過ごしているか
2. 母親・父親は自分と同胞にそれぞれどのように関わっているか
3. 同胞・母（父）・自分の3人でみたときの関係性はどのようなものか
4. 両親の関係性はどのようにみえているか

### 過去の親・同胞・周囲の人との関係

5. ○○の頃、障害のある同胞とどのように過ごしていたか
6. ○○の頃、母親・父親は自分と同胞はどのように関わっていたか
7. ○○の頃、同胞・母（父）・自分の三人でみたときの関係性はどのようなものだったか

たか

8. ○○の頃、両親の関係性はどのように見えていたか
9. きょうだいへの見方が変わったなど感じることもあるか→もしあれば、いつ頃、どのような変化があったか

#### その他

10. 自分にとって、障害のある同胞はどのような存在か
11. 今後についてどのように考えているか

半構造化面接は筆者である面接者と一対一で行われ、面接時間は概して1時間～2時間ほどであった。面接中の会話は事前に許可をとり、ICレコーダーで録音をした。また録音した面接内容は全て筆者がプロトコル化した。プロトコルの量は各協力者 Microsoft Word にて A4 用紙 1600 字/枚が 20 枚ほどであった。

## 5. 倫理的配慮

まず初めに、インタビューに入る前に本研究の主旨や目的の説明を口頭および書面で行った。研究協力者が十分理解したのち、個人情報の扱いについて、調査はいつでも参加の拒否ができること、話した内容の中で伏せてほしい箇所があれば遠慮なく申し出てもらうこと、インタビュー中の ICレコーダーでの録音やデータの取り扱い、などを口頭および誓約書として書面でも説明し、同意を得て署名をしてもらった場合のみインタビューを行った。なお研究の計画やインタビュー調査など、研究全体については指導教員の承認を得て実施した。

## 6. 分析方法

分析は序論の第四節で述べた通り、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて行った（木下, 2003; 2007）。

### 6-1. M-GTA の本研究への適応

本研究は、きょうだいからみた ASD 児・者と両親の関係性という相互作用に焦点を当てている。こうした社会的な相互作用を捉える際に重要な点は、捉えようとする事象・行為の構造とプロセスの両方に目を向けることである。例えば質的データの分析法で用いられ

ることの多い K J 法 (川喜田, 1986) は, 構造構成主義に基づき語りの分類や構造化に適している分析法だと考えられる (青木, 2017)。しかし, 本研究で捉えようとしているのは社会的な相互作用という動的な関係性であり, その構造だけでなくプロセス性も捉える必要があると考えられたため, M-GTA が適していると判断した。

## 6-2. 実際の分析過程

質的研究において, 分析の追跡可能性・反証可能性は研究としての科学性を保つ上で重要なものであると考えられている。したがって, 可能な限り追跡できるよう, 分析過程についての詳細を述べる。

実際の分析過程の大まかな流れは①研究テーマから分析焦点者と分析テーマを設定, ②概念を生成, ③新たな概念を生成しつつ各概念間の関連を検討しカテゴリー化, ④カテゴリー間の関連を検討, ⑤結果図, ストーリーラインの作成, ⑥理論的飽和化による分析終了である。

### 6-2-1. 分析焦点者

本研究における分析焦点者は, 「青年期以降の ASD 児・者のきょうだい」であり, 限定された範囲内の対象者であることを常に意識する。またこれにより「各調査対象者にとっての意味」を解釈するのではなく, 分析焦点者という「一定の属性をもった人間にとっての意味」を解釈していく。したがって, データは「すべての研究協力者のプロトコルで一つのデータ」という立場をとっている。

### 6-2-2. 分析テーマ

本研究の分析テーマは, 「ASD 児・者のきょうだいから見た ASD 児・者と両親の関わりから捉える関係性」とした。これらの分析焦点者と分析テーマを念頭に置きながらインタビューデータの分析にあたった。分析焦点者と分析テーマとデータを常に照らし合わせながら分析を行い, 語りが長く複数の文脈が見られる場合には, 本研究において重視した語りの該当部分にアンダーラインを引いて明確にした。

### 6-2-3. 概念の生成

上述の分析テーマと分析焦点者に沿ってデータと接し, 関連すると思われる箇所に着

目，着目した部分を具体例としてワークシートを立ち上げ，その具体例から他の具体例の説明も可能であるような定義を考え，それをさらに凝縮したものとして概念名を付けた。これを解釈という。概念がひとつ生成されると，それをもとにデータにあたり，類似例が見つければ具体例として追加した。具体例が豊富に出てこない場合は概念不成立と判断した。また解釈の恣意性を回避するため成立した概念の対極例を想定した。データ内に該当する対極例があれば，対極概念として成立するのかを検討し，成立するようであれば別個ワークシートを立ち上げた。概念について検討した内容や採用しなかった定義等については，ワークシート内の理論的メモ欄にその都度記入した。以下に概念生成過程とワークシートの具体例を示す。研究協力者は，○さん（きょうだいの性別・ASD児・者の続柄）で示している。

本研究においては，Aさん，Bさんのインタビューデータを得られた段階でその全てを読み込み，多様な具体例がありそうなひとつのデータとしてAさん（女性・兄）を選び出した。Aさんを選び出した理由は，インタビューに快く応じ，自身の体験を内省して具体的に言語化していたと考えられたため，最初の分析データに相応しいと考えたためである。次に，分析焦点者と分析テーマと照らし合わせながら関連のありそうな箇所に着目し，その箇所を具体例として分析ワークシートを立ち上げた。例えば，Aさんは次のように語っていた。

- Aさん（女性・兄）p.16・・・でいろんなことチャレンジさせて，大人になった時にやってることが多いというか，たくさん出来た方が良いついていうのがあるから，いろんなことを熱心にやってたなっていうのが覚えているんですけど。

筆者はこの下線部を，きょうだいは母親がASD児・者に将来的にできることが多くなってほしいという考えから，早い時期より継続して熱心に関わってきていると捉えていると考え，定義：「母親が発達障害を持つ同胞の将来を考え積極的に理解しようとし，早い時期から継続して熱心に関わっていると捉えているということ，概念名：「母親が熱心に関わっている」と解釈した。また具体例も豊富に見つかったため，概念成立と判断した。以下にワークシートの具体例を示す（Table2）。

Table 2 分析ワークシート例①

概念	母親が熱心に関わっている
定義	母親が ASD 児・者の将来を考え積極的に理解しようとし、早い時期から継続して熱心に関わっていると捉えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● A さん (女性・兄) p.16・・・いろんなことチャレンジさせて、大人になった時にやってることが多いとか、たくさん出来た方が良いついていうのがあるから、いろんなことを熱心にやってたなっていうのが覚えてるんですけど (A さん, p.16)</li> <li>● B さん (女性・弟) p.5・・・幸運なことに、幼稚園の先生も弟の様子を見て、ちょっと、って思ってくれたださったみたいで、そこから多分あの、児相に行った方が、っていう話を母親にしてくれたようで。そこからこう母親も動き始めて、わかっていただけどうしたら良いついていうのがわからなかったと思うんですよね。で、<u>母親本人はなるほどなるほどって動くタイプの人なので</u>、で、やっていったのかな。ちょうどね、母親も育つ頃で。</li> <li>● C さん (女性・兄) p.13・・・母も将来に向けて考え始めていた時期なのかなって思いますね。兄が将来少しでも困らないように、なんか色々教えたりとか。で、兄も昔から変わらないわけじゃなくて、できることがすごい増えて。多分その私が大学生の頃から兄ができることが増えてきたなあってすごい思うんですよね。だから母もそれに期待して、すごく色々教えたりしてたなって思います。</li> <li>● D さん (男性・弟) p.8・・・毎朝一緒に出て行く?で、電車のトレーニング。やっぱ1人じゃまだ難しいっていうところで、電車で行くトレーニングをしてました。あと少しずつ、なんというか注意の仕方が母変わったような気がして。小学校くらいは、結構手が出やすい、多分なんと言っただいかわからなかったと思うんですけど。よりも、口で聞かせるようになっていたかなあとは思います。(D さん, p. 8)</li> <li>● E さん (男性・弟) p.12・・・何か一つやらせようっていうような意識が強くなったんですかね。だから例えば計算を少しできるようにしようとかっていうことをしたりとか、こう1人でバスに乗れるようにしようとか、そういう自立を促すようなことをすごいしてたかな。</li> <li>● F さん (男性・弟) p.6・・・割と今でもスキンシップが多くてもうちの弟も表面は嫌がってますけど、まあ多分まんざらでもないんだろうなあって。そこで愛情を感じているとか。多分彼を、だからこの頃は<u>その仕事の出がけとかに、うちの母親とハイタッチして出かけるんです</u></li> </ul>

	<p>よ。ただ、うちの M が忙しくて玄関まで出迎えて、出迎えというか見送りに来てくれない時とかは、わざわざうちの母を呼んで、ハイタッチしてから行くんです。必要なんだろうなって思うんですけど。うん。そういうことを、うん。</p>
<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ASD 児・者と母親の関係性</li> <li>- きょうだいから見ても、母親は ASD 児・者に対して熱心に関わっている。しかし、この熱心さが適度な場合と、過度な場合があるかもしれない。そこには他の家族成員の関与が関係している？</li> <li>- この関わり方は他の家族成員にどういった影響を与えているのか？ →父親を巻き込むパターンと、より孤立するパターン？ きょうだいの ASD 児・者に対する印象に影響がある？</li> <li>- 早い段階からは積極的でない場合は？またその原因として考えられることは？</li> <li>- 行き過ぎた積極性は？</li> </ul> <p>* 対極例：</p> <p>母親が熱心な関わりをしていない→データ該当箇所なし。概念不成立。 父親が熱心な関わりをしている→データ該当箇所なし。概念不成立。 父親が熱心な関わりをしていない→類似概念成立。</p>

#### 6-2-4. 概念間の比較, カテゴリー化, 理論的飽和化

上述の手順で新たな概念も生成していき、その都度個々にワークシートを立ち上げた。また、これら概念の生成と同時に個々の概念間の比較検討も行った。概念同士のつながりがある場合にはカテゴリー化し、分析焦点者と分析テーマに沿ってカテゴリー名をつけた。以下にその具体例を示す。

分析を続ける中で、新たな概念としてきょうだいからみて ASD 児・者の障害の特性により両親が接し方に難しさを感じているようであるとする [障害特性による関わりの難しさ] という概念が成立した。先に成立していた [母親の熱心な関わり] との関連を検討すると、障害特性による関わりの難しさがあると母親は熱心に関わらざるを得なくなり、同時熱心に関われれば関わるほど、その難しさにも直面すると考え、これらは相互に関連していると考えた。また [父親の熱心な関わり] は概念として成立せず、母親特有のものであると考えられた。これらのことから、[母親と ASD 児・者の早期のカップル性] という概念が成立し、この概念との関係を検討すると [障害特性による関わりの難しさ] と [母親

の熱心な関わり]のサイクルが[母親とASD児・者の早期のカップル性]を形成していると考えられた。これらの流れはASD児・者を中心に行っているからこそその母親と父親の在り方であると考えられたため、〈発達障害児・者中心の家族〉とサブカテゴリー化した。

そしていくつかのカテゴリーの生成と同時にカテゴリー間の比較も行い、その関係を手書きの略図で描いた。その後も概念の生成とともに概念間の比較、カテゴリー間の比較を継続して行った。

M-GTAにおいて、分析を終了させる判断は、理論的飽和化に至ったか否かによる。理論的飽和化とは、分析を終了させるための一種の装置であり、データにあたってはすでに解釈した内容の具体例の追加しか生じず、新たな概念やカテゴリーが生成されなくなった状態のことを指している。

後半のインタビューであったHさんの分析の時点で新たな概念が生成されなくなり、ついでIさんの分析を行ってもすでに解釈した内容の具体例の追加しか生じなかった。新たな概念やカテゴリーが生成されなくなり、具体例の追加があっても結果図・ストーリーラインの構造が変化しなくなったため理論的飽和化に至ったと判断し、全体の分析を終了した。その後はさらに結果図を精緻化し、それを簡潔に文章化（ストーリーライン）した。

### 第三節 結果と考察

M-GTA による分析の結果、最終的に 17 個の [概念] が生成され、3 個の 〈サブカテゴリー〉、2 個の 【カテゴリー】 が生成され (Table 3), 「ASD 児・者のきょうだいから見たカップル性を中心とした ASD 児・者と両親の関係性」が見出された。

Table 3 ASD 児・者のきょうだいから見たカップル性を中心とした ASD 児・者と両親の関係性 概念リスト

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	[概念]	定義
ASD 児・者中心の家族		1 障害特性によって関わりが難しい	こだわりや突然のパニックなど、ASD 児・者の障害特性によって、両親が接し方に難しさを感じているように見えていること
		2 母親が熱心に関わっている	母親が ASD 児・者の将来を考え積極的に理解しようとし、早い時期から継続して熱心に関わっているように見えていること
		3 ASD 児・者との早期のカップル性	ASD 児・者が幼い頃から、母親と ASD 児・者の間に特別な結びつきが成立していると捉えていること
一体感のある家族	母	4 柔軟に関わる	母親が ASD 児・者に対して、自身にも ASD 児・者にも無理のない範囲で接しているように見えていること
		5 お世話を振り分ける	母親が状況によっては ASD 児・者の世話を他の家族成員に任せているように見えていること
		6 自身の時間	母親と ASD 児・者の距離のバランスがとれ、母親が自分の時間を過ごすことができているように見えていること
	家族の中で主体性のある ASD 児・者	7 一対一に関わる	父親が主体的に ASD 児・者と一対一に関わっているように見えていること
		8 家族成員を使い分ける	ASD 児・者が状況に合わせて家族成員の誰とコミュニケーションをとるか主体的に決めているように見えていること
		9 家族全体を繋ぎ止める	ASD 児・者がいることによって家族の離散が防がれているように捉えていること
分断している家族	母	10 日々大変さが溢れる	母親が ASD 児・者との日常的な関わりの中で様々な大変さが生じているように見えていること
		11 ASD 児・者に対して困惑する	父親が ASD 児・者とどのように関われば良いかわからず困惑しているように見えていること
	父	12 障害の理解が難しい	父親は障害を理解することが難しいと感じているように見えていること
		13 障害を否認する	父親が ASD 児・者を障害のない子として扱っているように見えていること
両親のカップル性		14 両親に一体感が生まれている	両親がともに、二人三脚で進んでいるように捉えていること
		15 両親の理解に相違がある	ASD 児・者に対する母親と父親の態度・理解が異なっているように捉えていること
母親と ASD 児・者のカップル性		16 母親と ASD 児・者の安定したカップル性	母親と ASD 児・者の特別な結びつきが過度ではないが、依然として強いと捉えていること
		17 母親と ASD 児・者の過度なカップル性	母親が ASD 児・者との関係に埋もれてしまい、過度な結びつきがあると捉えていること

以下にこれらをまとめて作成した結果図 (Figure 2) と簡潔に文章化したもの (ストーリーライン) を結果として示す。



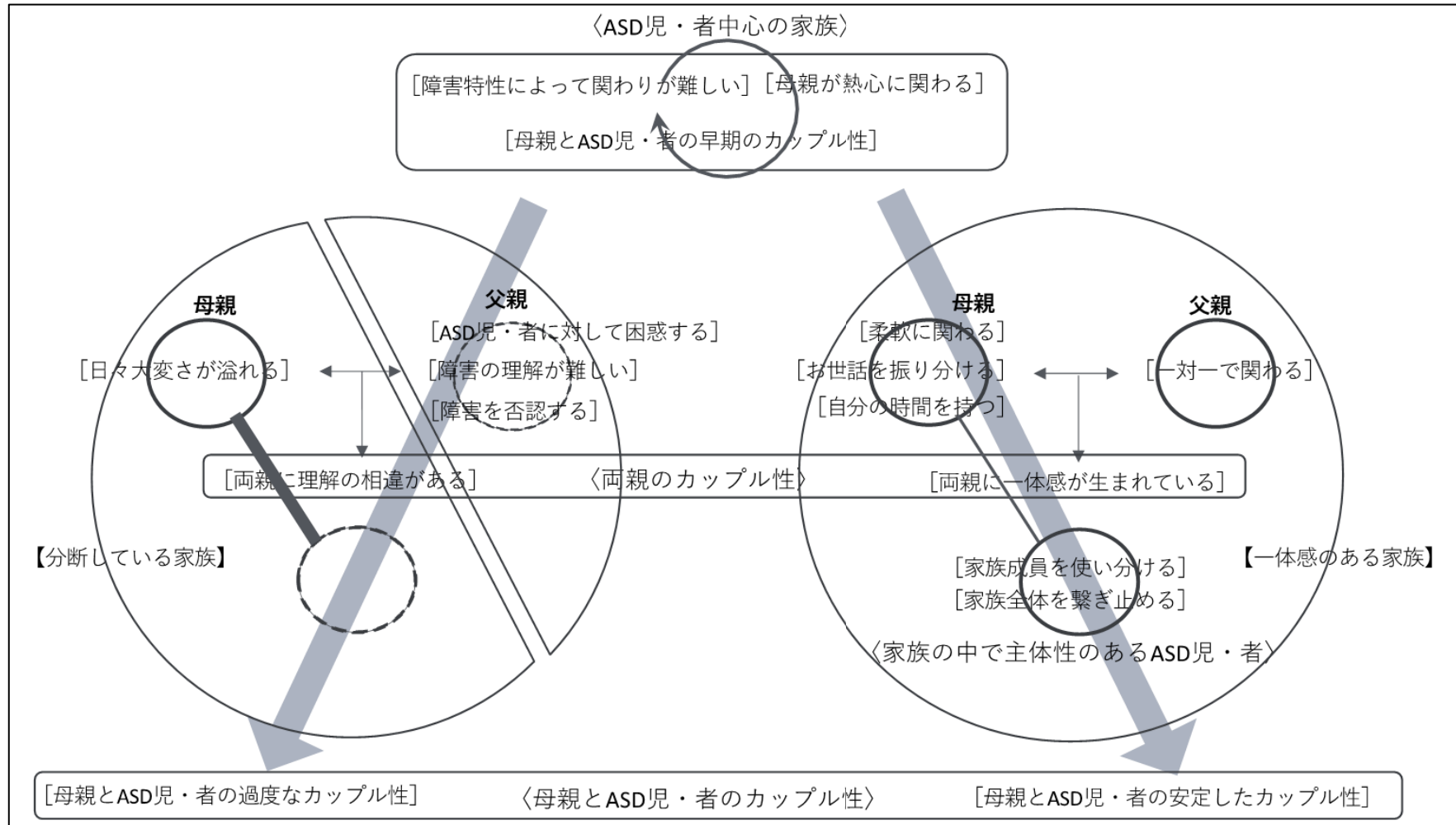


Figure 2 ASD児・者のきょうだいから見たカップル性を中心としたASD児・者と両親の関係性

### 3-1. ストーリーライン

きょうだいは ASD 児・者と両親の関わりから、早い時期より〈ASD 児・者中心の家族〉を見出していた。ここでは、[障害特性によって関わりが難しい]と感じながらも[母親が熱心に関わっている]様子から、[母親と ASD 児・者の早期のカップル性]が生み出されていた。そしてこれをベースとして二極化し、【分断している家族】と【一体感のある家族】という家族の関係性が形成されていた。【一体感のある家族】では、きょうだいから見ると、[柔軟に関わる]ことや ASD 児・者の[お世話の振り分ける]ことをし、[自分の時間を持つ]母親像が捉えられていた。また ASD 児・者と[一対一に関わる]父親像も捉えられていた。このように、母親と父親、個々で ASD 児・者と接している中でも[両親に一体感が生まれている]と捉えていた。またここでは家族の中で〈主体性のある ASD 児・者〉もみられている。きょうだいからは ASD 児・者が[家族成員を使い分ける]ことや、ASD 児・者がいることによって[家族全体を繋ぎ止める]という、家族の離散を防ぎ、まとめるという影響があると捉えられていた。そしてこのるような両親の関性と ASD 児・者の在り様からは、[母親と ASD 児・者の安定したカップル性]が賦活され、これらが関連することにより、両親と ASD 児・者の三者間の力動バランスがうまく保たれ、一体感があるという家族像が生み出されていた。その一方、【分断している家族】では、きょうだいは[日々大変さが溢れる]母親像が、[ASD 児・者に対して困惑する]、[障害の理解が難しい]、[障害を否認する]という距離のある父親像が捉えられていた。このような母親、父親の間に[両親の ASD 児・者に対して理解の相違がある]と、[母親と ASD 児・者の過度なカップル性]が賦活されていた。そしてこれらが相互に刺激し合うことにより、母親と ASD 児・者の距離が近くなり過ぎて一方離れている父親というような、分断しているひとつの家族像が生み出されていた。またこの二つの家族像は一概に過去から現在にかけて左から右へと移行するわけではなくその逆も考えられる。つまり一方向的なものではなく連続体であると考えられ、それ故にどちらかに長く固着してしまうことや、局面によって移行する可能性があることも示された。

次に各カテゴリーの説明や各概念の定義、具体例を数例示しながら提示する。具体例は「○さん(性別・ASD 児・者の続柄)」で記載した。

### 3-2. 各カテゴリーや概念について

#### 3-2-1. ASD 児・者中心の家族

このサブカテゴリーは以下の3つの概念から生成した。

[障害特性によって関わりが難しい]はこだわりや突然のパニックなど、ASD 児・者の障害特性によって、両親が接し方に難しさを感じているように見えていることを指す。

- Cさん(女性・弟) p.8・・・(母親は)すごい疲れてましたね。うん。本当に

泣くたびにヒステリーっぽくなってる時もありましたね。…その頃は父もなんか母，兄に対して怒る母に対して怒るっていう感じで。もう中学校の頃は家族全員，なんだかなんとなくギクシャクしてましたね。母も兄には関わりたくなけれど，でも静かにさせようとする母にまた怒ってっていう感じで。ちょっと嫌な，嫌な時期でした。

- Eさん (男性・弟) p.5 うん，悩んでいますね。で，やっぱり，あの，精神年齢がすごい幼いんですよ。だからどうしてもこう自分，気持ちが通らないと「やっぱりダメ」っていうのがあるので。よく駄々こねるんですよ。だから，そこがちょっと悩んでるのかなって気はしますけどね。

[母親が熱心に関わっている] は，母親が ASD 児・者の将来を考え積極的に理解しようとし，早い時期から継続して熱心に関わっているように見えていることを指す。

- Aさん (女性・兄) p.16・・・いろいろなことチャレンジさせて，大人になった時にやってることが多いとか，たくさん出来た方が良いついていうのがあるから，いろいろなことを熱心にやってたなっていうのが覚えてるんですけど (Aさん, p.16)
- Dさん (男性・弟) p.8・・・毎朝一緒に出て行く?で，電車のトレーニング。やっぱり1人じゃまだ難しいっていうところで，電車で行くトレーニングをしました。あと少しずつ，なんというか注意の仕方が母変わったような気がして。小学校くらいは，結構手が出やすい，多分なんと言って良いかわからなかったと思うんですけど。よりも，口で聞かせるようになっていたかなあとは思います。

〈母親と ASD 児・者の早期のカップル性〉は，ASD 児・者が幼い頃から，母親と ASD 児・者の間に特別な結びつきが成立していると捉えていることを指す。

- Fさん (男性・弟) p.1・・・まあちっちゃい頃は特に，まあ今もそうですけど母なしでは生きられない子なんで。ちっちゃい頃からもう，かかりつきりだったっていうことはないですけど，常に困らせてたのは弟，かなー。
- Gさん (女性・姉) p.4・・・なんか，やっぱり姉につきつきりみたいなイメージはあったので，なんかそれもしょうがないなって。それも心の中で思っていましたし。その幼稚園生の頃は，ずっと自分が面倒みなきみたいな感じにたぶん思ってたので，あんまりそんな，不満，母が姉につきつきりってことに関して，嫉妬したりとかそういうのはたぶんなかったと思います。

きょうだいには，[障害特性によって関わりが難しい] と両親がともに感じていると捉えていた。しかしそこから関連して生じているものは [母親が熱心に関わっている] のみであり，父親が熱心に関わるような具体例はみられなかった。この [母親が熱心に関わっている] は ASD 児・者の将来を考えて日々の生活の中で母親が熱心に関わっていることを示している。そして熱心に関われば関わるほど再び [障害特性によって関わりが難しい] と感じるサイクルが生み出されていると言えるだろう。このサイクルから [母親と ASD 児・者

の早期のカップル性] が形成されていると考えられ、これは沼田 (2016) の示した「母子の専心的な二者関係」とも符合する。同時に、見出された家族像である【分断している家族】と【一体感のある家族】との関連をみると、それらに移行する前の雛形として、また移行した後でも両者に共通するものとして位置づけることができる。このように、ASD 児・者への関わりが家族の関係性を定めていると考えられ、ASD 児・者中心の家族というサブカテゴリーが捉えられた。

## 2. 【一体感のある家族】

Figure 3 の右側にある概念やサブカテゴリーを総括し、【一体感のある家族】をカテゴリーとした。このカテゴリーでは、〈両親の関係性〉のうち [両親の一体感] と、〈母親と ASD 児・者のカップル性の質〉のうち [母親と ASD 児・者の安定したカップル性] が中心に据えられている。また両親が各々主体的に ASD 児・者へ関わっているという側面に加え、〈家族の中で主体性がある ASD 児・者〉もみられた。家族成員のそれぞれに適度な主体性がみられることでバランスがとれているという家族像を以下の概念やサブカテゴリーから捉えて生成した。

[柔軟に関わる] は、母親が ASD 児・者に対して、自身にも ASD 児・者にも無理のない範囲で接しているように見えていることを指す。

- D さん (男性・弟) p.10・・・根気強くやってたと思います。なので弟も、自分で頑張れる時は頑張るって言うてみたり、ちょっと今日は、っていう日も。そしたらわかったって言うて。迎えに行く。…柔軟に、やってみました。無理はさせない。なんでも自分から入ってこないとやらない、っていうのが母のモットーというか。なので、自分からやるって言うたらやらせるし、できないんだったらじゃあ助けるよって形でやってたので。
- E さん (男性・弟) p.13・・・でも、母はもう、とにかく辛いんだったらやりたいことはじゃあやらせてあげようってことで、例えば、あの子結構お風呂とか好きなので、近くの銭湯とか連れてってあげたりとか。休みの日はもう海出かけるよって言うて、例えばあの子ヨーカドー好きなのでヨーカドー連れて行ったりとか。そんなの、でしたかね。だから別に解消法がないっていうよりは、うーん、あの子にもちょっとじゃああの一楽になるように付き合っただけでいいよって言うて。一緒に外で遊んで待ってるとか。

[お世話を振り分ける] は、母親が状況によっては ASD 児・者の世話を他の家族成員に任せているように見えていることを指す。

- B さん (女性・弟)・・・だからいつもお目付役で、友達と遊びたいのに、今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると、え、良いよ。って言うて。一緒に外で遊んで待ってるとか。

- Dさん (男性・弟) p.17・・・あとは、母が怒っている時の弟の逃げる場所になるとか。まあ二人で怒っちゃう時もあったんですけど。一方で僕が怒ってる時には母が逃げる場所になる、っていう。っていう風には、できていたかなと思いますね。

〈母親自身の時間〉は、母親と ASD 児・者の距離のバランスがとれ、母親が自分の時間を過ごすことができているように見えていることを指す。

- Aさん (女性・兄) p.17・・・やっとなんか平日は自分の時間みたいな。そういう分け方みたいなところがちょっと変わってきたのかな。四六時中一緒じゃないんだっていう。まあここはちゃんとやって、あとは自分の時間、みたいな。まあしっかり分けてって感じはする。
- Cさん (女性・兄) p.5・・・日中作業所に通ってて、母親が毎日朝送ってるのと、夕方と、車で送り迎えをされていて、で、たまに兄が外ヘルを利用しているので、母は外ヘルさんに任せて。自分の時間っていう感じみたいですね。

自分の時間を過ごしている母親からは、熱心ではあるが ASD 児・者に無理はさせず、また自分も無理はしないで他者に任せられるところは任せることで ASD 児・者との関係に埋もれることなく、自分の時間を作ることができている母親像があると示唆された。

〈一対一で関わる〉は、父親が主体的に ASD 児・者と一対一で関わっているように見えていることを指す。

- Bさん (女性・弟) p.3・・・で、父親も定年退職してからは、送迎の方、朝の送りの方？をやってるって言ってたかな。で、迎えは母親がっていう形になってるので。
- Iさん (女性・妹) p.19・・・3人は、まあ悪くなかったんじゃないですかね。その大学、私の3年くらいまでの記憶だと。そんな悪くなかったと思うんです。やっぱ父親と妹で、まあ父親がだいたい連れ出すんですけど、出かけたりとかしたり、母と妹でどっか行ったりとか。してたみたいですね。うんうん。

一対一の関わりを持っている父親からは、日常の中で接する時間は母親と比べると少ないものの、それでも主体的に関わることで一緒にいる時間を増やそうとしている父親像が示唆された。

〈両親のカップル性〉：[両親に一体感が生まれている]

〈両親のカップル性〉は [両親に理解の相違がある] と [両親に一体感が生まれている] からなっている。これは、両親の ASD 児・者への関わり方によって両親間の関係性が変化していると捉えて生成した。

[両親に一体感が生まれている] は、両親がともに、二人三脚で進んでいるように捉

えていることを指す。

- Bさん(女性・弟) p.22・・・うん、父親も母親に何かあればすぐ相談に乗ってそんな雰囲気でしたので。
- Dさん(男性・弟) p.7・・・両親の関係性は、お互い寄り添って、というか。あまり考えたことはないのでよく分かりません。まあお互い弟に対して認知度っていうものは多分上がっていった。そうですね。一番、両親の関係で難しかったのが、就学前だった気がします。弟の就学前で、別に仲が悪いとかそういうわけではなく、どうして良いか分からない。弟の対応に対してどうしたら良いか分からないっていうところで両親ともに悩んで、いた、という風に聞きました。

母親も自分自身の時間を過ごそうとし、また父親も一対一でASD児・者に関わることで、母親とASD児・者の二者関係はもちろん、父親とASD児・者の二者関係も生じてきていると考えられる。当然のことではあるが、それぞれの二者関係においてASD児・者がどのように過ごしているのかを共有するといったことが、両親のASD児・者に対する理解の一致・促進につながると考えられる。

〈家族の中で主体性があるASD児・者〉は、以下の概念から生成した。

〔家族成員を使い分ける〕は、ASD児・者が状況に合わせて家族成員の誰とコミュニケーションをとるか主体的に決めているように見えていることを指す。

- Aさん(女性・兄) p.5・・・母親がいない時は、その場にいる誰の言うことを聞けば良いのかっていうのは判断してるみたいで、どうしても私しかいなかったら、私の言うことを聞くっていうのは選んでいるみたいで。
- Dさん(男性・弟)・・・弟の中で、これは母とやる、これは父とやるっていうのが決まって。例えば3人で行っても、父さんと映画を見る。そしたら母は自分の時間だって言ってショッピングモールをふらふらしてみたり。反対に、母と、弟で何かをするっていう時は、父がウロウロするっていう。で、買い物3人で行ったり。

〔家族全体を繋ぎとめる〕は、ASD児・者がいることによって家族の離散が防がれているように捉えていることを指す。

- Cさん(女性・兄) p.10・・・もし障害がなくて普通の子だったら、普通の子って言い方はしないですけど、障害がなかったら、私が二十歳になったら離婚したかったなっていうのを言って。なので兄がまあ、そうだったから今離婚しないんだなって思うと、その関係というか。関わりが大きかったのかなって感じがしますね。
- Eさん(男性・弟) p.15・・・家族に与えてる影響としては、やっぱり一個に、一つになるっていう意味ではあの子がいないと、うーん、なんだか。あの子がいることによって、多分家族がそこに一回戻ってくるっていうことが十分にある。でも誰

も弟を気にしてないって人はいないのでうちの家は。そういう影響力があるのかなとは思いますがね。

〈家族の中で主体性のある ASD 児・者〉は、両親各々による主体的な関わりがあるからこそ生じている行動・気持ちであると考えられる。母親との関わりだけでなく父親との関わりもあることで三者関係として成立することは、ASD 児・者の自立した在りようを確立することに寄与していると言えるだろう。またこのサブカテゴリーは次に記述する母親と ASD 児・者のカップル性の質にも影響を与えていると考えられる。

〈母親と ASD 児・者のカップル性の質〉；[母親と ASD 児・者の安定したカップル性]

このサブカテゴリーは、[母親と ASD 児・者の過度なカップル性] と [母親と ASD 児・者の安定したカップル性] からなっている。母親と ASD 児・者の結びつきが極端に強くなることがある一方、極端に強くはないもののその結びつきがなくなることはないことから、二人の結びつきにも質の異なりがあると捉え、生成した。【一体感のある家族】における母親と〈ASD 児・者のカップル性の質〉は、[母親と ASD 児・者の安定したカップル性] である。

[母親と ASD 児・者の安定したカップル性] は、母親と ASD 児・者の特別な結びつきが過度ではないが、依然として強いと捉えていることを指す。

- D さん (男性・弟) p.19・・・弟は、弟は結びつきは強いですが、母が絶対なので、母の言うことは絶対なので、気持ちは母にあるかなと、思いました。
- G さん (女性・姉) p.3・・・基本身の回りの世話はしてるんですが、結構それぞれ気をつけてると思います。…ただ多分母が姉の一番の理解者だとは思っていません。

きょうだいから見た 1 つの家族像として、【一体感のある家族】が見出された。このカテゴリーでは父-母-ASD 児・者の三者関係というバランスがとれている状態が際立っていると考えられる。ただし、母親と ASD 児・者の特別な結びつきが高まり過ぎていない状況が生じているが、その特別な結びつきがなくなることはなく [母親と ASD 児・者の安定したカップル性] として続いていると示唆された。

### 3. 【分断している家族】

きょうだいから見た家族像の一つとして、Figure1 の左側にある概念やサブカテゴリーを総括した【分断している家族】を生成した。【分断している家族】では〈両親のカップル性〉における [両親に理解の相違がある] と〈母親と ASD 児・者のカップル性の質〉における [母親と ASD 児・者の過度なカップル性] が関連しあっており、【一体感のある家族】で見られた ASD 児・者の在り方が見出されなかった。これは母親と ASD 児・者が密

着すればするほど、ASD 児・者という個人は消えて〈母親と ASD 児・者のカップル性〉という関係性のみが生き残り、そこから父親が離れているという家族の在り様として捉え、生成した。これは以下のサブカテゴリーと概念によって生成した。

〔日々大変さが溢れる〕は、母親が ASD 児・者との日常的な関わりの中で様々な大変さが生じているように見えていることを指す。

- Dさん (男性・弟) p.4・・・当番とかも小学校だとあるので、母は弟を連れて行って。でも弟は自分勝手にどこか行っちゃうので。自分勝手とか興味本意で？どっか行っちゃって、それについていく母とかあったんで、まあ、大変だったんだろうなって、思います。(Dさん, p.4)
- Gさん (女性・姉) p.2・・・あとちょっと姉がその不安定になってるっていうので、母も、二人で一緒にずーっといと辛いみたいで。そこはちょっと気を使うようになりました。はい。(Hさん, p. 2)

〔ASD 児・者に対して困惑する〕は、父親が ASD 児・者とどのように関われば良いかわからず困惑しているように見えていることを指す。

- Eさん (男性・弟) p.6・・・うーん…Fは戸惑ってましたね、まだ。うん。どんな風に怒ったら良いかわからないとか、あとはどっか連れて行ったら、弟勝手に結構どっかいっちゃう人なので、だからそれでいなくなっちゃったりとか、そういうのはあったかな。だから多分、Fは多分、戸惑ってた。どうしたら良いんだろうって。
- Iさん (女性・妹) p.11・・・ただその、うーん、対処の仕方というか、妹の理解できない時の泣いたり怒ってたりした時の、への対処の仕方がやっぱり、母ほどうまくはなかった。母と私ほどうまくはなかった、かもしれないですね。それはその後にも言えることなんですけど。うん

〈障害の理解が難しい〉は、父親は障害を理解することが難しいと感じているように見えていることを指す。

- Cさん (女性・兄) p.10・・・私と母親は、兄はこれはできるっていうことがわかっていて。その、将来兄だっけずっと家にいられるわけじゃないんで、いつかはあの、ホームとかに入ると思うんですけど、その時に、自分で少しでも何かできるようになって、これはできるっていうのを私たちが判断してるんですけど、父はその、何でやってやらないんだ、いじわるするなって言って、そういうことを言っていて。たとえば兄がおかわりが欲しいって仕草をするんですね。で、私たちはおかわりくださいって言えるのがわかってるので、言えるまで待つんですけど、母親は、あ、父親は仕草してるんだからおかわりやれよって、そういうことがあって。どこで結構口論ではないんですけど。できるんだからやらせてよってという私と母と、



やってやれっていう父と。で兄も仕草をしてるのにももらえないと、まあイライラしちゃうので、父はイライラされるのが嫌だから、早くおかわりやれっていうそういう…。)

- Iさん(女性・妹) p.2~3・・・うーん、なんか父親が妹を100%理解してなかったんじゃないかって私も母親も思っている。っていうのを、うん、わかって、この細めの線にしました。きっと愛情はあったと思うんですけど、ただその理解をしようとしているかっていうところとかは、私、健常児の私に対する熱意の方が強かった、気がしてますね。

〈障害を否認する〉は、父親がASD児・者を障害のない子として扱っているように見えていることを指す。

- Bさん(女性・弟) p.15・・・ただ父親は、でもそんなことないな、父親はほらあの多分あまり接し方がわからないけど、やっぱり可愛いから抱っこおんぶしたり、高い高いしたり。そう父親高い高いして落っこしちゃって、前歯折れちゃったんですよ。で、差し歯なんだよって聞いて大変だなって。
- Cさん(女性・兄) p.3・・・んーっと、何か昔の写真とか見たりとか、小さい時の録音のカセットテープとかがあって、そういうのを見ると、その頃はなんていうんですかね、普通、というか、普通っていうとあれですけど、多分そこらへんの子と同じような感じで関わってるんですけど、多分兄が中学か高校くらいでパニックが酷い時があって、その頃からなんとなくパニックになれるのが怖いというか、そういう印象を持ってたんじゃないかなって、思いますね。

こうした父親の関わり方からは、両親がともに〈障害特性による関わりの難しさ〉を感じているものの母親とは対照的にASD児・者に対して、難しさがあるゆえに主体的に関わっていない、あるいは関わるとしても少しずれている、障害を否認しているという父親像が示唆された。

#### 4. 〈両親のカップル性〉；[両親に理解の相違がある]

[両親に理解の相違がある]は、ASD児・者に対する母親と父親の態度・理解が異なっているように捉えていることを指す。

- Eさん(男性・弟) p.5・・・まあちっちゃい頃からそういう、根気強く接してきた母と父の違いなのかなって。結構、父はもうすぐキレちゃって。どっちかっていうとね。じゃあもう良いよってなっちゃって。で、いつも喧嘩になっちゃうっていうのが大体のパターンなんで、そこはもう、あの一、父と母の違いって言ったらそのくらいですかね。別にもう普段の弟の行動とかそういうパターンも、二人ともよく知ってるので、だからその言い方とか接し方はちょっと違うだけ。
- Iさん(女性・妹) p.11・・・差ですかね。うーん…どうだろうな。根本的な、そ

の障害者に対する考え、まあ私も母も違うんですけど、私と母でも違うんですけど、(父は)まあ理解が、どっかできないと思ったりするのかなっていう。ですかね。

〈両親に理解の相違がある〉は、負担がかかっている母親と距離のある父親から見えてくるものである。[障害特性による関わり方の難しさ] や [母親と ASD 児・者の早期のカップル性] が前提としてあることを考えれば、日々の生活の中で母親と ASD 児・者の密着度が高まることは容易に想像できる。しかしそのような母親とは対照的に、ASD 児・者に対してどのように関わればよいのかわからず、戸惑ってしまうことで障害があることを否認してしまう父親が示唆されたと言えるだろう。このような戸惑い・否認が解消されず、ASD 児・者との関わりに難しさを感じたままでは、普段熱心に関わっている母親との間に齟齬が生まれやすくなり、[両親に理解の相違がある] が生じてしまっている状態となっていると考えられた。

#### 5. 〈母親と ASD 児・者のカップル性〉；[母親と ASD 児・者の過度なカップル性]

[母親と ASD 児・者の過度なカップル性] は、母親が ASD 児・者との関係に埋もれてしまい、過度な結びつきがあると捉えていることを指す。

- C さん (女性・兄) p.4・・・母も全部自分で大丈夫、大丈夫って感じで。私が何かやるよって言っても、いいよいいよ、平気平気って言ってくれる人なので、自分としてはもっと何か手伝いたいなあって思うんですけど。
- F さん (男性・弟) p.19・・・僕が高校生の時にうちの母が倒れたことがあって。で、その時まああの生死に関わる状況ではなかったんですけど、どっかに石ができたちゃって、で、それで内臓かなんかにできて。そういうなんかなんだろかな、えっと尿石？そういうので、うちの弟がいる時に、母が痛みで倒れちゃって、でもうちの弟ではどうにもできないことだったので 119 にかけるでもない。ましてや救急車と一緒に乗れるでもない。で、結局家族みんなに電話して繋がらなくて、最後に電話したのが僕で、で、あの一それで家に駆けつけた時に弟と苦しんでる母親、っていう状況で。で母親が自分で 119 で救急車呼んでたみたいで、あとは救急隊員の到着を待つだけ。で、でもあの一その時僕もかなり焦ってたので、あのうちの弟と話す暇もなく。なんかまあ弟は多分、驚きすぎて焦りすぎるとスッと冷静になったような、スッと冷静になったような顔をするんです。で、母親にどうしたの？って聞くんです。僕はわかんない！わかんないけど痛いんだよ！って言って。で、救急隊員到着して、とりあえず僕が付き添って行く、救急車乗って行きますって言って、で、弟に救急車と一緒に乗っていくか？って聞いたら、その途端に泣き出して。で、もう救急車に乗るのが怖かったみたいで、いやだ、乗らないって言って。まあビャービャー泣いてるのを家に押し込んで、救急車に僕が乗って行っちゃったんですけど、そういう経験もあって。そういう病院とかになんていうんだろうその

かなり焦ったりびっくりしたりする状況だと自分がコントロールできなくなるんだなあっていうのは、かなり自分の感情をコントロールが効いてきた頃だったので。中三とかかなり落ち着いてる時の頃だったので、その彼がこうなるのかあって思ったんですよね。やっぱり母親がいないと生きていけないと思ってるんだなあって感じたのがそのエピソードですね。

きょうだいからみた家族像の一つとして、【分断している家族】が見出された。このカテゴリーからは、両親の ASD 児・者に対する理解の噛み合わなさによって母親と ASD 児・者の特別な結びつきがより強まってしまうこと、高まれば母親への負担がより増してしまい、さらに父親が離れていってしまうという悪循環があると示唆された。北川・七木田・今塩屋（1995）は障害幼児をもつ母親と健常幼児を持つ母親の精神的健康に及ぼす影響を検討し、夫婦親密性サポートは両方の母親にとってそのストレスの多寡に関係なく母親の精神的健康を良好に保つ機能があると指摘している。しかし、【分断している家族】のカテゴリーに移行した場合、大きなサポート源が失われてしまうこと、あるいはそのようなサポート源がないからこそこのカテゴリーに移行するとも考えられるだろう。

#### 第四節 研究 I の全体考察

##### 1. 研究 I で明らかにしたこと

本研究では、きょうだいの家族内の第三者性に着目し、環境としての家族の関係性をどのように認識しているのかを明らかにすることを目的に行われた。その結果、きょうだいからは〈両親のカップル性〉と〈母親と ASD 児・者のカップル性〉というサブカテゴリーに見られるように、家族の関係性を捉える際の軸としてカップル性の概念が有用であることが示された。カップル性とは、二者間の情緒的なつながりのことを指しており、両親間のカップル性が強いのか、それとも母親と ASD 児・者のカップル性が強いのかどうかを見ていくことで、きょうだいから見た環境が【分断している家族】として展開しているのか、あるいは【一体感のある家族】として展開しているのかが理解できると考えられた。しかし、これらはいくまで研究に協力したきょうだいのデータに基づいた家族像である。したがって、ここでさらに臨床的な理解へと繋げていくため、得られた概念・カテゴリーに基づいて Meltzer, D. & Harris, M. (2013) の家族論を用いて再解釈する。

##### 2. Meltzer, D. & Harris, M. の家族論から捉えるきょうだいからみた ASD 児・者と両親の関係性

以下に、Meltzer, D. & Harris, M. (2013) の家族類型をもとに概念・結果図を解釈することで、どのような家族像が展開しているのかを考察する。家族類型の横に付記される数字は概念リストの番号と対応している。また、その家族像に特有の概念は太字で記している。

## I. 【一体感のある家族】概念：1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 14, 16

【一体感のある家族】では、父親－母親－ASD 児・者の三者関係がより明瞭になっていた。ここでの父親は、より主体的に ASD 児・者と関わっているのと同時に、母親も意識的に自分の時間を確保しようとしていた。そこでは各々で完結するのではなく ASD 児・者についてお互いが話をする事で 14. [両親に一体感が生まれている] 状態になり、三者関係がより高まっているという良い循環が生じていた。つまり、ASD 児・者も家族の中で主体的に振る舞うことができるようになってきていることを意味していると考えられる。このような良い循環の中では父親の 7. [ASD 児・者との一対一の関わり] がみられており、些細な関わりであっても、結果として母親と ASD 児・者のカップル性の質に影響を与え、母親と ASD 児・者の結びつきを緩和し、家族力動のバランスを保つ一つの要因となっていると示唆された。山田（2010）でも、母親が父親を自身のサポート資源の一つとして捉えていると示されていることから、その意味でも「父親をいかに治療の場に登場させるか」を具体的に考えていくことが支援のポイントとなるだろう。

このように両親がカップルとして機能している家族の在り方は、「カップル家族」であると理解できる。ここでは両親が情緒的に繋がり、カップルとして成立していることが重要である。1.[障害に特性によって関わりが難しい]と感じられ、2.[母親の熱心な関わり]が生じることで3.[母親と ASD 児・者の早期のカップル性]は存在しているものの、母親が4.[柔軟に関わる]ことや 6.[自身の時間]を確保することを忘れず、父親も 7.[一対一で関わる]様子がみられることで 14. [両親に一体感が生まれている]状態、つまり両親のカップル性が十分に成立している状態になっている。さらに ASD 児・者も 8.[家族成員を使い分ける]という主体性が生まれており、16.[母親と ASD 児・者の安定したカップル性]が生まれている。

すなわち、ASD 児・者がいても愛情を産出し、その成長・発達に希望を失わず、悲しみ・辛さをコンテインしながら、考える機能が働いていく。障害という理不尽に見舞われることによって生じる心理的苦痛に圧倒されることなく、カップルとしてその苦痛をコンテインしていると考えられる。

## II. 【分断している母権的家族】概念：1, 2, 3, 10, 11, 12, 15, 17

【分断している母権的家族】では、母親が ASD 児・者との関係に取り組む一方で、同じ養育者である父親とは距離ができ、母親と ASD 児・者のカップル性が過密になっていると考えられる。1.[障害特性によって関わりが難しい]と感じられながらも、2.[母親が熱心に関わっている]ことで3.[母親と ASD 児・者の早期のカップル性]が生まれる。母親はその関わりの密度によって 10.[日々大変さが溢れる]ことになる一方で、父親は 11.[ASD 児・者に対して困惑する]ようになり、12.[障害の理解が難しい]ことにもなってしまう。これによって 15.[両親の理解に相違がある]状態が生まれ、両親のカップル性が生まれなくなり、17.[母親と ASD 児・者の過度なカップル性]が生じてしまう。こうして家族が母性と ASD

児・者が中心となることで父性は後景へと追いやられ、父性の不在が引き起こされてしまう。これによって良性機能が働く余地が狭まり、家族内の父性的な良性機能は母親が全てを担うか、コミュニティに投影されることになる。しかし、母親的人物が男性に対して敵意を持っている場合、コミュニティに対する羨望から「ギャング的家族」へと変化してしまう可能性が推察される。こうした家族像は、母親とASD児・者のカップル性が過密になればなるほど父親との距離ができるという悪循環が生じているがゆえに形成される家族像であると考えられる。

このような分断を助長する要因として母親と父親のASD児・者に対する理解の相違が考えられた。これは山岡・中村（2008）が示したように、障害認識は父母で違いが認められ、母親の多くは肯定・否定の両価的感情を持ちながらも、比較的早い段階で障害であると認めたのに対し、父親の多くは否定的な感情のみをもち、障害を認めにくかったという結果とも一致していると考えられる。こうして生み出された分断によって、【分断している母権的家族】が生み出される可能性が示唆される。

さらに、このような状況下ではASD児・者の主体性は弱く、母性との関係に埋没し姿が見えにくくなると考えられる。一般的な家庭においてでさえ、未だに主たる養育者は母親であり、父親は余裕があるときに助っ人として補佐をするといった古典的な役割観は強く根付いている（平木・中釜, 2016）。その役割観が極端に振れることにより、こうした分断が引き起こされると考えられる。さらに、ASDという障害を持った子を産んでしまったことへの過度な罪悪感や母親に迫害不安を引き起こし、絶望の種が蒔かれ、抑うつ的苦痛を引き起こし、希望を失わせるリスクを本質的に備えている。こうした過度な罪悪感などを誰がどのようにコンテインするのかという課題は、家族の在り方全体に影響を与えていると言えるだろう。

### III. 【分断している父権的家族】 1, 2, 3, 11, 12, 13, 15

一方、ASD児・者と母親のカップル性が形成され、両親のカップル性が失われていたとしても父親不在までは引き起こされていない状態があることも想定され、これは【分断している父権的家族】であると考えられる。1.[障害特性によって関わりが難しい]と感ぜられながらも、2.[母親が熱心に関わっている]ことで3.[母親とASD児・者の早期のカップル性]が生まれる。ここでの父親は11.[ASD児・者に対して困惑する]ことや、12.[障害の理解が難しい]ことが強く、13.[障害を否認する]ことになり、15.[両親の理解に相違がある]状態となっている。ただし、父性をもつ「切り分ける」という特質（Houzel, 2005）が適度に働いている場合、分断はされながらも一定の距離感を保っている状態ともいえる。このように、この家族像では父親的人物が力を有しているため、家族内には秩序や規律といった不文律が敷かれることになる。その質によっては分断されながらも距離が保たれることによって安定した雰囲気も醸成されるが、攻撃的、専制君主的な側面が強すぎる場合には分断が加速する。特に前者の場合、性質としては【一体感のある家族】と近いものを有し、

各家族成員間に一定の距離感が生まれた状態で関係性が維持され、子どもたちも比較的自由に動く余地が生まれ、同一化対象としての父性が生きている可能性が示唆される。ただし、後者の場合は家族内で生じる抑うつ的苦痛や絶望を表立ってコンテインする存在が確立されないため、それらの根源である障害そのものがないことにされる、つまり否認を中心とした機制が働き、家族の良性機能が働きにくくなると推察される。

これらの母権的家族・父権的家族の違いには、ASD 児・者の性別も関与すると考えられる。本研究においても ASD 児・者の多くが男性であり、父親にとっては同性であるという点はもちろん、母親と比較すれば物理的に接触する時間が少ない分余計に混乱し、障害の否認へとつながる可能性も推測できる。実際、沼田（2016）が父親は父親なりのペースとやり方で子どもとの関係を築いていると指摘していることから、父親と同性の ASD 児・者の関係性にはある種の独特さがあるものと推測され、今後より詳細に検討していく必要があるだろう。

#### IV. 【解体している家族】概念：1, 2, 3, 5, 13, 15, 17

【分断している家族】で蔓延る強烈な迫害不安がコンテインされないでいると、家族の分断はさらに拍車がかかることは想像に難くない。1.[障害特性によって関わりが難しい]と感ぜられながらも、2.[母親が熱心に関わっている]ことで3.[母親と ASD 児・者の早期のカップル性]が生まれることは他の家族像と同じである。しかし、母親が過度に 5.[お世話を振り分ける]のと同時に父親が 13.[障害を否認する]場合、当然 15.[両親の理解に相違がある]ことになり、さらに両親のカップル性が生じないため親機能が働かなくなってしまう。このように、障害を持つ子を産み、育てることの抑うつ的苦痛や、蒔かれてしまった絶望の種、が蔓延ることによって、父親の不在がより浮き彫りとなり、最終的には家族が離散してしまう可能性が推察される。したがって、【分断している家族】のさらに外に位置するのは【解体している家族】とも言える家族像が想定される。この【解体している家族】では悪性機能によって解体と混乱に支配されている。必然的に親と子、きょうだい間のバウンダリーも失われ、役割の逆転が生じてしまう「役割逆転家族」の性質を帯びることになると考えられる。特に、父性が不在となることによってその役割を担うことになるのがきょうだいであると推測される。従来からもきょうだいが親的役割を担うことは指摘されてきていたが、それらの多くはあくまで具体的な行動水準の役割である（橘・島田, 1999; 三原, 2000; 清水・板倉, 2021）。しかし、ここで見出された役割とはより情緒的な水準であり、男性女性の区別なく担う可能性があることを考えると、きょうだいの場合には性別よりも「障害がある」というインパクトの方が影響を与えているということを示唆しているのかもしれない。

#### V. 【凝集している家族】概念：1, 2, 3, 9, 14, 17

他方、【一体感のある家族】で見られた母親と ASD 児・者のカップル性が強まり、それ

を前提として両親のカップル性をも強まっていくと、家族の中に悪性の凝集が生じてくると考えられる。1.[障害特性によって関わりが難しい]と感じられながらも、2.[母親が熱心に関わっている]ことで3.[母親とASD児・者の早期のカップル性]が生まれる。同時に、ASD児・者の障害によって9.[家族全体を繋ぎとめる]力が強まってくると、見せかけ上は14.[両親に一体感が生まれている]ように見え、17.[母親とASD児・者の過度なカップル性]が生じてしまうと考えられる。家族内に抑うつ的苦痛や絶望感が渦巻き、両親共々混乱の坩堝に飲み込まれてしまい、ASD児・者は「よさ」や「自立」と言った両親の要求に応えることが難しい弱者であると無意識的にみなす歪んだ見方が醸成され、弱者であるASD児・者を守るという大義名分のもとコミュニティを荒らす「ギャング的家族」と成り下がる危険を孕んでいると推察される。この【凝集している家族】では一見すると教育熱心であったり、治療機関を利用するものの、本質的にはASD児・者の自立を良しとせず、いつまでも親の手元に置いておこうとする病理がうかがえる。

Meltzer, D. & Harris, M. (2013)の家族論をもとに家族の中の第三者的立場にいるきょうだいからみたASD児・者がいる家族像を整理した。臨床においては、主たる相談者はASD児・者と母親になりやすい。しかし、母親とASD児・者の二者関係にのみ焦点をあてることを当たり前と考えるのではなく、父親の立ち位置にも注意を向け、家族全体がどのような力動バランスなのか、そのバランスがどれほどの固さを持っているのかを考えることが、臨床において肝要である。特に重要な点は、両親のカップル性の質がどのようなものであり、家族機能のうちの良性機能をいかに賦活するか、悪性機能を見逃さずにいかに家族全体でコンテインできるよう支援することである。家族成員が担っている機能を評価し、極端な在り方にならぬよう必要に応じて支援者もある程度の機能を担いつつ、その機能を家族内に育てていくような見通しを持つことが重要である。

またこれらの家族像は、同じ家族でありながら、第三者として存在しているきょうだいから導き出されている。カップル性など、実際にその関係性の渦中にある人は自分がその関係に囚われてしまっているために自ら気づくことは難しい。そのような意味でも、きょうだいに家族の在り様について尋ねることは、それ自体が支援の糸口になり得ることも示唆されたと言えるだろう。

### 3. 本研究の意義と今後の課題

分析の結果としてきょうだいの視点から二つの家族像が見出され、いずれの家族像においても母親とASD児・者の特別な結びつきがなくなることはなく、両親の関係性と相互に影響し合うことで家族像が動いていると示唆された。さらに、得られた概念・結果図を精神分析的な概念を用いて解釈し、臨床適用可能なモデルへと拡張を行った。

これまでの研究で示されていなかった父親-母親-ASD児・者の関係を、複数の家族像として示した点が本研究の意義の一つであると考えられる。また同時にこの家族像にあ

てはまらないのであれば、「どの点があてはまらないのか」という側面から予測を立てることもできるだろう。

本研究において示された、家族像形成のコアとも言える母親と ASD 児・者のカップル性はきょうだいが第三者的な立ち位置から見出したものである。意図的にきょうだいを「観察者」という別次元に配置することで「両親と ASD 児・者の関係性」という家族像を捉えようとしていたためか、きょうだいの出生順位や性別が影響しているような語りはほとんどみられず、概念生成にまで至らなかった。そのため今後はより出生順位や性別に焦点をあてて検討する必要もあるだろう。

加えて本研究では「弟であるきょうだい」にデータをとることができなかった。収集したデータ内では理論的飽和化に至ったと判断されたが、さらなるデータの収集によっては再分析が必要かもしれない。

また、「家族の中の第三者性」と対になる「当事者性」に着目した研究は未だ不十分である。きょうだいの葛藤体験を総体的に捉えるためにも、以降はきょうだいの「当事者性」に着目した研究を行う。さらに重要な点として、研究 I で示唆された環境としての家族の在り方の中で、きょうだいがどのような心的苦痛を抱きながらそこに取り組むのかを明らかにしていく。



## 第四章

### 研究Ⅱ 自閉スペクトラム障害児・者がいることによってきょうだいと両親との関係性において体験する葛藤過程

#### 第一節 問題と目的

研究Ⅰではきょうだいの第三者性に着目し、環境としての関係性をきょうだいがどのように捉えているのかを明らかにした。本研究は、そこで検討されていなかったきょうだいの当事者性に着目し、きょうだいと両親の関係性に着目していく。従来は母親との関係性に主眼を置くことがほとんどであり、父親も含めた家族という文脈からきょうだいの体験を捉えようとする試みは未だ知見の蓄積が乏しい(大瀧, 2008)。例えば、田倉(2007)は、きょうだいと障害児・者の関係と母親の養育態度との関連を調べるため、知的障害児・者、ダウン症候群児・者、自閉スペクトラム障害児・者のきょうだい 115 名に質問紙調査を行った。その結果、きょうだいが障害児・者を受容したり親和的に関わることには、母親の兄弟への積極的かつ支持的な態度と、障害児・者との関係を叱ったりするといった統制的な態度の両方が影響していること、そしてその統制的な態度が強いと、きょうだいが葛藤を抱きやすいことを示唆した。また Corsano, Mesetti, Guidotti & Capelli (2017) は、各 14 名の ASD 児・者のきょうだいとその母親に対して関係性で感じる難しさやインタビューを行った結果、きょうだいは複雑な感情を抱き、責任感や将来の不安、友人関係の難しさ、自身の家族の間で体験することを語ることについての困難感があることを指摘した。しかし、これらを見ての通り、父親という存在も含めた家族の関係性からきょうだいを捉える試みは非常に乏しい。

したがって本研究では、きょうだいと両親それぞれの関わりの中でどのような葛藤過程を体験しているのかを整理し、その葛藤を通してどのような心理社会的な発達を遂げているのかを明らかにすること、その葛藤を越える際に両親との関係性の中で重要と思われるポイントを検討することを目的とする。さらに、研究Ⅰで得られた家族像の中できょうだいと両親がどのような関係性を築き得るのかを検討することも併せて目的とする。

## 第二節 方法

### 1. 研究協力者

本研究における研究協力者は、青年期以降のきょうだい 11 名である（男性 4 名，女性 7 名，平均年齢 28.1 歳）（Table 4）。研究協力者は地域の訓練会等に参加している家族の母親を介して筆者が直接連絡をとり，研究の目的・倫理等を口頭及び書面で説明し，同意が得られた場合のみ対象とした。なお全ての研究協力者から同意を得ることができた。

Table 4 研究Ⅱ～Ⅳ 研究協力者

協力者	年齢	性別	ASD児・者の続柄	ASD児・者の年齢	年齢差	診断名*1	ASD児・者の住居形態
Aさん	28歳	女性	兄	31歳	-3歳	ASD+ID	同居
Bさん	44歳	女性	弟	42歳	+2歳	ASD+ID	別居
Cさん	32歳→37歳	女性	兄	34歳→39歳	-2歳	ASD+ID	別居
Dさん	21歳→26歳	男性	弟	19歳→24歳	+2歳	ASD	同居
Eさん*2	26歳	男性	弟	22歳	-4歳	ASD+ID	同居
Fさん*2	24歳	男性	弟	22歳	-2歳	ASD+ID	別居
Gさん	27歳	女性	姉	29歳	-2歳	ASD+ID	同居
Hさん	23歳	女性	弟	18歳	+5歳	ASD	同居
Iさん	26歳→31歳	女性	妹	21歳→26歳	+5歳	ASD	同居
Jさん	21歳	女性	弟	18歳	+3歳	ASD	同居
Kさん	22歳	男性	兄	24歳	-2歳	ASD	別居

\* 1…ASD は自閉スペクトラム障害，ID は知的障害を指す。

\* 2…EさんとFさんは同一家族である

### 2. 調査時期

2016年6月～9月，2021年9月～10月に実施した。

### 3. 調査場所

筆者が研究協力者に直接連絡をし，研究協力者が安心して話せる空間として研究協力者の指定した場所，あるいは貸会議室や筆者の勤務する相談室，オンライン会議ツール（Zoom）等でインタビューを行った。

### 4. 調査内容と調査手続き及び分析対象データ

調査内容は，Aさん，Bさん，Eさん，Fさん，Gさん，Hさんについては2016年に実施した研究Ⅰで用いたインタビューガイドに沿った内容である。Cさん，Dさん，Iさん，Jさん，Kさんについては，研究Ⅰで用いたインタビューガイドに項目を追加したものをインタビューガイドとし，半構造化面接を行なった。インタビュー時には適宜順番を入れ替えながら尋ねた。また語られたエピソードの中でどのようなことを感じていたかを意識的に尋ねた。本研究で使用したインタビュー項目は次の通りである。

#### 現在の親・ASD児・者・周囲の人との関係

1. 現在、障害のあるASD児・者とどのように過ごしているか
2. 母親・父親は自分とASD児・者にそれぞれどのように関わっているか
3. ASD児・者・母（父）・自分の3人でみたときの関係性はどのようなものか
4. 両親の関係性はどのようにみえているか
5. 周囲の親しい人（友人やパートナー）とどのように関わっているか

#### 過去の親・ASD児・者・周囲の人との関係

6. ○○の頃、障害のあるASD児・者とどのように過ごしていたか
7. ○○の頃、母親・父親は自分とASD児・者はどのように関わっていたか
8. ○○の頃、ASD児・者・母（父）・自分の三人でみたときの関係性はどのようなものだったか
9. ○○の頃、両親の関係性はどのように見えていたか
10. きょうだいへの見方が変わったなど感じることもあるか→もしあれば、いつ頃、どのような変化があったか
11. ○○の頃、周囲の親しい人（友人やパートナー）とどのように関わっていたか

#### その他

12. 自分にとって、障害のあるASD児・者はどのような存在か
13. 今後についてどのように考えているか

※5., 11.は2021年度のインタビュー時のみ

半構造化面接は筆者である面接者と一対一で行われ、面接時間は概して1時間～2時間ほどであった。面接中の会話は事前に許可をとり、ICレコーダーで録音をした。また録音した面接内容は全て筆者がプロトコル化した。

本研究で分析の対象としたのは、後述するM-GTAの分析テーマ・分析焦点者に沿って各研究協力者のきょうだいー両親との関係性における体験についての語りとした（Table 5内編みかけ部分）。なおCさん、Dさん、Iさんの3名は2021年時の研究協力依頼にも応じていただいた。

Table 5 研究Ⅱ 分析対象データ

	2016年 ASD児・者 -両親	2016年 きょうだい児 -ASD児・者	2016年 きょうだい児 -両親	2016年 きょうだい児 -社会	2021年 ASD児・者 -両親	2021年 きょうだい児 -ASD児・者	2021年 きょうだい児 -両親	2021年 きょうだい児 -社会
Aさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Bさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Cさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Dさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Eさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Fさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Gさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Hさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Iさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Jさん	-	-	-	-	○	○	○	○
Kさん	-	-	-	-	○	○	○	○

※1 ○…インタビューガイドに挙げられた項目としてインタビューを行い得られたデータを指す。

※2 △…2016年時のインタビューであり、「きょうだい-社会」についてのインタビュー項目はインタビューガイドに挙げられていなかったが、インタビューの流れで自然と語られていた。

インタビュー時間は1時間～1時間半程度で、全て筆者がプロトコル化した。データの扱いの利便性から Microsoft Excel でプロトコル化し、データ量は各研究協力者約 20,000 字程度であった。

なお 2016 年時と 2021 年時のインタビューに応じていただいた研究協力者の語りは、より新しいデータを分析の対象とするため、2021 年時のインタビューによって得られた語りを選択した。なぜなら M-GTA が分析の対象とするデータとは、個人が日常生活を送る中の体験そのままを表現した「ディテール豊富なデータ」(木下, 2003; 2007; 2020) であり、5 年の経過を経ればその分さらなるディテールが盛り込まれると考えられるためである。これらのデータの扱いの背景は、M-GTA を考案した木下 (2003; 2007; 2020) の論考に基づいて第二章の第三節、第四節で述べた通りである。

## 5. 倫理的配慮

研究Ⅰと同様の手続きをもって倫理的配慮を行い、同意を得られた場合にのみインタビューを実施した。なお研究の計画、実施にあたって白百合女子大学倫理審査委員会の承認を得た (受理番号: 2021008 号)。

## 6. 分析方法

研究Ⅰと同様に修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ (以下、M-GTA) を用いた。

### 6-1. M-GTA の本研究への適応

本研究は、きょうだいが幼児期から青年期にかけて両親との間において抱くと考えられる葛藤体験に焦点を当てる。研究 I と同様、まさに人と人との相互作用を捉え、その変化に何がどのように影響を与えているのかを明らかにすることを目的としているため、M-GTA が適していると判断した。

### 6-2. 実際の分析過程

実際の分析過程の大まかな流れは研究 I と同様に、①研究テーマから分析焦点者と分析テーマを設定、②概念を生成、③新たな概念を生成しつつ各概念間の関連を検討しカテゴリー化、④カテゴリー間の関連を検討、⑤結果図、ストーリーラインの作成、⑥理論的飽和による分析終了である。以下にその詳細を述べる。

#### 6-2-1. 分析焦点者

本研究における分析焦点者は、研究 I と同様に「青年期以降の ASD 児・者のきょうだい」であり、限定された範囲内の対象者であることを常に意識する。またこれにより「各調査対象者にとっての意味」を解釈するのではなく、分析焦点者という「一定の属性をもった人間にとっての意味」を解釈していく。したがって、データは「すべての研究協力者のプロトコルで一つのデータ」という立場をとっている。

#### 6-2-2. 分析テーマ

本研究の分析テーマは、「青年期以降の ASD 児・者のきょうだいが両親との関わりから捉える葛藤過程」とした。これらの分析焦点者と分析テーマを念頭に置きながらインタビューデータの分析にあたった。

序論で述べたデータに対する視座のもと、分析焦点者と分析テーマとデータを常に照らし合わせながら分析を行い、語りが長く複数の文脈が見られる場合には、本研究において重視した語りの該当部分にアンダーラインを引いて明確にした。

#### 6-2-3. 概念の生成

上述の分析テーマと分析焦点者に沿ってデータと接し、関連すると思われる箇所に着目、着目した部分を具体例としてワークシートを立ち上げ、その具体例から他の具体例の説明も可能であるような定義を考え、それをさらに凝縮したものとして概念名を付けた。これを解釈という。概念がひとつ生成されると、それをもとにデータにあたり、類似例が見つければ具体例として追加した。具体例が豊富に出てこない場合は概念不成立と判断した。また解釈の恣意性を回避するため成立した概念の対極例を想定した。データ内に該当する対極例があれば、対極概念として成立するのかが検討し、成立するようであれば別個

ワークシートを立ち上げた。概念について検討した内容や採用しなかった定義等については、ワークシート内の理論的メモ欄にその都度記入した。以下に概念生成過程とワークシートの具体例を示す。

まずCさんとDさんのインタビューデータを得られた段階でその全てを読み込み、多様な具体例がありそうなひとつのデータとしてDさん②（男性・弟）を選び出した。Dさんはインタビューにおいて内省的な視点を持ちながら自身の体験を具体的に言語化していたため、最初の分析データに相応しいと考えた。次に、分析焦点者と分析テーマと照らし合わせながら関連のありそうな箇所に着目し、その箇所を具体例として分析ワークシートを立ち上げた。例えば、Dさんは次のように語っていた。

- Dさん（男性・弟）②16・・・そのルーティンができたのがずっと前なわけではないんですよ。社会人になってから。家にいる時間が短くなってからそういう時間が増えたから。僕が最初全く知らなかったんですよそういう時間が、行われてるっていうことが。で、ちょっと家にいるときに「ええ？」みたいな。そんなのやってたの？みたいな。「その時間は黙ってなきゃいけない」ってうわめんどくさ！みたいな。なにそれ！って思って。でもそれで、1人でこう1人で電車の中とかで聞いたりとか。要は音楽聞くと、まあ色々やってたらしいんですよそれも。音楽聞くでやってると、もうノツチャウらしいんですよ。だからそれとかを防ぐ、とか。でも1人で電車乗ってる時になんかこうしている時に、ムービーを聴いてたりとか、見てたりとかすると、一番それが母親遠くから見ていて、変じゃない、みたいな。違和感なかった、みたいな話から始まったから、「それを頑張れるためにこれをやる」っていうのを言われたので、「しょーがねーんだな」っていう感じで入ってたけど…。でもイライラする時はイライラするし。嫌な時は嫌だし、待ってくれって思った時は待ってくれって時なんで。それは普通に言ってる。だからそのなんか、このルーティン壊すと怒るとか、だからこうピリピリしてる感じではない。

筆者はこの部分を、母親がきょうだいに対してASD児・者の特性とその対処としての親の関わりであることを丁寧に説明し、「ルーティンだから」で済ませているわけではないと考え、定義：「ASD児・者の特性とその対処について母親が丁寧に説明すること」とし、概念：「丁寧な説明」と解釈した。

その後、他のインタビューデータを読み込むと具体例が追加されたことと、対極例が概念として生成されたことから、概念成立と判断した。分析ワークシート例は次の通りである（Table 6）。

Table 6 分析ワークシート例②

概念名	丁寧な説明
定義	ASD 児・者の特性とその対処について母親が丁寧に説明すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● B さん (女性・弟) 30・・・一番覚えているのは、えっと、まずは、どのくらいからなのでしょうね。考えてみたんですけど、やっぱり一番自分で覚えているのが、幼稚園くらいに、母親に、やっぱり弟の方が可愛いんだろってことを言った、んですよ。で、<u>その時にごまかさずに母親もきちんとしてくれて、多分弟がこういう子だから、誰かが助けてあげたりしないと、あの、他の人とコミュニケーションが取れないとかそんな難しい言葉は言われてないんですけど、とにかく助けてあげないと困っちゃうから、多分私、あなたよりも弟の方に色々手をかけてしまうけれども、あなたが可愛くないとかそういうわけじゃなくって話を一対一でしたんですね。で、幼稚園生ながらになるほどって思ったみたいで、それから一切言わなくなったのよっていうのを小学生くらいに、何か話した時にそんなことを言って、そういえばそんなこと言われた気がするーって話を母親として。と、そうですね。それから多分、あ、守るんだーっていうのがずっとあったと思って。</u></li> <li>● D さん (男性・弟) ②16・・・そのルーティンができたのがずっと前なわけではないんですよ。社会人になってから。家にいる時間が短くなってからそういう時間が増えたから。僕が最初全く知らなかったんですよ。そういう時間が、行われてるっていうことが。で、ちょっと家にいるときに「ええ？」みたいな。そんなのやってたの？みたいな。「その時間は黙ってなきゃいけない」ってうわめんどくさ！みたいな。なにそれ！って思って。でもそれで、1人でこう1人で電車の中とかで聞いたりとか。<u>要は音楽聞くと、まあ色々やってたらしいんですよそれも。音楽聞くでやってると、もうノツちゃうらしいんですよ。だからそれとかを防ぐ、とか。でも1人で電車乗ってる時になんかこうしている時に、ムービーを聴いてたりとか、見てたりとかすると、一番それが母親遠くから見ていて、変じゃない、みたいな。違和感なかった、みたいな話から始まったから、「それを頑張れるためにこれをやってる」っていうのを言われたので、「しょーがねーんだな」っていう感じで入ってたけど…。</u>でもイライラする時はイライラするし。嫌な時は嫌だし、待ってくれって思った時は待ってくれって時なんで。それは普通に言ってる。だからそのなんか、このルーティン壊すと怒るとか、だからこうピリピリしてる感じではない。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 母親がきょうだいに対して ASD 児・者の特性とその対処方法について説明している。「ルーティンだから」で済ませているわけではない。[対極</li> </ul>

	<p>例：丁寧な説明がない？] → [刷り込み] が該当</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [丁寧] には、知的な説明だけでなく、情緒的な距離の近さも含まれていると考えられる。単に説明をすれば良いというわけではない。</li> </ul>
--	---

#### 6-2-4. 概念間の比較, カテゴリー化, 理論的飽和化

上述の手順で新たな概念も生成していき、その都度個々にワークシートを立ち上げた。また、これら概念の生成と同時に個々の概念間の比較検討も行った。概念同士のつながりがある場合にはカテゴリー化し、分析焦点者と分析テーマに沿ってカテゴリー名をつけた。以下にその具体例を示す。

分析を続ける中で、新たな概念として、きょうだいが ASD 児・者の特性やその対処について、「そういうもの」と無条件に受け入れるよう詳細な説明がなく言われること、あるいはそもそも言われなことを体験するという [刷り込み] という概念が成立した。先に成立していた [丁寧な説明] との関連を検討すると、きょうだいに対する母親説明の仕方としてまとめられると考えられたことから、このまとまりを〈説明の仕方〉というサブカテゴリーを生成した。

そしていくつかのカテゴリーの生成と同時にカテゴリー間の比較も行い、その関係を手書きの略図で描いた。その後も概念の生成とともに概念間の比較、カテゴリー間の比較を継続して行った。

M-GTA において、分析を終了させる判断は、理論的飽和化に至ったか否かによる。理論的飽和化とは、分析を終了させるための一種の装置であり、データにあたってはすでに解釈した内容の具体例の追加しか生じず、新たな概念やカテゴリーが生成されなくなった状態のことを指している。後半のインタビューであった K さんの時点で新たな概念が生成されなくなり、かつ新たなカテゴリーも生成されなくなったため、理論的飽和化に至ったと判断した。最後に結果図を精緻化し、それを簡潔に文章化 (ストーリーライン) した。

### 第三節 結果と考察

分析の結果、18 個の [概念]、7 個の 〈サブカテゴリー〉、3 個の 【カテゴリー】 が生成され (Table 7)、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する葛藤を通して本当の気持ちを出していくプロセス」が見出された。



Table 7 ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する葛藤を通して本当の気持ちを出していくプロセス 概念リスト

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	【概念】	定義
きょうだいの在り方	良い子でいる	1 迷惑をかけられない	きょうだいが親に迷惑をかけまいと思っていること
		2 当然の世話係	きょうだいがASD児・者のお世話係として見なされていること
		3 親の思い・考えが分からなくて不安	きょうだいがASD児・者に対する親の考え・思いについて分からず、将来に不安を抱いていること
		4 関心を向けてほしい	きょうだいが自分のことも見てほしいと感じること
	本当の気持ちを出す	5 しょうがない	親の関心がASD児・者にもっていることや、自分が世話係になることについて折り合いをつけようとしているきょうだいの気持ちのこと
		6 自分の思いを主張する	きょうだいが自らの気持ちや考えについて主張する言動をすること
		7 不安をぶつける	きょうだいが抱える将来への不安を親に直接ぶつけていること
父親の存在感	関心の有無	8 無関心	父親がきょうだいをはじめ家族に対して無関心であること
		9 きょうだいへの関心	きょうだいをひとりの子どもとして父親が気にしていること
	目が向けられているのか 背が向けられているのか	10 頼りにならない	きょうだいが父親に対して抱く頼りにならないということ
母親とのやりとり	平等な扱い	11 関心を向けられている感覚	きょうだいが自分に関心を向けられていると感じること
		12 強引な平等	親がASD児・者との平等を意識しながら関わってくれていることに気づきながらも無理矢理さを感じることに
		13 同じひとりの子ども	きょうだいもASD児・者も特別扱いせず、ひとりの子どもとして平等に扱われていると感じること
	説明の仕方	14 きょうだい自身の時間	きょうだいが自分の時間を過ごせるように親が配慮していること
		15 刷り込み	きょうだいがASD児・者の特性やその対処について「そういうもの」と受け入れるよう詳細な説明がなく言われること、あるいはそもそも言われないこと
		16 丁寧な説明	ASD児・者の特性とその対処について母親が丁寧に説明すること
母親ときょうだいのどちらが 気持ちを受け止めるのか	17 反転された受け止め	きょうだいが親の気持ちを汲んで受け止めていること	
	18 気持ちを受け止める	きょうだいが自らの気持ちや考えについて主張する言動を親も正面からキャッチしようとしていること	

以下に結果図 (Figure 3) を示し、ストーリーラインを述べる。

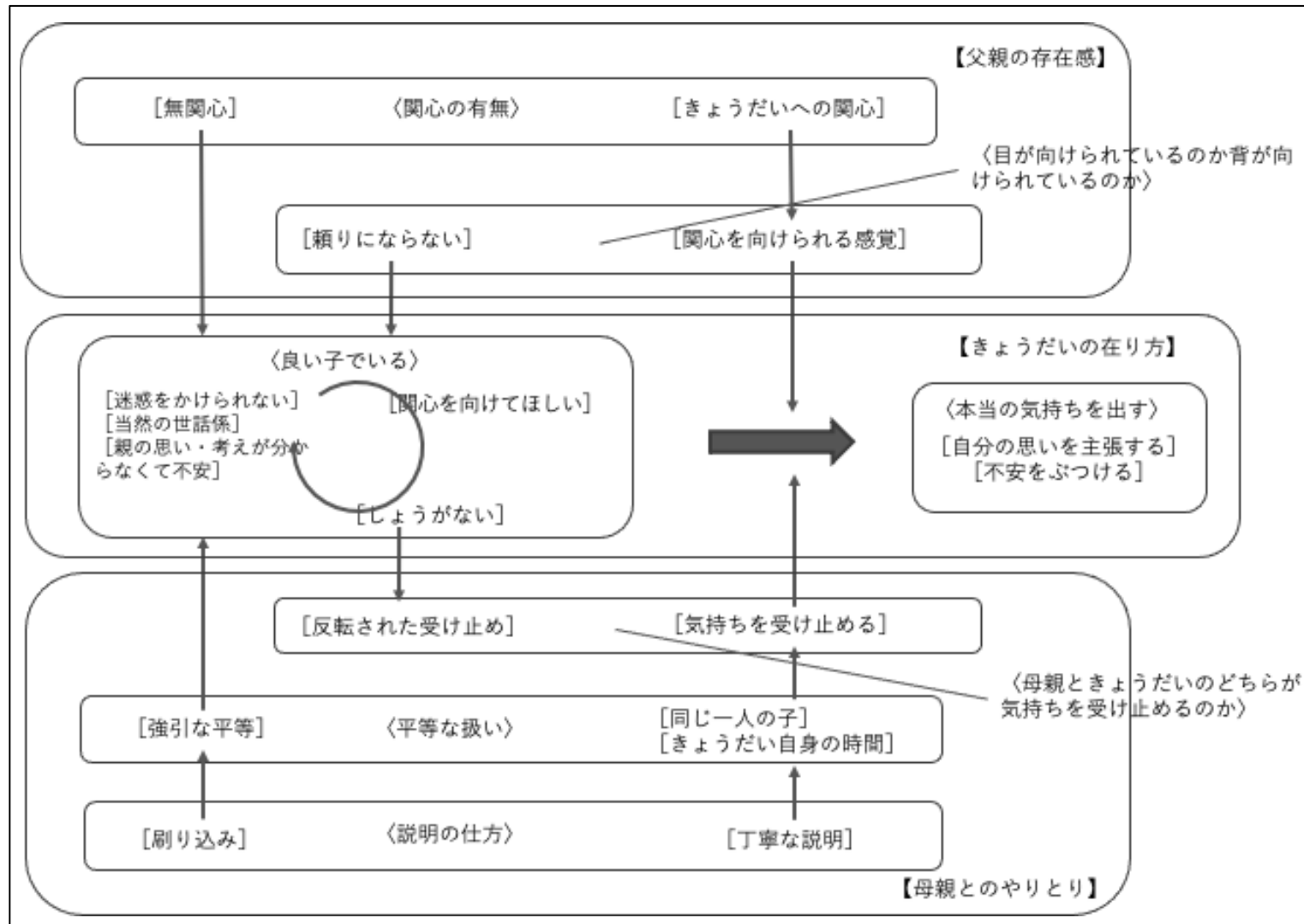


Figure 3 ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する葛藤を通して本当の気持ちを出していくプロセス

### 3-1. ストーリーライン

ASD 児・者のきょうだいは、両親の関心が ASD 児・者に向かざるを得ないために幼い頃から「関心を向けてほしい」と思いながらも「迷惑をかけられない」「しょうがない」と感じ、「当然の世話係」を担う〈良い子でいる〉。こうした【きょうだいの在り方】は、母親からの〈平等な扱い〉とはいえ「強引な平等」と感じられるような無理矢理の平等を、ASD 児・者の特性から世話をするのは当然という「刷り込み」を体験しており、〈母親ときょうだいのどちらが気持ちを受け止めるのか〉が曖昧になり「反転された受け止め」が生じ、「親の思い・考えが分からなくて不安」になったり、「関心を向けてほしい」という気持ちが未消化になっている。こうした【母親とのやりとり】が生じているときに父親からの〈関心の有無〉が「無関心」であると、〈目が向けられているのか背が向けられているのか〉という姿勢で背を向けられていると感じ、父親が「頼りにならない」と映り【父親の存在感】が希薄となることで〈良い子でいる〉がさらに固定化されていた、しかし、父親からの〈関心の有無〉において「きょうだいへの関心」が見て取れれば、きょうだいも「関心を向けられている感覚」を抱き、目が向けられていることを実感する。さらに、母親の配慮によって「自分の時間」を確保することや「同じ 1 人の子ども」として尊重してもらうような〈平等な扱い〉を受けたり、ASD 児・者の特性や手がかかってしまうことについて「丁寧な説明」を受けることで、きょうだいが「自分の思いを主張する」や「不安をぶつける」土台が築かれ、母親がきょうだいの「気持ちの受け止る」のを繰り返すことで〈本当の気持ちを出す〉という【きょうだいの在り方】が生み出される。

### 3-2. 各カテゴリーや概念について

#### 3-2-1. 【きょうだいの在り方】

【きょうだいの在り方】には〈良い子でいる〉、〈本当の気持ちを出す〉が含まれている。

〈良い子でいる〉は、「迷惑をかけられない」、「当然の世話係」、「親の思い・考えが分からなくて不安」、「関心を向けてほしい」、「しょうがない」から生成された。

「迷惑をかけられない」とは、「きょうだいが親に迷惑をかけまいと思っていること」と定義づけられ、ASD 児・者への対応で大変な親との間で迷惑をかけまいと良い子でいようとすきょうだいの様子が見出された。

- B さん (女性・弟) 36・・・あ、わかる。うんと一番、すべては母親のためだと思っています。あの、母親に苦勞をかけたくないとか、母親を悲しませたくないとか、そういう気持ちから出た行動なんじゃないかなって思いますね。あとそうだ、あとはね、授業参観に来てくれた時に、弟いなくなっちゃたんですよ。で○号線、がありますよね。○号線って大きい通りなんですけど近くにあって、そこ沿いの、電話ボックスで見つかったんですけど、轢かれなくてよかったーとか。本当になんかそ

うというのが、結構いなくなっちゃうのがあったんですよ。今の彼からすると考えられないんですけど。だからいつもお目付役で、友達と遊びたいのに、今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると、え、良いよ。って言って。一緒に外で遊んで待ってるとか。

- Eさん(男性・弟) 16・1・・・私自身の話で言うと、やっぱり妹がやっぱりもう妹が今こんな状態だから「お姉ちゃんちょっと我慢して」みたいなのは、ちっちゃい頃から本当に多くって。なんかそういうネガティブな意味だけじゃないんですけど、やっぱりその妹のお姉ちゃん、っていう感じで、特にそういう障害を持つ子の家族のコミュニティみたいなのに結構うち顔を出すタイプだったので、母親って。なので、お姉ちゃんお姉ちゃんって呼ばれることがすごい多くて。今も家帰るとお姉ちゃんって呼ばれるんですよね家族全員から。ちなみにそれは私がちょっと嫌でちょっとやめてって言うてるんですよ。長年そんな感じだから妹以外にお姉ちゃんって呼ばれるちょっと嫌だみたいになって。でもちょっとそういうふうに習慣づいてますけど、なんかそういうふうにやっぱり見られると、その「しっかりしなくちゃ」みたいなふうには多分言ったことあんまないですけど、思うことが多かったかなというふうに思いますね。「お姉ちゃんできなくちゃいけない。」って思って。何かそういうふうに「自分、頑張らなくちゃ」とか「言われたからこれしなくちゃ」みたいなふうな、すごいそこそこ真面目に捉えがちで。

〔当然の世話係〕とは、「きょうだい ASD 児・者のお世話係として見なされていること」と定義づけられ、きょうだい世話係を当たり前のように担う場合があることが見出された。

- Cさん(女性・兄) 59~61・・・母親の方は私の方を姉みたいな、世話係みたいな感じで見てたと思います。でなんかこう、兄が泣いたら私が真っ先に疑われる、っていう。「絶対あんたでしょ」「バレてる…」みたいな。〈実際どうだった?〉実際にイタズラして泣かせた時もある(笑)でもそうじゃない時もある。こっちは全然納得いかないんですけど…って思いましたね。
- Hさん(女性・弟) 52・・・そうですね。たとえばちっちゃなことだと、これとこれどっちが良い?で弟から選ばせるだったり、弟がわがまま言った時も、言って好きなどこ行っちゃったりしても、なんでちゃんと見なかったんだっていう感じ。責任の所在が全部私に。

〔親の思い・考えが分からなくて不安〕とは、「きょうだい ASD 児・者に対する親の考え・思いについてわからず、将来に不安を抱いていること」と定義づけられた。

- Aさん(女性・兄) 64・・・やっぱりきょうだいの最終的なところって親亡きあとじゃないですか私も、自分しかきょうだい、身内、母がいなくなったら身内私だけなんで、多分担うことにはなる。ただ親にはまだ何も言われてない。どうなるんだ

ろうっていう。ただグループホームに入ってるので、そこがちゃんとずっといる場所になればそこに中心で置かせてもらって私は仕事に行ける。で、まあ帰る、帰る、みたいなことでも良いのかなって思ってるんですけど、まあ親ほどのことはできないし、自分がやりたいまあ何も別にビジョンがないですけど自分の将来考えた時にどこまでできるかなとか、遠くへはいけないとか、そういうのは時々考えますね。それは親が何か緊急事態になってみたいときとわからないだろうし。正直ほとんど知らないんで兄のことを。で、そういうと何か緊急で倒れた時にこれがあれば全部私ができるみたいのを作っておいてっていうのは言っていて、ちょっと作ってくれてるんですけど。なんかそういうところも含めて、もう考えていかないといけないのかなって。まだ60過ぎて親も若い部類ですけど、急にどうなるかは全くわからないので。そういうところもあるしだから兄には信頼してもらえないといけないっていうのはあるんで、まあきつと関係性を急に変えることは無理だと思うし。将来的にはそういうところも含めて考えていかないといけないのかなって感じです。

- Cさん(女性・兄)104・・・両親もずっと元気だとは思いつながら60代中頃だし、兄も40歳なんです。なので、なんかずっと家にいるわけにもいかないだろうし。かといってグループホームを探してる気配も今のところ私には感じられなくて。なんか少し先の未来が本当に見えなくて。私が何かした方がいいのか動いた方がいいのか、何かその辺が全然読めないのが不安というか。母は母で何か自分で抱え込むというか、自分がやんなきゃみたいな感じなんで。私に何かをしてっていう特に何かもないし、どうしよう、先が見えないっていう漠然とした不安が。

[関心を向けてほしい]とは、「きょうだいが自分のことも見てほしいと感ずること」と定義づけられた。

- Bさん(女性・弟)32・・・でも、多分寂しいんだと思うんですけど。お母さんが弟のものになって、羨ましい、っていうのももちろんあるし、いいなあって。私も本当は抱っこしてほしいとか思ったはずなんですけど。ただ、父親も結構、なんだろうな、家にはあんまりいないタイプなんですけど、父親も小さい頃に私からするとおじいちゃんですかね、父親の、父親?をお父さんを亡くしてるので、お休みの日にはみんなでお出かけしようっていうのがあったんで。本当になんか休みになるとどこかに出かけてるって記憶があつて。母親で満たされない部分を父親がこう帰ってくると膝の上に乗ってくれたりとか。
- Hさん(女性・弟)35・・・母は結構、うーん、昔、私に対してあんまりあの関心がないわけではなかったんですけど、面倒見なかった、甘えさせてなかった、みたいなあのーっていうのがあったので、そういう部分で今になって気にかけてくれたり、はい。結構気を使ってくれたり。私自身も、昔は完全に親子だったんですけど、今は相談を持ちかけられたり家のこととか。色々まあ抱えてるものもあると思

うので、そういうのの相談にのってあげたり。なんか、対等じゃないんですけどそういう話もできるようになってきました。

「しょうがない」とは「親の関心がASD児・者に向いていることや、自分が世話役になることについて折り合いをつけようとしているきょうだいの気持ちのこと」と定義づけられた。

- Cさん(女性・兄) 63~64・・・私が怒るのがその…勝手にものを破られたとかそういうのがあるとどうしても「出してるあなたが悪い」ってなっちゃったりして…うーん…そうですね…なんだろう、兄の方を注意するっていうのはなかったと思いますね。〈そのことについてはどのように感じられますか?〉昔から…仕方ないと思ってましたね。
- Gさん(女性・姉) 16・・・あんまり覚えてないですけど、なんか、やっぱ姉につきっきりみたいなイメージはあったので、なんかそれもしょうがないなって。それも心の中で思っていました。その幼稚園生の頃は、ずっと自分が面倒みなきゃみたいな感じにたぶん思ってたので、あんまりそんな、不満、母が姉につきっきりってことに関して、嫉妬したりとかそういうのはたぶんなかったと思います。

「本当の気持ちを出す」とは、「自分の思いを主張する」と「不安をぶつける」から生成された。

「自分の思いを主張する」とは、「きょうだい自らの気持ちや考えについて主張する言動をすること」と定義づけられた。

- Dさん(男性・弟) 34・・・なんか…僕の母親は引かない人なんで、それ(「それはあなたたち親の目線でしょ」)を言ったからシュンとするとかないんですよ。「いやそうだけどさ」みたいな。「そうだけど、そこはこうでしょ」とか「何あんた今更そんなこと言ってんの」みたいなこともありますし。キャッチをしようとしてるんだと思います。そこで多分、僕も曲げないので、そのことじゃなくても「俺こう思う」みたいなのを、引かないんで…話が前に進まないんですよ。だから「そうなんだね」って感じなんじゃないですか?(笑)…なんかありますよね、無条件の肯定、みたいな。なんかそんな感じかな、みたいな。
- Iさん(女性・妹) 11・・・母も、その時母なんですけど、なんか私の不安がどのあたりから来てるかというのは察知した感じがあって。なので喧嘩みたいなふうにはならなかったんです。例えばお金はどうなのかとか。こういうときの私、何て言うんでしょうまだ結婚とかもしてないので、何かこういうふうにサポートが妹に大きなサポートが必要になったときに、すぐ動けるかわかんないとか一抹の不安があり、それが何か全部受け止めてくれた感じはしました。

「不安をぶつける」とは、「きょうだい自らが抱える将来への不安を親に直接ぶつけているこ

と」と定義づけられた。

- Cさん(女性・兄) 107・・・恥ずかしながら何にもわかってないので、そういう何か制度とか仕組みとかも何もわかってないし、正直その兄の今の状態というか、うん。健康ではあるんでしょうけど、その辺も何にもわかってないので。でも、今更そういうことを何か聞きづらい、母親に聞きづらいついていう。1回だけ、Tくんって今後どうする、グループホームとかどうするのってちょっと勇気出して聞いたんですけど。「急にどうしたの」って言われて、それ以上何か聞けなくて。もう1回聞く勇気はなくて。今に至ってるんですけど...
- H(女性・弟) 99・・・一回母と話したんですけど、うーん…。母の考えとしては、私には私の人生があるんだから、そんな弟にかかる必要はないから、いまのうちから弟ができるだけ1人で自立してできるように、そのなんていうんですかね、グループホームみたいなところで1人で自立できるようにみんなでしていこうって。完全に関係を断つっていうのは私も考えてないので、時々顔出したりとか。関わりは続けていきたいなって。

### 3-2-2. 【父親の存在感】

【父親の存在感】には、〈関心の有無〉と〈目が向けられているのか背を向けられているのか〉が含まれている。

〈関心の有無〉は、[無関心]と[きょうだいへの関心]から生成された。

[無関心]とは「父親がきょうだいをはじめ家族に対して無関心であること」と定義づけられた。

- Iさん(女性・妹) 20・・・なんか私はなんかあんまり器の広い人だと思ってなくて。いや、なんか常に自分が、自分や周りの人より自分の人。もちろん自分のことをまず大事にすることで周りの人に思いやりが持てるって私はそう思うんですけど、それとまた違う感じ。違うレベルが違う次元で自分が一番な感じっていうふうに思うので。私もあんまり話していて楽しく話ができたって最近思わなくなっちゃったんですね。
- Jさん(女性・弟) 89・・・なんか元々なんか父はなんか自分勝手というか、なんか自分のことしかしない感じだったんですけど、ただ弟がいることで、それなんか普通にそれで弟と一緒に出かけたりとか、その家族と関わる形になったという感じですね。

[きょうだいへの関心]とは「きょうだいをひとりの子どもとして父親が気にしていること」と定義づけられた。

- Bさん(女性・弟) 32・・・でも、多分寂しいんだと思うんですよね。お母さんが

弟のものになって、羨ましい、っていうのももちろんあるし、いいなあって。私も本当は抱っこしてほしいとか思ったはずなんですけど、ただ、父親も結構、なんだろうな、家にはあんまりいないタイプなんですけど、父親も小さい頃に私からするとおじいちゃんですかね、父親の、父親？をお父さんを亡くしてるので、お休みの日にはみんなでお出かけしようっていうのがあったんで。本当になんか休みになるとどこかに出かけてるって記憶があって。母親で満たされない部分を父親がこう帰ってくると膝の上に乗っけてくれたりとか。

- Dさん (男性・弟) 37~40・・・めちゃくちゃ黙ってますけど、多分僕がどこで何してるかとか、母親以上に気になってると思います。多分。僕がいない日とかに、僕に直接は聞いてこないんですけど、母親にどこ行ってんだ今、みたいな。母親は「知らない」って。父親は、気持ちをまっすぐに伝えたりしないんですよ。例えば、うーんと…本当は僕と一緒にサーフィンやりたいんですよ。でも僕はあんまり興味持たないんで。けど、今年ちょっとサップを買ったんですよ。割と時間があつたんでサップやったりしてたんですけど、で「サーフィンもいいなあ」とか言っとくと、こう、僕がいつでもサーフィン行くって言ってもいいような状態にボードがなってるんですよ。初級者用の、ファンボードっていうスポンジで浮力があるボードがあるんですけど、それが置かれてるんですよ廊下ずっと。スタンダードに。で、こう立て替える場所があるんですけど、それは父親が自分のやつと、俺がいつかやるって言った時用のボードが置いてあったりとかして。そういうのを見ると「あ、一緒にやりたいんだな」って。で僕が1人サップ行って、父親は海行って帰ってきて、僕の方の海までちょっと一緒にやったりとか。言葉が足りないのて教え方下手なんですけど。言語化が苦手な人だなって思ってます(笑)

〈目が向けられているのか背を向けられているのか〉は、[頼りにならない]と[関心を向けられている感覚]から生成された。

[頼りにならない]とは「きょうだい父親に対して抱く頼りにならないという印象のこと」と定義づけられた。

- Cさん (女性・兄) 36~38・・・完全に母と兄がセット、で父親はそこに何かこう置き物のようにいる感じ。視界には入るけど…特にそれが何かの役にも立たないし、処分に困っている置物ですかね。ただ目には入るなあっていう。何にも使えないしな、でも使えないしな、っていう。〈使えないしな、ですか〉いつかは使えるんじゃないかなって思ってたってはあるけど、どうしても使い道がわからないなっていういつか使えるんじゃないかなって思うんですけど。今のところはまだ…。
- Jさん (女性・弟) 151・・・けど、でも基本的には父の方が優しいっちゃ優しいんですけど。でも機嫌によりますね、その時の。競馬の結果ですよ競馬の結果。競馬の結果で結構気分がそれで何か悪いときに機嫌が。何か弟の面倒とかみたいな、弟のことを蔑ろにするので母と揉めてることが結構ありました。



【関心を向けられている感覚】とは、「きょうだいが“自分に関心を向けてもらえている”と感ずること」と定義づけられた。女性にも見られたが、特に同性の親から向けられる関心の意味が大きいと考えられる。男性の方が優勢のため、主に父親との関係の概念として位置付けた。

- Dさん(男性・弟) ②41・・・(父親が) 気にしてくれてるんだな、みたい。幼稚園から小学校6年生までは、ほぼ自分のサッカーに来てくれてたんですね。だからその時は逆に弟との関係、っていうのは希薄だったんですけど、僕が部活とかんなくてコーチもうやらなくなったくらいから弟と父親が結構仲良くなった感じ。僕としては8年間付き添ってもらった、で、こう何かすごい怒ったりとかするひとじゃないので。ずっとこうだまーって良い日も悪い日もいてくれる人っていう感じだから、何かこう、言わないこととか、うんってなったりしますが、それはそれだな、じゃないですけど、そういう人だ、みたいに思うし。「なんかこういうふうに思ってるの?」とか聞いてみたりとか。
- Eさん(男性・弟) 54・・・まあ自由にやらせたが故にあの、中3の頃はもう自由にやらせてもらえなかったんですけど、逆に。まあそれが良かったんですけど僕にとって。だからうーん、まあ僕からしたら父も母もちゃんと見てくれてたんで。やるべきところはちゃんと道を正してくれたのかなって気がします。

### 3-2-3. 【母親とのやりとり】

【母親とのやりとり】には〈母親ときょうだいのどちらが気持ちを受け止めるのか〉と、〈平等な扱い〉、〈説明の仕方〉が含まれている。

〈母親ときょうだいのどちらが気持ちを受け止めるのか〉は、[反転された受け止め]と[気持ちを受け止める]から生成された。

【反転された受け止め】とは、「きょうだい親の気持ちを汲んで受け止めていること」と定義づけられた。

- Aさん(女性・兄) 61・・・そうですね。やっぱり、私はそんなですけど、母が毎日兄がいると疲れる。で、精神的にやっぱりイライラするんですよどうしても。ちょっと家の中の空気感が悪くなって、私が色々喋れなくなったりし。テレビ見てちょっと笑ったら嫌な顔されそうだな、とか。しないとしてもですよ?だからそういうのもあるんで、結構顔色を見て生きてきてるんで。
- Bさん(女性・弟) 60・・・で、彼が就職、作業所に入ってから、休みのが嫌なんです。だから熱とかもしょうがない時は休むんですけど、ちょっとの咳とかだど行くって言ったりとか。じーっとしてて、それがここ2、3年あたり、疲れちゃったのか、今日休む?って聞くと休むって、休んじゃうんだよって母親が言ったの

で。とうとうおじさんに足を踏み入れましたねとか。そういうなんだろう、日常のこととかも実家に行くとき母から聞いたり。ただ私が行く時間が、弟が作業所に行ってる時間に行くことが多いので、夕方は自分の家切り盛りしないといけないので。そういう話を聞いて、良かったねとか、こうなんじゃないとか。今度はね母親のたまったものを癒させに行く時間、その時は。で、あとはなんかケースワーカーさんに、施設に宿泊訓練に来て欲しいって言われるんだけど、本人は行きたくないんですよ、一回行かせたんですけど、帰ってきて、また行くー？ってやだーって、言って。やっぱり合わなかったんだよって言って。でも、今年も宿泊させない？って言われちゃって母は言っていて。行かせたくないのよね、どう思う？とか、そういう話を日々してますね。

「気持ちを受け止める」とは「きょうだい自らの気持ちや考えについて主張する言動を親も正面からキャッチしようとしていること」と定義づけられた。

- Dさん(男性・弟)34・・・なんか…僕の母親は引かない人なんで、それ(「それはあなたたち親の目線でしょ」)を言ったからシュンとするとかないんですよ。「いやそうだけどさ」みたいな。「そうだけど、そこはこうでしょ」とか「何あんた今更そんなこと言ってんの」みたいなこともありますし。キャッチをしようとしてるんだと思います。そこで多分、僕も曲げないので、そのことじゃなくても「俺こう思う」みたいなのを、引かないんで…話が前に進まないんですよ。だから「そうなんだね」って感じなんじゃないですか？(笑)…なんかありますよね、無条件の肯定、みたいな。なんかそんな感じかな、みたいな。
- Eさん(男性・弟)11・・・母も、その時母なんですけど、なんか私の不安がどのあたりから来てるかというのは察知した感じがあって。なので喧嘩みたいなふうにはならなかったんです。例えばお金はどうなのかとか。こういうときの私、何て言うんでしょうまだ結婚とかもしてないので、何かこういうふうにサポートが妹に大きなサポートが必要になったときに、すぐ動けるかわかんないとか一抹の不安があり、それが何か全部受け止めてくれた感じはしました。

〈平等な扱い〉とは、[強引な平等]、[同じ1人の子]、[きょうだい自身の時間]から生成された。

[強引な平等]は「親がASD児・者との平等を意識しながら関わってくれていることに気づきながらも無理矢理さを感じる」と定義づけられた。

- Cさん(女性・兄)99・・・(母親は)多分私のことも兄のことも…平等に見てくれてると思うんですけど、どうしても平等って言っても、兄のことに普段かまひすぎているから、それを補うための平等さ、強引な平等さとか。そういうのはちょっと感じはするんですけど。子供の頃はそんなことに気づかないんで、平等に見てくれてるって思ってたんですけど、ちょっと大人になって何かそういうことを

感じ取ってしまっ。これは多分補うための平等さだと感じ取ってしまっからは、私もなんかあんまり大人になったってこともありますけど、あんまり「私のことを見て」みたいなそういうのは本当にますます減ったっていうか。どうぞ兄のことを頑張ってくださいって私は勝手に引きますっていう感じで。

- Hさん(女性・弟)74・・・(Hさんへの指導と弟への教育の質は)もしかしたら一緒かもしれないですね。子どもにたいして教育をしようって思って、もともと厳しかった私にはもっと厳しくしようって感じですかね。

[同じ1人の子ども]とは「きょうだいもASD児・者も特別扱いせず、1人の子どもとして平等に扱われていると感じること」と定義づけられた。

- Fさん(男性・弟)49・・・あー…弟特別っていうのはないですね。多分3人平等に。あの特別手がかかったと思いますけど、あのSに特にこうかきりきりになるようなことはなかったんじゃないかなあとは僕個人的には思ってます。ただ僕は昔からこう、そういうのに疎い方なので、疎い、鈍い、ので、あの多分自分が別段見られてなくても気にしなかったんだろうなって。たぶん小さい頃はお得な性格だった。
- Kさん(男性・兄)46・・・あとはちょっとそうですね具体的な年代がちょっと小学生のときだったか…あ、でも小学生のときですね。それは小学生のときなんですけど。自分と同級生がいて、その同級生と仲良かったのでよく遊んだりもしてたんですけど、その自分が2個上に兄がいて、その2個上にその同級生のお姉ちゃんもいたんですけど。お姉ちゃんは特に障害があるとかそういうわけじゃないんですよ。その時自分の兄と同級生の姉が、ちょっと揉めたみたいで。それについて何か一旦同級生の方から、自分の方にちょっといろいろ言われてしまっ。自分もその同級生とちょっと、一旦そのことが原因でちょっと揉めてっということがありましたね。そこで母がやっぱり上の子たちの喧嘩を下の子たちまでしわ寄せするのは違うだろうっっていう話をちょっとしてくれたみたいなんですよ。

[きょうだい自身の時間]とは、「きょうだいが自分の時間を過ごせるように親が配慮していること」と定義づけられた。

- Aさん(女性・兄)46・・・大学も含めあるし、アルバイトもしてたので、割と家にいない時間の方も多かったし。卒業の時なんかは丸々ヶ月くらいは旅行、海外旅行とか行っちゃっ。まだおばあちゃん家にいたんですけど結構な状態で。なんかすごいひどいことしたなって。でもそれも、親はまあ、ね、あなたの最後の大事な大学生活だから、好きなことしときなさいっという話をもらったんで、じゃあっそのまま行かせてもらったりとかはしたんで。まあ私は本当に自由に、やってたなって。今もそうですけど、思いますね。手伝ってるつもりでも大して手伝ってなかったのかもしれないですけど、かなって思います。時々やって、あとは本当に自

分の好きな大学生生活を送って、サークルもやってとか、合宿も行って、とか。特に不便感じたことはなかったですね。

- Eさん(男性・弟)26・・・いやでもいつも通りですね。あの一、基本的にうちの親はあの一、やりたいことをやれば良い。もう自由に遊んでらっしゃいってという家庭だったので、特にそう人間関係とかその辺りは言われたこともないし。まあ接しかたとしては、怒る時は怒るし。それ以外でなんか特段怒られてことってあんまりなくて。よく寄り道をするやつだったので私は。それでは怒られましたな。

〈説明の仕方〉は、[刷り込み]と[丁寧な説明]から生成された。

[刷り込み]とは、「きょうだい ASD 児・者の特性やその対処について「そういうもの」と受け入れるよう詳細な説明がなく言われること、あるいはそもそも言われないこと」と定義づけられ、母親からきょうだいへの ASD 児・者についての説明が乏しい場合があることが見出された。

- Aさん(女性・兄)48・・・なん…カチッとこう言われた記憶は…ないんで。やっぱりそういう療育センターとかそう行ったりとかして、いろいろカードのお勉強とか練習とかしたりとか。そういうのを知って「普通じゃない」というか。多分自然と覚えている。でもなんでですかね、わかんないです、なんで「自閉症」って言葉に自分が繋がったのか。親に言われたからっていうわけではないと思う。あなたの兄は自閉症によって改めて言われた記憶は私の中でないので。自然と、そういう言葉をどこかで学んだってことなんでですかね自分が。だと思っただけです。
- Cさん(女性・兄)66・・・だいたい昔から保育園の頃から兄はそういう、わかりやすく言うとそういう病気、病気？だから、「ちょっと考えるのは難しい子だから」、っていうのを刷り込まれてたというか、そう思うようにずっと言われてたので、「あ、そういうものなんだな」って思うようになって。私の方がお姉ちゃんっぽいようにしなくちゃいけないんだっていうのを昔から刷り込まれてたっていうのがあります。

[丁寧な説明]とは、「ASD 児・者の特性とその対処について母親が丁寧に説明すること」と定義づけられた。ここでは知的な説明だけでなく、情緒的な距離の近さも含まれていると考えられる。

- Bさん(女性・弟)30・・・一番覚えているのは、えっと、まずは、どのくらいからなんでしょうね。考えてみたんですけど、やっぱり一番自分で覚えているのが、幼稚園くらいに、母親に、やっぱり弟の方が可愛いんだろってことを言った、んですよ。で、その時にごまかさずに母親もきちんと答えてくれて、多分弟がこういう子だから、誰かが助けてあげたりしないと、あ、他の人とコミュニケーションが取れないとかそんな難しい言葉は言われてないんですけど、とにかく助けてあげないと困っちゃうから、多分私、あなたよりも弟の方に色々手をかけてしまうけれ

ども、あなたが可愛くないとかそういうわけじゃなくって話を一対一でしたんですね。で、幼稚園生ながらになるほどって思ったみたいで、それから一切言わなくなったのよっていうのを小学生くらいに、何か話した時にそんなことを言って、そういえばそんなこと言われた気がするーって話を母親として。と、そうですね。それから多分、あ、守るんだーっていうのがずっとあったと思って。

- Dさん(男性・弟)16・・・そのルーティンができたのがずっと前なわけではないんですよ。社会人になってから。家にいる時間が短くなってからそういう時間が増えたから。僕が最初全く知らなかったんですよそういう時間が、行われてるっていうことが。で、ちょっと家にいるときに「ええ？」みたいな。そんなのやってたの？みたいな。「その時間は黙ってなきゃいけない」ってうわめんどくさ！みたいな。なにそれ！って思って。でもそれで、1人でこう1人で電車の中とかで聞いたりとか。要は音楽聞くと、まあ色々やってたらしいんですよそれも。音楽聞くでやってると、もうノッチャうらしいんですよ。だからそれとかを防ぐ、とか。でも1人で電車乗ってる時になんかこうしている時に、ムービーを聴いてたりとか、見てたりとかすると、一番それが母親遠くから見ていて、変じゃない、みたいな。違和感なかった、みたいな話から始まったから、「それを頑張れるためにこれをやってる」っていうのを言われたので、「しょーがねーんだな」っていう感じで入ってたけど…。でもイライラする時はイライラするし。嫌な時は嫌だし、待ってくれって思った時は待ってくれって時なんで。それは普通に言ってる。だからそのなんか、このルーティン壊すと怒るとか、だからこうピリピリしてる感じではない。

#### 第四節 研究Ⅱの全体考察

##### 1. M-GTAによる分析で明らかにしたこと

本研究では、研究Ⅰで家族の中の第三者として置いていたきょうだい自身が当事者として両親とどのように関わり、何を体験しているのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、11名の成人期以降のASD児・者へのインタビューを通して得られたきょうだいー両親の幼少期から現在にかけての関わり及びその時に感じていた感覚や気持ちについての語りをM-GTAで分析した。

その結果、きょうだいが両親との関わりを通して〈良い子でいる〉自分から、〈本当の気持ちを出す〉自分へと発達していこうとしている【きょうだいの在り方】が見出された。またASD児・者を子にもつ父親と母親がきょうだいに対して具体的にどのように関わっているのか、その関わりがきょうだいにどのような影響を与えているのかも示唆された。

##### 2. 〈良い子でいる〉ことの意味と〈本当の気持ちを出す〉ためには何が必要か

本研究で示唆された〈良い子でいる〉とは、ASD 児・者に手がかかる親を前にして [迷惑をかけられない] と感じ、[関心を向けてほしい] と思いながらも [しょうがない] と諦め、[当然の世話係] を担っており、実際のところのこれから先の [親の思い・考えが分からなくて不安] であるが、同時に父親には [期待できない] し、母親からは気持ちを向けられ [逆転された受け止め] が生じている状況のことを指している。

この〈良い子である〉とはひとつの過剰適応であると考えられる。〈良い子である〉間は親から迷惑がられることなく、ASD 児・者に関心が向きやすい家族の中で立ち位置を確保できるからである。しかし、この適応状態は「偽りの成熟」(Meltzer, 1967) ともみなすことが出来る。「偽りの成熟」とは、理想化された対象を内的対象として取り入れ、その内的対象へ混乱を伴って同一化し、親からの分離と親への依存を否認することである。これにより、情緒的に成熟していくことや個人として独立した存在なることはなく、またエディプス・コンプレックスに直面することもなく、同一化している対象から情緒的に分離することもなく大人になっていく。つまり、ASD 児・者のお世話をする親に対する攻撃性や依存は否認され、自身の内的対象としての親に同一化することで [当然のお世話係] として振る舞い、そのことを [しょうがない] と受け入れる表面的な適応がよい状態として成り立ちうると考えられる。

この時の【母親とのやりとり】をみると、ASD 児・者が持つ特別さは当然なのだ [刷り込み] がされていたり、〈平等な扱い〉と言えども [強引な平等] を感じてしまっている。また、〈良い子でいる〉きょうだいは ASD 児・者の世話だけでなく、母親の気持ちを受け止める役としてもいることになり、[反転された受け止め] が生じてしまっている。

[反転された受け止め]とは、このように、きょうだいの【母親とのやりとり】、つまり母子関係にはコンテイナー (Bion, W.R., 1962) としての機能がしばしば反転し得る可能性が潜んでいると考えられる。Bion, W.R. (1962) は早期母子関係をコンテイナー／コンテインドモデルとして定式化した。このモデルでは、乳児が空腹時等に圧倒されてしまう不安や欲求不満、恐怖を母親に投影同一化するが、母親はそれについてコンテイナーとして受け止めつつ夢想し、乳児が受け入れられるよう言語で緩和して返していく。そして乳児はその母親の機能そのものも内在化していくプロセスが示されている。この反転が生じてしまっているとすると、抱えてもらう必要のあるきょうだいの本来の子ども部分はさらに小さくなってしまふことに繋がってしまう。

また、父子関係に目を向けると、【父親の存在感】もこの状況を引き起こす要因になり得る。父親からの[無関心]は、きょうだいの[関心を向けてもらいたい]という自らの存在の価値を脅かされるような渴望が満たされないことを思い知らされ、背を向けている父親に対して[頼りにならない]という失望にもつながっていく。背が向けられているという感覚は、“いるけどいない”という自身の存在を揺るがされるような抑うつ感を引き起こす可能性も示唆される。そして結果的に、心理的にはより孤独を感じながらも、自身は世話役を続けることになってしまうため、まるで大人かのように振る舞わざるをえない「偽りの自

己」の形成が加速してしまうと推察される。

以上のように、〈良い子でいる〉こととはきょうだいの取り得る過剰適応の姿であり、「偽りの成熟」が達成されてしまうことを意味していると考えられる。具体的な「世話係」だけでなく、心理的な「世話係」を担っているといえるだろう。そこには ASD 児・者へ関心を向ける親を前に、自ら内的対象としての親に同一化することで親からの分離と依存を否認しようとする在り方が考えられる。

次に〈本当の気持ちを出す〉ことへ向かうには、何が重要であるかを述べる。先に述べたように、〈良い子でいる〉ことはきょうだいが幼少期から布置されやすい在り方である。しかし、そこに【父親の存在感】と【母親とのやりとり】の内容によって〈本当の気持ちを出す〉という【きょうだいの在り方】へと押し上げていく可能性が秘められている。

〈良い子である〉きょうだいは[関心を向けてほしい]という思いを抱いているが、そのきょうだいに対して特に[同じひとりの子ども]として母親が接すること、父親が[きょうだいへの関心]を抱くことが重要である。また、その関心は必ずしも言葉でのやりとりである必要はなく、【父親の存在感】と言うべき象徴としての眼差しがあることが重要であると考えられる。

こうした関心をむけられると、きょうだい自身も自らの情緒に関心をむける力が養われ、否認されている分離や依存に伴う情緒に開かれていく。次第に[自分の思いを主張する]ことや、[不安をぶつける]ことができるようになり、母親が[気持ちを受け止める]ことを繰り返すこと、すなわち本来のコンテイナー／コンテインドの関係性が機能していくことで「真の自己」として発達していくことができると考えられる。〈本当の気持ちを出す〉という【きょうだいの在り方】へと進んでいく様相は、こうした「偽りの成熟」からいかに本来の成熟へと向かっていくのかという発達プロセスで捉えることができるといえる。

次に、研究 I で見いだされた各家族像に沿ってきょうだいと両親の関係性をさらに解釈することで、より臨床に適用可能な理解へと広げていく。

### 3. Meltzer, D. & Harris, M.の家族論から捉えるきょうだいと両親の関係性

#### I. 【一体感のある家族】におけるきょうだいと両親 概念：4, 6, 7, 9, 11, 13, 16, 18

この家族像は ASD 児・者と母親のカップル性が生じながらも両親のカップル性も十分に成立している家族像である。この家族像においては、きょうだいが親に対して 4.[関心を向けてほしい]というひとりの子どもとして自然な感覚を持っていることに対して、父親が 9.[きょうだいへの関心]として応じ、それによってきょうだいは 11.[関心を向けられている感覚]を体験することが出来る。これによって 13.[同じひとりの子ども]としての立場を享受し、ASD 児・者に対して 16.[丁寧な説明]を受けることで折り合いもつけやすくなる。さらに母親からは 18.[気持ちを受け止める]姿勢も向けられているため、きょうだいは安心して 6.[自分の思いを主張する]ことや、7.[不安をぶつける]ことが可能になっていく。

このように、この家族像ではASD児・者がいることできょうだいが必然的に体験する抑うつ的苦痛や絶望、迫害不安を否認、あるいは世界に投影することなく、両親のカップル性を持ってコンテインし、愛情を生み出していくことができる。きょうだいが抑うつ的苦痛や絶望感、迫害不安を抱いたとしても両親がきょうだいに対して情緒的に接触し、それらをコンテインするだけの良性機能が家族内に備わっている状態である。そのため、こうした両親のカップル性に支えられ、ASD児・者がいたとしてもひとりの子どもとして関心を向けられることにより、その立場を享受することができ、きょうだいが〈本当の気持ちを出す〉ことに屈託なく進むことができると考えられる。

## II. 【分断している母権的家族】におけるきょうだいと両親 概念：1, 8, 10, 12

この家族像は、両親のカップル性が弱く、ASD児・者と母親のカップル性が強まり、父親的人物が排除されてしまっている家族である。きょうだいは母親に対して1.[迷惑をかけられない]という思いを強く抱き、自分の気持ちを抑え込みがちになる。一方、父親は家族に対して8.[無関心]でいることで10.[頼りにならない]と判断され、家族から排除されてしまう。母親はきょうだいに対してASD児・者と同じように関わろうとするものの、その心の中心にはASD児・者がいるため、12.[強引な平等]を向けることになってしまい、きょうだいもそれを感じ取りながらも目を瞑るしかない状況下になっている。

このように、母権的家族であるがゆえに母性が家族内機能の中心となっている場合があり、きょうだいがASD児・者との間で感じる葛藤や、コミュニティとの間でASD児・者がいるからこそ体験する迫害不安や抑うつ的苦痛をも母性がコンテインしていくことになる。しかし、家族内の良性機能全てを母性が保有することは困難であり、その歪みは他の家族成員かコミュニティが担うこととなる。そのため、母性ときょうだいの偽りのカップル性が生じやすい。ここでは排除されている父性と同じように見捨てられることへの不安や、母性から分離することの不安が引き起こされ、それらの不安と同時に自らの依存を否認するため大人として振る舞う偽りの成熟(Meltzer, 1967)が生じてしまうと推察される。一度この母性に囚われると、きょうだいが持つ子どもとしての自分らしさは見えにくくなり、大人としてのケア・テイカーという在り方に固定化されてしまうかもしれない。

## III. 【分断している父権的家族】におけるきょうだいと両親 概念：5, 9, 11, 14,

この家族像は、【分断されている母権的家族】と同じく両親のカップル性が弱く、ASD児・者と母親のカップル性が強まっているものの、父親的人物が排除されておらず、家族



内で父性が生きている家族像である。父親からは 9.[きょうだいへの関心]が向けられており、きょうだいも 11.[関心を向けられている感覚]を抱くが、父性の持つ「切り分ける」特質 (Houzel & Rhode, 2005) によって、きょうだいと ASD 児・者の間には距離ができていく。そのため、ASD 児・者に家族の関心が向くことを 5.[しょうがない]と冷静に捉えるのと同時に、14.[きょうだい自身の時間]が確保されやすく、ひとりの子どもとして生きていきやすくなると考えられる。

ここでは、きょうだいは母性と偽りのカップル性を生み出すのではなく、父性に同一化していくと考えられる。父性とはすなわち社会の象徴であり、そこに同一化していくことできょうだいの適応は決して悪くないだろう。あるいは父性の持つ「切り分ける」という特質 (Houzel & Rhode, 2005) によって始めから両親との距離が生み出され、〈良い子でいる〉ことなく親元を離れていくことが可能であると考えられる。ここでは父性の程度によっては否認が働きやすく、否認に基づく躁的防衛も機能することで健全な思春期が展開する可能性がある。ただし、そこでは両親に対する攻撃性や依存が不十分であるため、思春期が頓挫してしまうこともあり得ると考えられる。

#### IV. 【解体している家族】におけるきょうだいと両親 概念：2, 10, 15, 17

この家族像は、父親的人物の排除が加速し、一方で ASD 児・者と母親のカップル性が過密になりすぎてしまうことで家族内に蔓延する抑うつ的苦痛や絶望感、迫害不安を両親が抱えることができなくなり、きょうだいがその役割を担うか、あるいは家族が離散してしまうような家族像である。きょうだいは家族の中で 2.[当然の世話係]として位置付けられ、同時に父親は 10.[頼りにならない]状態に、母親からは 15.[刷り込み]によって ASD 児・者のお世話をすることを言外に強いられてしまう。

ここでは、家族内に生じる混乱をきょうだいが引き受けることとなり、役割の逆転が生じやすと考えられる。しかし、同一化の対象は家族の中に存在しないため、きょうだいにとっての生きる指針がなく、心理的に右往左往してしまう。こうした環境下で育つと成長の過程で役割を活かしてお世話係になっていくという選択肢しかなくなってしまうが、その役割とはそもそも混乱の上に成り立っているため、現実的には崩れやすくなってしまいう可能性がある。

#### V. 【凝集している家族】におけるきょうだいと両親 概念：3, 9, 12

この家族像は、ASD 児・者と母親のカップル性だけでなく、ASD 児・者が中心となる

からこそ両親のカップル性も過密になっていくことで家族の凝集性が増し、家族内で生じる抑うつ的苦痛や絶望感をコンテインする空間が生まれずそれらはコミュニティに投影され、迫害不安と感じられるためにコミュニティに対して高圧的な態度で臨んでいくような家族像である。きょうだいはASD児・者と両親の距離が近いことを間近で見ているが、現実的な将来のことを考えるような空間がないため、3.[親の思い・考えが分からなくて不安]という思いを常に抱きながらも家族の中に留まることになる。ここでは父親から9.[きょうだいへの関心]も向けられはするが、母親からは12.[強引な平等]と、きょうだいに対しての情緒的なつながりは薄く、ASD児・者の障害が家族の中心になってしまっていると考えられる。

ここでは、良性機能の働く余地がないため絶望感や抑うつ的な痛みが蔓延し、真っ当な自立や成長といった希望が見出されずかき消されてしまう。ASD児・者は、両親が望む理不尽な自立を達成できず、常に弱者として位置付けられてしまい、結果的に親元から離れていくことができなくなってしまうと考えられる。

臨床においては、サブカテゴリーである〈母親ときょうだいのどちらが気持ちを受け止めるのか〉と〈目が向けられているのか背が向けられているのか〉は具体的な着目ポイントとして挙げられる。

従来のきょうだい支援は母親との宿泊、レクリエーション（平川, 2004; 阿部ら, 2013）が多く、障害についての知識や対応を身につけるといった教育的支援が主要であった（柳澤, 2007）。実際に、本研究においても〈説明の仕方〉の[丁寧な説明]にあるように、幼いきょうだいに対してであっても、ASD児・者の特性や、それゆえに手をかけざるを得ないこと、しかしそれはきょうだいをないがしろにしようとしているわけではないと伝えることは、きょうだいが〈本当の気持ちを出す〉ことに大きく寄与していると考えられる。ただし、一緒に時間を共有するだけでは、[強引な平等]ときょうだいが感じてしまう場合がある。したがって、きょうだい支援において重要なことは〈母親ときょうだいのどちらが気持ちを受け止めているのか〉という情緒的な応酬がどういった方向で行われているのかをつぶさに見つめることであると考えられる。

また同時に、〈目が向けられているのか背が向けられているのか〉という父親の家族への姿勢をアセスメントすることも重要である。母子関係だけに注目して家族の中で母親機能がどの程度あるのかだけを見るのではなく、【父親の存在感】という父性が家族の中でどのように確立されているのか、あるいは欠落しているのかを見定めることは、きょうだい支援のみならず、ASD児・者当人とその家族全体をサポートする上で重要な視点を提供する。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義は、従来から指摘されているきょうだいが担う「世話係」が両親との関係性から心理的にどのように形成・維持されうるかを描き出し、時に“いるけどいない”という「真の自己」の存在を問われるような抑うつ感を抱き得ること、その一方で両親の関心を向けられることできょうだいが自分らしさを獲得していくプロセスを体験していることを示した点にある。また、研究Ⅰで見出された5つの各家族像においてきょうだいと両親の関係性がどのような力動の元にあるかを明示し、より臨床的な理解を拡充した点にあると考えられる。

ただし、本研究でインタビューに応じた協力者は、「インタビューに応じた」という時点で自らの体験を語ることに開かれていることがうかがえる。したがって、インタビューに応じることに抵抗感があるきょうだいになんらかの形で研究に招き、その語りを検討することは今後の課題と考えられる。また、本研究におけるインタビューでは、性差に関する語りはM-GTAにおいて概念成立に至るまでは見当たらなかった。しかし、より性差へ意識を向けてインタビューを行うことで構成される語りがあることも想定される。したがって、今後はそうしたきょうだいの属性別の研究が行われる必要もあるだろう。

なお、ここで検討したのはきょうだいと両親の関係性におけるきょうだいの体験であり、これはきょうだいの体験をある一側面に過ぎない。きょうだいは家族の中でASD児・者とも関わっていることが自明であり、その理解は未だ不十分であるといえる。そこで、次にきょうだいとASD児・者の関係性に焦点をあてて研究を行った。

## 第五章

### 研究Ⅲ 自閉スペクトラム障害児・者がいることによってきょうだいが自閉スペクトラム障害児・者との関係性において体験する葛藤過程

#### 第一節 問題と目的

本研究ではASD児・者のきょうだいとASD児との関係性に焦点を当てていく。先行研究において、特にきょうだい関係に焦点を当てられたものはしばしば見られている。たとえば、田倉（2008）はきょうだいが幼少期から保護的役割を担いながらも周囲の働きかけに憤りや恐れを感じたり、障害児・者との関わりで怒りや不満を感じ、同胞に障害がなければという願望を持ち続けるが、自分が障害児・者にとっての「兄弟姉妹」であることを認識する体験を通して障害児・者との関係を肯定的に受け止めるようになっていたことを明らかにした。また笠田（2013）は、進路・就業というライフコースの選択時に障害児・者をサポートする方向へと進むか否かに葛藤が生まれることを明らかにした。またTomeny, Ellis, Rankin & Barry（2016）は、45名のASD児・者のきょうだいと37名の知的障害児・者のきょうだいを対象に、自身のきょうだい関係の捉え方が障害児・者へのサポート姿勢や人生の満足度、ストレスやうつ症状にどのような影響を与えながら違いがあるのかについて調査した。その結果、きょうだい関係をポジティブなものとして捉える割合がASD児・者のきょうだいが少ないこと、きょうだい関係をポジティブなものとして捉えているほど障害児・者をサポートする姿勢が多く、人生満足度も高いことを示唆した。また、ネガティブなものとして捉えているほどストレスやうつ症状が高まりやすいことも示唆した。しかし、その葛藤の中身についての検討は不十分であり、未だ謎に包まれている。きょうだいの支援をより具体的に考えていくためにも、ここではASD児・者がいることによってきょうだいがASD児・者との関係性において、どのような葛藤過程を体験しているのか、そしてどのような側面が発達しているのかを明らかにすること、および家族像がどのように展開するのかを明らかにすることを目的とした。

## 第二節 方法

### 1. 研究協力者

本研究における研究協力者は、研究Ⅰの研究協力者9名に加えて2名追加された11名であった（男性4名、女性7名、平均年齢28.1歳）（Table 4）。研究協力者は地域の訓練会等に参加している家族の母親介して筆者が直接連絡をとり、研究の目的・倫理等を口頭及び書面で説明し、同意が得られた場合のみ対象とした。なお全ての研究協力者から同意を得ることができた。

Table 4 研究Ⅱ～Ⅳ 研究協力者

協力者	年齢	性別	ASD児・者の続柄	ASD児・者の年齢	年齢差	診断名*1	ASD児・者の住居形態
Aさん	28歳	女性	兄	31歳	-3歳	ASD+ID	同居
Bさん	44歳	女性	弟	42歳	+2歳	ASD+ID	別居
Cさん	32歳→37歳	女性	兄	34歳→39歳	-2歳	ASD+ID	別居
Dさん	21歳→26歳	男性	弟	19歳→24歳	+2歳	ASD	同居
Eさん*2	26歳	男性	弟	22歳	-4歳	ASD+ID	同居
Fさん*2	24歳	男性	弟	22歳	-2歳	ASD+ID	別居
Gさん	27歳	女性	姉	29歳	-2歳	ASD+ID	同居
Hさん	23歳	女性	弟	18歳	+5歳	ASD	同居
Iさん	26歳→31歳	女性	妹	21歳→26歳	+5歳	ASD	同居
Jさん	21歳	女性	弟	18歳	+3歳	ASD	同居
Kさん	22歳	男性	兄	24歳	-2歳	ASD	別居

\* 1…ASD は自閉スペクトラム障害、ID は知的障害を指す。

\* 2…EさんとFさんは同一家族である

### 2. 調査時期

2016年6月～9月、2021年9月～10月に実施した。

### 3. 調査場所

筆者が研究協力者に直接連絡をし、研究協力者が安心して話せる空間として研究協力者の指定した場所、あるいは貸会議室や筆者の勤務する相談室、オンライン会議ツール（Zoom）等でインタビューを行った。

### 4. 調査内容と分析対象データ

調査内容は、Aさん、Bさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさんについては2016年に実

施した研究 I で用いたインタビューガイドに沿った内容である。C さん, D さん, I さん, J さん, K さんについては, 研究 I で用いたインタビューガイドに項目を追加したものをインタビューガイドとし, 半構造化面接を行なった。インタビュー時には適宜順番を入れ替えながら尋ねた。また語られたエピソードの中でどのようなことを感じていたかを意識的に尋ねた。2021 年時に使用したインタビュー項目は次の通りである。

#### 現在の親・同胞・周囲の人との関係

1. 現在, 障害のある同胞とどのように過ごしているか
2. 母親・父親は自分と同胞にそれぞれどのように関わっているか
3. 同胞・母(父)・自分の 3 人でみたときの関係性はどのようなものか
4. 両親の関係性はどのようにみえているか
5. 周囲の親しい人(友人やパートナー)とどのように関わっているか

#### 過去の親・同胞・周囲の人との関係

6. ○○の頃, 障害のある同胞とどのように過ごしていたか
7. ○○の頃, 母親・父親は自分と同胞はどのように関わっていたか
8. ○○の頃, 同胞・母(父)・自分の三人でみたときの関係性はどのようなものだったか
9. ○○の頃, 両親の関係性はどのように見えていたか
10. きょうだいへの見方が変わったなど感じることもあるか→もしあれば, いつ頃, どのような変化があったか
11. ○○の頃, 周囲の親しい人(友人やパートナー)とどのように関わっていたか

#### その他

12. 自分にとって, 障害のある同胞はどのような存在か
13. 今後についてどのように考えているか

※5., 11.は 2021 年度のインタビュー時のみ

半構造化面接は筆者である面接者と一対一で行われ, 面接時間は概して 1 時間~2 時間ほどであった。面接中の会話は事前に許可をとり, IC レコーダーで録音をした。また録音した面接内容は全て筆者がプロトコル化した。

本研究で分析の対象としたのは, 主として各研究協力者のきょうだい-ASD 児・者の関係性における体験についての語りである (Table 8 内編みかけ部分)。

Table 8 研究Ⅲ 分析対象データ

	2016年 両親 -きょうだい児	2016年 きょうだい児 -ASD児・者	2016年 きょうだい児 -両親	2016年 きょうだい児 -社会	2021年 ASD児・者 -両親	2021年 きょうだい児 -ASD児・者	2021年 きょうだい児 -両親	2021年 きょうだい児 -社会
Aさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Bさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Cさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Dさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Eさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Fさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Gさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Hさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Iさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Jさん	-	-	-	-	○	○	○	○
Kさん	-	-	-	-	○	○	○	○

※1 ○…インタビューガイドに挙げられた項目としてインタビューを行い得られたデータを指す。

※2 △…2016年時のインタビューであり、「きょうだい-社会」についてのインタビュー項目はインタビューガイドに挙げられていなかったが、インタビューの流れで自然と語られていた。

インタビュー時間は1時間～1時間半程度で、全て筆者が逐語化した。なお研究Ⅱ～Ⅳ時のプロトコルはデータ管理を円滑にするためMicrosoft Excelに記入した。文字数は各協力者約20,000字程度であった。

なお2016年時と2021年時のインタビューに応じていただいた研究協力者の語りは、より新しいデータを分析の対象とするため、2021年時のインタビューによって得られた語りを選択した。なぜならM-GTAが分析の対象とするデータとは、個人が日常生活を送る中の体験そのままを表現した「ディテール豊富なデータ」(木下, 2003; 2007; 2020)であり、5年の経過を経ればその分さらなるディテールが盛り込まれると考えられるためである。これらのデータの扱いの背景は、M-GTAを考案した木下(2003; 2007; 2020)の論考に基づいて第二章の第三節、第四節で述べた通りである。

## 5. 倫理的配慮

研究Ⅰ・Ⅱと同様の手続きをもって倫理的配慮を行い、同意を得られた場合にのみインタビューを実施した。なお研究の計画、実施にあたって白百合女子大学倫理審査委員会の承認を得た(受理番号: 2021008号)。

## 6. 分析方法

研究Ⅰ・Ⅱと同様に修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ(以下、M-GTA)を用いた。

### 6-1. M-GTA の本研究への適応

本研究は、きょうだいが幼児期から青年期にかけて ASD 児・者との間で体験する葛藤過程に焦点を当てる。研究 I・II 同様、まさに人と人との相互作用を捉え、その変化に何がどのように影響を与えているのかを明らかにすることを目的としているため、M-GTA が適していると判断した。

### 6-2. 実際の分析過程

実際の分析過程の大まかな流れは研究 I・II と同様に、①研究テーマから分析焦点者と分析テーマを設定、②概念を生成、③新たな概念を生成しつつ各概念間の関連を検討しカテゴリー化、④カテゴリー間の関連を検討、④結果図、ストーリーラインの作成、⑤理論的飽和による分析終了である。以下にその詳細を述べる。

#### 6-2-1. 分析焦点者

本研究における分析焦点者は、研究 I・II と同様に「青年期以降の ASD 児・者のきょうだい」であり、限定された範囲内の対象者であることを常に意識する。またこれにより「各研究対象者にとっての意味」を解釈するのではなく、分析焦点者という「一定の属性をもった人間にとっての意味」を解釈していく。したがって、データは「すべての研究協力者のプロトコルで一つのデータ」という立場をとっている。

#### 6-2-2. 分析テーマ

本研究の分析テーマは、「青年期以降の ASD 児・者のきょうだいが ASD 児・者との間で体験する葛藤過程」とした。これらの分析焦点者と分析テーマを念頭に置きながらインタビューデータの分析にあたった。実際の作業においては分析焦点者と分析テーマとデータを常に照らし合わせながら分析を行い、本研究において重視した語りの該当部分を必要に応じてアンダーラインを引いて明確にした。

#### 6-2-3. 概念の生成

上述の分析テーマと分析焦点者に沿ってデータと接し、関連すると思われる箇所に着目、着目した部分を具体例としてワークシートを立ち上げ、その具体例から他の具体例の説明も可能であるような定義を考え、それをさらに凝縮したものとして概念名を付けた。



これを解釈という。概念がひとつ生成されると、それをもとにデータにあたり、類似例が見つければ具体例として追加した。具体例が豊富に出てこない場合は概念不成立と判断した。また解釈の恣意性を回避するため成立した概念の対極例を想定した。データ内に該当する対極例があれば、対極概念として成立するのかを検討し、成立するようであれば別個ワークシートを立ち上げた。概念について検討した内容や採用しなかった定義等については、ワークシート内の理論的メモ欄にその都度記入した。以下に概念生成過程とワークシートの具体例を示す。

まず Cさんと Dさんのインタビューデータを得られた段階でその全てを読み込み、多様な具体例がありそうなひとつのデータとして Dさん②（男性・弟）を選び出した。Dさんはインタビューにおいて内省的な視点を持ちながら自身の体験を具体的に言語化していたため、最初の分析データに相応しいと考えた。次に、分析焦点者と分析テーマと照らし合わせながら関連のありそうな箇所に着目し、その箇所を具体例として分析ワークシートを立ち上げた。例えば、Dさんは次のように語っていた。

- Dさん（男性・弟）②87・・・どんな小学生だったか…お調子者で、クラスは俺が中心に回ってる、みたいなふうに思ってた。でも自分で自分的には人に嫌なことはしないやつだって思ってたんですけど、でも今振り返ってみると、トロくて口が達者なやつめちゃくちゃ嫌いだったんですよ。鈍くて鈍臭くて、なのに口だけめちゃくちゃいうやつとかもう本当に嫌で。よくわーって言ってて怒られたなっていう記憶があります。

筆者はこの部分を、きょうだいが ASD 児・者との間で感じている怒りを ASD 児・者は守る対象だからこそ直接は向けられず、家族外の他者に向けていると考え、定義：「きょうだいが ASD 児・者に抱いたが家族外の他者へ向ける攻撃性のこと」とし、概念：「家族外の他者への攻撃性」と解釈した。しかし、他のインタビューデータを読み込むと、例えば次のような語りが見られた。

- Aさん（女性・兄）47・・・なんか…うーん。本当に昔は、兄っていうかからかいの対象でしかなかったの。っていうのがあって。からかいすぎて噛み付かれたりとかしましたし。なんだろうまあ、寂しいんですかね。なんかよくきょうだいの本とか、話とか、そのかかりっきりで自分に関わってもらえない寂しさに襲われる、みたいな聞くんですけど、そこは別に感じたことはなくて。だけど、やっぱ…なんだろう一緒に見てもらいたいって。うん…からかう事で私も注目してっていうのが

自然に出てたのかなって。と思うんですけど、そういうことばかりずっとやってきて。で、今は、昔から、兄の方が冷静なので。精神的になんか、なんだろう、軽くあしらうってところは昔から変わってないんですけど。そこに伴って私もこんなことばかりやってしまう。いけないなってそういう意味では、兄もそういう出来る部分とか冷静な部分を見て、ちゃんとしっかりしようって思ったし、こういう仕事をやって障害のある人と関わって、きょうだい視線でどうしても見ちゃうことがあって。あたりもするんですけど、まあそういう、からかうわけじゃないんですけど、そういう意味でしっかり人対人でやらなきゃ、ぶつからなきゃ相手もわかんないし、なめられたりこっちもなめちゃったり、そういうのがあるんだなってことも仕事してわかったから、兄に対しても、ちゃんとトーン変えて、ただからかうじゃなくて、伝えたいことはパーっと言ったりとか、そういう接し方はちゃんとしなきゃなっていう、感じに、大人としてはしっかりしようっていう風には仕事してから思いましたね。ちゃんと接すればわかるんで。態度とか声のトーンとかで本当にわかるので。同じこと言ってもビシッといえば伝わるとかもあるんで。

筆者は、これらの具体例から、きょうだいがASD児・者との間で抱えている攻撃性は必ずしも外に向けられるわけではなく、また、その背景には家族の関心がASD児・者に向けられていることによる寂しさがあると考え、定義：「家族の関心がASD児・者に向いていることできょうだいが家族の中で寂しさを感じるが故に攻撃性を発露すること」、とし、概念：「寂しさからくる攻撃性」と再解釈した。さらに、他のインタビューデータにも豊富な具体例が確認されたため、概念成立と判断した。ワークシートの例は次の通りである。

Table 9 分析ワークシート例③

概念名	寂しさからくる攻撃性
定義	家族の関心がASD児・者に向いていることできょうだいが家族の中で寂しさを感じるが故に攻撃性を発露すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Aさん(女性・兄)47・・・なんか…うーん。<u>本当に昔は、兄っていうかからかいの対象でしかなかったの。</u>っていうのがあって。からかいすぎて嘔み付かれたりとかしましたし。<u>なんだろうまあ、寂しいんですかね。</u>なんかよくきょうだいの本とか、話とか、そのかかりっきりで自分に関わってもらえない寂しさに襲われる、みたいな聞くんですけど、そこは別に感じたことはなくて。だけど、<u>やっぱ…なんだろう一緒に見てもらいたいって。</u>うん…からかう事で私も注目してっていうのが<u>自然に出てたのかなって。</u>と思うんですけど、そういうことばかりずっとやってきて。で、今は、昔から、兄の方が冷静なので。精神的になん</li> </ul>

か、なんだろう、軽くあしらうってところは昔から変わってないんですけど。そこに伴って私もこんなことばかりやってしまう。いけないなってそういう意味では、兄もそういう出来る部分とか冷静な部分を見て、ちゃんとしっかりしようって思ったし、こういう仕事をやって障害のある人と関わって、きょうだい視線でどうしても見ちゃうことがあって。あつたりもするんですけど、まあそういう、からかうわけじゃないんですけど、そういう意味でしっかり人対人でやらなきゃ、ぶつからなきゃ相手もわかんないし、なめられたりこっちなめちゃったり、そういうのがあるんだなってことも仕事してわかったから、兄に対しても、ちゃんとトーン変えて、ただからかうんじゃないで、伝えたいことはパーっと言ったりとか、そういう接し方はちゃんとしなきゃなっていう、感じに、大人としてはしっかりしようっていう風には仕事してから思いましたね。ちゃんと接すればわかるんで。態度とか声のトーンとかで本当にわかるので。同じこと言ってもビシッといえば伝わるとかもあるんで。

- Dさん(男性・弟) ②87・・・どんな小学生だったか…お調子者で、クラスは俺が中心に回ってる、みたいなふうに思ってた。でも自分で自分的には人に嫌なことはしないやつだって思ってたんですけど、でも今振り返ってみると、トロくて口が達者なやつめちゃう嫌いだっただけですよ。鈍くて鈍臭くて、なのに口だけめちゃうやつとかもう本当に嫌で。よくわーって言ってて怒られたなっていう記憶があります。
- Fさん(男性・弟) 59-2・・・だからあの一本当に僕も多分、多分確か直接言われたと思うんですけど、ちょっと弟のこと気にかけてやってた。で、あの一例え弟のクラスに遊びに行ったりもしてました。ただ、その弟まあ当然支援学級に行ってたんですけど、僕がお兄ちゃんてわかっていると、そのクラスにも支援学級の子が来てるんですよ。僕のクラスで支援学級の子が来てるので、その子がなんかできないこととかがあると頼みやすいんで、僕のトコに回ってくるので。だから当時は、なんで毎回俺がやらなきゃいけないだと思ってた節もあるという。小五ですかね。あの一分顔には出てないです。いいよって行ってやってたと思うんですけど、内心はなんで俺がやらなきゃいけないんだっていうのは思ってたね。
- Hさん(女性・弟) 77・・・其の頃にはそうだったと思います。このころだったと思うんですけど、弟にたいしてちょっと嫉妬してしまうことがあって、今まではなんかその自分も面倒を見てあげなきゃって感じだったんですけど、そんな面倒見なくても大丈夫だっとなってきた、それでも弟に対して両親が私よりも甘く接してるのでうらやましく思いました。

	た。
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだい体験する感覚の一つ。恥とは異なるベクトルで、それでも「普通じゃない」から「守る」と葛藤する？</li> <li>• 親がここにどのように関わるのかがポイント？ [平等] や [説明], [関心を向ける] などか。</li> <li>• Dさんの語りは転移だろう。</li> <li>• 定義:「きょうだいが ASD 児・者に抱いたが家族外の他者へ向ける攻撃性のこと」→「家族の関心が ASD 児・者に向いていることできょうだいが家族の中で寂しさを感じるが故に攻撃性を発露すること」に変更。攻撃性の背後には寂しさがある。また必ずしも外に向かうわけではないと思われるため。</li> </ul>

#### 6-2-4. 概念間の比較, カテゴリー化, 理論的飽和化

上述の手順で新たな概念も生成していき、その都度個々にワークシートを立ち上げた。また、これら概念の生成と同時に個々の概念間の比較検討も行った。概念同士のつながりがある場合にはカテゴリー化し、分析焦点者と分析テーマに沿ってカテゴリー名をつけた。以下にその具体例を示す。

分析を続ける中で、新たな概念として、きょうだいが ASD 児・者の障害がなかったらと思う「障害がなければという思い」が成立した。先に概念成立していた「寂しさからの攻撃性」との関連を検討すると、これらの思いはきょうだいが幼い頃から抱いているものと考えられたため、〈幼いながらに感じるもの〉とサブカテゴリー化した。さらにその後、「一緒にいると恥ずかしい」という概念が成立し、これとも比較すると、同じサブカテゴリー内に入ると考えられた。

そしていくつかのカテゴリーの生成と同時にカテゴリー間の比較も行い、その関係を手書きの略図で描いた。その後も概念の生成とともに概念間の比較、カテゴリー間の比較を継続して行った。後半のインタビューであった Jさんの時点で新たな概念が生成されなくなり、かつ次の研究協力者である Kさんの時点では具体例の追加しか生じなくなった。また、具体例の追加が生じて結果図の全体像には影響を及ぼさなかったため、理論的飽和化に達したと判断し、インタビューデータの分析を終了した。その後は分析の結果図を精緻化し、それを簡潔に文章化（ストーリーライン）した。

### 第三節 結果と考察

分析の結果、19 個の [概念]、7 個の 〈サブカテゴリー〉、2 個の 【カテゴリー】 が生成され (Table 10)、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス」が見出された。

Table 10 ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス 概念リスト

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	[概念]	定義
思春期にかけての体験	巻き込まれた関係	1 お目付役として守る	きょうだいが ASD 児・者のお世話係を担っていること
		2 きょうだいだから分かる	きょうだいだからこそ ASD 児・者と通じていること
		3 一緒にいると恥ずかしい	きょうだいが ASD 児・者の障害特性から一緒にいることを恥ずかしいと思うこと
	幼いながらに感じるもの	4 寂しさからくる攻撃性	家族の関心が ASD 児・者に向いていることできょうだいが家族の中で寂しさを感じるが故に ASD 児・者に攻撃性を向けること
		5 障害がなければという思い	きょうだいが ASD 児・者の障害がなかったらと思うこと
		6 “普通”じゃない	きょうだいが ASD 児・者に対して抱く“普通”とは違うという感覚のこと
	理不尽の捉え方	7 しょうがない	きょうだいが ASD 児・者の言動や ASD 児・者中心に家族が動くことに対して、「しょうがない」と飲み込んでいること
		8 療育施設等への付き添い	きょうだいが障害児・者の集まり (訓練会、療育施設等) について行くこと
	きょうだいならではの体験	9 思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする	きょうだいが思春期の頃に ASD 児・者と一緒に出かけることで ASD 児・者の障害特性について周りの目を気にすること
		特性ゆえの難しさ	10 特性を通した関わり
	11 特性に反発しても変わらない		きょうだいが ASD 児・者のこだわりに対して反発しても ASD 児・者が意に介さないこと
	思春期から青年期にかけての体験	フラットな視点	12 成長の気づき
13 正面から向き合えば伝わる			きょうだいが ASD 児・者に対して正面から向き合うことで伝わる事があると感じていること
14 信頼関係			きょうだいが ASD 児・者との間に信頼関係があるように感じていること
巻き込まれた関係から脱却への試行		15 きょうだいでも分からない	きょうだいであっても、ASD 児・者のことについて分からない部分があること
		16 自分を形作るひとつ	きょうだいが、ASD 児・者がいることも今の自分の一部を形作っていると感じていること
		17 思春期・青年期にかけて距離ができる	きょうだいがライフステージによって ASD 児・者と接点が少ない時期があること
		18 親亡き後の不安	きょうだい児が親が亡くなった後に ASD 児・者とのように付き合っていけば良いのか悩んでいること

以下に結果図 (Figure 4) を示し、ストーリーラインを述べる。

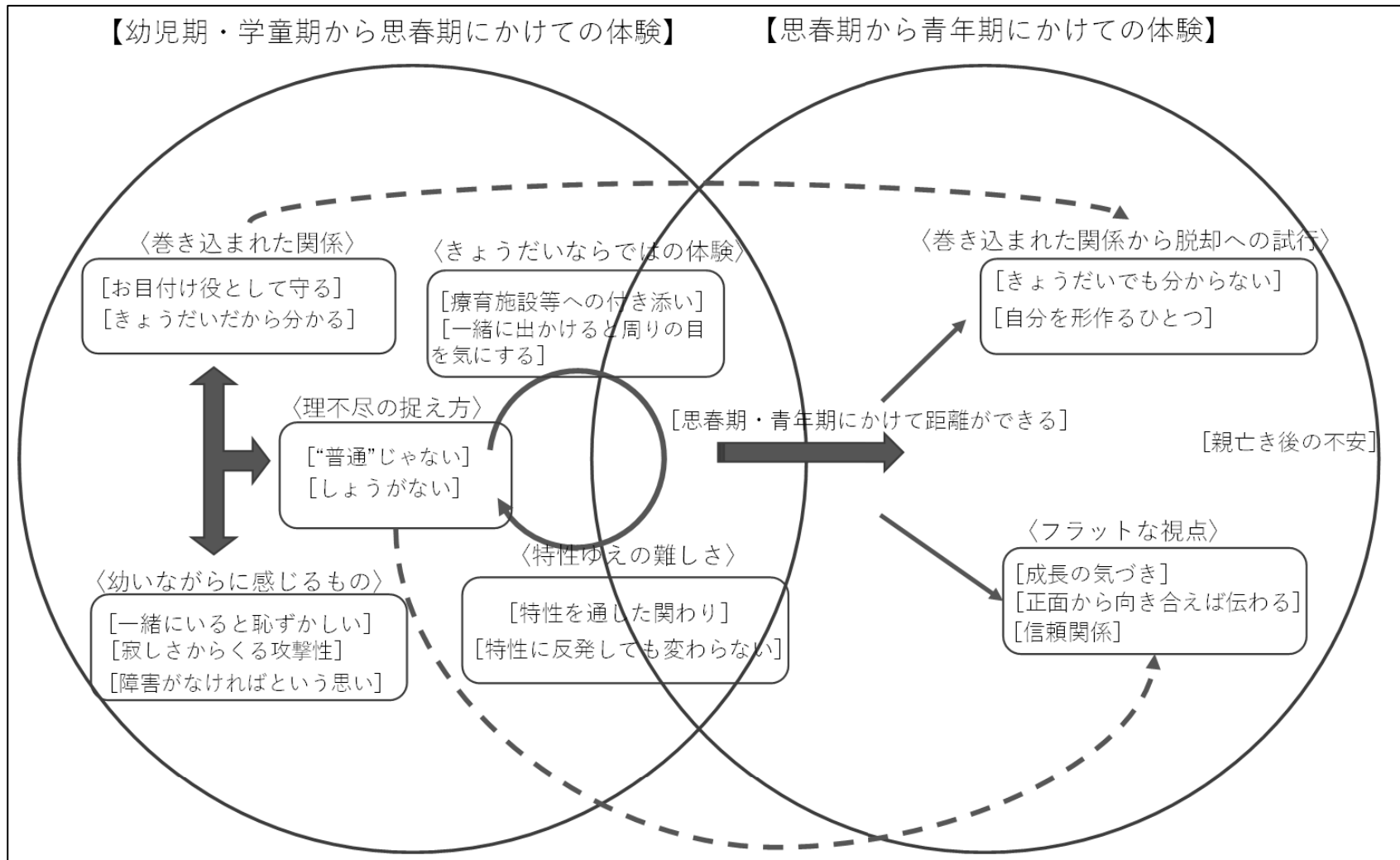


Figure 4 ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス

### 3-1. ストーリーライン

ASD 児・者のきょうだいは、幼児期より ASD 児・者の [お目付け役として守る] 側におり、親ではなく [きょうだいだから分かる] という距離感の近い関係性にいることが多く、〈巻き込まれた関係〉になっている。そして巻き込まれていながらも [一緒にいると恥ずかしい], [寂しさからくる攻撃性], [障害がなければ] といった〈幼いながらに感じるもの〉を体験している。これらの在り方・体験はきょうだいにとって理不尽ではありながらも、その理不尽を [“普通”じゃない] から [しょうがない] と捉えており、〈きょうだいならではの体験〉として、ASD 児・者の [療育施設等への付き添い] をするが、思春期に歩みを進めるにつれて [思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする] ことも体験する。そこでは [特性を通した関わり] をする中で [特性に反発しても変わらない] という〈特性ゆえの難しさ〉も痛感する。これらの【幼児期・学童期から思春期にかけての体験】を経る中で、ライフステージの移行に伴い、[思春期・青年期にかけて距離ができる] ことで事態が動いていく。距離が出てくることで自身と ASD 児・者を俯瞰し、それまで [守る] 対象だった ASD 児・者の [成長の気づき] を見て、[正面から向き合えば伝わる] ことも実感する中で [信頼関係] へと移行し、〈フラットな視点〉を持つことができると同時に、[きょうだいでも分からない] があることを知り、ASD 児・者と共にあることとはあくまで [自分を形作るひとつ] であると捉え直しが生じて〈巻き込まれた関係からの脱却への試行〉が試みられる。ただし、親より長く関わる ASD 児・者との間には、[親亡き後の不安] が完全になくなるとは言い難い。これらがきょうだいの【思春期から青年期にかけての体験】となっている。

次に、各カテゴリーや概念を、具体例を交えながら提示する。

### 3-2. 各カテゴリーや概念について

#### 3-2-1. 【幼児期・学童期から思春期にかけての体験】

ここには〈巻き込まれた関係〉、〈幼いながらに感じるもの〉、〈理不尽の捉え方〉、〈特性ゆえの難しさ〉、〈きょうだいならではの体験〉というサブカテゴリーが含まれている。

〈巻き込まれた関係〉は [お目付け役として守る] と [きょうだいだから分かる] という概念から生成された。

[お目付け役として守る] とは「きょうだい ASD 児・者のお世話係を担っていること」

と定義づけられ、きょうだいがASD児・者と行動を共にする際に単なるきょうだい関係ではなく、出生順位・性別に関係なくASD児・者の行動を見守る役割を担いやすいことが示唆された。

- Bさん(女性・弟) 36,37・・・あ、わかる。うんと一番、すべては母親のためだと思います。あの、母親に苦勞をかけたくないとか、母親を悲しませたくないとか、そういう気持ちから出てた行動なんじゃないかなって思いますね。あとそうだ、あとはね、授業参観に来てくれた時に、弟いなくなっちゃたんですよ。で○号線、がありますよね。○号線って大きい通りなんですけど近くにあって、そこ沿いの、電話ボックスで見つけたんですけど、轢かれなくてよかったーとか。本当になんかそういうのが、結構いなくなっちゃうのがあったんですよ。今の彼からすると考えられないんですけど。だからいつもお目付役で、友達と遊びたいのに、今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると、え、良いよ。って言って。一緒に外で遊んで待ってるとか。〈そういう時はどんな気持ちに?〉しょうがないかなって。でも、うん、それで、なんか考えたんでしょうね。団地に住んでたんで、友達を団地の公園に呼んじゃって。そうすると一緒に遊べるじゃないですか、で遊んで。で、ただ、あの友達で弟が嫌だっていう子いるかなって前もって言って。いや実はねって。ってみんな良いよーって。もうそこも困らなかったですよ。
- Cさん(女性・兄) ②80・・・たまにですけど、こう兄と家族で出かけたりすると、どうしても私が、母が目を離す時はどうしても私が見てないといけない、みたいな、まあお節介もあるんですけど、自分がちゃんとしなきゃ、みたいなのが勝手に芽生え始めてて、って感じですかね。
- Dさん(男性・弟) ②57・・・親。親なんじゃないですかね。親の関係がでかいのかなって思いますけど。親が弟にめちゃくちゃ怒ってる時とかに、なんでそんなに怒るの、って思う時もあるんすよ。だからめちゃくちゃ怒られてるから俺がケアしなきゃみたいなのも結構あって。親との関係が前後じゃないのかなって思いました。上下の関係じゃなくて、横の関係で割と。で、まあでも親だっていくら息子だからと言ってもムカつく時はムカつくよな、みたいな。じゃあそうなってるなら逃げ道を俺が作らなきゃな、みたいなのは小学校の中学年くらいから。なんで中学年くらいからかなって思ったかという、弟が…僕が小3で小1なんですよ。だから学校生活の時は全て俺が守る、みたいな。僕も調子いいんで、味方が多いんですよ。敵に、僕の味方だから、弟からしても味方なんですよ。そこがくっついていたりとか、でコミュニティができて。でも同学年とかに嫌なことしてくる奴がいて、僕





って、「自分」という主体性を見失いやすくなってしまいう危険性を孕んでいると考えられる。

きょうだいがかうした〈巻き込まれた関係〉になることは無理からぬ状況にあるが、同時に〈幼いながらに感じるもの〉が〔一緒にいると恥ずかしい〕、〔寂しさからくる攻撃性〕、〔障害がなければという思い〕から生成された。

〔一緒にいると恥ずかしい〕は「きょうだい ASD 児・者の障害特性から一緒にいることを恥ずかしいと思うこと」と定義づけられ、他者であるはずの ASD 児・者と一緒にいると、自らも恥ずかしくなってしまうことが示唆された。

- H さん 66 (女性・弟)・・・直接なんか嫌と言うよりは、うーん、たとえば学校で見かけた時に大声で名前呼ぶのが恥ずかしいとかっていうのはありました。やっぱり根は良い子なのであんまり嫌なことはなかったです。
- K さん 15 (男性・兄)・・・小学生の時のきょうだい関係ですか。そうですね…。そうっすね、お互いちょっと距離がやっぱり自分もまだ幼かったんで、やっぱり友達からとかもそういうふうに言われたりするの、やっぱ全員が全員子どもに障害について理解があるっていうわけではなく、どうしてもそれは難しいので、そういうことだからかわれたりしたり言われたりするのちょっと嫌だっというのもあったんで。あまり自分の方から兄の話をしたり関わりに行ったりっていうのはちょっと小学生のときはなかったですね。

〔寂しさからくる攻撃性〕とは、「家族の関心が ASD 児・者に向いていることできょうだい家族の中で寂しさを感じるが故に ASD 児・者に攻撃性を向けること」と定義づけられ、恥ずかしいとはまた異なるベクトルの情緒的な体験があることが示唆された。

- A さん (女性・兄) 47・・・なんか…うーん。本当に昔は、兄っていうかからかいの対象でしかなかったの。っていうのがあって。からかいすぎて嘔み付かれたりとかしましたし。なんだろうまあ、寂しいんですかね。なんかよくきょうだいの本とか、話とか、そのかかりっきりで自分は関わってもらえない寂しさに襲われる、みたいな聞くんですけど、そこは別に感じたことはなくて。だけど、やっぱ…なんだろう一緒に見てもらいたって。うん…からかう事で私も注目してってのが自然に出てたのかなって。と思うんですけど、そういうことばかりずっとやってきて。で、今は、昔から、兄の方が冷静なので。精神的になんか、なんだろう、軽くあしらうってところは昔から変わってないんですけど。そこに伴って私もこんなことばかりやってしまう。いけないなってそういう意味では、兄もそういう出来

る部分とか冷静な部分を見て、ちゃんとしっかりしようって思ったし、こういう仕事をやって障害のある人と関わって、きょうだい目線でどうしても見ちゃうことがあって。あつたりもするんですけど、まあそういう、からかうわけじゃないんですけど、そういう意味でしっかり人対人でやらなきゃ、ぶつからなきゃ相手もわかんないし、なめられたりこっちもなめちゃったり、そういうのがあるんだなってことも仕事してわかったから、兄に対しても、ちゃんとトーン変えて、ただからかうんじゃないで、伝えたいことはパーっと言ったりとか、そういう接し方はちゃんとしなきゃなっていう、感じに、大人としてはしっかりしようっていう風には仕事してから思いましたね。ちゃんと接すればわかるんで。態度とか声のトーンとかで本当にわかるので。同じこと言ってもビシッといえば伝わるとかもあるんで。

- Fさん 59-2 (男性・弟)・・・だからあの一本当に僕も多分、多分確か直接言われたと思うんですけど、ちょっと弟のこと気にかけてやってくれて。で、あの一例え弟のクラスに遊びに行ったりもしてましたし。ただ、その弟まあ当然支援学級に行ってたんですけど、僕がお兄ちゃんてわかってると、そのクラスにも支援学級の子が来てるんですよ。僕のクラスで支援学級の子が来てるので、その子がなんかできないこととかがあると頼みやすいんで、僕のトコに回ってくるので。だから当時は、なんで毎回俺がやらなきゃいけないだと思ってた節もあるという。小五ですかね。あの一多分顔には出てないです。いいよって行ってやってたと思うんですけど、内心はなんで俺がやらなきゃいけないんだっていうのは思っていましたね。

「障害がなければという思い」は「きょうだいが ASD 児・者の障害がなかったらと思うこと」と定義づけられ、きょうだいが ASD 児・者の障害がなかった場合のことを想像することがあると示唆された。ただし、具体例を見るとそのような想像をすること自体にきょうだい自身が罪悪感を抱いてしまう可能性もうかがえた。

- Cさん (女性・兄) 111・・・だから途中でどうしても何か意地悪したくなるというか、「Tくんがこうじゃなかったらもっと違ったのに」と思ったことが途中であって、なんか子供の頃と今との間であって。今なんかそんなこと全然本当に問題ないですけど。その途中にちょっとありました一時期だけ。
- Iさん 7 (女性・妹)・・・苦しさは…もうそうですね…その当時のことを…もう多分自分が…苦しかったのは…何だろう。多分そのいろんな私はプレッシャーを元から受けやすいタイプで、資質的にあるんですよね多分。自分が意識しないところでも結構その社会的な、「就職しないと」みたいな「4年で卒業しない」とみたいな思

っていて。なんかその感情の逃げ場があんまりなかった、ように思いますね。そういうことを本当は、本当はって言ったらあれですね、何か普通、普通の？普通のって、普通のも違うか。健常のきょうだいで、かついろんな健常の兄弟がいますけど、何かいいタイプのきょうだいとか姉妹だったら、何かそういうのを話せたりとかしたのかなと思うんですけど。まあその真反対というか、その影響を2人ともネガティブに受けて、しかもぶつかる、みたいな感じで。状況的にはしょうがなかったとも思うんですけど、そういう...あれ質問なんでしたっけ。

〈巻き込まれた関係〉と〈幼いながらに感じるもの〉が存在するが、これはASDという障害が理不尽なものとして降りかかっているがゆえに生じてきているものだと考えられる。こうした理不尽に対して、きょうだいはASD児・者のことを〔“普通”じゃない〕と察知し、だからこそ〔しょうがない〕と捉えていることが見出され、〈理不尽の捉え方〉というサブカテゴリーが生成された。

〔“普通”じゃない〕とは、「きょうだいがASD児・者に対して抱く“普通”とは違うという感覚のこと」と定義づけられ、きょうだいは幼いながらにASD児・者が周りの人と違うことを敏感に察知していることが示唆された。

- Bさん(女性・弟)31・・・でも、やっぱり、何だろう。普通のきょうだいの子たちを見てると、おしゃべりができるじゃないですか。でも、一生懸命しゃべっても返ってこないし、様子が違うな、と思いますよね。で、でもお母さんはすごいかわいがってるけど、あれ？って。私も頑張ってるけどなっていうのは多分思ったのかな。結構人見知りな子だったんですよ小さいころ、で、幼稚園の時もよく泣いていたらして。あんまり覚えてないんですけど。で、あと、お弁当が食べれないって泣いてて、で、なんかね、毎日同じお弁当を作ってたんだよお母さんっていう話を聞いたことがあって。へー、ありがとうございますって大きくなってから言いました。で、幸運なことに、幼稚園の先生も弟の様子を見て、ちょっと、って思ってくださいみたいで、そこから多分あの、児相に行った方が、っていう話を母親にしてくれたようで。そこからこう母親も動き始めて、わかっていたけどどうしたら良いっていうのがわからなかったと思うんですよね。で、母親本人はなるほどなるほどって動くタイプの人なので、で、やっていったのかな。ちょうどね、母親も育つ頃で。
- Dさん(男性・弟)26・・・普通…普通っていい方がベストかわからないですけ

ど、「違うな」っていうのがわかるんですよね。5歳だろうが何歳だろうが。言葉の教室に通うとか。付いていくわけじゃないですか。よく泣いてるとか。会話ができないとか。でもちっちゃい頃から僕のことめっちゃ好きなんですよ。だからそういうのがわかるから、かな。

[しょうがない]は「きょうだい ASD 児・者の言動や ASD 児・者中心に家族が動くことに対して、「しょうがない」と飲み込んでいること」と定義づけられ、抱いている攻撃性を否認、あるいは抑圧している可能性が示唆された。

- D さん 23 (男性・弟)・・・しょうがないなは…ずっとあります。そのそれこそ 5 歳とか。僕仮面ライダーの人形とか集めてたんすけど、こう尖ってるんすよ。でもそれ全部嘯まれて無くなるんすよ。なんかそれとかも、しょうがないな、怒ってもしょうがないな、みたいな。感じだったし…。あとは二人で一個、みたいのがなかったんすよ。大体二人ずつ買ってもらってたんですよ。例えばゲームにしても、ゲームボーイアドバンスとかあったじゃないですか。あれとかも二つあるし、その次の SP とかも二つあって、DS とかも二つあって。DS とかは、怒って壊したんすよあいつが。僕はもうやんなくなってた時期だったんでそれを渡したりとか。だからある程度こうなんだろうな、許容できる、許容できない範囲のしょうがないやが、日常的に起こらなかったかもしれないです。
- E さん 33-34 (男性・弟)・・・いや、別に、あの俺の中では別にそんなもう割り切っていましたかね。嫌でしたけど。もうちっちゃい頃からの場所だったんで。嫌だったんですけど、でも結局はまあ…。まあ別に逆らうとかそんなのはなくて。うちはもう基本弟中心なんで。別に、良いのかなと。〈別に良い?〉そんなに…もう、なんだろうな。割と雑な性格なんで、そこはもう簡単に割り切れたというか。まあ、じゃあしょうがないねっていうような気持ちだったかな。

この時期に、しばしばきょうだいは[療育施設等への付き添い]をすることが見出されたが、同時に[思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする]ことも見出されたため、これらから〈きょうだいならではの体験〉というサブカテゴリーが生成された。

[療育施設等への付き添い]とは「きょうだい障害児・者の集まり(訓練会、療育施設等)について行くこと」と定義づけられ、多くのきょうだいが ASD 児・者の通う療育施設や地域の訓練会に参加するという体験をしようする可能性が示唆された。

- A さん (女性・兄) 37: そうですね・・・中学校の時は・・・。養護学校に兄が行

って・・・まあでもその養護学校の学校祭とかに行ったりとかはしてましたし。中学校の時は・・・訓練会ってそのさよちゃんも、すずな会っていうんですか？とかも小学校，中学校くらいまでは私も兄も行って。あたしもそこはズーっと一緒に行っていて，そこで調理実習とか。楽しいじゃないですか。だからいろいろ私もやって一緒に楽しんでたし。そこでそのきょうだいの友達とかも作って。その時代はまだそれで結構楽しかった。けど，そこで旅行も行ったりするし，っていう仲間みたいのは作ってたかなっていう感じはしますね。

- Hさん 57 (女性・弟)・・・経緯は，そうですね，なんかきっかけがあったというよりは，普通の子とはちがうんじゃないかなって私自身が感じて，たぶん自分のちっちゃかったころと比較して，このくらいの年になったら私は落ち着いてたな，とか，自分と比較したところから始まったと思います。療育センターとかにMと一緒に行って，なんか弟と似た雰囲気の子がその施設に集まっていたので，弟は普通の子とは違うのかなって感じてました。

[思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする]とは「きょうだいが思春期の頃に ASD 児・者と一緒に出かけることで ASD 児・者の障害特性について周りの目を気にすること」と定義づけられ，きょうだいが思春期に入ってくると ASD 児・者と一緒に出かけると，自身も含めてどのように見られるのかを気にする場面があることが見出された。

- Bさん (女性・弟) 34・2・・・で，1年生の頃は本当に泣き虫で，男の子によくランドセルとか蹴られてたから，いやこのままじゃいけないって言い返して。何かエイってやったら，あくる日から何もやられなくなって。あいつこええぞ，みたいな感じになってくれたので。そうですね。そういう関係でも楽で。なので，あとは良かったことになるのかな。やっぱ弟ができないんだったら，自分ももっと頑張らなきゃって思って。本当にもうこの歳になると，あああの時あんなに頑張らなくて良かったのにな，って振り返ると思ったり，するんですけど。うん。なんかね，この歳になって，改めちっちゃい時の自分に会ったら，頑張ってるねって声をかけてあげられるのになって。でも周りもそれを認めてくれている人が何人かいたので。で，一番，一番？うーんとね，小学校の3，4，5と担任を持ってくれた先生と未だに手紙のやり取りをしているんですけど，その先生がとても気にかけてくれていて。で，そうですね，思春期の時とかにもすごい相談相手になってくれた気がするんですよ。そういう方達にも恵まれたっていうか，うん。本当になんか困ってないんですよ，自分自身が。で，悪いことっていうか，小学校の高学年になって，だん

だん分かってきますよね、こう自分のきょうだいは違うって。で、ちょうど、近所にも同じ年で、そのこのごきょうだいがやっぱり肢体不自由、の方だったのかな。で、知的にもあって。で、うちの弟は肢体不自由がないので、あの逆に言うと恥ずかしがり屋さんねというか、周りの人が気づいてくれないところがあって。でもあの奇声を発してしまうので、ちょっとそういうのがあると、え?! っていう感じで。恥ずかしいなっていうのがまずあったかな。で、ちょっと高学年から中学生くらいは一緒に電車に乗るのを、親の前だから平気なふりをしているけど、やっぱりちょっと離れ…られるものならちょっと距離おいちゃおうかなっていう心と戦ってました。あの、恥ずかしくってっていう。でもその恥ずかしいって思う自分も嫌なんですよ。そこで葛藤してた感じです。

- Eさん 78 (男性・弟)・・・ありますよやっぱり。あの一特にやっぱり大学生とか高校生くらい。まあそれくらいになってくるとやっぱりそういうのがよりあったり、周り気にするようになりましてからね。ただ、だから気にしたからどうすんのって話でもないんですけど、例えばこいつには話さない方が良くなっていうのは結構ありますよ。
- Gさん 23 (女性・姉)・・・私、それこそ試合、とかだけじゃなくても、親と一緒にいるだけでも、一緒に居る時に友達に会うのもすごく嫌だったんで。姉が、とういうより、家族とはもう一緒にでかけることがなかったと思う。

こうした〈理不尽の捉え方〉や〈きょうだいならではの体験〉をしながらも、ASD 児・者との〔特性を通した関わり〕、〔特性に反発しても変わらない〕ことを体験していることも見出され、〈特性ゆえの難しさ〉が生成された。この〈特性ゆえの難しさ〉は、【思春期から青年期にかけての体験】にも生じうるため、結果図では右の円にも入ってきている。

〔特性を通した関わり〕とは「きょうだいが ASD 児・者の特性を通して関わりが生まれていること」と定義づけられ、きょうだいが ASD 児・者の特性、特にこだわりやルーティンを通して関わりを持っていることが見出された。

- Bさん (女性・弟) 23・・・一緒にいるって言うのが一番自然な形なんですかね。で、何か困ったことが、何かやってほしいこととか、ほしい、やっぱり自閉的なので、こうそこの実家から帰ってくるときに、必ず、幼稚園のときにいただいたあの、キリスト系のイエス様の絵本があったんですよ。12ヶ月こう1冊ずつ。あれを何を思うのか、1冊ずつ自分であるんでしょうね、その日の気分が。それを開いて読めと。でそれを読まないと返してもらえないっていうのがありますね。

- Jさん 96 (女性・弟)・・・でも今とそんな変わらないというか。なんかすごい重いわけでもなかったので弟の場合。なんか普通になんか弟が何かどうしても出掛けるのに付き合ったりとか、そのぐらいで。ただなんか弟が結構料理とか服とかを何か曜日で決めてて。それには必然的に合わせる感じにはなりますよね。

[特性に対して反発しても変わらない]とは、「きょうだい ASD 児・者のこだわりに対して反発しても ASD 児・者が意に介さないこと」と定義づけられ、きょうだいは ASD 児・者の特性に理解は示しつつも、それでも自身にとって困ったことであるときに反発はするが結局変わらないことを体験すると示唆された。なお反発ができていているという点においては、前述の「寂しさからくる攻撃性」が表出されていると推察できる。

- Dさん 10-11, 15 (男性・弟)・・・どう思う？どう思うって難しいですね…。それは、こう、日によります。僕が帰ってきた瞬間に撮ってたりすると、わかっちゃいるけどイライラしたり。はぁ～…みたいな感じだったり。ちょっと待ってくれって思ったりもしますし。まあでもこうルーティンだから、など…。どう思うとかないというか…。〈どう思うとかない〉そういうもの、みたいな感じで。～それはもう「自分は納得してないから黙っててくれ」と(笑)うるさい、と。曲げないっすね。
- Eさん 21 (男性・弟)・・・困ることは...うーん...やっぱり、いろいろ困ることはあるんですけど、別にそれを客観的に見ると多分困ってるんですけど、困ってるっていう風には思っなくて普段は。だから例えばすごいクセがあるので、あの一例えば、これはここになきゃいけないとか、そういうのがあるんですね。こだわり、強いですからね。だから例えば風呂場一つにしても、椅子の位置がすんげえ端の方に移動してたりとか、もう鬱陶しなあとかいつも思うながらやっていますけど、でもそういうのはやっぱりあるんで、まあそれはもう持病なん...治らないものだと思うんで、それはもう今さら治そうと誰も思っていないので。ただあの一、そのこだわりが強すぎるがために、いろいろその順応できない、彼が。それが多分困るのかなあっていうのはありますけど。ただあの一、あいつがすごいなって思うのは、さっきもちょっと言いましたけど、その使い分けをしたりするので。例えば、今俺に何か頼ってくるといえば、何か欲しいとドライブ連れてって欲しいとか。あとは困った時、何か腹が減った時とか、あとはどっかに何か食べに行きたいとか。そういう関連のことは僕なので基本的に。そういうのは、もう、おにいちゃん。それこそもう、次男が帰ってくると、もう次男一筋なので。もう俺なんかそっちのけで、って



いうがあるので。で、まあそういうところがこいつ面白いなあとかっていつも思うんですけどね。うん。あいつのことはそれくらいですかね。

### 3-2-2. 【思春期から青年期にかけての体験】

このカテゴリーには、〈フラットな視点〉、〈巻き込まれた関係から脱却への試行〉というサブカテゴリーと、[思春期・青年期にかけて距離感ができる]、[親亡き後の不安]という概念が含まれている。

[思春期・青年期にかけて距離感ができる]とは、「きょうだいがライフステージによってASD児・者と接点が少ない時期があること」と定義づけられ、特に思春期・青年期にかけてはきょうだいが自らの交友関係を広げていく時期であることが相まって、相対的にASD児・者との関係性には物理的・心理的に距離ができることが見出された。また、この概念は複線経路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) の「等至点 (Equifinality Point: EFP)」（安田, 2015）にも相当すると考えられ、今回の研究協力者全ての語りに見られていた。「等至点」とは、個々人が多様な経路を辿っていたとしても等しく到達するポイント（安田, 2005）を意味しており、TEA ではこのポイントを起点に研究協力者を集めることを分析方法に組み込んでいるため、本研究においても研究協力者の理論的サンプリングに一定の妥当性が見られたと言えよう。

また、この物理的・心理的距離感はライフステージの移行という社会・文化的な圧力からも生み出されており、これに伴ってきょうだい自らのASD児・者の関係性を俯瞰することを可能にし、〈フラットな視点〉と〈巻き込まれた関係から脱却への試行〉へと寄与していた。

- Aさん(女性・兄)60・・・そうですね。私も本当に前より会う時間が減って、一週間に一回や二回みたいになって、まあいる時はしつこくしようみたいな時はあるんですけど、コミュニケーションですね言い方あれですけど。まあそれくらいの距離感の方が、向こうは良いみたいですね。私は別に。もともと仕事でいないんで。どうしようもない。時々あって、ちょっとコミュニケーション取るくらいの方が、多分あっちもしつこくされなくて良いんだろうし、私もずっと毎日いるのも、やっぱりうるさいってなる、こだわりがあるので細かいってなるけれども、週1、2だったらまだ許せるか。ってなって、まあ距離感はちょうど良いかなって思いますね。時々会うっていう。で、時々旅行に行って、みたいな。感じがちょうど良いで

すね。

- Jさん 93 (女性・弟)・・・あ、でもそうですね、中学のときもなんか私が高校に入って結構私遠い高校だったので、何かそこでも関わる機会が減った気がします。
- Kさん 8 (男性・兄)・・・今ですか。今はですね。あまり…そうですね、兄弟、やっぱり男の同士の兄弟っていうのもあるので、結構自分が高校入る、入ったぐらいから結構あんまり交流があんまり、お互い干渉しなくなっていったので。

[親亡き後の不安]とは「きょうだい親が亡くなった後にASD児・者とどのように付き合っていけば良いのか悩んでいること」と定義づけられた。

- Iさん 10 (女性・妹)・・・あ、そうですね、私は結構その時不安で。そうですね結構、うちの祖父が亡くなったときにその遺書が書かれてなかったりとか。ちゃんと整えてから旅立つ方って結構多いと思うんですけど、うちの祖父はそれをせず旅立ってってしまって。結構しっちゃかめっちゃかな状況が続いていて。なんかそれで何か生前にできることとか、こういうふうにした方がいいんだみたいな。私も興味があったので母がやってることとかを見ていて。そういうのとかを見てると、やっぱり家族内でのコミュニケーションが、生きている方の家族間のコミュニケーションがすごくやっぱり密に行われる場とかにいと、なんかそういう元々私もいとことか稀薄というかほとんどいないに等しいんですね。なので本当に家族だなんて思える存在は本当に妹か親ぐらいで。だから、妹とこういう話絶対無理みたいな感じに思っ。全部私が決めなきゃいけないのかと思っ、何か困ったことを何か一番近くで相談できるきょうだいいないと思っ。結構母がそういうやり方で自分のきょうだいに相談してたのを見て、自分はそれを見ていて、自分はそれができないみたいに感じたときに不安に思っ。それそこから結構なので、話のきっかけとしては割とネガティブな動機だったんですけど。そんな感じでした。
- Jさん 139 (女性・弟)・・・これはすごい先なんですけど、なんか両親が先に死んだらもう私が何かその弟のあれをするのかな。多分そういう施設に入ると思うので、具体的になんか何かを面倒見るってわけじゃないと思うんですけど。でも後見人的なものには多分なることになるし、みたいな。

〈フラットな視点〉とは、きょうだいとASD児・者の間に距離ができることによってきょうだい[成長の気づき]、[正面から向き合えば伝わる]、[信頼関係]という概念から生成された。ここではそれまでのきょうだいとASD児・者の関係性が主に「守る-守られる」という関係性であった状態とは異なり、よりフラットな視点できょうだいASD児・者を見ていることが示唆された。

[成長の気づき]とは、「きょうだい ASD 児・者の成長に気づくこと」と定義づけられ、ASD 児・者のゆっくりとはしているものの確かな成長・発達をきょうだい認め、喜ばしいと感じていることが見出された。

- F さん 40 (男性・弟)・・・あー...うーん、それはそうですね...。家族全体にも言えることですが、この彼がいることで話題が彼のことで話題ができるので。些細なことでもできるようになると言いたくなっちゃうんでしょうね。だから割とそれが他のところと比べると、あのー甘やかしてるとっていう風にきつと見える部分のかなとは思いますが。そんなちっちゃいことでできるようになったすごい、えらい。って、言うのか、みたいな。うちでは普通なんです。うちでは普通なんですけど、うちでは普通に彼がこれができるようになったのはすごいことなんです。褒めてあげなきゃいけない、ってなるんですけど、それでよしよしすごいなっていうと、やっぱり甘やかしているように見えるのかなあという風には思います。
- G さん 33 (女性・姉)・・・そうですね。あとはやっぱり精神的に成長したのかわからないですけど、でもちょっと周りが見えるようになってきたかなっていうのはありますね。
- H さん 95 (女性・弟)・・・(ASD 児・者への見方が変わった理由) そうですね... やっぱり弟自身の成長があったんじゃないか。な最初は手をつないで、監視しなきゃっていうのがあったんですけど、成長して普通にコミュニケーション取れるようになったり、一緒にゲームしたりしてたので、きっかけというよりはじわじわと徐々になってきたかなと。

[正面から向き合えば伝わる]とは、「きょうだい ASD 児・者に対して正面から向き合うことで伝わる事があると感じていること」と定義づけられ、〈特性による難しさ〉というネガティブな側面へ向いている目が、ASD 児・者の健康的な部分、ゆっくりではあるが発達してきている部分に目を向けることが可能になっていくことが示唆された。

- A さん (女性・兄) 47・・・なんか...うーん。本当に昔は、兄っていうかからかいの対象でしかなかったの。っていうのがあって。からかいすぎて噛み付かれたりとかしましたし。なんだろうまあ、寂しいんですかね。なんかよくきょうだいの本とか、話とか、そのかかりっきりで自分に関わってもらえない寂しさに襲われる、みたいな聞くんですけど、そこは別に感じたことはなくて。だけど、やっぱり...なんだろう一緒に見てもらいたいって。うん...からかう事で私も注目してっていうのが自然に出てたのかなって。と思うんですけど、そういうことばかりずっとやって

きて。で、今は、昔から、兄の方が冷静なので。精神的になんか、なんだろう、軽くあしらうってところは昔から変わってないんですけど。そこに伴って私もこんなことばかりやってしまう。いけないなってそういう意味では、兄もそういう出来る部分とか冷静な部分を見て、ちゃんとしっかりしようって思ったし、こういう仕事をやって障害のある人と関わって、きょうだい目線でどうしても見ちゃうことがあって。あつたりもするんですけど、まあそういう、からかうわけじゃないんですけど、そういう意味でしっかり人対人でやらなきゃ、ぶつからなきゃ相手もわかんないし、なめられたりこっちもなめちゃったり、そういうのがあるんだなってことも仕事してわかったから、兄に対しても、ちゃんとトーン変えて、ただからかうんじゃないくて、伝えたいことはパーっと言ったりとか、そういう接し方はちゃんとしなきゃなっていう、感じに、大人としてはしっかりしようっていう風には仕事してから思いましたね。ちゃんと接すればわかるんで。態度とか声のトーンとかで本当にわかるので。同じこと言ってもビシッといえば伝わるとかもあるんで。

- Dさん 21 (男性・弟)・・・ああ～ま、基本ベースはあるんすよ。でもどっか行ってたとか、イレギュラーって日常的によく起こると思うんですけど…。そうになったらそれでしょうがないかっていう。で、それにやっとうしようがないって思うようになってきたりとか。あと昼ごはんのコップと夜ご飯のコップが違うんすよ。そんなん覚えらんないから。こっちがこう一緒に飲み物とか準備してあげようと思っても、なんか「違います！」みたいな。「じゃあテメエでやれ！」みたいな(笑)お魚とかも、どこの切を食べたいとかあるんすよ。なんかそれも、要は骨が嫌だから、骨が少ないところを食べたがるんですけど、それも自分がゲームしてて選べない時があるんすよ。でもう来なくて適当に置いておいたら、なんか1人で怒るから、「お前がいけないんだろ」みたいな。ってすると、それが何回かあるんですけど、そうすると学習して、それまでにやめて自分で選び始めたりするんすよ。で、自然と骨の多いものが僕のところにきたりしてて。みたいな。だからあの子のそういうストレスになるようなものが僕的にそんなストレスじゃなければ「じゃあいいよ」みたいな。
- Fさん 56 (男性・弟)・・・うん。小一あたりの彼が一番悪ガキだったので。物を壊す投げる叩くはまあ日常茶飯事だったので、まあそれは怒られますよね。それをしてしかたない、この子だから仕方ない、じゃなくて、ちゃんと怒るところは怒るし。うん。だから多分その姿勢が、きょうだいには見えているから、じゃあ僕達も悪いことされたら怒らなきゃいけないのかなあとか思ったりもしたと思うんですけど

ど。

〔信頼関係〕とは「きょうだいとASD児・者との間に信頼関係があるように感じていること」と定義づけられ、きょうだいとASD児・者がより対等な存在として互いの目に映っていることが見出された。

- Dさん 46 (男性・弟)・・・「何時に行くからね」って言うておくと、支度ができてるんですよ。父親と行く時とかは支度できてないんですよ。で、怒られてるんですよ。母親にも「良い加減にしないで！」って言われて。でも僕の時ではできてるんですよ。一番こう、怒らせてはダメって思ってたのかなって。っていう姿を見ると、気を遣ったりする、こっちが気にしてあげることが、まあ「あげる」という表現をしましたが今、気にしてあげることが苦じゃない、みたいな。気かけよう、って思う。このくらいの時間に帰ったら、多分今やってんな～みたいな感じで家に入るから、「ですよ～」みたいな。やりましたよね～みたいな。
- Fさん 95：(男性・弟)・・・そうですね。あの一僕が完全になくて良いとは言わない、ですよ。やっぱり多分自分で言うのもなんですけど、彼にとっては大切な存在で。あの一多分、今から予約した番組を次に僕が帰ってきた時に見ようねとか言ってるので。だからもうあの一この頃は結構ひどくて、なんで帰るんだって言われるんですよ。だからまあ確かにか彼にとっては精神を安定させるためというか、自分を保つために必要存在ではあるけれども、でもやっぱり母がいないと、それも。
- Kさん 15 (男性・兄)・・・そうっすねそういったあれは、障害を持つっていうのもあったんですけど、なんで自分もしっかりしなきゃと思ってたんすけど、やっぱりその上で兄なんだ、兄であるっていうのをちょっとやっぱり障害を持ってても、あ、兄は兄なんだって。

こうした視点を持つのと同時に、〔きょうだいでも分からない〕や、ASD児・者との関わりはあくまで〔自分を形作るひとつ〕であるという自我境界のはっきりとした、より主体的なきょうだいの在り方が見出され、ここから〈巻き込まれからの脱却〉というサブカテゴリーを生成した。

〔きょうだいでも分からない〕とは、「きょうだいであっても、ASD児・者のことについてわからない部分があること」と定義づけられ、以前は〔きょうだいだから分かる〕とまで感じていた距離の近さが〔きょうだいでも分からない〕というより現実的な認知へと

脱錯覚 (Winnicott, 1953) していく様子を指していると考えられた。

- Bさん (女性・弟) 64-2・・・一番彼に聞けるのが、彼の気持ちがわかるのが良いんですけど、彼の気持ちは永遠にわからないので。そこがね、もどかしいところなので。うん。それがねわかるようなね、機械があれば良いねとか、今コンピュータとかができてるじゃんって。そういうのがわかれば良いのになってよく話したりして。なので、そうですね。ただ、あの自分が彼よりも早く死んじゃった後は心配になるんですけど、なんかどういわけか、次男くんが、ある日、実家の母にあのさあ、俺がさあ、大きくなって働けるようになったらさ、この団地に引っ越してきて、おじいちゃんおばあちゃん死んだら俺ここに住んでヒロくん見てあげようかって言ったことがあったんですよ。で、なんか母親が涙ながらにそれを言っていて。なんかね、嬉しくってって言って。あ、何にも言っていないけどそれが育ったんだって。それを聞いた時は嬉しかったですね親として。あ、ちゃんとかうやって繋がっていけるんだなって。無理なく？まあ生まれつきであったとしてもそうやって言ってくれるなら嬉しかったなって。で、運が良いのか悪いのか、男の子を3人産めたので、でもどうしてもやってほしいとも思わないし、もしそういう気持ちがある子が出てきてくれたら嬉しい。で、それでも死ぬ時にダメだったら、施設かなんかにどうにか手続きを取った後に、会いに行って、って一言言って死のうと。思ってるので。そのくらい簡単な気持ちで。なんか、うん、世の中に対して、思春期の頃は不信感がいっぱいあったんですけど、35くらいまではあったかないろんな意味で。でも、なんかそれを過ぎておばさんになったら、ちょっと大丈夫じゃない？って、安心、っていうか。なんか、わかったわけじゃないけど、すべてがわかったわけじゃないけど、周りに良い人が多いので。良い人に恵まれてるので。なんとかなるんじゃないかなって気が。なんとかなるって信じてればなんとかなるよって言って。うん。なんかね。そうですね。
- Cさん 53 (女性・兄)・・・自分の家族とか親戚とか、そういう周りの人のことをどのくらいどういうふうに理解しているのかどうしてもわからないんで…。あんまり見た目に、見た目というか変化は感じはしないんですけど、でも作業所とかの人の入れ替わりとかはちゃんとみているみたいで。まあ家のこともなんかちょっとは感じてるんだと思うんですけど、基本的なスタンスはやっぱり変わらないですね。母親に頼って、母親の言うことはなんでも聞く、って言うのは変わらないです。

また「自分を形作るひとつ」とは、「きょうだいも、ASD 児・者がいることも今の自分の一部を形作っていると感じていること」と定義づけられ、きょう代いは ASD 児・者との関係があくまで自身の一部を形作っていることを意識的・無意識的に感じ取っていることが見出された。不思議なことに、今回の研究協力者のほぼ全ての人が福祉・教育のいずれかの職を選択したり、これまでに障害に関する資格や勉強をしていた。これが意味するものの検討は、研究IVに譲ることになる。

- B さん (女性・弟) 60-1・・・なくてはならないというか、あの、同じ空間には今はいないけれども、やっぱりずっと一緒に心の中にはいつでもあるし、ありますね。彼がいて、いなかった人生って想像できない、寄りかかっているわけではないんですけど、なんかいてくれたから流れて流れてここまで来たのかなっていうのがあって。で、うん、でも自分で全部選んできたんで、何も後悔もないし、果たして自分が結婚したことが弟にとって良かったのかなって、っていうのはちょっとまだありますけど。でも、弟も、寂しくないし、後、あの息子たちが生まれた時に、すごいお兄さんにまた成長したなっていうか。今まではお姉さんと弟だったので、こう二つのものがあるって食べたそうにしてたら、良いよってみんなあげちゃうみたい。周りがあげちゃうから太ってるんじゃないっていうのがあるんですけど。それが、子供が容赦なくて俺の分もとるのかみたいなのがあって、初めて欲張ることを覚えたみたいで、一本、ここに置いてあったら一本食べたら別にぼーっとしてた彼が、息子たちが来ると2個くらい持っているんですよ。凄くない？って言って。そういうことを母親とか主人とかと一緒に面白いねって。で、あとは体力的には衰え始めたのか、お昼寝することが多くて、気がつけば寝てる、とか。お昼寝してるねーとかいうのを見て。彼を見てると、本当に暖かい気持ちになれるので。そう、いてくれてありがとうって感じの人なので。そのなんだろうな、作業所でも、実習に来た方が、すごい図体がすごいでかいんですよ、石塚さんくらい、すごい太ってるんですよ。体いかついで、はじめみんな引くんですよ、怖そうって。で、結構なんか半日一緒にいるとみんなファンになるわよって職員さんも言うてくださって。良かったねって。で、実習に来た方でも弟に会いに来たって言うて来てくださる方がいるよーとか。どこまで本当なの、っていうんですけど。なんか言うてくださるから、良かったねって。彼は彼なりにそういう世界ができてるんだなって。私がいなくてもちゃんと居場所があって、すごいなって。

- D さん 119 (男性・弟)・・・うーん…。…そういうの(家族との関係)を意識したことがあまりないんですよ。意識的にその…うーん…でも例えばその「人だ」とか、「同じような人間だ」とかっていう部分が家族からもらったなっていう。っていう感覚は、が、そこがたぶん一番大きいかな。そのどうだから偉いとか、どうだからスゴイ見たいのは、ないっていう感覚はスゴイ入れられたっていうか、今になって生きてるなって。だからゼロじゃないですけど、この人のこの部分、この人のこの部分、この人のこの部分、この人のこの部分っていうみたいなので出来上がってるなっていう。そのどれだけウェイトが家族があるかは…難しいっすね、自覚ができないっすね。人を受け入れるキャパが広いのとかは、そこは家族だなって思います。その何%くらい、とかは難しいっすね。
- J さん 122 (女性・弟)・・・何かっていうと、あとは何かなんか全然知らずに入ったんですけど大学には。何かその特別支援とかの免許を取る、取れるみたい聞いて、そしたらなんか弟とかもいて、その弟とか何か訓練会とかでもそういう子と関わってきたので、何かそういう経験とかを生かせるような方向に行きたいなと思って。

#### 第四節 研究Ⅲの全体考察

##### 1. 本研究で明らかにしたこと

本研究では、研究Ⅰ・Ⅱでは捉えられていなかったきょうだいと ASD 児・者という二者関係において、きょうだいが体験していることと、その体験を通してどのような心理的発達を辿っているのかを明らかにすること、そして Meltzer, D. & Harris, M. (2013) の家族論を元にどのような家族像が展開するのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、11 名の青年期以降の ASD 児・者へのインタビューを通して得られたきょうだいー ASD 児・者の幼少期から現在にかけての関わり及びその時に感じていた感覚や気持ちについての語りを M-GTA で分析した。

その結果、きょうだい特有の葛藤状態として [“普通”じゃない] という気づきや、そこからいかに脱却を試みているかのプロセスが描き出された。

##### 2. 〈巻き込まれた関係から脱却への試行〉に至るには

本研究で得られた M-GTA の結果図で示された ASD 児・者のきょうだいの体験過程も、



田倉（2008）と大枠は同等のプロセスを辿っていることが示唆された。

きょうだいは、障害のない兄弟姉妹と比べて子ども時代に親的役割行動（家族に何か起きた時に自分が動く、家族のメンバーを励ましたり手助けする、家族の世話をする、親の愚痴や相談事を聞いてあげる）を多くとっており、他者配慮に注力する傾向が指摘されている（清水・板倉, 2021）。この他者配慮に注力する傾向は、過度にならない限りは適応的であると言えるだろう。しかし、きょうだいは時に親が障害児・者の養育に時間と注意を費やしているために、寂しさや不満、孤独、見捨てられ不安を感じる一方で、障害児・者との親の愛情の奪い合いをすることに罪悪感を抱きやすいとも指摘されており（MacHale & Gamble, 1989; Rosenberg, 2000; 宮本, 2007），“相手に合わせる”ことが中心になってしまうリスクがあると考えられる。実際に Woodgate, Ateah & Secco(2008)や Bayat(2007)は、ASD 児・者のきょうだいが抑うつ感情や疲労感、コントロールを失う感覚、喪失感を抱く傾向にあることを指摘したが、この背景に〈巻き込まれた関係〉があり、主体としてのきょうだいが弱くなってしまうと言えるだろう。主体が弱いままだと自己感の発達に支障をきたし、身につけた適応的な行動で幼児期・学童期を過ごす、場合によっては思春期・青年期という生物学的にも心理的にも大きく変化する時期に問題を呈する可能性が推察される。一見すると、[きょうだいだからわかる]や「お目付役として守る」は適応的な行動だが、それが時にきょうだいの心理的な発達の阻害要因になりうる可能性にも注意することが重要であると考えられる。

さらに、本研究で得られた知見は、〈巻き込まれからの脱却への試行〉までの道筋、脱却しようとするきょうだいの心理的な取り組みを示している。きょうだいは、その多くが思春期・青年期にかけて物理的にも心理的にも距離ができていた。これはライフステージの変化に伴う社会・文化的な構造の圧力によってたどる等至点（安田, 2005）であると考えられる。この距離が生まれることや、自我同一性の模索の時期に入ること相まって自身について俯瞰して考える視点が芽生えてくると、ASD 児・者や、ASD 児・者との関係性見え方にも変化が生まれてくる。さらにこの頃になると、きょうだいだけでなく ASD 児・者もその歩みはゆっくりではあるが、発達する。その発達・成長を敏感に察知することで、きょうだいにとっての ASD 児・者は「お目付役として守る」という存在に収まるわけではなく、[正面から向き合えば伝わる] 1 人の個人として [信頼関係] が育まれていく。同時に、ASD 児・者を 1 人の個人として見るということは、自らもまた 1 人の個人として boundary が形成されていくことになる。この boundary の形成こそ、即ち〈巻き込まれから脱却への試行〉というプロセスであると考えられる。

こうしたきょうだいの試みは、研究 I で描き出されたそれぞれの家族像の中でどのように展開しているのだろうか。以下に研究 I で分類した家族像をもとに考察していく。

### 3. Meltzer, D. & Harris, M.の家族論から捉えるきょうだいと ASD 児・者

#### I. 【一体感のある家族】におけるきょうだいと ASD 児・者 概念：4, 6, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 17

この家族像は ASD 児・者と母親のカップル性が生じながらも両親のカップル性も十分に成立している家族像である。きょう代いは幼いながらに ASD 児・者のことを 6.[“普通”じゃない]と感じ取り、親の関心の比重が ASD 児・者へ傾くことから ASD 児・者に対して 4.[寂しさからくる攻撃性]をいさぐ。また 8.[療育施設等への付き添い]や 9.[思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする]体験をしつつ、10.[特性を通じた関わり]が生まれ、17.[思春期・青年期にかけて距離ができる]中でも関わり続けていくと 12.[成長の気づき]や 13.[正面から向き合えば伝わる]といった感覚が芽生え、14.[信頼関係]が生まれてくる。

ここでは、ASD 児・者がいることできょう代いが必然的に体験する抑うつ的苦痛や絶望、迫害不安を否認、あるいは世界に投影することなく、両親のカップル性を持ってコンテインし、愛情を生み出していくことができると考えられる。したがって、葛藤が生じてもマイルドであり、きょう代いは両親の保護的な側面を取り入れることで ASD 児・者の存在を素直に受け入れることが可能になるだろう。

#### II. 【分断している母権的家族】におけるきょうだいと ASD 児・者 概念：1, 3, 5, 8, 9, 16

この家族像は、両親のカップル性が弱く、ASD 児・者と母親のカップル性が強まり、父親的人物が排除されてしまっている家族である。ここでは、母親の関わり方に同一化していくことになるが、3.[一緒にいると恥ずかしい]や 5.[障害がなければ]という思いを無意識的には抱いており、葛藤している状態にある。他方、8.[療育施設等への付き添い]や 9.[思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする]という体験をしつつも 1.[お目付け役として守る]ことに自らの家族内の位置を見出しており、16.[自分を形作るひとつ]であると捉えている。

母権的家族では母性が家族の中心にあり、きょう代いが ASD 児・者との間で感じる葛藤や、コミュニティとの間で ASD 児・者がいるからこそ体験する迫害不安や抑うつ的苦痛をも母性によってコンテインしていくことになる。これにより、一見すると巻き込まれから

の脱却へと歩みを進めているように見えるだろう。しかし、本来母親的人物が家族内機能の全てを保有するのは困難を極める。なぜなら本来は両親がカップル性を生み出すことによって果たされる機能だからである。この【分断している母権的家族】では、父親的人物が排除されてしまっていることがポイントである。すなわち、きょうだいが一見すると巻き込まれから脱却しようと試みているものの、その実、父親の肩代わりとして母親と偽りのカップル性が生み出され、きょうだいが家族内に蔓延る抑うつ的苦痛や迫害不安を引き受ける役割を担うこととなり、結果的に家族の中でASD児・者に対するお世話係を心理的に担い続けることになると思われる。

### III. 【分断している父権的家族】におけるきょうだいとASD児・者 概念：7, 15, 17

この家族像は、【分断されている母権的家族】と同じく両親のカップル性が弱く、ASD児・者と母親のカップル性が強まっているものの、父親的人物が排除されておらず、家族内で父性が生きている家族像である。きょうだいは理不尽に対して7.[しょうがない]と距離を取り、距離があるために15.[きょうだいでも分からない]という感覚を抱く。さらに17.[思春期・青年期にかけて距離ができる]ことも相まって、きょうだいとASD児・者があまり関わらないで進んでいく。

ここでは、きょうだいは母性と偽りのカップル性を生み出すのではなく、父性が家族内で強い力を持っているため、その父性に同一化していくことが可能である。この場合、家族像全体としてみると分断が進み、ASD児・者と母親のカップル性がより過密になってしまう。しかし、きょうだい自身は社会の象徴たる父性に同一化していくため、適応は決して悪くなく、巻き込まれから脱却へと試行することの困難が少ないかもしれない。あるいは、父性の持つ「切り分ける」という特質（Houzel & Rhode, 2005）によって始めからASD児・者との距離が生み出され、〈巻き込まれた関係〉にならずに経過を辿る可能性もあるだろう。いずれにしても、母権的家族と比較すると巻き込まれている程度が薄いと考えられる。

### IV. 【解体している家族】におけるきょうだいとASD児・者 概念：1, 7, 11, 16

この家族像は、父親的人物の排除が加速し、一方でASD児・者と母親のカップル性が過密になりすぎてしまうことで家族内に蔓延する抑うつ的苦痛や絶望感、迫害不安を家族内で抱えることができなくなり、きょうだいがコンテインする役割を担うか、家族が離散してしまうような家族像である。きょうだいはASD児・者との関わりにおいて1.[お目付け

役として守る]ことに終始し、そうした役割を担うことを 7.[しょうだない]と思い、11.[特性に反発しても変わらない]という諦めを抱きつつも、お世話する係を担い続ける。こうした役割は 16.[自分を形作るひとつ]としてきょうだいの在り方に大きな影響を与えていく。

ここでは、きょうだいにとっての同一化対象がおらず、両親のカップル性も失われている。そのため、きょうだい自身が抱える葛藤や抑うつ的苦痛、絶望感だけでなく、母性が抱えきれない、父性が切り分け切れない悪性機能をきょうだい引き受けることでなんとか家族としての形態を保つという、まるで親子の立場が逆転してしまっているかのような関係性となってしまう。これは【分断している母権的家族】でも見られるケア・テイカーの心理に近いものであるが、家族内に広がる混乱の上に成り立っているため限界を迎えやすいと考えられる。

#### V. 【凝集している家族】におけるきょうだいと ASD 児・者 概念：1, 2, 8, 18

この家族像は、ASD 児・者と母親のカップル性だけでなく、ASD 児・者が中心となるからこそ両親のカップル性も過密になっていくことで家族の凝集性が増している。きょうだいと ASD 児・者の距離も近く、2.[きょうだいだから分かる]という感覚を抱き、1.[お目付け役として守る]ことに繋がる。一方、ASD 児・者は両親から表面的で理不尽な自立を要求され、様々な社会的資源を投入されることになる。きょうだいは 8.[療育施設等への付き添い]を体験するが、両親の ASD 児・者への関わりは表面的でもあるため、18.[親亡き後の不安]を強く抱くことになる。

凝集すればするほど家族の良性機能が働く余地が狭まり、抑うつ的苦痛や絶望感、迫害不安が広がることで、真っ当な自立や成長といった希望がかき消されてしまう。そのため、両親は ASD 児・者に対して表面的かつ理不尽な自立を要求するが、それを障害ゆえに達成できない弱者として無意識的に位置づけられ、親元から離れていくことができないと考えられる。こうした家族像においては、きょうだいは両親に同一化することできょうだい自身も ASD 児・者を弱者とみなし、自分よりも力を持っていないと卑下するという形態によって憎しみを向けることで満足し続けるという倒錯的なあり方にも陥るかもしれない。

きょうだいが臨床場面で治療者の目の前に現れた時、初めから〈巻き込まれた関係〉に困っていると自ら述べるとは考えにくい。無意識的には職業選択、あるいは恋愛関係からの結婚への躊躇など影響を与えていると考えられるが、多くは何らかの症状を形成し、その症状を困りごととして述べるだろう。しかし、その症状の背後を考える際にこれらの概

念・視点を持って家族歴や生育歴を見つめ直すことが事態の解決に資する可能性は十分に考えられる。大瀧（2018）はきょうだい研究において「1 人の生を生きる人としての体験や影響について探求することが重要」と述べたが、研究だけでなく臨床においても、探求の試金石として本研究で得られた知見が役立つと思われる。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義は、先行研究で示されていたきょうだいと ASD 児・者の関係性の中できょうだいが体験していることとは異なる視点から、その体験を〈巻き込まれた関係〉〈巻き込まれからの脱却への試行〉として新たに見出した点にある。さらに、研究 II と同様に、Meltzer, D. & Harris, M. (2013)をもとに研究 I で行なった家族類型に則してきょうだいの体験を整理することにより、M-GTA の結果図で得られたプロセスと関連しながらも他の在り方を見出したことが本研究の意義と言える。

本研究における課題は研究 II とも重なるが、とりわけ出生順位についてはより検討が必要であると考えられる。今回のインタビューにおいて出生順位が主たる要素である概念は生成されなかった。しかし、より出生順位に着目してインタビューを行った場合には、その差が見出される可能性も否定できない。したがって、今後は出生別の検討もなされていく必要があるだろう。

また、きょうだいはその人生において両親や ASD 児・者とだけ関わっているわけではない。きょうだいは当然、家族外の人々と社会的相互作用を行いながら発達している。したがって、次にきょうだいが家族外の人々との間で抱く葛藤体験を明らかにするために研究 IV を行った。

## 第六章

### 研究Ⅳ 自閉スペクトラム障害児・者がいることによってきょうだいと社会との関係性において体験する葛藤過程

#### 第一節 問題と目的

本研究では、研究Ⅱ・Ⅲと同様にきょうだいの当事者性に着目しながら、研究Ⅱ・Ⅲでは検討されていなかったASD児・者のきょうだいと社会との関係性に焦点を当てていく。ここでの社会とは、すなわち家族外の他者のことを指し、近いところでは友人やパートナー、同じ学校に通っていた人などを指し、抽象的に捉えれば特定の他者ではなく総体としての社会を指している。人とは相互依存的な存在であり、社会もまた、人の相互作用によって形作られているという視点から、きょうだいと社会との間でどのような葛藤を体験しているのかを明らかにすることを目的とする。

こうした視座に立った先行研究は、驚くほど乏しい。わずかにではあるが社会との関わりにも触れているものとして、笠田（2013）や沖潮（原田）（2016）などが挙げられる。笠田（2013）はきょうだいとライフコースの選択時に親役割ときょうだい役割との間で葛藤しており、その葛藤の解決のためには親や親以外の他者からその葛藤を汲み取ってもらうことが重要であると述べた。また沖潮（原田）（2016）は、葛藤という表現は用いていないが、存在するだけで価値があるという家族的な価値観と、経済的な活動等ができることに意味があるという社会的な価値観の間で揺らぐ姿を描いた。しかし、これらの研究を見てわかる通り、その葛藤の中身については十分に検討されているとは言い難い。またKovshoff, Cebula, Tsai & Hastings（2017）は、きょうだいとその家族全体の関係と、さらにそれを取り巻く社会といった複層的な相互作用という文脈に立ち、その中できょうだいがどのような体験をしているのか、その体験を通してどのような特徴を示すのかを明らかにすることが必要であることを「The Siblings Embedded System Framework」という社会相互作用論の観点から整理して理論的に指摘している。こうした視点に基づいてきょうだいの体験を捉える試みは未だ不十分であると考えられる。きょうだいは家族内の人とだけ関わっているわけではない。きょうだいも各ライフステージで、家族外の他者と関わっている。そして当然、その中でもきょうだい特有の体験が生まれていることから、社会との間で生まれるきょうだい特有の葛藤の存在が推察される。以上のことから、本研究ではASD児・者がいることによってきょうだいと社会との間においてどのような葛藤過程を体験し、どのように向き合っているのかを明らかにすることを目的とする。

## 第二節 方法

### 1. 研究協力者

本研究における研究協力者は、研究Ⅱ・Ⅲと同様である（男性4名、女性7名、平均年齢28.1歳）（Table 4）。研究協力者は地域の訓練会等に参加している家族の母親介して筆者が直接連絡をとり、研究の目的・倫理等を口頭及び書面で説明し、同意が得られた場合のみ対象とした。なお全ての研究協力者から同意を得ることができた。

Table 4 研究Ⅱ～Ⅳ 研究協力者

協力者	年齢	性別	ASD児・者の続柄	ASD児・者の年齢	年齢差	診断名*1	ASD児・者の住居形態
Aさん	28歳	女性	兄	31歳	-3歳	ASD+ID	同居
Bさん	44歳	女性	弟	42歳	+2歳	ASD+ID	別居
Cさん	32歳→37歳	女性	兄	34歳→39歳	-2歳	ASD+ID	別居
Dさん	21歳→26歳	男性	弟	19歳→24歳	+2歳	ASD	同居
Eさん*2	26歳	男性	弟	22歳	-4歳	ASD+ID	同居
Fさん*2	24歳	男性	弟	22歳	-2歳	ASD+ID	別居
Gさん	27歳	女性	姉	29歳	-2歳	ASD+ID	同居
Hさん	23歳	女性	弟	18歳	+5歳	ASD	同居
Iさん	26歳→31歳	女性	妹	21歳→26歳	+5歳	ASD	同居
Jさん	21歳	女性	弟	18歳	+3歳	ASD	同居
Kさん	22歳	男性	兄	24歳	-2歳	ASD	別居

\* 1…ASDは自閉スペクトラム障害、IDは知的障害を指す。

\* 2…EさんとFさんは同一家族である

### 2. 調査時期

2016年6月～9月、2021年9月～10月に実施した。

### 3. 調査場所

筆者が研究協力者に直接連絡をし、研究協力者が安心して話せる空間として研究協力者の指定した場所、あるいは貸会議室や筆者の勤務する相談室、オンライン会議ツール（Zoom）等でインタビューを行った。

### 4. 調査内容と調査手続き及び分析対象データ

調査内容は、Aさん、Bさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさんについては2016年に実施した研究Ⅰで用いたインタビューガイドに沿った内容である。Cさん、Dさん、Iさん、

J さん、K さんについては、研究 I で用いたインタビューガイドに項目を追加したものをインタビューガイドとし、半構造化面接を行なった。インタビュー時には適宜順番を入れ替えながら尋ねた。また語られたエピソードの中でどのようなことを感じていたかを意識的に尋ねた。本研究で使用したインタビュー項目は次の通りである。

#### 現在の親・同胞・周囲の人との関係

1. 現在、障害のある同胞とどのように過ごしているか
2. 母親・父親は自分と同胞にそれぞれどのように関わっているか
3. 同胞・母（父）・自分の 3人でみたときの関係性はどのようなものか
4. 両親の関係性はどのようにみえているか
5. 周囲の親しい人（友人やパートナー）とどのように関わっているか

#### 過去の親・同胞・周囲の人との関係

6. ○○の頃、障害のある同胞とどのように過ごしていたか
7. ○○の頃、母親・父親は自分と同胞はどのように関わっていたか
8. ○○の頃、同胞・母（父）・自分の三人でみたときの関係性はどのようなものだったか
9. ○○の頃、両親の関係性はどのように見えていたか
10. きょうだいへの見方が変わったなと感じることがあるか→もしあれば、いつ頃、どのような変化があったか
11. ○○の頃、周囲の親しい人（友人やパートナー）とどのように関わっていたか

#### その他

12. 自分にとって、障害のある同胞はどのような存在か
13. 今後についてどのように考えているか

※5., 11.は 2021 年度のインタビュー時のみ

半構造化面接は筆者である面接者と一対一で行われ、面接時間は概して 1 時間～2 時間ほどであった。面接中の会話は事前に許可をとり、IC レコーダーで録音をした。また録音した面接内容は全て筆者がプロトコル化した。



Table 11 研究Ⅳ 分析対象データ

	2016年 ASD児・者 -両親	2016年 きょうだい児 -両親	2016年 きょうだい児 -ASD児・者	2016年 きょうだい児 -社会	2021年 ASD児・者 -両親	2021年 きょうだい児 -両親	2021年 きょうだい児 -ASD児・者	2021年 きょうだい児 -社会
Aさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Bさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Cさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Dさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Eさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Fさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Gさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Hさん	○	○	○	△	-	-	-	-
Iさん	○	○	○	△	○	○	○	○
Jさん	-	-	-	-	○	○	○	○
Kさん	-	-	-	-	○	○	○	○

※1 ○…インタビューガイドに挙げられた項目としてインタビューを行い得られたデータを指す。

※2 △…2016年時のインタビューであり、「きょうだい-社会」についてのインタビュー項目はインタビューガイドに挙げられていなかったが、インタビューの流れで自然と語られていた。

研究Ⅳで分析の対象としたのは、主として各研究協力者のきょうだい-社会との関係性における体験についての語りである (Table 11 内編みかけ部分)。なお C さん、D さん、I さんの 3 名は 2021 年時の研究協力依頼に応じていただいた。

インタビュー時間は 1 時間～1 時間半程度で、全て筆者がプロトコル化した。データの扱いの利便性から Microsoft Excel でプロトコル化し、データ量は各研究協力者約 20,000 字程度であった。

なお 2016 年時と 2021 年時のインタビューに応じていただいた研究協力者の語りは、より新しいデータを分析の対象とするため、2021 年時のインタビューによって得られた語りを選択した。なぜなら M-GTA が分析の対象とするデータとは、個人が日常生活を送る中の体験そのままを表現した「ディテール豊富なデータ」(木下, 2003; 2007; 2020) であり、5 年の経過を経ればその分さらなるディテールが盛り込まれると考えられるためである。これらのデータの扱いの背景は、M-GTA を考案した木下 (2003; 2007; 2020) の論考に基づいて第二章の第三節、第四節で述べた通りである。

## 5. 倫理的配慮

研究Ⅰ～Ⅲと同様である。なお研究の計画、実施にあたって白百合女子大学倫理審査委員会の承認を得た (受理番号: 2021008 号)。

## 6. 分析方法

研究Ⅰ～Ⅲと同様に修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ（以下、M-GTA）を用いた。

### 6-1. M-GTA の本研究への適応

本研究は、きょうだいが幼児期から青年期にかけて社会（家族外の他者）との間において体験する葛藤に焦点を当てる。ここでも研究Ⅰ～Ⅲ同様、きょうだいと社会（家族外の他者）という人と人との相互作用を捉え、きょうだいがどのような葛藤過程を体験し、そこへ何がどのように影響を与えているのかを明らかにすることを目的としているため、M-GTA が適していると判断した。

### 6-2. 実際の分析過程

実際の分析過程の大まかな流れは研究Ⅰ～Ⅲと同様に、①研究テーマから分析焦点者と分析テーマを設定、②概念を生成、③新たな概念を生成しつつ各概念間の関連を検討しカテゴリー化、④カテゴリー間の関連を検討、④結果図、ストーリーラインの作成、⑤理論的飽和による分析終了である。以下にその詳細を述べる。

#### 6-2-1. 分析焦点者

本研究における分析焦点者は、研究Ⅰ～Ⅲと同様に「青年期以降の ASD 児・者のきょうだい」であり、限定された範囲内の対象者であることを常に意識する。またこれにより「各調査対象者にとっての意味」を解釈するのではなく、分析焦点者という「一定の属性をもった人間にとっての意味」を解釈していく。したがって、データは「すべての研究協力者のプロトコルで一つのデータ」という立場をとっている。

#### 6-2-2. 分析テーマ

本研究の分析テーマは、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との間で体験する葛藤過程」とした。これらの分析焦点者と分析テーマを念頭に置きながらインタビューデータの分析にあたった。序論で述べたデータに対する視座のもと、分析焦点者と分析テーマとデータを常に照らし合わせながら分析を行い、語りが長く複数の文脈が見られる場合には、本研究において重視した語りの該当部分にアンダーラインを引いて明確にした。

### 6-2-3. 概念の生成

上述の分析テーマと分析焦点者に沿ってデータと接し、関連すると思われる箇所に着目、着目した部分を具体例としてワークシートを立ち上げ、その具体例から他の具体例の説明も可能であるような定義を考え、それをさらに凝縮したものとして概念名を付けた。これを解釈という。概念がひとつ生成されると、それをもとにデータにあたり、類似例が見つければ具体例として追加した。具体例が豊富に出てこない場合は概念不成立と判断した。また解釈の恣意性を回避するため成立した概念の対極例を想定した。データ内に該当する対極例があれば、対極概念として成立するのかを検討し、成立するようであれば別個ワークシートを立ち上げた。概念について検討した内容や採用しなかった定義等については、ワークシート内の理論的メモ欄にその都度記入した。以下に概念生成過程とワークシートの具体例を示す。研究協力者は、○さん（きょうだいの性別・ASD児・者の続柄）で示している。

本研究においても、まずCさんとDさんのインタビューデータを得られた段階でその全てを読み込み、多様な具体例がありそうなひとつのデータとしてDさん②（男性・弟）を選び出した。Dさんを選択した理由はこれまでと同様で、インタビューにおいて内省的な視点を持ちながら自身の体験を具体的に言語化しており、最初の分析データに相応しいと考えたためである。次に、分析焦点者と分析テーマと照らし合わせながら関連のありそうな箇所に着目し、その箇所を具体例として分析ワークシートを立ち上げた。例えば、Dさんは次のように語っていた。

- Dさん（男性・弟）②62・・・特別なことはなくて、同じ空間に一緒にいるみたいな。で、他の友達のお母も気にかけてくれるから、その友達も気にかけてくれる。でうちの母親は隠さない。みんなの前でもダメなことはダメで怒られてる、怒られてるのでかわいそう、他の友達が助ける。でやられっぱなしじゃないんですよ弟も。やられて「ビエ～！嫌い！」みたいな言ったりすんですよ。その時とか。一番怒られてた時は「雲の上飛んでっちゃえ」って言って超キレられた。超キレられてた。「死ねってことか！」みたいな。ってなあって、そういうやりとりを友達が見て、めっちゃ笑ってる、みたいな。で、それが何かこう友達ができたかっていうと、僕との関係を見て、そうすればいいんだ、みたいな。めちゃくちゃちゃっちゃい頃からの友達、2歳くらいからの友達とかは、同じ、ではないけど、優しくした

い対象っていうふうに見てくれて。で、そうするとめちゃくちゃわかるから、好きになるんすよ。なにになになになに、みたいに擦り寄ってくるので、友達も「お？」ってなる子もいるし。でその友達の友達にはこうやって関わるといいんだよっていうのを教えてくれてその子も関わるようになってきたりとか。で、支援級があって、僕が顔見に行ったりしてたんで、友達もついてきて関わったり。で脱走したって聞いたら僕も「探してきます！」とか言って。僕の教室に来るってこともあったんですよ。僕の教室に弟が来て遊んでるとかも多かったですね。僕の小学校の同級生の女の子の服で鼻水拭いちゃったことがあって。「拭かれたんだけど！」って言われて「めちゃくちゃごめん！」みたいな。代わりに謝ったり。でもその親も「あ、全然いいよ！鼻水でもうんちでも拭いて！」みたいな感じの親だったんで大丈夫だった。でそれをきっかけに、そういうときは弟と一緒に行って「ほら謝って」っていうんすよ。で、また関わる、みたいな。

筆者はこの部分を、ASD 児・者が ASD 児・者と一緒にいることできょうだいの友達が起点となってさらに友達の輪が広がっていくと考え、初めに 定義：「きょうだいの友達が起点となって、さらにきょうだいと ASD 児・者の関わりが広がること」とし、概念：「関わりの広がり」と解釈した。しかしその後、他の研究協力者のインタビューデータを読み込むと、例えば次のような語りなどがみられた。

- G さん (女性・姉) 19・・・結構低学年のころは個別級に遊びに行ったりしてて。で個別級の担任の先生とも仲良くしてもらえて、結構可愛がってもらってて。遊びに行ったりしてたんですけど、高学年くらいからは、なんか男子にからかわれたりとかあって、たぶんちょっと嫌だになっていうのは出てきてて。そこらへんくらいからたぶん遊びに行ったりとかしなくなった。

筆者はこれらの具体例から、きょうだいの友達が起点になっているのではなく、きょうだいと ASD 児・者の関係性が起点となってきょうだいの社会との関わりが増えていると考え、定義：ASD 児・者との関係が起点となり、きょうだいと社会の関わりが広がっていくこととし、概念：「関わりの広がり」と再解釈した。さらに他のインタビューデータにも具体例が見られたため、概念成立と判断した。分析ワークシート例は次の通りである (Table 12)。

Table 12 分析ワークシート例④

概念名	関わりの広がり
定義	ASD 児・者との関係が起点となり、きょうだいと社会の関わりが広がっていくこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p><b>B さん (女性・弟) 64・2・・・</b>一番彼に聞けるのが、彼の気持ちがわかるのが良いんですけど、彼の気持ちは永遠にわからないので。そこがね、もどかしいところなので。うん。それがねわかるようなね、機械があれば良いねとか、今コンピューターとかができてるじゃんって。そういうのがわかれば良いのねってよく話したりして。なので、そうですね。ただ、あの自分が彼よりも早く死んじゃった後は心配になるんですけど、なんかどういいうわけか、<u>次男くんが、ある日、実家の母にあのさあ、俺がさあ、大きくなって働けるようになったらさ、この団地に引っ越してきて、おじいちゃんおばあちゃん死んだら俺ここに住んで弟見てあげようかって言ったことがあったんですよ。で、なんか母親が涙ながらにそれを言っていて。なんかね、嬉しくってって言って。あ、何にも言っていないけどそれが育ったんだって。それを聞いた時は嬉しかったですね親として。あ、ちゃんとかうやって繋がっていきけるんだなって。無理なく？まあ生まれつきであったとしてもそうやって言ってくれるなら嬉しかったなって思って。で、運が良いのか悪いのか、男の子を3人産めたので、でもどうしてもやってほしいとも思わないし、もしそういう気持ちがある子が出てきてくれたら嬉しいし。で、それでも死ぬ時にダメだったら、施設かなんかにどうにか手続きを取った後に、会いに行って、って一言言って死のうと。思ってるので。そのくらい簡単な気持ちで。なんか、うん、世の中に対して、思春期の頃は不信任感がいっぱいあったんですけど、35くらいまではあったかないろんな意味で。でも、なんかそれを過ぎておばさんになったら、ちょっと大丈夫じゃない？って、安心、っていうか。なんか、わかったわけじゃないけど、すべてがわかったわけじゃないけど、周りに良い人が多いので。良い人に恵まれてるので。なんとかなるんじゃないかなって気が。なんとかなるって信じてればなんとかなるよって言って。うん。なんかね。そうですね。</u></p> </li> <li> <p><b>D さん (男性・弟) ②62・・・</b>特別なことはなくて、同じ空間と一緒に</p> </li> </ul>

いるみたいな。で、他の友達の親も気にかけてくれるから、その友達も気にかけてくれる。でうちの母親は隠さない。みんなの前でもダメなことはダメで怒られてる、怒られてるのでかわいそう、他の友達が助ける。でやられっぱなしじゃないんですよ弟も。やられて「ビエ～！嫌い！」みたいな言ったりすんですよ。その時とか。一番怒られてた時は「雲の上飛んでっちゃえ」って言って超キレられた。超キレられてた。「死ねってことか！」みたいな。ってなあって、そういうやりとりを友達が見てて、めっちゃ笑ってる、みたいな。で、それが何かこう友達ができたかっていうと、僕との関係を見て、そうすればいいんだ、みたいな。めちゃくちゃちっちゃい頃からの友達、2歳くらいからの友達とかは、同じ、ではないけど、優しくしたい対象っていうふうに見てくれて。で、そうするとめちゃくちゃわかるから、好きになるんすよ。なにになになになに、みたいに擦り寄ってくるので、友達も「お？」ってなる子もいるし。でその友達の友達にはこうやって関わるといいんだよっていうのを教えてくれてその子も関わるようになったりとか。で、支援級があって、僕が顔見に行ったりしてたんで、友達もついてきて関わったり。で脱走したって聞いたら僕も「探してきます！」とか言って。僕の教室に来るってこともあったんですよ。僕の教室に弟が来て遊んでるとかも多かったですね。僕の小学校の同級生の女の子の服で鼻水拭いちゃったことがあって。「拭かれたんだけど！」って言われて「めちゃくちゃごめん！」みたいな。代わりに謝ったり。でもその親も「あ、全然いいよ！鼻水でもうんちでも拭いて！」みたいな感じの親だったんで大丈夫だった。でそれをきっかけに、そういうときは弟と一緒に行って「ほら謝って」っていうんすよ。で、また関わる、みたいな。

- Gさん(女性・姉)19・・・結構低学年のころは個別級に遊びに行ったりしてて。で個別級の担任の先生とも仲良くしてもらえて、結構可愛がってもらってて。遊びに行ったりしてたんですけど、高学年くらいからは、なんか男子にからかわれたりとかあって、たぶんちょっと嫌だなんていうのは出てきてて。そこらへんくらいからたぶん遊びに行ったりとかしなくなった。
- Iさん②16-2(女性・妹)・・・なので自分がいわゆる大多数の家族の構成の中で育ったわけじゃないっていう認識は多かったのと。あとは妹の

なんか今もですけど、普通にこうやって大人の方とお話をするよりも、もう少しどうやったら妹の、彼女の何か少ないボキャブラリーでわかってもらえるかとか、言い方はちょっと彼女仕様に変えるとか、あと何でしょう。その妹がいて妹が今ちょっと状態良くないなみたいな、1日に何回かそういう時間がやってくるんですけど、それがやってきたときになんか今私家でこれしたかったけど妹がこうだから我慢、みたいなふうなのは今も本当にあつて。だから何て言うんでしょう、結構周りの人ありきの自分みたいなふうに、自分の振る舞いを考えることが本当に前からあったのは思いますね。なんか結構そういう私なんですけど、それでもなんか多分それは後天的なというか、家族がこうだったから自分がそういう気質を持ったっていうふうな気持ち、そういう感覚でいるんですけど、多分もしかしたら私はそうじゃなかったら、かなりかなりフリーダムなというか、かなりやりたいことしかやらない。なんか結構わがままなタイプの自分の要素もあるんですね。なので、そこを尊重、大いに尊重して、何か大いにやりたいことばかりをやって大満足みたいな感じの人生もあったかもしれないんですけど。でももしかしたら本来の自分はそうだったのかもしれないなっていうふうに離れて思うんですけど。離れて生活するようになって、なんか妹のことを気にせず生活できてる時に、なんかそこんと結構今出てきてる感じがして。だからそれはその今まで結構気を使って近しい友達でもですし、仕事場の方とかに対しても本当に気を使ってこの人の顔色見て言葉を選ぶみたいな、悪い意味でも。だからあんまり私が今まですごく人に嫌な思いをさせるっていうことは多分、今よりちょっと前までの方があんまなかったと思って。結構いい人みたいな感じで思われることが多かったと思うんですけど、最近本当離れて住んでだいぶ自分のライフスタイルも自分のものとして変わってきて、自分が好きなことを優先的にできるとか自分が心地いい生活が優先的にできてるみたいなことが割とかなり気持ちがよくって。そうすると、自分の交友関係はだいぶ変わってきたんですよね。移転してからはなんですけどはい。今までちょっと我慢して付き合っ、何か我慢して、「ま、いっかこの人根ははいい人だし」とかいうふうに私が頑張って、合わせるようにしてきた友達だったりお付き合いする人とかあったりそういう人はなんかもうどんどん離れていくみたいな。私からも

	<p><u>離れるし、っていうふうなことはこんなにダイナミックに人間関係が変わって、今も本当に変わることが多いんですけど。そういう自分の周りの人の付き合い方とか付き合いの内容が変わってきたことって多分今までの自分の人生がなかったんですね。っていうことが、だいぶ大きな変化なんですけどここ数年間でっていうのがありますね。</u></p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 定義：きょうだいの友達が起点となって、さらにきょうだいと ASD 児・者の関わりが広がること→ASD 児・者との関係が起点となり、きょうだいと社会の関わりが広がっていくこと きょうだいの友達が起点になっているのではなく、きょうだいと ASD 児・者の関係性が起点になり、きょうだいが社会との接点が増えていることが具体例から導き出されたため、定義を変更した。</li> <li>● 対極例：関わりが窄まることはないが、「関わりが広がらない」というところに固着する可能性？</li> </ul>

#### 6-2-4. 概念間の比較, カテゴリー化, 理論的飽和化

上述の手順で新たな概念も生成していき、その都度個々にワークシートを立ち上げた。また、これら概念の生成と同時に個々の概念間の比較検討も行った。概念同士のつながりがある場合にはカテゴリー化し、分析焦点者と分析テーマに沿ってカテゴリー名をつけた。以下にその具体例を示す。

分析を続ける中で、新たな概念として、きょうだいが ASD 児・者のことを社会に理解されていないと感じるとその関係を切り捨てるという [受け止めがなければ切り捨てる] 概念が成立した。先に成立していた [関わりの広がり] との関連を検討すると、きょうだいが社会に相対しているときのきょうだいの反応体験と考えられ、このまとまりを〈きょうだいの反応〉とカテゴリー化した。

そしていくつかのカテゴリーの生成と同時にカテゴリー間の比較も行い、その関係を手書きの略図で描いた。その後も概念の生成とともに概念間の比較、カテゴリー間の比較を継続して行った。

M-GTA において、分析を終了させる判断は、理論的飽和化に至ったか否かによる。理論的飽和化とは、分析を終了させるための一種の装置であり、データにあたってはすでに解釈した内容の具体例の追加しか生じず、新たな概念やカテゴリーが生成されなくなった状態のことを指している。後半のインタビューであった K さんの時点で新たな概念が生成さ



れなくなり、かつ新たなカテゴリーも生成されなくなった。しかし、現実的な調査期間の制約や理論的サンプリングの限界から分析を終了した。最後に結果図を精緻化し、それを簡潔に文章化（ストーリーライン化）した。

### 第三節 結果と考察

M-GTAによる分析の結果、16個の[概念]、6個の〈サブカテゴリー〉、2個の【カテゴリー】が生成され（Table 13）、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する語りの葛藤を通して昇華へと向かうプロセス」が見出された。

Table 13 ASD児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する語りの葛藤を通して昇華へと向かうプロセス 概念リスト

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	【概念】	定義	
わ か つ 本 て 当 ほ は し い	不安ゆえの対処	顔色を見て合わせる	家族内での関係からきょうだい児が周囲の人の顔色を見て合わせる	
		どのように思われるか心配	きょうだい児がASD児・者のことを周囲の人に話そうとする時に理解してくれるかどうか心配すること	
		自分からは語らない	きょうだい児がASD児・者のことを自分から話さずには抵抗感があること	
	社 会 に お け る き よ う だ い の 語 り	語りの葛藤	知られざるを得ない	きょうだい児がASD児・者のことを知られたくなくとも知られざるを得なくなる
			自らASD児・者のことを語る	きょうだい児がASD児・者について周囲の人に対して説明すること
			語りづらいからはぐらかす	きょうだい児がASD児・者のことを周囲の人に語りづらいついてはぐらかすこと
			気を遣われるのを避ける	きょうだい児がASD児・者のことを周囲の他者に話して嫌な空気・気持ちになることを避けること
			絶対に語りたくないわけではない	きょうだい児がASD児・者のことを周囲の人に絶対に語りたくない、というわけではないこと
		社会の反応による体験	ASD児・者に関わってくれて感謝する	きょうだいの周囲の人がASD児・者に関わってくれて感謝すること
			自分がどう思われるかには関係ない	きょうだいがASD児・者のことを周囲の人に話しても、自分がどう思われるのかにはさほど影響を及ぼさないと気づくこと
受け止めてくれる			きょうだいが周囲の人に受け止められていると感じること	
嫌な思いをする			きょうだいがASD児・者をめぐって周囲の人との間で嫌な思いをすること	
社 会 と の 向 き 合 い 方			関係性の選択	関わりの広がり
	受け止めがなければ切り捨てる	きょうだいがASD児・者のことを社会に受け止められていないと感じたら切り捨てること		
	きょうだいの昇華・還元	多様性の理解	きょうだいが社会には多様な人がいることをASD児・者との体験を通して理解すること	
		経験を活かす	きょうだいがASD児・者がいるからこそその経験を通してそれを活かそうと動くこと	

以下に結果図 (Figure 5) を示し、ストーリーラインを述べる。

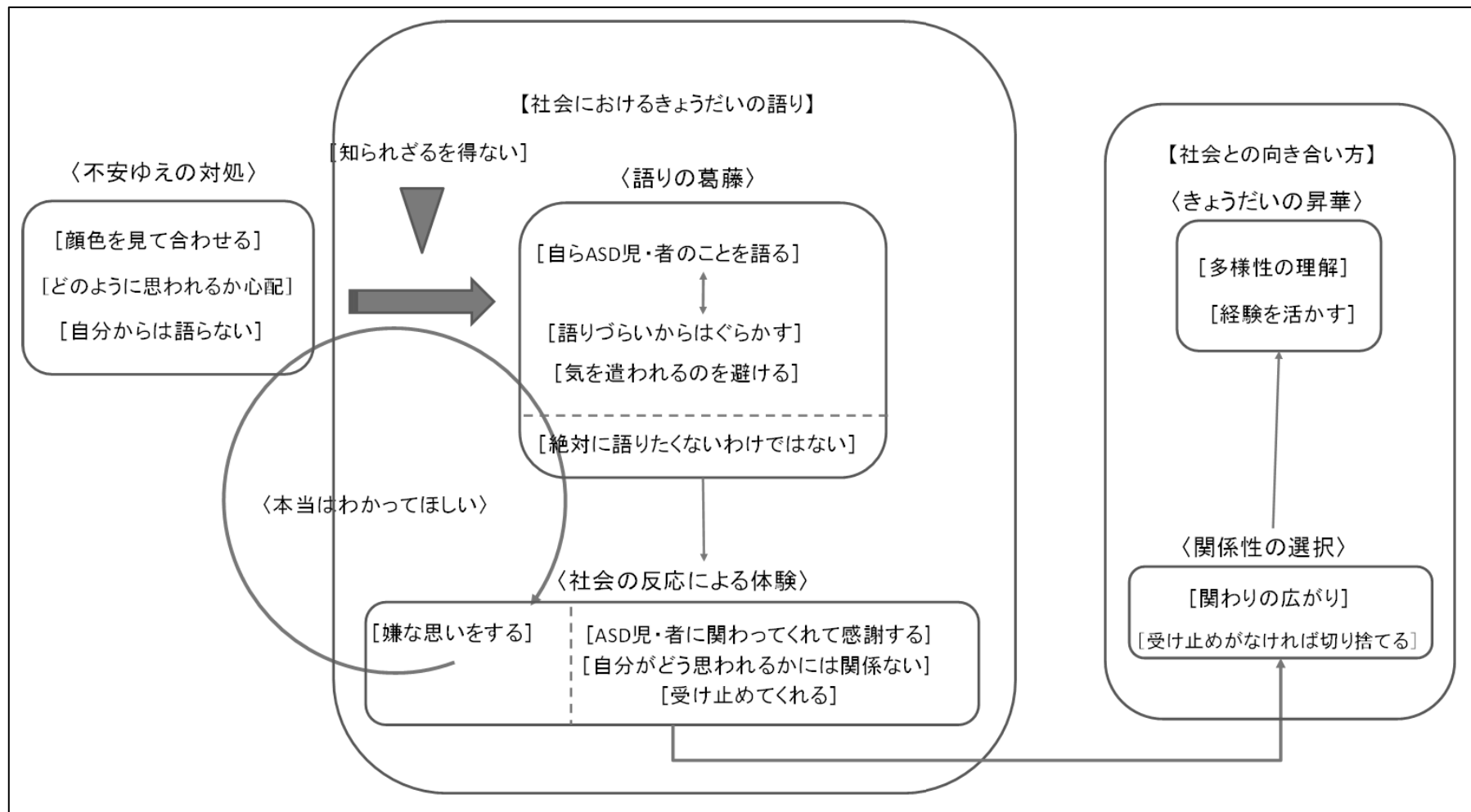


Figure 5 ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する語りの葛藤を通して昇華へと向かうプロセス

### 3-1. ストーリーライン

ASD 児・者のきょうだいは、母親や ASD 児・者への気遣いから、社会と付き合う際に「顔色を見て合わせる」という関わり方や、家族内の ASD 児・者のことを「自分からは語らない」という〈不安ゆえの対処〉が身につきやすい。しかし、主に学校場面において、「話さざるを得ない」状況に出くわす。それは同じ学校であれば「〇〇のきょうだいってさ」と指摘されることもあれば、友達を家に招いた時にどのようにするかなどである。こうした状況においてきょうだいは、「自ら ASD 児・者のことを語る」と「語りづらいからはぐらかす」を、人を見て使い分ける。

「語りづらいからはぐらかす」の背後には「気を遣われるのを避ける」意味合いも含まれているが、必ずしも ASD 児・者の存在を否認するのではなく、奥底には「絶対に語りたくないというわけではない」という気持ちも見え隠れしており、こうした〈語りの葛藤〉と呼べるきょうだい特有の葛藤が見られる。こうした状況や語りから生じる〈社会の反応による体験〉には「嫌な思いをする」こともあれば、「ASD 児・者に関わってくれて感謝する」こともあり、きょうだいの捉え方として「自分がどう思われるのかには関係ない」が生まれたり、「受け止めてくれる」という安心感が見られる。これらの流れは【社会におけるきょうだいの語り】とまとめられ、きょうだいがいかにして語るのか／語らないのかがポイントになっている。〈社会の反応による体験〉に呼応するように〈きょうだいの反応〉として、「関わりが広がる」や「受け止めがなければ切り捨てる」が生じる。ここにも周囲との関係性が広がる・広がらないというスペクトラムが見て取れる。

こうしてさまざまな人に触れることにより、ASD という障害があっても人は人であるという「多様性の理解」や自分の受けた感謝をさらに還元していかうとする「経験を活かす」という〈きょうだいの昇華〉へと向かっていく。一方、「嫌な思いをする」が大きいと、〈不安ゆえの対処〉がさらに強度を増し、〈語りのスペクトラム〉にも固着してしまうことになり、【本当はわかってほしい】という思いに光が当たりにくくなる。また「嫌な思いをする」が大きかったとしても、〈関係性の選択〉は生じており、関わる人を選んでいく。そして社会には ASD 児・者やその家族である自分のことを理解してくれない人もいるという「多様性の理解」や、【本当はわかってほしい】という思いを抱えながらも、これ以上嫌な思いをしないための昇華として「経験を活かす」という〈きょうだいの昇華〉へと向かっていく。これらを代表的な 2 経路として〈関係性の選択〉と〈きょうだいの昇華〉が【社会との向き合い方】としてまとめられる。

次に、各カテゴリーや概念を、具体例を交えながら提示する。具体例は「○○さん（きょうだいの性別・ASD 児・者の続柄）」で記載し、その概念の定義を特に示していると考えられるものを抜き出した。

### 3-2. 各カテゴリーや概念について

#### 3-2-3. 〈不安ゆえの対処〉

〈不安ゆえの対処〉は「顔色を見て合わせる」, 「どのように思われるか心配」, 「自分からは語らない」から生成された。

「顔色を見て合わせる」とは、「家族内での関係からきょうだいが周囲の人の顔色を見て合わせること」と定義づけられきょうだいが家族内の関係から周囲の人の顔色を見て行動しやすいことが見出された。

- I さん (女性・妹) ②16・2・・・なので自分がいわゆる大多数の家族の構成の中で育ったわけじゃないっていう認識は多かったのと。あとは妹のなんか今もですけど、普通にこうやって大人の方とお話をするよりも、もう少しどうやったら妹の、彼女の何か少ないポキャブラリーでわかってもらえるかとか、言い方はちょっと彼女仕様に変えるとか、あと何でしょう。その妹がいて妹が今ちょっと状態良くないなみたいな、1日に何回かそういう時間がやってくるんですけど、それがやってきたときになんか今私家でこれしたかったけど妹がこうだから我慢、みたいなふうなのは今も本当にあって。だから何て言うんでしょう、結構周りの人ありきの自分みたいなふうに、自分の振る舞いを考えることが本当に前からあったのは思いますね。なんか結構そういう私なんですけど、それでもなんか多分それは後天的なというか、家族がこうだったから自分がそういう気質を持ったっていうふうな気持ち、そういう感覚でいるんですけど。多分もしかしたら私はそうじゃなかったら、かなりかなりフリーダムなというか、かなりやりたいことしかやんない。なんか結構わがままなタイプの自分の要素もあるんですね。なので、そこを尊重、大いに尊重して、何か大いにやりたいことばかりをやって大満足みたいな感じの人生もあったかもしれないんですけど。でももしかしたら本来の自分はそうだったのかもしれないっていうふうに離れて思うんですけど。離れて生活するようになって、なんか妹のことを気にせず生活できてる時に、なんかそこんと結構今出てきてる感じがして。だからそれはその今まで結構気を使って近しい友達でもですし、職場の方

とかに対しても本当に気使ってこの人の顔色見て言葉を選ぶみたいな、悪い意味でも。だからあんまり私が今まですごく人に嫌な思いをさせるっていうことは多分、今よりちょっと前までの方があんまなかったと思って。結構いい人みたいな感じで思われることが多かったと思うんですけど、最近本当離れて住んでだいぶ自分のライフスタイルも自分のものとして変わってきて、自分が好きなことを優先的にできるとか自分が心地いい生活が優先的にできてるみたいなことが割とかなり気持ちがよくって。そうすると、自分の交友関係はだいぶ変わってきたんですね。移転してからなんですけどはい。今までちょっと我慢して付き合っ、何か我慢して、「ま、いっかこの人根ははいい人だし」とかいうふうに私が頑張っと思って、合わせるようにしてきた友達だったりお付き合いする人とかあったりそういう人はなんかもうどんどん離れていくみたいな。私からも離れるし、っていうふうなことはこんなにダイナミックに人間関係が変わって、今も本当に変わることが多いんですけど。そういう自分の周りの人の付き合い方とか付き合いの内容が変わってきたことって多分今までの自分の人生がなかったんですね。っていうことが、だいぶ大きな変化なんですけどこのこの数年間でっていうのがありますね。

- Kさん（男性・兄）79・・・意図した事はあんまり別にはないんですけど、多分潜在的に思ってることはあるかもしれないですね。やっぱり面倒くさいことが嫌いだったのでちっちゃい頃から。そうですね、やっぱり何か言い返せば10帰ってきて。帰ってきて結局終わらない。だったらもう素直にはいはい聞いてれば、一番早く終わるっていう考えにはなったりもしたかもしれないです。

【どのように思われるか心配】は、「きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人に話そうとする時に理解してくれるかどうか心配すること」と定義づけられ、きょうだいは ASD 児・者が身内にいることで社会からどのような目で見られるのかを気にしてしまう傾向にあることが見出された。

- Bさん（女性・弟）41-1・・・中学校の時でもう一つ引っかかり始めたのが、昔は今みたいにあの、うちでは〇〇級って言うんですけど、特別支援学級っていうのが、各学校にあたわけじゃなかったの。小学校の時に弟が一度、私弟と一緒に学校通いたかったんですよ。でも別の学校じゃないとしょうがないじゃないですか。本当に羨ましくて。で、一時期、同じ学校ではなくて、ちょっと離れたところの市内の学校にその支援級があつて。母親と通ってたことがあったんですね弟が。もしかしてって思ったんですけど、でも合わなかったみたいで結局やめてしまつて。で、中学に入ったら支援級が自分の中学校にあつて、そこに1人の男の子が来てた

んですけど、彼があんな嫌なことがあると周りに唾を吐いてしまうタイプの子で。そうすると嫌がられちゃうじゃないですか。みんなわーとか言って逃げちゃうんですよ。大丈夫なのに、って思いながら見て。唾吐いちゃダメじゃんとか言うんだけどそうすると唾を吐かれて。で、そういうのが当たり前だと思ってたのが、周りは当たり前じゃないから、白い目で見られるっていうのを初めてこう、初めてじゃないけれども、あ、やっぱり世間ってこんなもんなんだなっていうのを勉強して。そこから人の目を気にするようになったのかなって思いますね。こう世間が思っているのと自分が思っている思いは、こう合っていないんだなっていうのを知ることになって。でも一生懸命お友達とかに説明するとわかってくれる人も中にはいるっていうのもわかっていたから、じゃあ諦めないで周りから攻めれば良いのかって。うん。そうねえ。そこが中学生の時。

- Cさん（女性・兄）②72・・・一般人、兄のことを知らない人に話す時って彼らの元々の障害者に対する印象っていうのが決まってるんですよ、「電車の中で奇声をあげる」みたいな。なんかそういう固定観念、イメージがあって、そういうのをイメージされているところに自分の兄のことを話そうとすると、どう言ったらわかってくれるのかなって話し方がやっぱりわかんないですね。

「自分からは語らない」は「きょうだいがASD児・者のことを自分から話すことには抵抗があること」と定義づけられ、きょうだいがASD児・者のことを素直には語りにくい場合があることが見出された。

- Jさん（女性・弟）98・・・自分が中学のときは、私中学の友達が多分ほぼ中学から一緒になった友達って弟のこと知らないんですけど。家とかに遊びに来てた子は知ってるんですけどほぼ多分知られてなくて。まあ特に自分から話すこともなかったの。
- Kさん（男性・兄）69・・・そうですね、突っ込まれた場合は自分の友達もそこまで、あまり自分はそういう偏見をしそうな人とは別に付き合ってたので…。まあ突っ込まれたら多分言ってたかもしないんですけど、そこまで突っ込まれることが今まであんまり高校とかでは高校、大学となかったんで。大学でも兄弟いるか聞かれた時も兄が1人いるって言って。大学行ってんの？と聞かれるんですけど、高校卒業して働いてるよっていう感じ。ぐらいいし言わないんで。

以上の概念からは、きょうだいが社会と接する際にASD児・者がいることで自身にどのような印象を持たれるのかを不安に思っていると考えられたため、〈不安による対処〉と

してカテゴリー化した。

きょうだいたちが社会との間で感じる不安とは、抱いていておかしくないものであると考えられる。意識的には感じていなくても無意識的な不安として存在する可能性は否定できない。ただし、そうした不安を抱えているからといって、必ずしも不適応に陥るとは限らない。それは次のカテゴリーにおいて示される。

### 3-2-4. 【社会におけるきょうだいの語り】

【社会におけるきょうだいの語り】には [知られざるを得ない]、〈語りの葛藤〉、〈社会の反応による体験〉、【本当はわかってほしい】が含まれている。

[知られざるを得ない] は、「きょうだい ASD 児・者のことを知られたくなくても知られざるを得なくなる」と定義づけられ、きょうだいのライフステージが幼児期・学童期に進んでいく中で、学校中に ASD 児・者のことが知れ渡ってしまったり、家に友人を招くことで身内に ASD 児・者がいることを知られたくなくても知られてしまう場合があることが見出された。

- E さん (男性・弟) 41・・・まあそれほど良い、その周りの子がすごい影響を持ってる学校なんで、それこそ、特別級の子でも弟のことを知らないっていう子はいない。だから学校の中で俺の弟って言ったらもう弟。で、弟のお兄ちゃんって言ったら俺。っていう、全校で多分知らない子いないんじゃないかな。
- J さん 74 (女性・弟)・・・仲良い子は普通に家とかにも呼んだりするので、それで、それがきっかけで話したりとかもするし。あと、なんかこの子なら大丈夫だろうなって信頼もなんとなくあったので。

〈語りの葛藤〉は [自ら ASD 児・者のことを語る]、[語りづらいからはぐらかす]、[気を遣われるのを避ける]、[絶対に語りたくないわけではない] という概念から生成された。

[自ら ASD 児・者のことを語る] とは、「きょうだい ASD 児・者について周囲の人に対して説明すること」と定義づけられ、きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人にどういう人なのかを説明する場合があることが見出された。

先に述べたように、きょうだい ASD 児・者がいることを不安に思っているも自ら語るができる場合もある。この背景には、家族の中で ASD 児・者の大変さが偏ることなく、また大変さを誰も否認することなく全体で共有されているかどうかの違いを生ん



でいると考えられた。否認とは防衛機制のひとつであり、不快なことをそもそも無かったことにしてしまうことで自我が苦しみから生き延びようとする機制である。特に原始的なものである場合には魔術的な要素を含んでおり、「見て見ぬ振り」ではなく、「そもそもない」ということにしてしまうことを指している。つまり、家族の中で特定の家族成員における否認が強い場合には、その躰寄せが他の家族成員に向かってしまう可能性がある。さらに、こうした否認の文化が強い家族にとって、ASD という障害はタブーとして処理されてしまうため、きょうだいも社会と接するときに触れ難いものとなってしまおうと考えられる。〈自ら ASD 児・者のことを語る〉は、一見すると単純な自己開示のようにも見えるが、心理的にはこうした家族の文化からの影響も受けるきょうだいの行動である推察される。

- F さん (男性・弟) 63, 64・・・同級生とか。例えば僕が中学の頃とかも、別に弟だよって言ったら僕がいないところでも、あ、F の弟じゃんって挨拶してくれるし、そういう感じだから、僕もうちの弟が障害を持っていることを苦慮したりしないです。割とこうサラッとさえちゃう。〈サラッとですか〉聞かれたらスツと話せますし、今で言うと、聞かれなくてもスツと話しちゃいますね。
- G さん (女性・姉) 54・・・私はお付き合いしてる頃から、姉のこととか家族のこと話してたので、結構会ったりとかもしてたので、割と理解とかも、どこまで理解してるかもわからないですけど。正直その家族じゃないとわからないことと違って、大変さとかもあるとは思いますが。結婚する人は姉に対しての理解がないと結婚は無理だなあと私は思ったので。もうそこは理解はしてもらえてるかなっていうのはありますね。

〔語りづらいからはぐらかす〕は「きょうだいが ASD 児・者のことを周囲の人に語りづらいと感じてはぐらかすこと」と定義づけられ、きょうだいが ASD 児・者のことを簡単には口にせず、話す相手を選んでいることが見出された。

ここには、きょうだいの「恥の感覚」が見て取れる。ここでの「恥」とは、自分が悪く思われているや、間違っていると思われているという感覚のことを指しており、羨望とも結びつく概念である。Klein, M (1957) は羨望を対象の良い部分に向けた破壊的な攻撃のことを指している。具体的には、相手が自分よりも優れていると感じた際に、その相手の悪いところ・できていないところを目ざとく見つけて徹底的に攻撃していくことなどが考えられる。しかし、本研究の研究協力者からは、そのような激しい攻撃性は語られなかった。これは本研究の研究協力者ゆえなのか、はたまたきょうだいだからなのかは精査する必要があるだろう。ただし、少なくとも本研究の研究協力者から導き出された「ASD 児・

者のきょうだい」は、そうした恥の感覚があっても他者を攻撃することなく、むしろその攻撃性を外に出すことなく抱え込んでいるようにも思われる。その理由には、「ASD」という厳然とした現実としての「障害」があるからであり、他者の良いものを破壊しても現実には変わらないことを体験的に知ってるからではないだろうか。しかし、こうした攻撃性は完全に無意識下に収めておくことは誰にでも不可能である。それゆえ無意識から漏れ出て外界へ投影され、「どのように思われるのか」と被害的な不安を生み出してしまっていると推察される。

- Cさん(女性・兄) ②87・・・大学ではもう家に友達が来ることもないので、兄のことは周りにはほとんど言ってないですね。兄のことはほとんどはぐらかす。なんとなく嘘は言わないけど、そこまでは話を濁す、みたいな。
- Eさん(男性・弟) 78・・・ありますよやっぱり。あの一特にやっぱり大学生とか高校生くらい。まあそれくらいになってくるとやっぱりそういうのがよりあったり、周り気にするようになりましてからね。ただ、だから気にしたからどうすんかって話でもないんですけど、例えばこいつには話さない方が良いなっていうのは結構ありますよ。

[気を遣われるのを避ける]とは「きょうだいが ASD 児・者のことを周囲の他者に話して嫌な空気・気持ちになることを避けること」と定義され、きょうだいが ASD 児・者のことを周囲に話すとき気を遣われてしまうかもしれないと考え、その際に抱く嫌な気持ちを回避しようとする様子が見出された。

これは「語りづらいからはぐらかす」の「語りづらい」理由のひとつであると考えられる。きょうだいは ASD 児・者の存在を知られざるを得なくなると、そこで社会の反応を体験する。ここでどのような体験をするのかは、きょうだいが ASD 児・者のことを語る場面において葛藤を抱くか否かに影響を与えるものであると推察される。「微妙な空気になる」という C さんの語りのように、友人たちからのいたたまれない視線に「自分の家なのに」居心地の悪さを感じることの辛さがきょうだいに生じる可能性があることには注意が必要だろう。

- Cさん(女性・兄) ②88・・・なんか…あんまり知られるのもめんどくさいっていうのがあって。向こうもそんな突っ込んでほくないと思うんですけど、会話が続いたらめんどくさいなっていうか。あんまりなんか知られたくない、嫌だから知られたくないんじゃないじゃなくて、その後の話してる人たちの空気が微妙になるのが嫌で話したくない、っていうんですね。

- Jさん(女性・弟) 99・・・特に話す必要もないかなって思ったんですけど。なんかそれで変に気を使われても嫌だしなっていうのもあって。

「絶対に語りたくないわけではない」とは「きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人に絶対に語りたくない、というわけではないこと」と定義され、自ら語らない、語りづら  
いからはぐらかすとしても、必ずしも絶対に語りたくないとい意固地になっているわけでは  
ないことが見出された。

語ることをはぐらかしたり、その背後にある気を遣われるのを避けるが生じる可能性が  
あるということは、「気を遣われない」場合にはきょうだいが何を思っているのかを考え  
る必要がある。ここで生成された概念が「絶対に語りたくないわけではない」である。つ  
まり、きょうだいが心のどこかで ASD 児・者が家族にいることの大変さであったり、  
ASD 児・者がいるからこそその自分であることを受け止めてほしいという欲求があることが  
推察される。こうした欲求自体はきょうだいに限らず誰でも持ちうるもので、依存愛情欲  
求と言えるだろう。こうした欲求を持ちながらも、ASD 児・者がいることによってそれを  
素直に出せない、つまりきょうだいが語りたけれど語れない、という葛藤に陥る場合があ  
ることを示唆している。

- Cさん(女性・弟) ②115・・・元々話すの好きではないし人の話を聞ければいい  
なと思っていったんですけど。なんかいざ何かワークとかしてみたらうん。自分の  
ビックリするくらい結構いろんな過去のこととか、思ってることとか、何かスラス  
ラ出てきて。なんか話したくないわけではなかったんだなっていうふうに思って。  
つかえながらも何か自分の言いたいことをすごく言えたなっていう感じがしてま  
した会の時に。
- Gさん(女性・姉) 62・・・あんまり話題にならないので。自分から話題にもしな  
いですし。友達には話さないかも。姉のことは聞かれば答えますけど、自分から  
話をしたりとかはないです。結構今後関わりが深そうな人には話したりとかします  
けど。そうじゃない人はスルーしちゃいますね。

これらの概念から、きょうだいには ASD 児・者のことを社会に対して開示していく際  
に、「語り」という水準で葛藤を抱えていることが推察された。また、一見すると語ろう  
としないきょうだいであっても、何がなんでも ASD 児・者をいるのにいないことにする否  
認をしておきたいと思っているわけではないと考えられた。以上のことから、これらの概  
念を〈語りの葛藤〉としてカテゴリー化した。

次に、〈社会の反応による体験〉は、[ASD 児・者に関わってくれて感謝する]、[自分がどう思われるかには関係ない]、[受け止めてくれる] という概念から生成された。

[ASD 児・者に関わってくれて感謝する] とは「きょうだいの周囲の人が ASD 児・者に関わってくれて感謝すること」と定義づけられ、ASD 児・者に周囲の人が暖かく関わってくれることに対して、きょうだいが感謝していることが見出された。

社会との接点における幸福のひとつである。このような環境に身を置くことができるのであれば、きょうだいが抱える葛藤や ASD 児・者、そして両親への思いに肯定的な影響を与えることは想像に難くない。

- B さん (女性・弟) 37・・・しょうがないかなって。でも、うん、それで、なんか考えたんでしょね。団地に住んでたんで、友達を団地の公園に呼んじゃって。そうすると一緒に遊べるじゃないですか、で遊んで。で、ただ、あの友達で弟が嫌だっていう子いるかなって前もって言って。いや実はねって。ってみんな良いよーって。もうそこも困らなかったですよ。
- D さん (男性・弟) ②100・・・ようは、弟が楽しく学校生活を送れた、それがなんかありがたかったなあ。でもそれ、弟じゃなく、それは支援級で「支援級の子」として見てもらった、から優しくしてもらった。でも学校の中には支援級じゃなくても支援が必要な生徒って、まあその緘黙の子だったりもあると思うんですけど、たくさんいて。その子たちが楽しかったって思える学校生活に、を、作りたいな見たいのが最初でした。

[自分がどう思われるかには関係ない] とは、「きょうだいが ASD 児・者のことを周囲の人に語っても、自分がどう思われるのかにはさほど影響を及ぼさないと気づくこと」と定義づけられ、きょうだいが例え身内に ASD 児・者がいることを周囲に語っても、きょうだい自身がどう思われるのかには影響がないことを体験的に知ることが見出された。

つまり、「恥の感覚」に変化が生じていることを指している。先に述べた [絶対に語りたくないわけではない] が意味する依存愛情欲求が一定程度満たされることにより、例え ASD 児・者が家族にいることを社会に知られたとしても、きょうだい自身としては何が変わるわけではないということを知ることである。こうした「知ること」により、障害の社会的な評価と自身の評価を分けて考える心理的な境界線が引かれることになり、きょうだいがより自分らしく振る舞えていくことにつながると考えられる。

- *Jさん (女性・弟) 100・・・*なんかそれまでの経験から何か別にその自閉症とか、カミングアウトしてもべつにそんなその人間関係とかであれはないよなっていうことには気づいて。でもだからといって、何かやっぱりやっぱ「普通の子とは違う」という感じには思われるじゃないですか。なんかそこまで偏見とかなかったとしても。何かそれで気を使われたりするの嫌だなと思ったので、うん何か聞かれない限りは答えなくてもいいかなみたいな気持ちでありました。
- *Kさん (男性・兄) 84・・・*そうですね、中学のときの経験であんまり人から言われることないな、ないっていうのがあって。まあ別に兄のことを知ってても、別にそれについて何か言われたりとかもなかったんで。そっから別に言われることがないっていう安心感が出たんですかね。そこから気にしなくなって。

[受け止めてくれる]とは「きょうだいが周囲の人に受け止められていると感じること」と定義づけられ、きょうだいASD児・者のことを知られた時に、周囲の人にその大変さを受け止めてくれたと感じ、安心感に繋がることが見出された。

この概念も依存愛情欲求を満たしうるきょうだいの体験である。Tomeny & Barry, Fair (2017)は、きょうだいの心理的なストレスの低減やきょうだい-ASD児・者関係の改善にはソーシャルサポートが重要であることを指摘している。本研究においても、家族外の人である社会にどれだけ受け止められているのかがきょうだいの関心事になっていることが示唆された。受け止めてもらう関係は、しばしば母子関係においても重要なものと指摘される。もっとも前言語的で無意識的な水準で言えば乳幼児とその母親の間で、乳幼児が抱く言葉にならない不快な感覚や強烈な不安を母親が察知して受け止め、乳幼児が理解可能な形で返してあげることによって乳幼児が安心するというコンテインド/コンテイナーモデル(1962a)が代表的である。これは乳幼児と母親に限らず、精神分析的な心理療法の治療者-患者間における治療機序としても作用するものであるが、日々の日常の中でも常に起こりうるものであり、きょうだい社会に抱えられることにも大きな意味があると考えられる。

- *Bさん (女性・弟) 34-2・・・*で、1年生の頃は本当に泣き虫で、男の子によくランドセルとか蹴られてたから、いやこのままじゃいけないって言い返して。何かエイってやったら、あくる日から何もやられなくなって。あいつこええぞ、みたいな感じになってくれたので。そうですね。そういう関係でも楽で。なので、あとは良かったことになるのかな。やっぱ弟ができないんだったら、自分をもっと頑張らなきゃって思って。本当にもうこの歳になると、あああの時あんなに頑張らなくて良

かったのにね、って振り返ると思ったり、するんですけど。うん。なんかね、この歳になって、改めちっちゃい時の自分に会ったら、頑張ってるねって声をかけてあげられるのになって。でも周りもそれを認めてくれている人が何人かいたの。で、一番、一番？うーんとね、小学校の3、4、5と担任を持ってくれた先生と未だに手紙のやり取りをしているんですけど、その先生がとても気にかけてくれていて。で、そうですね、思春期の時とかにもすごい相談相手になってくれた気がするんですよ。そういう方達にも恵まれたっていうか、うん。本当になんか困ってないんですよ、自分自身が。だで、悪いことっていうか、小学校の高学年になって、だんだん分かってきますよね、こう自分のきょうだいは違うって。で、ちょうど、近所にも同じ年で、そのこのごきょうだいやっぱり肢体不自由、の方だったのかな。で、知的にもあって。で、うちの弟は肢体不自由がないので、あの逆に言うと恥ずかしがり屋さんねっていうか、周りの人が気づいてくれないところがあって。でもあの奇声を発してしまうので、ちょっとそういうのがあると、え?!っていう感じで。恥ずかしいなっていうのがまずあったかな。で、ちょっと高学年から中学生くらいは一緒に電車に乗るのを、親の前だから平気なふりをしているけど、やっぱりちょっと離れ…られるものならちょっと距離おいちゃおうかなっていう心と戦ってました。あの、恥ずかしくってっていう。でもその恥ずかしいって思う自分も嫌なんですよ。そこで葛藤してた感じです。

- Dさん(男性・弟)63②・・・幼稚園も一緒だったんですよ。だからずっと知ってくれる友達がいる、っていう強さ。あとは浅はかですけど、その時のこと考えると、学校っていろんな子がいる中で、わちゃわちゃするグループと静かにするグループがあって、僕はもうお調子者なのでわちゃわちゃしてる方で中心にいたいっていう小学校中学校生活…幼稚園から。なので僕の仲間は、自然とそういう奴なんですよ。そいつらが味方していると、嫌なことをする奴がいないんですよ。で、なんかしたやつに対して僕がめちゃくちゃキレるから、でそれもなんだろうな…うーん…別に俺がお前に嫌われたところで、俺の学校生活何も変わらないって思って言うので、向こうが引くんですよ。「ごめん」みたいな感じになるし。だから周りがよかった。僕の友達が理解してくれたから、いやすかった。で弟がいることで僕に不利が生じてないっていうところも。お前の弟こうなんだろう、みたいな感じでなったら…もしかしたら僕も感覚が違ってたかもしれないんですけど。そんなふうに言ってくる友達はいなかったです。

〈嫌な思いをする〉とは「きょうだいがASD児・者をめぐって周囲の人との間で嫌な思

いをする」と定義づけられ、きょうだいがあることによって揶揄われたりすることを体験して嫌な思いをすることが見出された。

きょうだいにとっての不幸である。しかし、こうした不幸はきょうだいに限らず子どもたちの日々の生活の中でありふれているものであることも事実である。ただきょうだいゆえの点として指摘できるのは、自分自身に障害があるわけではないこと、きょうだい自身が自分の兄弟姉妹に障害があることなど望んでいないのにも関わらずこのような思いをする羽目になってしまう点である。こうした体験の衝撃が大きかったり頻度が多い場合には、きょう代いはASD児・者のことを「いるのにいない」という否認することにつながってしまおうと考えられる。

- Gさん(女性・姉) 19・・・結構低学年のころは個別級に遊びに行ったりしてて。で個別級の担任の先生とも仲良くしてもらえて、結構可愛がってもらってて。遊びに行ったりしてたんですけど、高学年くらいからは、なんか男子にからかわれたりとかあって、たぶんちょっと嫌だになっていうのは出てきてて。そこらへんくらいからたぶん遊びに行ったりとかしなくなった。
- Kさん(男性・兄) 46・・・あとはちょっとそうですね具体的な年代がちょっと小学生のときだったか…あ、でも小学生のときですね。それは小学生のときなんですけど。自分と同級生がいて、その同級生と仲良かったのでよく遊んだりもしてたんですけど、その自分が2個上に兄がいて、その2個上にその同級生のお姉ちゃんもいたんですけど。お姉ちゃんは特に障害があるとかそういうわけじゃないんですよ。その時自分の兄と同級生の姉が、ちょっと揉めたみたいで。それについて何か一旦同級生の方から、自分の方にちょっといろいろ言われてしまって。自分もその同級生とちょっと、一旦そのことが原因でちょっと揉めてってということがありましたね。そこで母がやっぱり上の子たちの喧嘩を下の子たちまでしわ寄せするのは違うだろうって話をちょっとしてくれたみたいなんですよ。

以上の概念から、[知られざるを得ない] 状況から〈語りの葛藤〉を通してきょう代いがASD児・者がいる自分として社会に接した際の反応として〈社会からの反応による体験〉とカテゴリー化した。

### 3-2-5. 【本当はわかってほしい】

【本当はわかってほしい】は、既述した概念である[絶対に語りたくないわけではない]、[嫌な思いをする]、〈不安ゆえの対処〉から生成された。〈語りの葛藤〉において、

「自分からは語らない」きょうだいできえ、その裏には「絶対に語りたくないわけではない」という葛藤があるが、そこには「嫌な思いをする」ことで〈不安ゆえの対処〉の強度が増していつてしまうこと、そうしたことでさらに「自分からは語らない」という状態が固定化してしまい危険性が示唆された。こうした状況においても「絶対に語りたくないわけではない」という思いがある以上、【本当はわかってほしい】、受け止めてほしいという思いがあると考えられたため、カテゴリー化した。

このカテゴリーは、他のカテゴリーやサブカテゴリーとも重複している。なぜならこの感覚は特定の時期にのみ表れるのではなく、負の循環に陥り始めることでいつ何時でも感じるものであると考えられるためである。笠田（2013）も親だけでなく親以外の他者にきょうだいが抱えている葛藤を理解してもらえない場合、孤独感が中年期にまで持続することを指摘している。本研究においても同様の概念が生成されたが、では、【本当はわかってほしい】の中身とはなんなのか。きょうだいは何をわかってほしいのだろうか。

きょうだいが特有の悩みを抱えることはすでに多くの研究で指摘されているが、ここでは研究Ⅲで示唆された概念が理解の助けになる。すなわち、「関心を向けてほしい」、「しょうがない」、「迷惑をかけられない」といったきょうだいが抱く葛藤によって生じる痛み・苦しみのことを指していると推察される。日常的にこうした痛みや苦しみを感じることで、自然なことと考えられるが、これが否認・抑圧されることによって問題行動や症状形成へと至る可能性が示唆されるだろう。

### 3-2-6. 【社会との向き合い方】

【社会と向き合い方】は、〈関係性の選択〉と〈きょうだいの昇華・還元〉というサブカテゴリーから生成された。

〈関係性の選択〉は、「関わりの広がり」、「受け止めがなければ切り捨てる」という概念から生成された。

「関わりの広がり」とは、「ASD 児・者との関係が起点となり、きょうだいと社会の関わりが広がっていくこと」と定義づけられ、きょうだいが ASD 児・者との関係における体験を通して、きょうだい自身の社会との関わりが広がっていくことが見出された。

きょうだいが社会に受け止められていると感じることで、より積極的に社会と関わるようになり、その関係性が広がっていくことを示している。つまり、きょうだい－ASD 児・者、あるいはきょうだい－両親といった閉じられた二者関係でなく、そこに社会とい



う第三者が入り込む三者関係が成立していくことの萌芽が見て取れる。

- D さん (男性・弟) ②62・・・特別なことはなくて、同じ空間に一緒にいるみたいな。で、他の友達の親も気にかけてくれるから、その友達も気にかけてくれる。でうちの母親は隠さない。みんなの前でもダメなことはダメで怒られてる、怒られてるのでかわいそう、他の友達が助ける。でやられっぱなしじゃないんですよ弟も。やられて「ビエ～！嫌い！」みたいな言ったりすんですよ。その時とか。一番怒られてた時は「雲の上飛んでっちゃえ」って言って超キレられた。超キレられてた。「死ねってことか！」みたいな。ってなあって、そういうやりとりを友達が見て、めっちゃ笑ってる、みたいな。で、それが何かこう友達ができたかっていうと、僕との関係を見て、そうすればいいんだ、みたいな。めちゃくちゃちっちゃい頃からの友達、2歳くらいからの友達とかは、同じ、ではないけど、優しくしたい対象っていうふうに見てくれて。で、そうするとめちゃくちゃわかるから、好きになるんですよ。なにになになになに、みたいに擦り寄ってくるので、友達も「お？」ってなる子もいるし。でその友達の友達にはこうやって関わるといいんだよっていうのを教えてくれてその子も関わるようになってきたりとか。で、支援級があって、僕が顔見に行ったりしてたんで、友達もついてきて関わったり。で脱走したって聞いたら僕も「探してきます！」とか言って。僕の教室に来るってこともあったんですよ。僕の教室に弟が来て遊んでるとかも多かったですね。僕の小学校の同級生の女の子の服で鼻水拭いちゃったことがあって。「拭かれたんですけど！」って言われて「めちゃくちゃごめん！」みたいな。代わりに謝ったり。でもその親も「あ、全然いいよ！鼻水でもうんちでも拭いて！」みたいな感じの親だったんで大丈夫だった。でそれをきっかけに、そういうときは弟と一緒に行って「ほら謝って」っていうんですよ。で、また関わる、みたいな。
- I さん②16-2 (女性・妹)・・・なので自分がいわゆる大多数の家族の構成の中で育ったわけじゃないっていう認識は多かったのと。あとは妹のなんか今もですけど、普通にこうやって大人の方とお話をするよりも、もう少しどうやったら妹の、彼女の何か少ないボキャブラリーでわかってもらえるかとか、言い方はちょっと彼女仕様に変えるとか、あと何でしょう。その妹がいて妹が今ちょっと状態良くないなみたいな、1日に何回かそういう時間がやってくるんですけど、それがやってきたときになんか今私家でこれしたかったけど妹がこうだから我慢、みたいなふうなのは今も本当にあって。だから何て言うんでしょう、結構周りの人ありきの自分みたいなふうに、自分の振る舞いを考えることが本当に前からあったのは思いますね。なんか結構そういう私なんですけど、それでもなんか多分それは後天的なというか、

家族がこうだったから自分がそういう気質を持ったっていうふうな気持ち、そういう感覚でいるんですけど、多分もしかしたら私はそうじゃなかったら、かなりかなりフリーダムなというか、かなりやりたいことしかやらない。なんか結構わがままなタイプの自分の要素もあるんですね。なので、そこを尊重、大いに尊重して、何か大いにやりたいことばかりをやって大満足みたいな感じの人生もあったかもしれないんですけど。でももしかしたら本来の自分はそうだったのかもしれないなっていうふうに離れて思うんですけど。離れて生活するようになって、なんか妹のことを気にせずに生活できてる時に、なんかそこそこ結構今出てきてる感じがして。だからそれはその今まで結構気を使って近しい友達でもですし、仕事場の方とかに対しても本当に気を使ってこの人の顔色見て言葉を選ぶみたいな、悪い意味でも。だからあんまり私が今まですごく人に嫌な思いをさせるっていうことは多分、今よりちょっと前までの方があんまなかったと思って。結構いい人みたいな感じで思われることが多かったと思うんですけど、最近本当離れて住んでだいぶ自分のライフスタイルも自分のものとして変わってきて、自分が好きなことを優先的にできるとか自分が心地いい生活が優先的にできてるみたいなことが割とかなり気持ちがよくなって。そうすると、自分の交友関係はだいぶ変わってきたんですね。移転してからなんですけどはい。今までちょっと我慢して付き合っ、何か我慢して、「ま、いっかこの人根はいい人だし」とかいうふうに私が頑張ってるって、合わせるようにしてきた友達だったりお付き合いする人とかあったりそういう人はなんかもうどんどん離れていくみたいな。私からも離れるし、っていうふうなことはこんなにダイナミックに人間関係が変わって、今も本当に変わることが多いんですけど。そういう自分の周りの人の付き合い方とか付き合いの内容が変わってきたことって多分今までの自分の人生がなかったんですね。っていうことが、だいぶ大きな変化なんですけどこのこの数年間でっていうのがありますね。

[受け止めがなければ切り捨てる]とは、「きょうだい ASD 児・者のことを社会に受け止められていないと感じたら切り捨てること」と定義づけられ、きょうだい ASD 児・者のことを社会から受け止めていないと感じた際には、そのような社会であれば自ら距離を取ろうとする様子が見出された。

きょうだいの持つ攻撃性の一側面であると考えられる。このように区切る・割り切るといった機能は、父性性の取り入れが行われていることを示唆している。きょうだいの場合、研究Ⅲで示唆されたように父親から関心を向けられることが心理的な発達を促進する上で重要な要因であることが考えられるが、その理由の一つとして、こうした良い意味で

の割り切りができるようになるかが挙げられると考えられる。

- Fさん(男性・弟) 65・・・別にあの一障害を持っていようが持っていまいが、別に僕にとってはものすごい良い弟なので。あの一まあ隠す必要もないし、それでとやかく言われたら、その人とは終わりなのかなって。逆にたぶんそのくらい弟は大事に思ってます。弟をバカにするならこっちから。
- Gさん(女性・姉) 55・・・結構面倒見ないといけないことは増えるっていう風には伝えてはいますが、グループホームに入れなかったら、一緒に住む、住まなきゃいけないっていうそういうことはまだ話してない。あとはやっぱりその経済的などころも出てくるじゃないですか。なので、そこはやっぱり教員っていうのがあって、なんとかできるかなって勝手に自分の中では思ってる。どうなるかわからないですけど。そこまではあんまり話は詰めてないです。ただやっぱり面倒みたりとか助けなきゃいけないことが、多くなるっていうのは理解してもらってるので。理解はないと無理かなっていうのは思います。

これらの概念を〈社会からの反応による体験〉に応じたきょうだいの反応として〈関係性の選択〉とカテゴリー化した。

従来のきょうだいに関する研究は、家族内にASD児・者がいることでどのような影響を受けるのか、というきょうだいの受け身的な側面が描かれることが多かった。しかし、本研究によってきょうだいがより積極的に選択している側面があることも示唆された。

〈きょうだいの昇華〉とは〔多様性の理解〕と〔経験を活かす〕から生成された。ここでの昇華とは、自我による防衛機制のひとつであり、社会的に認められにくい情動を、社会的・精神的に価値のある活動へと置き換えていくことを指している。

〔多様性の理解〕とは、「きょうだいが社会には多様な人がいることをASD児・者との体験を通して理解すること」と定義づけられ、きょうだいがASD児・者がいることによって社会には多様な人がいることを体験的に知ることが見出された。なお、ここの多様性の理解とは、障害の種別や程度こそあれ、純粋に人それぞれであるというフラットな理解や、受け止めてくれる人もいるが受け止めてくれない人もいるが後者の方が多いというネガティブな理解と、多様性の理解にも種類があると考えられた。

- Bさん(女性・弟) 44・・・慣れてっちゃったのかな。慣れていちゃった。人の思い…いろいろな人にアタックしてみても話をしてみても、人ってあの、障害を持ってる人

を受け入れてくれる人と頑なにこう言っちゃう人と色々なタイプがいるのをその期間に勉強できたっていうか。で、自分の中で蓄積して行って。もうどうしても認めてくれないっていう人も、大人でも子供でもどこにでもいるんだっていうのを納得できて。でも自分がどうなりたかくなって考えるようになって。そしたら、やっぱり弟がいるおかげか、弟以外の障害の方も、おじいちゃんもおばあちゃんもみんな一緒の方が楽しい。それはこう多分弟が暮らしやすい世の中ができてくれれば、誰が暮らしても暮らしよい世の中ができるだろうって短大の時に思いました。勉強しながらその時に思って。よかったなこの学校に来てって思いました。

- Dさん(男性・弟) ②82・・・そう、「弟の業界」(笑) 例えば1人で全然知らない子が見たら、いて、バス停で1人でジャンプしてる子がいたりすると、「先輩いたぞ！」って言うてみたりとか(笑)って言うてもよくわかってないから「うん」って言うてたりとか。「お友達だね」とか。まあそういう話を家でもするんですけど、その小学校の頃から〇っていう塾じゃないですけどそこに行つて。で、ようはそういう子たちがたくさんいて、なんか1人で怒ってる子がいたり泣いてる子がいたり・・・すごい関わろうとしてくる子がいたりとかして。で、僕その弟が幼稚園の頃から通ってたので、その迎えとかは一緒に行くことが多くて。小学校2年生の時とかだと、最後の30分くらいの遊びに入れてもらったりとかしてる中で、こうなんだろうな、同じようでも同じじゃないっていう感覚がわかってきた。こいつはこうだ、この子はこんな感じなんだろうなっていう。

「経験を活かす」とは、「きょうだいがあるからこその経験を通してそれを活かそうと動くこと」と定義づけられ、きょうだいがあるからこその体験した自身の経験を自身の学びや進路選択、周囲との関わりに活かそうとしていくことが見出された。ただし、ここには良い経験が多いからこそ「経験を活かす」場合もあれば、「嫌な思い」をしてきたからこそ「経験を活かす」他ない場合と、同じ「経験を活かす」であってもその力動、いわば原動力が異なっていると考えられ、これらがきょうだいの昇華と考えられた。

- Aさん(女性・兄) 50・・・そう、だと思えますね～。うーんなんか本当に、気付いたら選んでたっていったらあれですけど。なんでですかね、やっぱり多いじゃないですか、きょうだいってこう言う仕事って。私の周りでも何人か知ってるんで。だからと言って仲が良いからやったってだけではないと思って。嫌いって言うてる人もいたりとかして、それでもやってたりとか。だから、やっぱり結局自分の身近

にそういう人がいて、知ってるから、それが身近だから仕事としてもできるんじゃないかって思ったりとか、やってみようって思うのかなって。多分私はそうだったので、自然とやってたし。 だけど逆に身内にも誰もそういう人がいないのに目指してるってどういうモチベーションなんだろうって、すごいなって。本当に尊敬する。得体の知れないね、何考えてるかわからない人を、接するってかなり難しいことだと思うんで。うちの職場に学生が、女子学生が実習とかくるんですけど、まあそこに身内がって子が何人かいたりして。まあけど何故なのかって聞いてみたいなって思ったんですけど。だいたいやっぱり、自分が、こういう状況なのを生かして仕事をしたいって言うところですよ。

- D さん②102, 103・・・家の中でどういう扱いを受けてるとか、それを見るから、自分もそういう扱いをするわけじゃないですか。蔑ろにされてるんだったら、自分だって「あ、この子は蔑ろにしているんだ」って思うから、すると思うんですけど、そういう扱いをされていないから自分もそういう扱いをしていないし、それでよかったと思うから、他に還元しようって、思うのかな～みたいな。〈還元しよう、ですか〉そう、そうだ、その還元していく場所に、何が適しているのかを考えた時に、その時に「先生」っていう職業しかわからなかったんだ。もしかしたら、もっと調べれば、色々あったのかもしれないですけど、その時にはわかんなくて。身近なところで見たときに、そういうふうに見える職業って、教員だなんて思ったから、じゃあ塾とか、そういう教室とかはどうかって思ったけど…「いやでも行かなきゃいけない場所」じゃないですか学校って。義務教育だし。でなおかつ長い時間を過ごす場所。だからその学校外に居場所を作るっていう考え方もすごく大切に良いんだろうなって思うんですけど、そこには経済的な事情で通わせることができなかつたり、知らない、そういう場所があるっていうのを知らないっていう可能性もある。無条件でいる場所って学校だから、学校にしようって思ったんです。

これらの概念から、きょうだい ASD 児・者がいることによる体験を通して社会の在り方を理解したり、自らの中で動く気持ちや感覚を社会に向けていく様子が見受けられたため、〈きょうだいの昇華〉とサブカテゴリー化した。

きょうだい福祉職や教職、心理職といったいわゆる「他人のお世話係」を担う職に就く割合は多いが、一見すると同じ職業選択に見えるものの、こうした同じ昇華であっても異なる力動があることが示唆された。

以上の〈きょうだいの反応〉と〈きょうだいの昇華〉は、きょうだい ASD 児・者がい

ることで生じた社会との葛藤を社会との向き合い方であると考えられたため、【社会との向き合い方】とカテゴリー化した。

きょうだい社会との接点においてどのような選択をしていくのかには、社会との間の相互作用の影響を受けているが、その社会との相互作用そのものがASD児・者がいることによって影響を受けていることが示唆された。

#### 第四節 研究Ⅳの全体考察

##### 1. 本研究で明らかにしたこと

本研究では、研究Ⅱ・Ⅲと同様にきょうだいの当事者性に着目しながら、研究Ⅱ・Ⅲでは捉えきれていなかったASD児・者がいることによってきょうだい社会との間で体験する葛藤過程を明らかにし、そこに何がどのように影響しているのかを明らかにすることを目的としていた。M-GTAによる質的データの分析の結果、社会との間で抱く葛藤として〈語りの葛藤〉や【本当はわかってほしい】などが導き出された。また、きょうだいの【社会との向き合い方】として、昇華という具体的な行動も描き出されたと言えるだろう。以下にきょうだい社会との間で抱く葛藤と、社会との向き合い方について考察する。

##### 2. きょうだい社会との間で抱く葛藤と【社会との向き合い方】

本研究で導き出された葛藤は「語りたいのに語れない」や、「本当はわかってほしいのにわかってもらえない」といったものである。きょうだいは、幼い頃よりASD児・者の違和感に気づいていることが研究Ⅱの[“普通”じゃない]という概念で示唆されていたが、それ故に社会に受け止められないのではないだろうかと不安を抱いていると考えられた。沖潮（原田）（2016）は、「障害者の兄弟が抱える揺らぎ」を明らかにするために、自己エスノグラフィによって障害者を生きることの内在的な本質を探ることを試みていた。その結果の一つとして、「存在するだけで価値があるという家族的な価値観」と、「経済的な活動等ができることに意味がある社会的な価値観」の間で揺らいでいることを明らかにした。また、きょうだい障害者も自分も別々に生きていくストーリーに追従しようとしてもそれへの抵抗の間で揺れ動くというきょうだいの心理的特徴を明らかにした。特にこの後者については、障害者ときょうだい別個の人としていかに生きていくか、という心理的な境界線について述べているものと推察される。本研究においても、語ったその先の社会の反応による体験から[自分がどう思われるかには関係ない]と、心理的な境界線が引かれ

ている様子が示唆されており、共通した示唆が得られたと言えるだろう。では、こうした境界線をひくという心理的な機能は、どのように発達してくるのだろうか。

境界線を引く、すなわち区切る・仕切ることで秩序をもたらす機能は、象徴的には父性の力であると考えられている (Houzel & Rhode, 2005)。発達過程で父親へと同一化をしていくことで、社会規範の象徴たる父親の良い側面として取り入れられる力であり、これが超自我の形成へと寄与していく。しかし、この象徴としての父親の超自我的な側面が強すぎると、逆に圧倒されてしまい、「自分はダメだ」「自分にはできない」といった不安が生じて動けなくなってしまう。すなわち去勢不安である。Freud, S. (1909b) は症例少年ハンスにおいて、母親への近親姦的な接近の欲求 (≡ 依存愛情欲求) によって父親を排除しようと試みるが、父親と母親のつながりを理解するようになると父親からの懲罰を恐れ、その不安を去勢不安と同定した。そして子どもはその去勢不安から母親を断念し、今度は父親の良い側面を取り入れて同一化していくことで超自我が形成されていくという一連の流れを複合体の意味で「コンプレックス」を用い、子どもの心の発達において普遍的に存在するエディプス・コンプレックスとして概念を確立した。この子ども・父・母という三者間における子どもが抱く葛藤を乗り越える、つまり母親を諦め、父親の良い側面を取り入れて同一化していくことが心理的発達において重要な基盤になると考えられている。このエディプス・コンプレックスは、幼少期である 3~6 歳頃に見られるものであるが、未消化のままであるとその後様々な時期で顔を出し、心理的な不適応や症状形成をきたしてしまうと考えられている。年齢が上がるにつれ、それは実際の父親との間だけでなく、より広範な社会との間でも体験されうるものである。最終的に母親を諦め、父親と同一化することで「自分にもできる」「自分はこれで良いのだ」という感覚を抱いていくこととなる。

こうした概念からきょうだいを見ると、きょうだい抱える可能性のある不安を読み解くことができる。つまり、きょうだい抱える不安は、ASD 児・者がいることによって「普通ではない」という感覚から引き起こされていると考えられる。この「普通ではない」ことが、すなわち男児がペニスを父親によって奪われてしまうのではないかという不安と重なってしまう場合に、きょうだいの心理的発達が停滞してしまう。少し言葉を変えると、自分らしさや主体性など、「自分はこれで良いのだ」という感覚が損なわれてしまう機会が、[嫌な思いをする] ことによって引き起こされてしまい、〈本当はわかってほしい〉という依存愛情欲求を抱きながらも嫌な思いをする不安、すなわち去勢不安から [顔色を見て合わせる] や [どのように思われるか心配] が引き起こされ、[自分からは語らない] という〈不安ゆえの対処〉の強度が高まってしまうと考えられる。

ここでもう一つ重要な点は、父性が不在の場合である。例えば、ASD 児・者が身内にいることを父親が否認する場合、より具体的な行動で言えば父親の家族との関わりが薄い場合には、父性が不在となってしまう。この父性が不在の場合、幼少期の心理的発達に必要なエディプス・コンプレックスがそもそも立ち上がらない。立ち上がらないまま時間が過ぎ、いきなり社会との対峙を求められると、余計に傷つきやすくなってしまいう可能性もあると推察される。したがって、ASD 児・者が家族にいる場合には、いない家族に比べても父親の家族参加が心理的に非常に重要であると考えられる。

ではきょうだいと社会との間でエディプス・コンプレックスを体験する場合、どのような経過を辿るのだろうか。それが〈社会による体験〉→〈関係性の選択〉→〈きょうだいの昇華〉に表されている。

父性への同一化という視点から見た場合に、[どのように思われるか心配]という思いがあっても、[自分がどう思われるかには関係ない]と区切ることができるようになっていくかどうか、つまり、そうした区切る・仕分ける力を得ることが父性への同一化によってもたらされる福音であり、この力があるからこそ、自身とASD 児・者を別個の人として捉えることが可能になる。すると、自分は自分として[関わりの広がり]が生まれ、その時には[自らASD 児・者のことを語ることも増えてくる。しっかりと説明できれば受け止めてくれる人、関わってくれる人が増えて[関わりの広がり]が生じてくる。そうしてくると、きょうだいは感謝することが増え、その経験を活かして社会に対して還元しようと試みていく。このようなプロセスは、きょうだいに生じるエディプス・コンプレックスをうまく消化したタイプであると推察される。

一方、嫌な思いを体験すると、〈本当はわかってほしい〉と思いながらも、[どのように思われるか心配]になってしまい、[顔色を見て合わせる]ことがふえ、[自分からは語らない]というスタイルを身につけることになる。しかし〈本当はわかってほしい〉の裏には「なぜわかってくれないのか」という攻撃性が潜んでいても何ら不思議ではない。社会に対する「なぜわかってくれないのか」といった攻撃性は抱いて当然の気持ちであると客観的には考えられるが、きょうだいにとってはそのような気持ちを抱いているとさらに[嫌な思いをする]かもしれないと、不安の源泉になってしまうのである。またこの時、ASD 児・者に対して、あるいはASD という障害に対して本当はどのように思っているのかも重要である。心のうちではASD 児・者やASD が家族の中にあることによって体験する嫌な思いに理不尽さを感じ、「どうして自分がこんな目に遭わなければいけないのか」と、ASD 児・者や両親、そして社会を非難したくなる気持ちもあるかもしれない。しかし、そうした気持ちを抱いていることは認め難く、自分のものとして体験されないためにきよ



うだいの中から分裂排除され、周囲の人が自分を非難していると感じるという投影同一視が働きやすいことも十分に考えられるだろう。こうした攻撃性の一つの表れとして「受け入れがなければ切り捨てる」という時に攻撃的な捉え方もできる選択であったり、そうした社会的に認めにくいときょうだいたちが感じている攻撃性をより社会的・精神的に価値あるものとして置き換えて充足させるために「経験を活かす」という昇華に向かっていると考えられる。こちらのプロセスにおいては、社会との間のエディプス・コンプレックスが消化されているというよりも、それ以前のきょうだい-ASD 児・者という二者関係に重きが置かれており、未だ十分にエディプス・コンプレックスという三者関係の領域に踏み込みきれていない側面があると推察される。

以上のきょうだいが社会との間で抱く葛藤が内包された昇華に向かうプロセスは、ASD 児・者がいることによってきょうだいが体験する心理的な発達課題であると考えられる。

しかし、きょうだいの誰しもが昇華へと向かうとは考えにくい。そのため、次に、研究Ⅱ・Ⅲと同様に、研究Ⅰで見いだされた5つの家族像に沿ってきょうだいと社会の関係性を解釈することで、臨床適用の幅を広げる。

### 3. Meltzer, D. & Harris, M.の家族論から捉えるきょうだいと社会

#### I. 【一体感のある家族】概念：4, 5, 9, 11, 13, 15

この家族像はASD 児・者と母親のカップル性が生じながらも両親のカップル性も十分に成立している家族像である。ここでは、きょうだいが社会との関りを持つ土台としての両親のカップル性が存在しており、〈語りの葛藤〉や不安を抱きながらも社会と積極的に関わっていくことが可能であると考えられる。思春期・青年期は第二の分離固体化期（Blos, P., 1962）とも言われ、家族からの自立を問われる時期である。ASD 児・者のきょうだいがこうした時期に差し掛かると、両親のカップル性が根底にあり抱えられている感覚があるからこそ社会へと関わっていくことができるだろう。社会に開かれているからこそ、ASD 児・者がいることで体験する抑うつ的な苦痛があってもそれを受け入れ、障害を否認することなく 5.5.[自ら ASD 児・者のことを語る]ことに屈託がなくなると考えられる。

【一体感のある家族】では家族の中に抑うつ的な苦痛や絶望が蔓延したとしても、両親のカップル性を基盤としてそれを上回る愛情や発達への期待、希望が見出される。これにより、きょうだいが社会に対峙した際も 9.[ASD 児・者に関わってくれて感謝する]といった社会の良い側面に目が向きやすく、11.[受け止めてくれる]という期待も持つだろう。こうした両親カップルの健康的な側面を取り入れることで、ASD 児・者がいることによって社

会との間で体験する葛藤は、〈きょうだいの昇華〉という形でより社会に向かって歩みを進めていくと推察される。その結果、家族とは情緒的につながりながらも 13.[関わりの広がり]を体験し、15.[多様性の理解]をしながらきょうだいが自分らしく自らの人生を歩んでいくことになるだろう。

## II. 【分断している母権的家族】におけるきょうだいと社会 概念：1, 2, 3, 4, 6, 8

この家族像は、両親のカップル性が弱く、ASD 児・者と母親のカップル性が強まり、父親的人物が排除されてしまっている家族である。母親的人物が家族内機能の全てを保有している場合があり、きょうだいがASD 児・者との間で感じる葛藤や、コミュニティとの間でASD 児・者がいるからこそ体験する迫害不安や抑うつ的苦痛をも母親がコンテインしていくことになる。しかし同時に、母性が有する機能の特質は「受容する」「抱えこむ」(Houzel & Rhode, 2005)であり、また社会を象徴し同一化対象となるはずの父親の存在が薄いことから、きょうだいが家族関係に囚われていく危険も孕んでいる。こうした家族像においては、きょうだいは母親と偽りのカップル性を生み出しやすい。これは母親的人物が父親的人物を排除しようとしているのを目にし、自らも排除されないよう母親的人物に合わせるのと同じように、きょうだいが社会からも排除されないよう 3.[自分からは語らない]し、1.[顔色を見て合わせる]ことに繋がるだろう。また社会から 2.[どのように思われるか心配]という不安も生じ、6.[語りづらいからはぐらかす]ことになると考えられる。ここでは、ASD 児・者がいることによって感じる絶望感や惨めさが漂い、きょうだいが社会へと向かう歩みを鈍らせてしまうかもしれない。

## III. 【分断している父権的家族】におけるきょうだいと社会 概念：3, 7, 10

この家族像は、【分断されている母権的家族】と同じく両親のカップル性が弱く、ASD 児・者と母親のカップル性が強まっているものの、父親的人物が排除されておらず、家族内で父性が生きている家族像である。これにより、父性の持つ「切り分ける」「侵入する」といった特質 (Houzel & Rhode, 2005) が際立ってくるのと同時に、きょうだいにとっては社会との接近が容易にもなりうる。つまり、社会の象徴たる父親に同一化していくことは、すなわち社会との関りを持つことを意味し、家族の囚われに巻き込まれずに済む可能性があるだろう。しかし、父性があまりにも強権的な場合、否認が主な機制として働いてきてしまう。【一体感のある家族】のようにより健康的な躁的防衛による否認とは異なり、ここでは「全く問題はない」とするような万能的な否認が働いていると推察される。したがって、社会との間で体験する抑うつ的苦痛や惨めさを可能な限り体験しないよう ASD

児・者のことを3.[自分からは語らない]し、7.[気を遣われるのを避ける]ように振る舞ったり、10.[自分がどう思われるかには関係ない]と距離をとることになるだろう。これにより、家族との距離はとれると推察されるが、否認しきれない現実と直面した時には適応が崩れやすくなってしまいかもしれない。

#### IV. 【解体している家族】におけるきょうだいと社会 概念：4, 16

この家族像は、父親的人物の排除が加速し、一方でASD児・者と母親のカップル性が過密になりすぎてしまうことで家族内に蔓延する抑うつ的苦痛や絶望感、迫害不安を家族内で抱えることができなくなり、家族が離散してしまうような家族像である。ここでは混乱が渦巻いており、その混乱を収める人物が必要になるが、両親がその機能を果たせず、ASDという障害を持った同胞がいる以上きょうだいがその立場を担いやすく、家族内にはびこる抑うつ的な苦痛や絶望感、迫害不安をきょうだいが抱えることになると推察される。結果としてきょうだいにとって同一化対象がないためにその立場、つまり家族をケアするという立場にしか自身を見出せなくなってしまう。そこでは1人の子どもとしての主体性を尊重される機会が乏しくなり、人生を自分のニーズにしたがって歩いていく指針を得ることができず、心理的に右往左往してしまう可能性が示唆される。こうした状況下においては、家族のことについて4.[語りづらいからはぐらかす]ことがある一方で、16.[経験を活かす]しかなく、職業選択はおのずとケア・テイカー的な職業となることは想像に難くない。しかしそもそもその役割は家族の中の混乱の上に成り立っているため、破綻を来しやすいと推察される。

#### V. 【凝集している家族】におけるきょうだいと社会 概念：12, 14

この家族像は、ASD児・者と母親のカップル性だけでなく、ASD児・者が中心となるからこそ両親のカップル性も過密になっていくことで家族の凝集性が増し、家族内で生じる絶望感や抑うつ的な痛み、迫害不安だけが漏れ出ること、真つ当な自立や成長といった希望が見出されることなくかき消されてしまうような家族像である。ここでは、きょうだいが社会との間で抱く不安や葛藤には目が向けられることが少ない。なぜならASD児・者の障害そのものが家族の中心に布置し、きょうだいは脇役だからである。特に、家族内に広がる雰囲気として、両親が子どもに向ける自立・成長への期待が表面的で理不尽なものになり、1人の子どもがその子らしく自立していくことがよしとされない。そして自立できないのは社会のせいであるという認識の元、社会との間で敵意や絶望感を引き起こしやすいと推察される。そのため、きょうだいは社会との間で12.[嫌な思いをする]こと

に敏感になり、14. [受け入れがなければ切り捨てる] と、時に苛烈にも見える対人関係を築くかもしれない。しかし表面的で理不尽な自立・成長の期待は必然的にきょうだいにも向けられる。きょうだいが自らの人生を歩んでいくことが良しとされないため、結果的に家族の凝集から抜け出すことができずに社会と心理的な距離ができてしまうと推察される。

きょうだいの中に福祉職や教職、心理職といったケア・テイカーの職業につく人が多いことはよく知られている。臨床の場面に患者として姿を見せることも少なくない。その背景には個別性があるのはもちろんだが、大まかに全体を捉える際には、こうした昇華・還元という力動の違いがあると考えられる。この2つのプロセスを辿ってわかるように、介入のポイントは自ずと変わってくる。どちらかといえば、昇華されていると社会的には適応しているように見えるため、問題の所在が掴みにくい。しかし、[どう思われるか心配]で〈本当はわかってほしい〉という思いがありながらも[自分からは語らない]というスタンスを維持している場合には、本人の主観的な体験として苦痛を伴っていることが想定される。重要なことは、働いているかもしれない投影同一視を弱めるためにも、本当は周囲の人ではなくきょうだいが抱えている攻撃性を解釈し、自分の気持ちとして受け止められるようになることで安心して三者関係の中に歩みを進めていくことをサポートしていくことだと考えられる。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義は、これまで詳細に論じられることのなかったASD児・者がいることによってきょうだいと社会との間でどのような葛藤を体験し、また社会に対してどのような向き合い方をしているのかを明らかにした点にある。ただし今後の課題として、理論的サンプリングが不十分で、理論的飽和化に至っていない可能性が第一に挙げられる。また、友人とパートナーなど、その親密さによっても生じる葛藤には違いがある可能性も否定できない。したがって、より関係性を絞った検討を重ねていくことも必要だろう。なお研究I～IVに共通する今後の課題は、次章に譲ることとする。

# 結論

## 第七章 総括

### 第一節 各研究で明らかにしたこと

本論文の一連の研究では、ASD 児・者の兄弟姉妹（以下、きょうだい）に焦点をあて、ASD 児・者がいることによって家族内・外の人との関係性の中できょうだいが体験する葛藤の全体像と、きょうだいが日々をともにする家族像を整理することによってきょうだいの心の発達について論じた。

葛藤は、人の心理的発達において重要な位置を占めている。「本当はしたいけれどできないという身動きの取りにくい心理的な負荷がかかる状況」や「良い体験と悪い体験の相剋」のことを指しており、この葛藤をいかに整理して意味づけるのか、いかに折り合いをつけていくのかが心理的発達を左右する。本論文では、きょうだいの葛藤を家族内における「第三者性」と「当事者性」の二つの視点から捉え、「第三者性」として家族像を、さらに「当事者性」からは「ASD 児・者との関係」「両親との関係」「社会との関係」という 3 つの関係性を詳細に検討し、多角的な理解を試みた。また、きょうだいを主人公としながら、家族内外の人と関わる社会相互的作用を捉える上で、社会構成主義的なパラダイムに依拠しながら M-GTA を用いて分析を行った。さらに、M-GTA の限界とも言える実際の臨床場面への適用をさらに円滑に行うために M-GTA で得られた結果を素材として精神的な概念・理論を用いて解釈し、論じた。次に、各研究で明らかにしたことを改めて整理する。

研究 I では、きょうだいの家族内における「第三者性」に着目した。これは、家族成員のひとりであるきょうだいは、ASD 児・者－両親という関係性から見ると第三者に位置していることを意味している。この「家族内における第三者性」に着目してきょうだいにとっての環境として、ASD 児・者と両親の関係性がどのように形成されているのかを検討した。青年期以降のきょうだい 9 名を対象に、家族との関係性についてインタビューを行い、M-GTA を用いてきょうだいからみた ASD 児・者と両親の関係性を描き出した (Figure 3)。その結果、ASD 児・者と母親の間には早期からカップル性が成立しやすく、特に密着したカップル性が形成されると同時に父親が ASD 児・者に関心がないと父親が排除され、【分断している家族】像が形成されていた。その一方で、両親のカップル性が機能し、母親と ASD 児・者のバウンダリーが形成され、父親の関心が ASD 児・者に向くことで、【一体感のある家族】像が形成されていた。

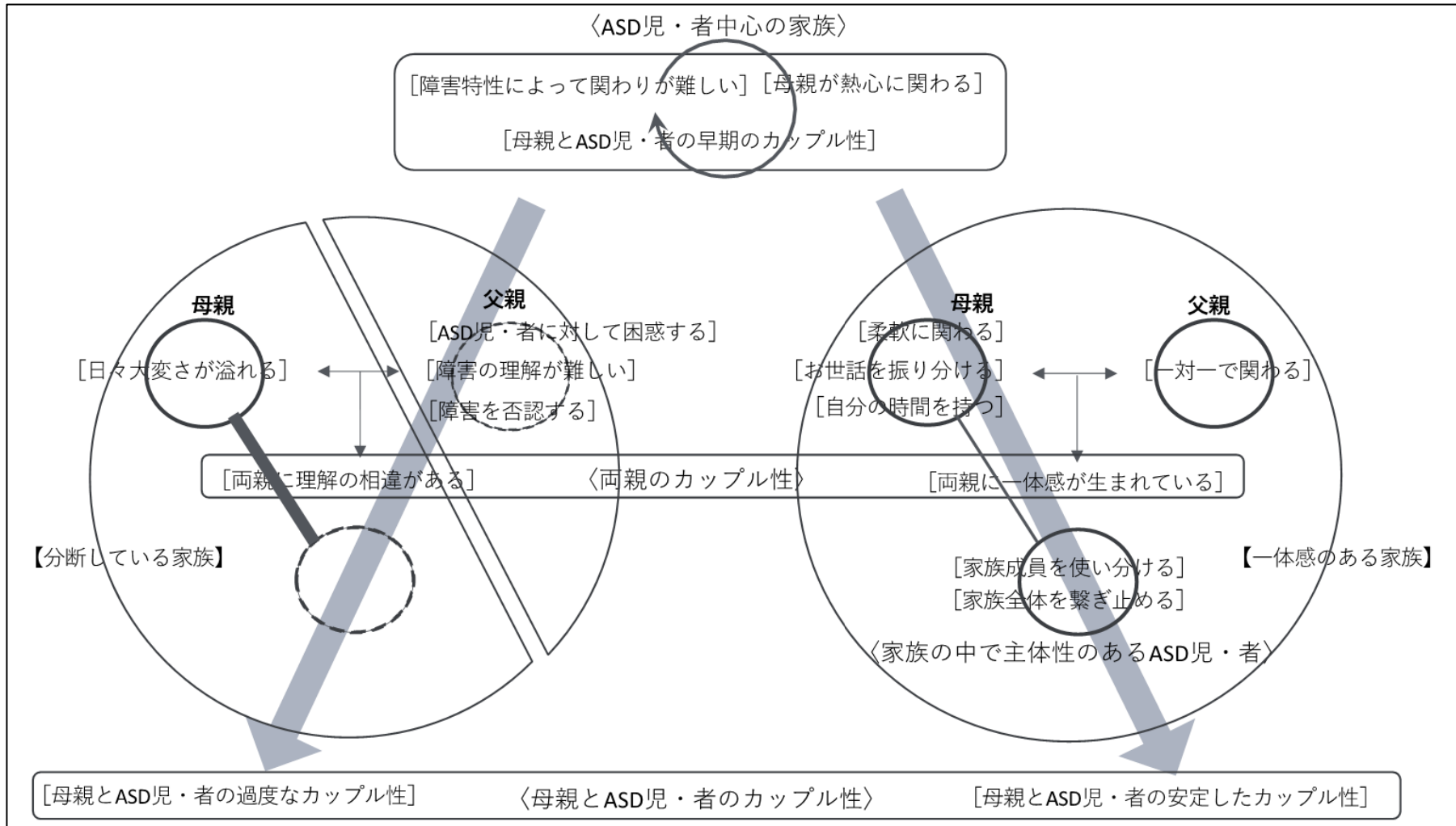


Figure 2 ASD児・者のきょうだいから見たカップル性を中心としたASD児・者と両親の関係性

さらに、ここで得られた概念・結果図を素材とし、Meltzer, D. & Harris, M. (2013)の家族類型を用いて解釈した。Meltzer, D. & Harris, M. (2013)は、愛情の産出、憎悪の流布、希望の促進、絶望の種まき、抑うつ的苦痛のコンテイン、迫害不安の漏出、混乱の出現、考えること、といった項目から、家族を類型化した。これらの項目に沿ってきょうだいからみた ASD 児・者と両親の関係性に関する M-GTA で得られた結果を解釈すると、I. 【一体感のある家族】、II. 【分断している母権的家族】、III. 【分断している父権的家族】、IV. 【解体している家族】、V. 【凝集している家族】の5つに分類された。各家族像の特徴については、研究Ⅱ～Ⅳを通して論じたため、本論文の総合考察にて述べることにする。

研究Ⅱ～Ⅳでは、きょうだいの「当事者性」に着目した。「当事者性」とは、研究Ⅰで着目した家族内の「第三者性」と対になる視点であり、きょうだい自身を関係性の中心に据えた視点である。この「当事者性」に着目し、ASD 児・者がいることによってきょうだいが各関係性（ASD 児・者、両親、社会）の間でどのような葛藤を体験しているのかを整理し意味づけを見出すことで、研究Ⅰを合わせてきょうだいが ASD 児・者がいることによって体験する葛藤の全体像を明らかにすることを目的とした。

研究Ⅱでは、ASD 児・者がいることによって、きょうだいが両親との関係性において体験する葛藤過程を明らかにし、その葛藤を通してどのようにきょうだいの心が発達しているのかについて検討することを目的とした。研究協力者 11 名のインタビューデータを M-GTA を用いて分析した結果、きょうだいが葛藤体験を通して自分の気持ちを抑えているところから本当の気持ちを表出していくプロセスが見出された (Figure 5)。きょうだいが Meltzer (1967) の指摘した「偽りの成熟」、すなわち親に対する分離不安と依存の否認を果たすために内的対象としての母親に同一化することで大人のような子どもに陥るリスクがあること、本当の成熟にいたるためには、否認されている親との分離への不安や依存をみつめ、両親のコンテインや関心を向けられている感覚を実感することが鍵となることを論じた。また、研究Ⅰで得られた 5 つの家族像に沿って、各家族像においてきょうだいが両親とどのような関係性を築き得るのかを論じた。



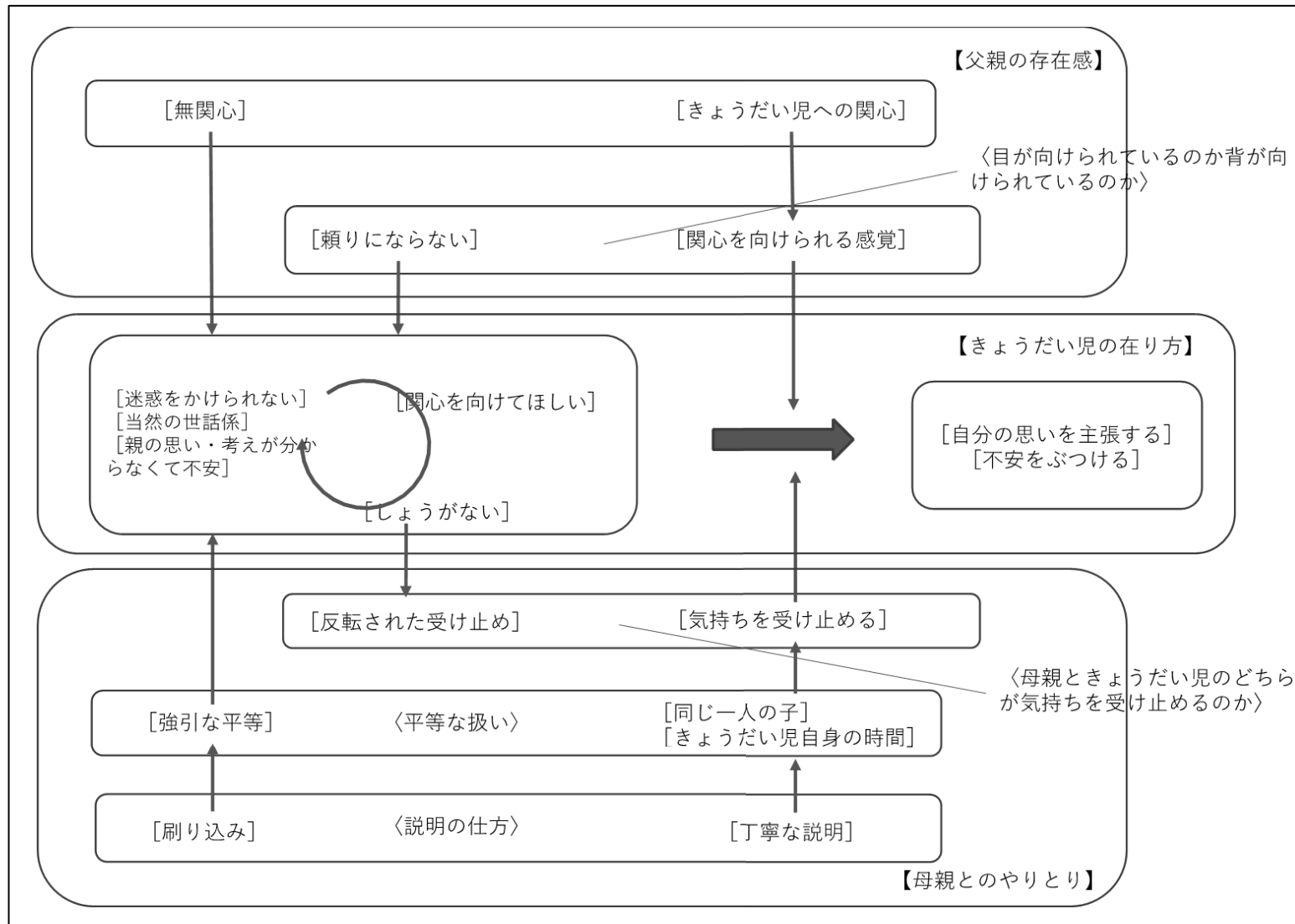


Figure 3 ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する葛藤を通して  
本当の気持ちを出していくプロセス

研究Ⅲでは、ASD 児・者がいることによって、きょうだいも ASD 児・者との関係性において体験する葛藤過程を明らかにし、その葛藤を通してどのようにきょうだいの心が発達しているのかについて検討することを目的とした。研究協力者は研究Ⅱと同様であった。分析の結果、「きょうだいも ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却しようとするプロセス」が見出された (Figure 5)。「巻き込まれた関係」とは、きょうだいも自分自身に関心に向けてほしいと意識的・無意識的に思いながらも ASD 児・者を守り、それを「お目付役」と感じていたり、「しょうがない」と感じながらも、[きょうだいだからわかる] というバウンダリーが弱まっている状態のことを指している。つまり、きょうだい本人の意識に関わらず、無意識的にこうした関係に陥り、抜け出せなくなっている状態がここでの「巻き込まれた関係」である、こうした関係性から抜け出そうとしていく要因として、[思春期・青年期にかけて距離ができる] というきょうだいの等至点が現実として大きく作用し、自身と ASD 児・者の関係を俯瞰することに繋がり、ASD 児・者の成長に気づくことができただけ守るだけでなく正面から向き合ったり、[きょうだいでも分からない] ことがあると知ることによって ASD 児・者との間にバウンダリーが生まれ、巻き込まれた関係から脱却しようと試行していくプロセスが示唆された。

さらに、研究Ⅰで得られた家族像 5 つに沿って、各家族像におけるきょうだいと ASD 児・者の関係性を論じた。

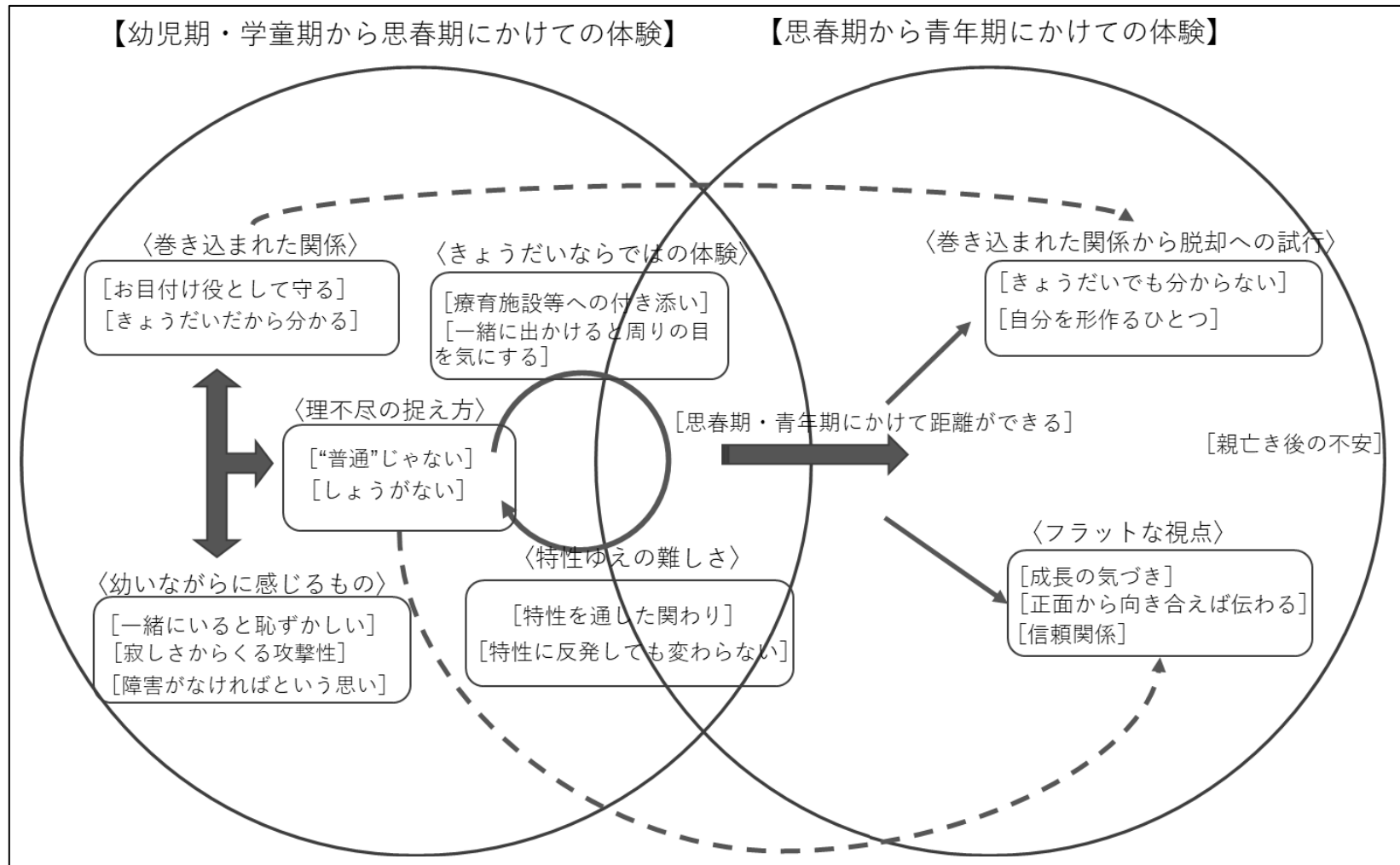


Figure 4 ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス

研究Ⅳでは、ASD 児・者がいることによって、きょうだいと社会（あるいは他者）との関係性において体験する葛藤過程を明らかにし、その葛藤を通してどのようにきょうだいの心が発達しているのかについて検討することを目的とした。研究協力者は研究Ⅱ・Ⅲと同様であった。M-GTA を用いて分析を行なった結果、きょうだいと語ることの葛藤を通して昇華へと向かっていくプロセスが見出された（Figure 6）。ここでは、きょうだいと社会と対峙した際にはエディプス・コンプレックスの相似形として関係性が理解され、[本当はわかってほしい] という依存愛情欲求を抱いているものの、そうした欲求を抱くことは ASD 児・者のきょうだいという立場だからこそ [どう思われるか心配] という不安によって圧倒され、[自分からは語らない] という葛藤状態に陥る可能性が示唆された。ただし通常のエディプス・コンプレックスとは異なり、その抜け道としてきょうだいゆえの [経験を活かす] ことや、[多様性の理解] という昇華へ向かうという心理的発達のプロセスが示唆された。

また、研究Ⅱ・Ⅲと同様に研究Ⅰで得られた 5 つの家族像の中できょうだいと社会とどのような関係性を築いていくのかについて次のように論じた。

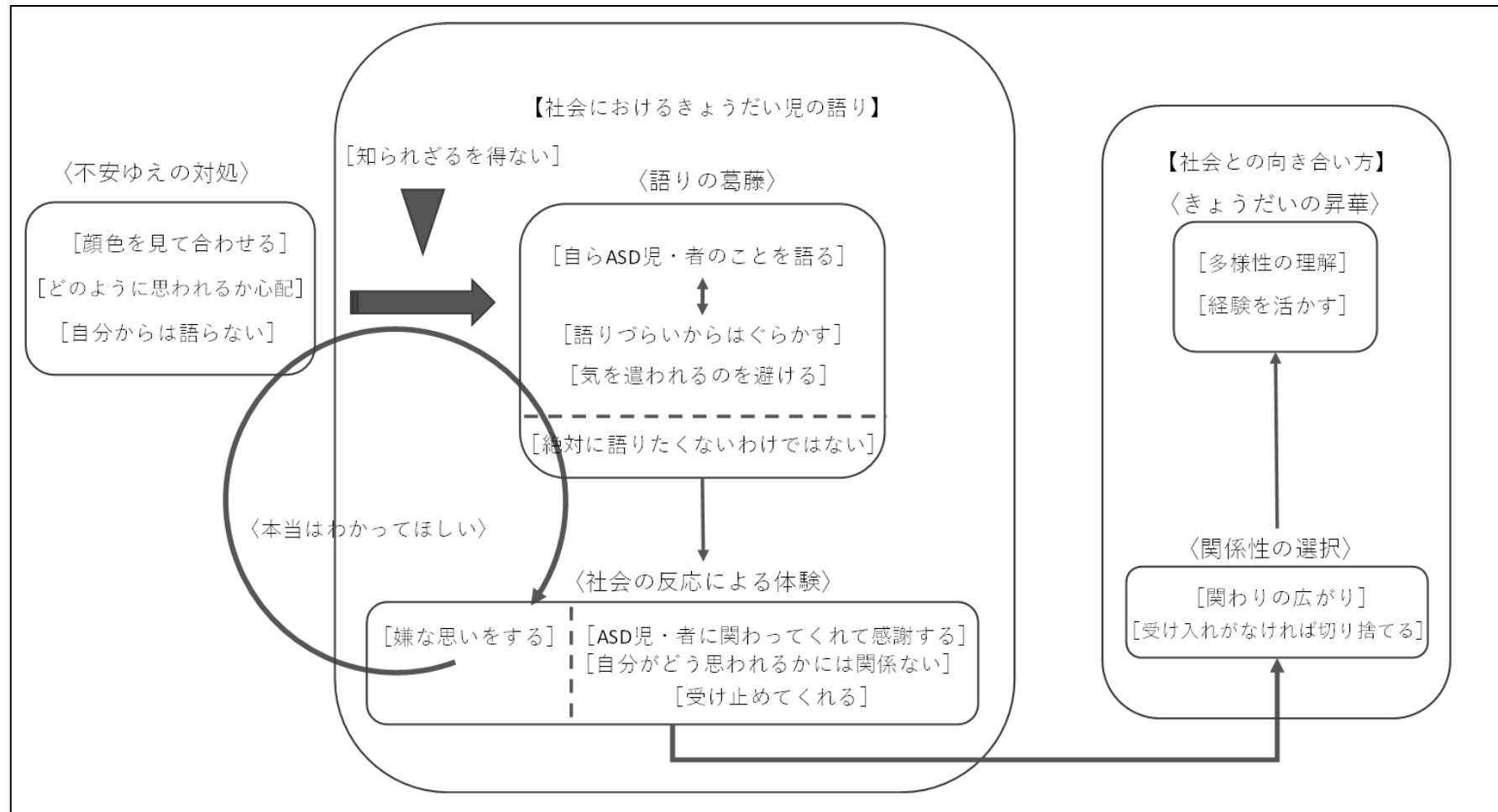


Figure 5 ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する語りの葛藤を通して昇華へと向かうプロセス

## 第二節 本論文の総合考察

本節では総合考察として、ASD 児・者がいることによってきょうだいが体験する葛藤の全体像をモデル化し、同胞葛藤の概念の捉え直し・拡大を試みる。また研究 I～IVで論じた 5 つの家族像を振り返り、Meltzer (1967) の精神分析過程に沿って整理することで、きょうだいの対象関係の発達を論じる。さらに、これらを通して示唆される ASD 児・者のきょうだいの特異性を論じる。

### 2-1. きょうだいが体験する葛藤の全体像

#### 2-1-1. きょうだいが体験する葛藤の全体像の結果図

ASD 児・者がいることによってきょうだいが体験する葛藤の全体像をモデル化する。下図は、研究 I～IVにおいて導き出された概念・サブカテゴリーを中心に、同胞葛藤の説明において中心的な内容のものを一つの結果図にまとめたものである (Figure 7)。カッコ内のローマ数字は、得られた研究の番号を指している。

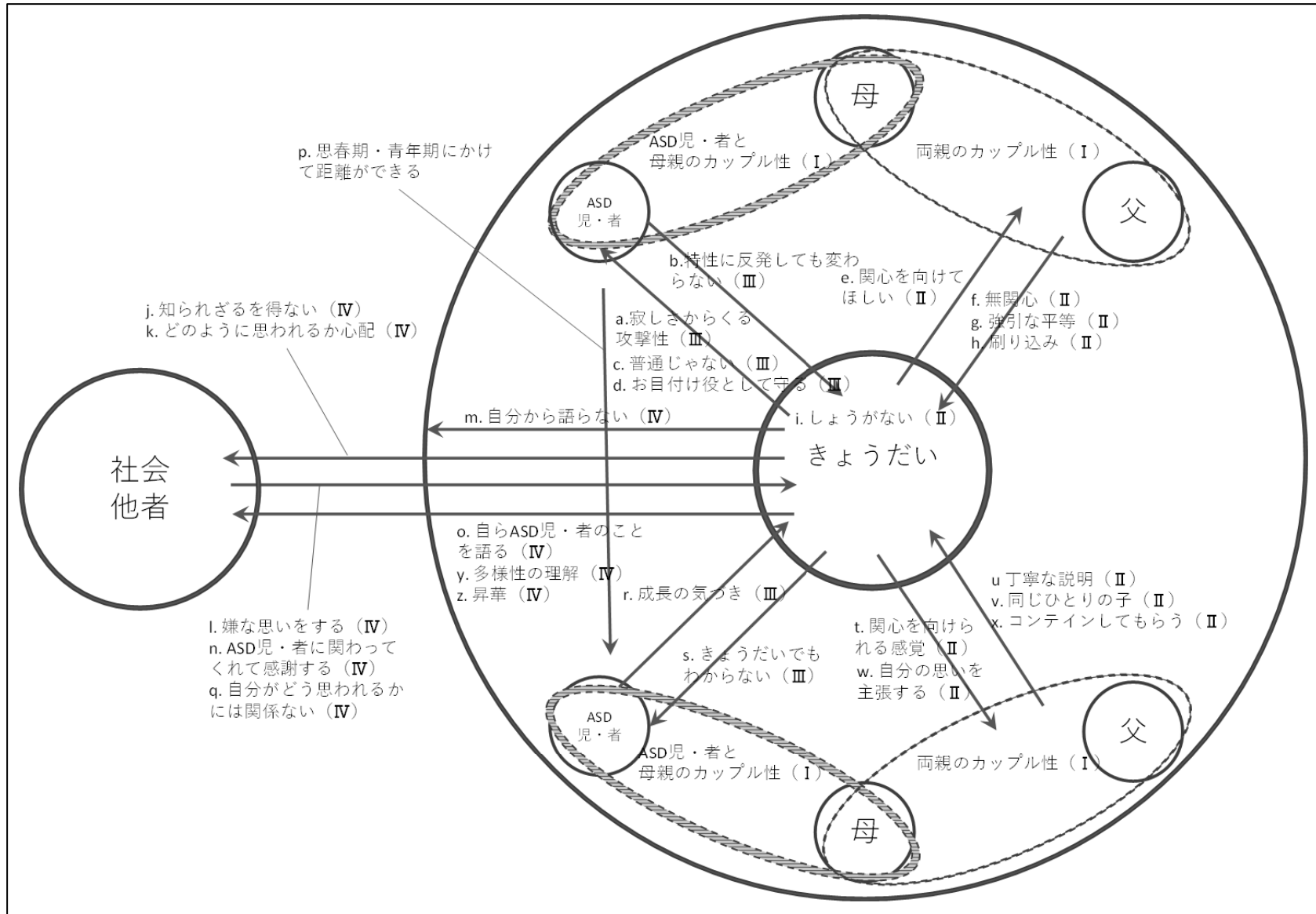


Figure 6 ASD児・者がいることによってきょうだいが体験する葛藤過程の全体像結果図

次に、この結果図を文章で記述すると以下のようなになる。

きょうだいは、ASD 児・者と母親のカップル性を前に a. 寂しさからくる攻撃性 (Ⅲ) を ASD 児・者に向けるが、ASD 児・者の特性ゆえの難しさから b. 特性に反発しても変わらない ことを体験する。そうした ASD 児・者を前にきょうだいは幼いながらも c. 普通じゃない (Ⅲ) という感覚を抱き、d. お目付け役として守る (Ⅲ) という言動をとるようになる。この裏には両親に対して e. 関心を向けてほしい (Ⅱ) という思いがあるが、父親からの f. 無関心 (Ⅱ) や、母親からの g. 強引な平等 (Ⅱ)、ASD 児・者の大変さに関する h. 刷り込み (Ⅱ) がある場合には、こうした役割を i. しょうがない (Ⅱ) と受け止め、時に積極的にこの役割を担っていく。

年齢があがるにつれ、学校場面などで ASD 児・者のことを j. 知られざるを得ない (Ⅳ) 状況になると、きょうだいは k. どのように思われるか心配 (Ⅳ) になり始める。実際に社会・他者から l. 嫌な思いをする (Ⅳ) ことを体験すると、ASD 児・者のことはより m. 自分からは語らない (Ⅳ) 姿勢が強まっていく。一方、社会・他者の ASD 児・者への対応が友好的で n. ASD 児・者に関わってくれて感謝する (Ⅳ) ようなものだった場合、安心して o. 自ら ASD 児・者のことを語る (Ⅳ) ようになっていく。

こうした家族・社会との関係性の中で、p. 思春期・青年期にかけて距離ができる (Ⅲ)。これは物理的な距離だけではなく、q. 自分がどう思われるかには関係ない (Ⅳ) という心理的な距離もできてくる。そして l. 嫌な思いをする (Ⅳ) ことよりも n. ASD 児・者に関わってくれて感謝する (Ⅳ) ことが勝ると、ASD 児・者との関係も俯瞰して見ることができ、ASD 児・者の r. 成長の気づき (Ⅲ) が起きやすくなる。また、s. きょうだいでもわからない (Ⅲ) という現実的な体験へと開かれていく。さらにここを支えるものとして、きょうだい個人に父親が関心を向けることによる t. 関心を向けられる感覚 (Ⅱ) や、母親からの ASD 児・者についての u. 丁寧な説明 (Ⅱ)、v. 同じひとりの子 (Ⅱ) といった関わりを受けることにより、安心して w. 自分の思いを主張する (Ⅱ) ことができるようになる。こうした現実的な体験の中で感じることを x. コンテインしてもらう (Ⅱ) ことで、



両親，そして社会に対して障害を持つ人を含めた y. 多様性の理解 (IV) が進み，そうした理解に基づいて社会に対して z. 昇華 (IV) する方向へ向かっていくという心理的な発達が進んでいく。

このように，ASD 児・者がいることによるきょうだい各関係性の中で体験する葛藤過程を通じた心理的な発達は，非常に複雑である。従来の「同胞葛藤 Sibling Rivalry」(Levy, 1928) では捉えきれない事象であると考えられる。

先行研究を見ると，「同胞葛藤」の定義が曖昧であったり，定義を明確にしてはいないが「ASD 児・者との間できょうだいが体験する葛藤」のことを述べている研究がしばしば見られる。田倉 (2008) は，きょうだいが障害児・者との関係を肯定的に捉えるまでのプロセスを提示し，幼少期からの保護的役割や障害児・者との関わりで感じる怒り・不満を抱くこと，障害児・者に障害がなければという願望を持ち続けることを指摘した。また肯定的に捉えていない事例から，思春期のきょうだいの葛藤の大きさや，障害特性・日常的な関わりの乏しさから関係構築の難しさがあることを示した。同様に，山本・金・長田 (2000) は，高校生以上のきょうだい 9 名に行なったインタビュー調査から，きょうだいが幼い頃から障害についての何らかの違和感を抱いていたこと，面倒を見る役割を担うこと，母親の関心が障害児・者へ向かうことによる寂しさ，学校社会で偏見やいじめに遭い辛い思いをすることで成人に達するまで障害児・者の障害のことを秘密にしていることなどを導き出した。これらの知見は障害種別や出生順位・性別の統制が不十分であるものの，きょうだいが幼少期より保護的役割を担うこと，障害児・者及び親との関わりの中で怒り・不満・寂しさを抱くこと，障害がなければという思いを持つこと，学校社会における辛い思いをする可能性があることなどがポイントとしてあげられる。これらの知見は，本論文で導き出された研究 II・III で示唆されたきょうだいがお目付け役，お世話係として振る舞う様子や，研究 II でみられた寂しさからくる攻撃性や関心を向けてほしいと思うこと，研究 IV で示唆された学校場面で ASD 児・者のことを知られざるを得ず，嫌な思いをすることになることが示唆されたといった結果とも十分に一致するものであると言える。また，

富永・松永（2013）は ASD 児・者のきょうだい 10 名に対するインタビューから、幼児期からの ASD 児・者の障害の気づき、関わりの難しさを感じながら、家庭内で世話役割を担っていたことや、学童期から思春期にかけてはきょうだい自身の関わりの輪が広がると同時に ASD 児・者に対する否定的な感情が強まること、思春期以降では ASD 児・者への客観的理解が深まり、青年期以降では ASD 児・者との自発的な外出や情緒的な関わりが増えていたことなどを指摘した。この知見もまた、本研究で得られた研究Ⅲで得られた思春期・青年期にかけて距離ができ、きょうだいが ASD 児・者の発達、成長に開かれて正面から向き合うようになっていたという結果と符合すると考えられる。しかし、これらの研究の中で「同胞葛藤」そのものを扱い、きょうだいの心理的発達について言及するものは見られなかった。それだけきょうだいの心やきょうだいを取り巻く環境が複雑であると推察される。これらの先行研究を経て、本研究で扱う「同胞葛藤」の定義を改めて明確にし、その全体像と中身について考察する。

## 2-1-2. ASD 児・者のきょうだいの「同胞葛藤」Sibling Rivalry から Sibling Complex へ

本研究で扱う「同胞葛藤」とは、Levy（1938）が定義した Sibling Rivalry のことを指している。Sibling Rivalry は、「自身の兄弟姉妹に対する親の愛情をめぐった敵対心と、同時に友愛的な関係を望まれていることによる葛藤」と定義されており、きょうだい間の愛憎が中心の概念である。しかし、同じ「葛藤」という訳語が当てられる「エディプス葛藤」は、Oedipus Complex であり、Complex とは複合体のことを意味している。概念としては、母親に対する近親姦的な接近の願望と父親の排除、それに対する父親からの報復の恐れに苛まれるものの母親への接近を断念し、父親へ同一化することで父親の良い側面を取り入れて超自我を形成していく発達的で複合的な関係性という一連の空想と定義されている（Freud, S., 1909 など）。このように、同じ「葛藤」という言葉が用いられつつも、Rivalry と Complex で意味する内容が異なっていると考えられる。また、Sibling Rivalry は兄弟姉妹の中に障害児・者は想定されておらず、「きょうだいの同胞葛藤」を考える必要がある。なぜなら、きょうだいと ASD 児・者は障害の有無によって、そもそも同じ土俵

に立っていない。だからこそきょうだい「特有の悩み」(Meyer & Vadasy, 1994)が生まれるのである。以上のことから筆者は、兄弟姉妹関係が持つ複雑さ及び障害児・者が家族にいることによる複雑さから、Sibling Rivalryを含んだ家族関係全体の概念として「きょうだいの Sibling Complex」を提唱したい。

特に、本論文では ASD 児・者のきょうだいに対象を限定している。したがって「ASD 児・者のきょうだいの Sibling Complex」とは、「**ASD 児・者のきょうだいの Sibling Complex**」:「きょうだいは ASD 児・者への敵意などの攻撃性と両親への依存愛情欲求を向ける。また社会の理解度によって動く家族との関係性に巻き込まれる。そこから両親・社会によるコンテイン及び両親カップルへの同一化を経て、ASD 児・者との心理的な距離をとって自分らしさを形成して昇華へと向かい、ASD 児・者を全体対象として捉えて抑うつポジションへと進む一連の心理社会的発達プロセス」と定義づけた。きょうだい-ASD 児・者-両親-社会という関係性の中で生じるきょうだいが体験する葛藤の複合体が「ASD 児・者のきょうだいの Sibling Complex」であり、きょうだいはこの複合体における体験を通して心理的な発達を遂げていると推察される。

### 2-1-3. Sibling Complex シブリング・コンプレックスを越えるためには

では、このシブリング・コンプレックスをきょうだいが越えていくためには、何がサポートとなるのだろうか。従来のきょうだい支援を最初に言及したのは Holt (1958) だと考えられる。その後、欧米において「Sibshop」(Meyer & Vadasy, 2008) や Sibs org UK (2021) など、障害についての心理教育や母子交流の機会を提供するプログラムが考案されてきた。日本においても、きょうだいと母親の宿泊やレクリエーションが行われている(平川, 2004; 阿部・神名, 2013)。しかし、その問題点として、障害についての知識や対応を身につけるといった教育的な支援としては成立するものの(柳澤, 2007)、その実、親睦会以上になり得ていないという指摘も見られていた(玉井, 2004)。これらのプログラムにおけるキーパーソンは「母親」であり、母子関係に介入することによってきょうだいの寂しさや不満を和らげることが目的のようである。本論文においても、親に自分の気持ちを受

け止めてもらうことはきょうだいが主体性を発揮していく上で重要な要因であると考えられた。それは研究Ⅲでは特に母親に気持ちを受け止めてもらうのか、あるいは母親の気持ちを受け止めているのかといった「気持ちのやりとり」が母親との間でどれだけ交わされているのかがポイントであると示された通りである。しかし、本論文ではそこへさらに「父親」の存在と「社会」との関わりという視点もきょうだい葛藤を越えるために必要なサポートとなることを示唆した。

では父親がどのように関わると良いのか。それは e. 関心を向けてほしい (Ⅱ) というきょうだいの潜在的なニーズを満たすような関わりであると考えられる。エディプス・コンプレックス (Freud, S., 1909) において父親の存在は子どもを脅かす存在である一方、同一化の対象となる良い側面も多分に含んでいる。子どもがいかにかのことに気づき、父親の良い側面を取り入れていけるのかどうかが心の発達において重要であると考えられている。しかし、シブリング・コンプレックスにおいては父親が直接的な脅威となるのではない。e. 関心を向けてほしい (Ⅱ) というきょうだいの感覚に対して背中を向けるのではなく眼差しを向けることが重要になってくる。もちろん、そこには個別性を見れば父親自身の特性や、育ちの影響も大きく絡んでくる。しかしそれでも関心を向けるのか否かだけでもきょうだいにとってはシブリング・コンプレックスから抜け出す一歩になりうる。つまり、父親が不在の影響がきょうだいのような特有の経験をしている存在にとってはより大きく出てくるものと推察される。ただし、これは必ずしも父親が担わなければならないというわけではない。きょうだいにとっての自我理想となるような父親的な存在からの眼差しによって十分に補填されるものでもであると推察される。

きょうだい葛藤を越えるために重要なもうひとつの要因として、社会の対応が挙げられる。きょう代いは k. どのように思われるか心配 (Ⅳ) という思いを抱きやすいため、周囲の反応をよく見ている。それは研究Ⅳで示された〈不安ゆえの対処〉にもある「顔色を見て合わせる」というきょうだいの社会に対する姿勢にも表れている。きょう代いがどのようなライフステージにいようと社会との接点は避けられないが、特に幼い時期において体験する ASD 児・者の兄弟姉妹にることによる社会の反応は、その後きょうだいのシ

ブリング・コンプレックスが残るのか、それとも越えられるのかといった状況を左右するひとつの要因となりうることが示唆された。例えば、学校で揶揄われるのか、それとも一緒に遊んでくれるのかといった体験であっても、きょうだいに与える影響は計り知れない。もちろん、そこにはきょうだいのパーソナリティや家族の対応などによって大きな問題にはならない可能性も十分に考えられるが、だからと言ってそうした社会との接点においてきょうだいが何を感じているのかを見過ごすわけにはいかない。社会との接点でどのような体験をしているのか、そこで何を感じているのかを言語化していくことがシブリング・コンプレックスに埋没してしまう危険性を減じていくものと考えられる。

治療場面における臨床的な示唆としては、きょうだいが臨床場面で治療者の目の前に現れた時、初めからこれらの「シブリング・コンプレックス」に困っていると自ら述べるとは考えにくい。多くは何らかの症状を形成し、その症状を困りごととして述べるだろう。その症状の背後にある葛藤体験は、上図のように非常に入り組んでいると考えられる。しかし、その症状の背後を考える際にこれらの概念・視点を持って家族歴や生育歴を見つめ直すことが事態の解決に資する可能性は十分に考えられる。大瀧（2018）はきょうだい研究において「1人の生を生きる人としての体験や影響について探求することが重要」と述べたが、研究だけでなく臨床においても、探求の試金石として本研究で得られた知見が役立つと考えられる。

## 2-2. 5つの家族像におけるきょうだい

### 2-2-1. 5つの家族像の特徴

研究Ⅰ～Ⅳにおいて、きょうだいが生きる家族像を5つに分類し、各家族像におけるきょうだいの体験を論じた。これらの分類ときょうだいの体験の中核的な性質を抽出すると、次のTable 14のように整理される。各項目は、きょうだいと各対象の関係性で生じる特徴を示している。

Table 14 5つの家族像と各家族像におけるきょうだいの体験

	両親との関係性	ASD 児・者との関係性	社会との関係性
I. 【一体感のある家族】	1人の子ども	愛情 (+)	昇華
II. 【分断している母権的家族】	母性と偽りのカップル	お世話の対象	偽りの成熟
III. 【分断している父権的家族】	父性への同一化	希薄	適応
IV. 【解体している家族】	役割の逆転	偽りの親子	脆弱なケア・テイカー
V. 【凝集している家族】	自立・成長 (-)	憎悪 (+)	心理的引きこもり

各家族像におけるこれらの性質をふまえ、その特徴と、そこで生きるきょうだいの在り方をまとめる。

#### I. 【一体感のある家族】

この家族像では両親が情緒的に繋がり、カップルとして成立している。ASD 児・者がいても愛情を産出し、その成長・発達に希望を失わず、悲しみ・辛さをコンテインしながら、考える機能が働いている家族である。この家族において、両親は ASD 児・者がいることできょうだいが必然的に体験する抑うつ的苦痛や絶望、迫害不安を否認、あるいは社会に投影することなく、両親のカップル性を持ってコンテインし (Bion, 1962)、愛情を生み出していくことができる。きょうだいは 1 人の子どもとしての立場を享受できることから、屈託なく [本当の気持ちを出す] (II) ことができ、より主体的になっていくことが可能となる。ASD 児・者との間では、愛情を生み出す両親を取り入れて同一化し、ASD 児・者に対して愛情を向け、その存在を素直に受け入れていくことになると考えられる。きょうだいが社会に対峙した際も [ASD 児・者に関わってくれて感謝する] (IV) といった社会の良い側面に目が向きやすく、[受け止めてくれる] という期待も持つだろう。こうした両親カップルの健康的な側面を取り入れることで、ASD 児・者がいることによって社会との間で体験する葛藤は健康な躁的防衛によって対処することが可能となり、より社会に向かって歩みを進めていくと推察される。その結果、家族とは情緒的に繋がりがながらも [関わり

の広がり]を体験し、きょうだい自分らしく自らの人生を歩んでいくことになると考えられる。

## II. 【分断している母権的家族】

ここでは家族が母性と ASD 児・者が中心となることで父性は後景へと追いやられ、父性の不在が引き起こされてしまう。これによって良性機能が働く余地が狭まり、家族内の父性的な機能は母親が全てを担うか、コミュニティに投影されてしまう家族である。母性がある機能の特質は「受容する」「抱えこむ」(Houzel & Rhode, 2005)であるが、社会を象徴し同一化対象となるはずの父親の存在が薄いことから、きょうだいが家族関係に囚われていく危険を孕んでいる。こうした家族像においては、きょうだいは母親と偽りのカップル性を生み出しやすい。これは母親的人物が父親的人物を排除しようとしているのを目にし、自らも排除されないよう母親的人物に合わせるのと同じように、きょうだいが社会からも排除されないよう「自分からは語らない」し、「顔色を見て合わせる」ことに繋がるだろう。また社会から「どのように思われるか心配」という不安も生じ、「語りづらいからはぐらかす」ことになると考えられる。ここでは、ASD 児・者がいることによって感じる絶望感や惨めさが漂い、きょうだいが社会へと向かう歩みを鈍らせてしまうかもしれない。社会との間ではお世話係の経験を活かし、ケア・テイカーとしての立場を選択しやすいと考えられるが、その立場に居座り続けることで結果的に母性との関係に囚われ続けてしまうと推察される。

## III. 【分断している父権的家族】

この家族像は、【分断されている母権的家族】と同じく両親のカップル性が弱く、ASD 児・者と母親のカップル性が強まっているものの、父親的人物が排除されておらず、家族内で父性が生きている家族像である。これにより、父性の持つ「切り分ける」「侵入する」といった特質 (Houzel & Rhode, 2005) が際立ってくるのと同時に、きょうだいにとって社会との接近が容易にもなりうる。つまり、社会の象徴たる父親に同一化していくこと

は、すなわち社会との関わりを持つことを意味し、家族の囚われに巻き込まれずに済む可能性はあるだろう。社会との間では、必然的に体験する抑うつ的苦痛や惨めさを可能な限り体験しないよう「[気を遣われるのを避ける]」ように振る舞ったり、「[自分がどう思われるかには関係ない]」と距離をとることになるだろう。このように、否認に基づく躁的防衛も機能することで健全な思春期が展開する可能性があるが、両親に対する攻撃性や依存は不十分となるため思春期が頓挫してしまうリスクも孕んでいる。

#### IV. 【解体している家族】

家族内に蔓延る強い迫害不安によって、家族全体が解体と混乱に支配されている家族である。この解体・混乱が進めば、家族は離散してしまうことになるだろう。ここでは必然的に親と子、きょうだい間のバウンダリーが失われ、きょうだいも混乱を引き受けるという役割の逆転が生じてしまう「役割逆転家族」(Meltzer, D. & Harris, M., 2013)の性質を帯びることになると考えられる。こうした状況下においては、家族のことについて「語りづらいからはぐらかす」ことがある一方で、「経験を活かす」しかなく、職業選択はおのずとケア・テーカー的な職業となることは想像に難くない。しかしそもそもその役割は家族内の混乱の上に成り立っているため、限界を迎えやすいかもしれない。この家族の中にはきょうだいが発達していく上で同一化の対象となる人物がいないため、生きる指針がなく心理的に右往左往してしまう。唯一の方向性が経験を活かすという意味でケア・テーカーになることだが、その役割はそもそも家庭における混乱の上に成り立っているため、破綻が生じやすい可能性が推察される。

#### V. 【凝集している家族】

ここでは ASD 児・者の持つ障害が家族の中心として母親と ASD 児・者のカップル性が前提となって両親のカップル性が強まっており、悪性の凝集が生じている家族である。家族間の距離が心理的に近づき過ぎることで家族の良性機能が働く空間がなくなり、絶望感や抑うつ的な痛み、迫害不安だけが漏れ出ることで、真っ当な自立や成長といった希望が



見出されることなくかき消されてしまう。そのため、ASD 児・者は表面的な自立・成長を両親から理不尽に望まれ、それを達成できない弱者として位置付けられることで、結果的に親元から離れていくことができなくなってしまうと考えられる。こうした ASD 児・者を前にきょうだいは、両親に同一化することできょうだい自身も ASD 児・者を弱者とみなし、自分の方が力を持っていると相手を卑下することで憎しみを向けて満足するという倒錯的なあり方に陥ることがあるかもしれない。また、そうした ASD 児・者への攻撃性はきょうだいに迫害不安を引き起こすが、家族内では良性機能が乏しいため社会に投影されていく。そのため、きょうだいは社会からの攻撃性におびえ、恐怖することから心理的に引きこもってしまう場合が推察される。

#### 2-2-2. 5つの家族像と精神分析過程

5つの家族像を示すことで、きょうだいの多様な体験を見出すことができた。しかし、これらの家族像はそれぞれがどのように関連しているのだろうか。Meltzer, D. & Harris, M. (2013) はそもそもの家族類型を時間の経過に伴って変容していくものと位置付けていることから、きょうだいが生きる家族像もそれぞれに連続性があると考えられる。この連続性を捉える視点として、Meltzer (1967) の「精神分析過程」を援用する。Meltzer (1967) は、個人（患者）と対象（分析家）の関係性が転移の変容を通して展開する様子を「精神分析過程」という一連の段階で提示した。この転移の変容を通して観察される段階の連続性は、原初的な対象関係の発達の過程、すなわち依存から自立へのプロセスを明示している。ここで、先に整理した 5 つの家族像を「精神分析過程」になぞらえて理解することを通して、きょうだいにとっての依存から自立へのプロセスをより深く捉えることを試みる。これにより、きょうだいが家族内・外との無意識的な交流によってその対象関係を発達させる過程を描き出すことができると考えられる。

以下に Meltzer (1967) と Meltzer の理論を体系的に整理した Cassese (2001) による「精神分析過程」の段階に従い、整理していく。

## Phase I. 転移の収束と深化－【凝集している家族】

この最初の段階では、きょうだいは分離によって引き起こされる見捨てられる不安を過剰な投影同一化 (Meltzer, 1967) によって防衛することが中心となる。そもそも投影同一化は Klein (1946) が妄想－分裂ポジションとの関連で述べた概念であるが、妄想－分裂ポジションにおいて、乳児はスプリッティングを用いて不安と破壊衝動を排除しようと試みる。この排除された部分の対象の中に投影され、その対象はスプリット・オフされた部分に同一化されることとなる。このように、Klein は通常の投影同一化が自己のある部分の投影であることを想定していたが、Meltzer は投影される部分が自己の全体に及べば及ぶほど投影同一化も過剰になってくることを指摘した (Meltzer, 1967)。自己の大部分が対象に投影され、同一化することで、対象との自己の区別がなくなり、対象と自己のバウンダリーが消失することで分離が否認されるのである。このように、対象と自己の区別がなくなっている状態は、本論文で導きだされた【凝集している家族】の在り方と重なる。

【凝集している家族】とは ASD 児・者の障害が中心となって展開する家族像であり、そこでは自立や成長の希望がかき消されてしまっている。つまり、家族からの分離がないことにされ、同時に、そこで生じる分離不安、見捨てられる不安が否認されてしまう。こうした過剰な投影同一化が家族内で作動している状態が【凝集している家族】の特徴であると考えられる。また、Meltzer (1975) は自閉心性 (自閉スペクトラム障害の中核群と自閉症傾向群に共通する心的傾向) において過剰な投影同一化が生じやすいことも指摘した。心理的な自己統合が困難な自閉心性を持つ人は分離に耐える能力が欠如しているからこそ、自身の統合を保つために外的対象に完全に依存するために過剰な投影同一化を用いると述べたのである。したがって、ASD 児・者がいるからこそ、家族内でも過剰な投影同一化が生じやすいリスクが潜んでいるとも言えるだろう。

ここから次の段階へ進むには、過剰な投影同一化を消退させ、自己と他者の区別をつけていくことが必要となってくる。

## Phase II. 地理的混乱の整理－【解体している家族】

この段階では、きょうだいは Phase. I の自他が未分化状態から進んで対象と自己の区別ができつつあるが、いまだ部分対象的である。また心的な苦痛や迫害不安などを抱えることができず、依然として外的対象の中に向けて排除することが主な防衛になっている。さらに、部分対象的であるが故に対象の一部の機能もスプリットされ、その機能が本来あるはずの対象に備わっていないことになってしまう。これは【解体している家族】における役割の逆転と重なる。【解体している家族】においては、両親の親機能が家族内にはびこる混乱によって手元を離れ、きょうだいも担わざるを得なくなっていた。これは同時に、きょうだいが子どもとして享受するはずの機能を手放してしまうことも意味する。こうした家族の中で、きょうだいは親のように振る舞うことで、分離と依存を否認し、偽りの成熟 (Meltzer, 1967) としてアダルト・チルドレンや脆弱なケア・テイカーのような状態像をとると推察される。

この段階から次へと進むには、分離と依存の否認を手放し、親としての機能をもつ外的対象への同一性を確立することが求められる。

## Phase III. 領域的混乱の整理－【分断している母権的家族】

この段階では、Phase. II から進んで対象をある程度のまとまりをもって知覚するが、きょうだいは前性器的な形式で現れるエディプス・コンプレックスによる領域的混乱が引き起こされる。領域的混乱とは、すなわち「満足感への欲求、拡散した性器的な興奮、性感帯とその機能の無区別」(Cassese, 2001) であり、良い機能・対象と悪い機能・対象が入り混じった混乱のことを指している。ここでは、これらの混乱から良い対象・機能を守るため、良い部分は上に配置し、悪い部分を下に配置するという水平スプリッティングが主な防衛機制として作動し、良い対象への理想化と独占欲が高まってくる。このようにエディパルなテーマと絡んで対象の良い側面へ理想化と独占欲が高まる様子は、【分断している母権的家族】における母親との偽りのカップルの形成と同義の事態であると考えられる。つまりきょうだいは、母親の一生懸命なお世話するという良い部分を上方に配置して

取り入れ、障害をもつ子を産んだ罪悪感や心理的苦痛、絶望感といった悪い部分は下方へと配置することで良い部分を守ろうとする事態が生じているといえる。このようにしてきょうだいは、お世話係としての自己を確立していくこととなる。

この段階から次へと進むには、領域的混乱を整理すること、つまり母親との偽りのカップル性が形成されることでどのようなスプリッティングが生じているのかを整理することが必要となる。

#### Phase IV. 抑うつポジションへの入り口ー【分断している父権的家族】

この段階では、きょうだいは抑うつポジションへの入り口に位置しているため、Phase I～IIIより相対的には対象を一定のまとまりがあるものとして知覚するが、いまだスプリッティングや理想化を使って良い部分と悪い部分に分かたれている。悪い部分からは良い部分を破壊する攻撃性が向けられるが、これをいかに守りつつ統合していくかが試される。また、性器的なエディプス・コンプレックスが生じ、父性の持つ補償的で創造的な役割と母性の持つコンテインする役割を内在化していくことが目指される。特に、こうした父性のもつ役割に焦点が合わせられる状態は、【分断している父権的家族】と類似していると考えられる。父性のもつ力は「切り分け」(Houzel & Rhode, 2005)であるが、ここではASD児・者ときょうだいの間に距離を設けることを意味している。すなわち、ASD児・者ときょうだいは全く別の存在であり、積極的に関わる必要はないと分けておくことを指している。こうした切り分けをきょうだいが「自分のことを大事に思ってくれている」という信頼と捉えることができれば、父性の持つ補償的で創造的な能力を取り入れていくことに繋がり、現実適応は決して悪くはないだろう。ただしASDという障害が現実の脅威として、つまり破壊的部分として存在しているため、そこからの攻撃をいかに耐えるかが重要となる。

ここから次の段階へと進むには、ASDという障害が引き起こす破壊的部分からの攻撃に耐え、修復と保護の機能を遂行する良い対象、つまり父性と母性への信頼を確立することが求められる。ただし、この家族は父権的家族であるがゆえに母性が足りず、足踏みす

ることになるかもしれない。

#### Phase V. 離乳プロセスー【一体感のある家族】

この段階は自己の統合や自立への葛藤が特徴である。Phase. I～IVと比較しても、対象を全体対象として捉えることが可能になっていく。きょうだいが、ここまで分かたれていた対象の統合が進むことで生じる抑うつ不安に耐え、両親カップルの摂取同一化がすすみ、同時に依存の達成が為されることによって離乳、つまり自立へと歩みを進めていく段階である。こうした状態は【一体感のある家族】として理解できる。つまり、両親がカップルとして、そして全体対象として存在しており、ASD 児・者に対して愛情をもった姿勢で関わっている。そうした両親カップルを取り入れることできょうだい自身も ASD 児・者に対して自然と両親と同じような姿勢でいることによって、情緒的に繋がりながら 1 人の人としてほどよい距離感で関わるができるようになると考えられる。

以上のように、5つの家族像を Meltzer (1967) の「精神分析過程」を用いて連続性を持って配置することで、各家族像におけるきょうだいの対象関係のあり方が示された。これらを一連のプロセスとして並べると、次のようになると考えられる。

きょうだいは、ASD 児・者がいることによって家族の中で生じやすくなる過剰な投影同一化に巻き込まれ、自己と ASD 児・者の区別がなく[きょうだいだからわかる]という心理的な距離の近さを体験する (Phase. I)。次に過剰な投影同一化が減退しても依然として部分対象的な関係性が主であり、各対象・機能がバラバラに布置する混乱にみまわれている。こうした中できょうだいは[当然のお世話係]のように、混乱の上に親代わりの世話係として家族内に位置することになる (Phase. II)。バラバラになっていた各対象・機能は少しずつまとまりをつけていくが、まとまる際には良い対象・機能／悪い対象・機能とそれぞれで収斂していく。収斂していく過程では、良い対象・機能（一生懸命なお世話など）は母性的な性質を有しており、悪い対象・機能（障害のある子を産んだ罪悪感・抑うつの痛みなど、障害という理不尽）からスプリッティング・オフしておくことで保存し、きょう

うだいは良い対象・機能への同一化を試みる (Phase.III)。同一化を試みる中で、悪い対象・機能からは破壊的な攻撃性が向けられることになるが、この攻撃から耐える補償的・創造的な父性の力が働くことで良い対象・機能の同一性が高められながら、対象としての輪郭がより明確になっていく。きょうだいは補償的・創造的な父性の力へと同一化していくことで現実的な社会への適応へと歩みを進める (Phase.IV)。そしてこれまで部分対象的な関係性にあったものが母性と父性の両者を取り入れていく中で統合され、抑うつ的な痛みを引き起こしながらもその痛みを耐えることで両親カップルとして摂取同一化され、自立へと向かっていく (Phase.V)。

こうした一連の対象関係の発達がきょうだいと ASD 児・者、両親、社会の無意識的な交流下で展開していると推察される。ただし、本来の「精神分析過程」と異なり、現実的には各段階から次の段階へと進むことは困難を極めると考えられる。なぜなら、ASD 児・者のいる家族には、ASD という障害が現実的な制約として働き、家族像の固定化が生じやすいことが想定されるからである。そのため家族像の移行が生じにくく、結果的にきょうだいの対象関係の発達も各段階に留まりやすくなってしまわないだろうか。こうした固定化が生じやすいこと自体がきょうだいが体験する特異性であると考えられる。このような特異性については、次項でまとめる。

さらに、先に述べた「ASD 児・者のきょうだいのシブリング・コンプレックス」は、「精神分析過程」で示唆されたきょうだいの対象関係の発達において、どの段階—家族像においても生じるものと推察される。ただし、各段階—家族像における関係性の特徴から、その表現型は異なるものだろう。たとえば、【一体感のある家族】においては「ASD 児・者のきょうだいのシブリング・コンプレックス」の定義がほぼその通りに展開するだろう。他方、【分断している母権的家族】においては、ASD 児・者への敵意などの攻撃性や両親への依存愛情欲求は否認、あるいは抑圧されて見えにくくなるだろう。いずれにせよ、その表れ方を通してきょうだいとその家族の理解を深めることが可能になると考えられる。

### 2-3. ASD 児・者のきょうだいが体験する特異性

最後に、ASD 児・者のきょうだいが体験する特異性を取り上げる。きょうだいはしばしば、特有の悩み (Meyer & Vadasy, 1994) があるとされ、その中身は、「罪悪感：同胞の障害を自分の責任と思い込んでしまうこと」、「過剰な同一視：自身もいつか同胞と同じ障害をもってしまうのではないかと不安に感じること」、「恥ずかしさ：同胞の障害を恥ずかしく思うこと」、「孤独感：相談すること共感してもらうことがなく孤立している感覚を抱くこと」、「正確な情報の欠如：同胞が持つ障害について正確な情報が欠如していること」、「将来に関する不安：将来（結婚や両親が亡くなった後のお世話など）に関して不安を抱くこと」、「憤り・恨み：同胞に対して憤りや恨みを抱くようになること」、「増える介護負担：家事や同胞の世話を求められること」、「完璧への圧力：良い子でいなければならないというプレッシャーを抱くこと」の8つが挙げられている。こうしたきょうだい特有の悩みの存在は、きょうだいの体験にある種の特異性があることを示唆しているように思われる。

ただし、Meyer & Vadasy (1994) で述べられている「罪悪感」にはさらに別の側面があると考えられる。罪悪感は、自己の価値に関する内的葛藤から生じるもので、苦悩に満ちている心の状態であると考えられる (Hinshelwood, 2001)。また、Klein, M. (1948) が述べた罪悪感とは、抑うつポジションにおいて対象の認知が部分対象から全体対象へと向かう中で、これまで悪い対象だと思って攻撃していた対象が、実は良い対象と同一の対象であることを知り、主体が激しい自責の念から対象が苦しむのを悔やむ時の感情のことを指している。この定義に照らし合わせると、Meyer & Vadasy (1994) の罪悪感は、ASD 児・者の障害を自分のものと思い込むことというきょうだいの「自分が影響の根源である」という万能的な空想の元に生じている感覚であり、Klein の述べた罪悪感とは異なるものであると考えられる。ここで見えてくる他の側面として、きょうだいは ASD 児・者へ親の関心が向くことを仕方がないとしながらも、寂しさからくる攻撃性を向けていたところ、親から関心を向けてもらうことできょうだい自身も ASD 児・者の成長している側面へ目が向けられるようになり、「障害」という部分に引っ張られて攻撃性を向けていた対

象（部分対象としてのASD児・者）も発達するひとりの人間であると気付く（全体対象としてのASD児・者）ことで引き起こされるものが罪悪感であると考えられる。このように、障害ゆえに引き起こされるきょうだいのシブリング・コンプレックスでみえる家族全体の力動関係は、きょうだいの特異性であると考えられる。また、前項で述べた5つの家族像での体験や、「精神分析過程」における各段階での固定化傾向も、それ自体がきょうだいの特異性として挙げられるだろう。

さらに、きょうだいはその多くが親よりも長く人生をともにする（大瀧, 2012）。幼少期の頃から生活をともにし、家族として存在する。現実的には、場合によってはグループホーム等で分かれて生活することにもなるが、家族としての繋がりがなくなることはない。小さい頃から常にその存在が関係性の中に入り込んでおり、慢性的に影響を受ける／与える存在である。しかし、同時にその障害特性ゆえに一緒の時間を過ごしていても言語的なコミュニケーションが必ずしもうまくいかない。一般的な兄弟姉妹同士においてもコミュニケーションのズレや性格的な不一致により衝突が生じることは避けられないが、ASD児・者ときょうだいであっても同様だろう。さらに、そこで衝突したとしてもASD児・者のもつ特性によって反発しても変わらないため、言語的なやりとりが成立しにくく、結果として双方向的なやりとりが維持されにくい。そのため、家族なのに繋がれないという感覚を抱いたり、あるいはすでに述べたような家族像の中での体験を断続的に受け続けることとなる。こうした慢性的な影響を受け続ける／与え続けることもきょうだいの体験する特異性のひとつであるといえるだろう。ただし、言語的なやりとりが生じにくいからといってきょうだいとASD児・者が繋がれないとは限らない。なぜなら、情緒的な繋がりは必ずしも言語的なやりとりのみによって生じるのではなく、非言語的な交流、無意識的な交流によっても形成されるからである（Bion, 1962）。非言語的、無意識的な水準での交流が起きているからこそ、「罪悪感」や「将来の不安」といった特有の悩みが生まれてくるのである。こうした特有の悩みは、すぐに消え去ることはない。重要なことは、そうした特有の悩みを抱えうるのだときょうだい自身とその周囲が理解し、その悩みを抱えながらも生きていく中で発達をとげていくことだと考えられる。



以上のように、これらの複数の特異性を体験しながら、自立しようともがくことがきょうだいの苦悩であり、同時にその体験から得難い心の発達を遂げる可能性も秘めているといえるだろう。

### 第三節 本論文の限界と今後の課題

本論文の限界はいくつか挙げられる。まず、研究協力者の属性については検討する余地があるだろう。本論文の研究協力者は、いずれもその家族が地域の訓練会等に参加している家族のきょうだいである。したがって、きょうだいや ASD 児・者への親の向き合い方や、その親の姿勢をみたきょうだいであるという点は考慮すべきであり、本論文の分析で得られた結果とは異なるプロセスを辿る可能性も十分に考えられる。また、性別や出生順位に焦点を当てることも必要だろう。本論文で得られた結果もきょうだい-ASD 児・者の組み合わせを絞った研究を重ねることで、その関係性特有の事象が見出せるかもしれない。さらに、ASD 以外の障害種別の場合や、ASD の特性の程度による違いも見られるかもしれない。こうしたさまざまな条件を統制しながらの研究には困難が付きまとうが、今後の課題として1つずつでも明らかにしていく必要があると考えられる。

上記とも関連するが、本論文における個別性も考慮する必要があるだろう。本論文では M-GTA を用いて、「11 名の研究協力者」でなく、分析焦点者を「青年期以降の ASD 児・者のきょうだい」としている。そのため、基本的には「青年期以降の ASD 児・者のきょうだい」に広く当てはまるであろう結果図を生成した。さらに、その結果図を精神分析的な理論・概念で解釈し、より臨床的に有用な視点への拡大を試みた。しかし、それでもなお、この結果図では説明しきれない事例もあるだろう。繰り返しになるが、M-GTA の1つの特色として、「三位相のインターラクティブ」があげられる。この内の第三相として、M-GTA で生成された結果図は、さらに臨床場面で研究結果を読んだ各々が検証し、さらに結果図を精緻化・拡大していくという研究結果と読者の相互作用もその方法論に含めている

(木下, 2020)。本論文においては研究結果と読者の間に生じる乖離を縮めるために精神分析理論を用いた解釈を行ったが、それでもなお、きょうだいの体験全てを網羅しているとは言えないだろう。そこにはきょうだい各個人の人生があるからである。したがって、今後は臨床研究においても今回の結果図、および5つの家族像を用いながら、きょうだいについて、さらに検討していく必要があると考えられる。

また、今回得られた結果図や5つの家族像を、さらに他のパラダイムによって検証することも今後の課題としてあげられる。具体的には、各結果図および5つの経路の客観主義のパラダイムによる検証、臨床における症例を通じた検討などが必要だろう。

#### 第四節 本論文の意義

本論文において、ASD 児・者のきょうだいに注目し、ASD 児・者がいることによってきょうだいが家族内・外で体験する葛藤過程がどのようなものなのか、その整理を試み、さらにその葛藤過程を通してどのような心理的発達を遂げているのかを検討した。きょうだいの「家族の中の第三者性」に着目したASD 児・者と両親の関係性の形成プロセス、きょうだいの「当事者性」に着目したきょうだいとASD 児・者、両親、社会の各関係性における葛藤過程とそれを通して心理的発達の結果図、そしてそれらを統合した全体像で Sibling Complex というきょうだいが体験する複合体を提示できたことは、臨床場面で出会う可能性のあるきょうだいを支援する上で示唆に富む視点を提供できた点に本論文の意義があると考えられる。また、きょうだいが生きる家族像の在り方を分類し、その特徴について論じた点も、これまでのASD 児・者がいる家族関係全体を理解する上で新たな視点を提供できたと考えられる。さらに、本論文では方法論をあえて一貫させ、M-GTA の限界を超えてより臨床に繋げる試みとして、考察において精神分析研究お伝統的な手法を掛け合わせて概念・結果図に対して解釈を積み重ねた。これにより、概念・結果図からさらに臨床場面に即した理解を生み出した点も本研究の意義としてあげられる。また、それらの知見からきょうだいの内的な対象関係の発達の様相を明らかにしたこと、そしてきょう

だいの特異性についても論じ、きょうだいだからこそその体験を明らかにしたことも重要な義があるだろう。

きょうだいがそれぞれに体験する家族関係や葛藤は、それそのものがきょうだいの発達に寄与するものであるが、時にその発達を妨げてしまうことにもなりかねない。それらを理解することで歩みを進めることができるようになるが、その一歩を踏み出すことが難しい。本論文がその歩みを支えることに役立つものであることを願っている。

## 引用文献

- 阿部美穂子・神名昌子. (2015). 障害のある子どものきょうだいとその家族のための支援プログラムの開発に関する実践的研究. *特殊教育学研究*, **52**(5), 349-358.
- 安藤寿康. (2003). 双生児・同胞研究法の原理と現状. *臨床精神医学*, **32**(11), 1299-1304.
- Bion, W. R. (1962). A theory of thinking. *Int. J. Psycho-Anal*, **33**, 306-310; republished (1967) in *Second Thoughts*, 110-119. (中川慎一郎訳：考えることに関する理論. 松木邦裕監訳：再考－精神病の精神分析理論. 金剛出版, 2007) (白峰克彦訳：思索についての理論. 松木邦裕監訳：メラニー・クライン トゥデイ①. 岩崎学術出版, 1993.)
- Blos, P. (1962). *On adolescence*. New York Press. (野沢栄司訳. 青年期の精神医学. 誠信書房, 1971.)
- Braconnier, M. L., Coffman, M. C., Kelso, N. & Wolf, J. M. (2018) . Sibling Relationships: Parent–Child Agreement and Contributions of Siblings With and Without ASD. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **48**, 1612-1622.
- Cassese, S.F. (2001). *Introduction to the work of Donald Meltzer*. Karnac Books, London. (木部則雄, 脇谷順子, 山上千鶴子訳. 入門 メルツァーの精神分析論考—フロイト・クライン・ビオンからの系譜. 岩崎学術出版社, 2005.)
- Corsano, P., Musettei, A., Guidotti, A & Capelli, F. (2017). Typically developing adolescents' experience of growing up with a brother with an autism spectrum disorder . *Journal of Intellectual & Developmental Disability*, **42** (2), 151-161.
- 張学偉. (2008) . 発達障害児のいる同胞の自己主張と親子関係との関連. *鹿児島大学医学雑誌*, **60**(1), 1-15.
- Engel, G . (1977). The Need for a New Medical Model: A Challenge for Biomedicine . *Science*, **196**, 129-136.
- エリクソン, E. H. (1950) . *Childhood and Society*. (仁科弥生 (訳) .*幼児期と社会*. みすず書房, 1977).
- Ferraioli, S. J. & Harris, S. L. (2010). The Impact of Autism on Siblings. *Social Work in Mental Health*, **8**, 41-53.
- 藤沢令夫 (訳) (1967) オイディプス王. 岩波文庫.
- Freud, S. (1905d) Three Essays on the Theory of Sexuality. *G. W*, 5, 29-145; *S.E*, 7,

- 123-243. (渡邊俊之訳：性理論のための三篇. 渡邊俊之責任編集 越智和弘・草野シユワルツ美穂子・道籟泰三訳：フロイト全集 6. 岩波書店, 163-310)
- Freud, S. (1909b) Analysis of a Fobia in a Five-Year-Old Boy ('Little Hans'). G. W, 7, 243-377; S.E, 9, 177-204. (ある5歳児男児の恐怖症の分析(少年ハンス). 総田純次責任編集 総田純次・福田覚訳：フロイト全集 10. 岩波書店, 2008, 1-174)
- Freud, S. (1912-1913a) Totem and Taboo: Some Points of Agreement between the Mental Lives of Savages and Neurotics. G. W, 9; S.E, 13, 1-161. (トーテムとタブー. 須藤訓任責任編集 門脇健・須藤訓任訳：フロイト全集 12. 岩波書店, 2009, 1-206.)
- Freud, S. (1916-1917) Introductory Lectures. S. E. 15, 16. (懸田克躬・高橋義孝訳：精神分析入門, 正・続. 懸田克躬・高橋義孝訳：フロイト著作集 1 精神分析入門「全」. 人文書院, 1971.)
- Freud, S. (1923b) The Ego and the Id. G. W, 13, 237-289; S. E, 19. trans. Strachey, J. London: Hogarth Press, 1-66, 1955. (井村恒郎・小此木啓吾訳：自我とエス. フロイト著作集 6. 人文書院, 1970. 263-299.) (本間直樹責任編集 本間直樹・家高 洋・太寿堂真・三谷研壘・道籟泰三・吉田耕太郎訳：フロイト全集 18. 岩波書店, 2007)
- Freud, S. (1923e) The Infantile Genital Organaization: An Interpolation into the Theory of Sexuality. G. W, 13, 293-298; S.E, 19, 139-145. (本間直樹訳：幼児期の性的編成(性理論に関する追加). 本間直樹責任編集 本間直樹・家高 洋・太寿堂真・三谷研壘・道籟泰三・吉田耕太郎訳：フロイト全集 18. 岩波書店, 2007, 233-298)
- Freud, S. (1924d) The Dissolution of the Oedipus Complex. G. W, 13, 395-402; S. E, 19, 171-189. (太寿堂真訳：エディプス・コンプレックスの没落. 本間直樹責任編集 本間直樹・家高 洋・太寿堂真・三谷研壘・道籟泰三・吉田耕太郎訳：フロイト全集 18. 岩波書店, 2007, 301-309)
- 古川樹里・古賀靖之. (2007). 発達障害児をもつ家庭の家族機能における一考察：きょうだいからみた家族機能について. 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要, **37**, 19-31.
- 藤本修(編). (2009). メンタルヘルスの観点から分析する きょうだい. ナカニシヤ出版.
- 原田満里子・能智正博. (2012). 二重のライフストーリーを生きる一障がい者のきょうだいの語り合いからみえるもの. 質的心理学研究, **11**, 26-44.
- 原 幸一・西村辨作. (1998). 障害児を同胞に持つきょうだいの適応に関する質問紙調査. 日本特殊教育学会, **36**(1), 1-11.

- 春野聰子・石山貴章. (2011). 障害者のきょうだいの思いの変容と将来に対する考え方. *応用障害心理学研究*, **10**, 39-48.
- Hinshelwood, R. D. (1991) *A Dictionary of Kleinian Thought*. 2nd ed. London: Free Association Books. (衣笠隆幸総監訳, 福本修・奥寺崇・木部則雄・小川豊昭・小野泉監訳: クライン派用語辞典. 誠信書房, 2014.) .201-216.
- Houzel, D. & Rhode, M. (2005) *Invisible Boundaries Psychosis and Autism in Children and Adolescents*. Karnac Books Ltd. (木部則雄・脇谷順子監訳, 長沼佐代子・五十畑昌子訳: 自閉症の精神病への展開 精神分析アプローチの再見. 明石書店, 2009.)
- 平川忠敏. (1986). 障害児の同胞. *幼年教育研究年報*, **11**, 65-72.
- 堀口大學 (訳). (1950). *ヴェルレーヌ詩集*. 新潮文庫.
- Kaminsky, L. & D. Dewey. (2002). Psychosocial Adjustment in Siblings of Children with Autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **43**(2), 225-232.
- 笠田 舞. (2014). 知的障がい者のきょうだい者のきょうだいが体験するライフコース選択のプロセス—青年期のきょうだいが辿る多様な径路と, 選択における迷いに着目して—. *質的心理学研究*, **13**, 176-190.
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘. (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. *発達心理学研究*, **7**(1), 31-40.
- 木部則雄. (2006). *こどもの精神分析*. 岩崎学術出版社.
- 木下康仁. (2003). *修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い*. 弘文堂.
- 木下康仁・萱間真美. (2005). *修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) について聴く: 何を志向した方法なのか, 具体的な手順はどのようなものか*. *看護研究*, **38**(5), 349-367.
- 木下康仁. (2007). *ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて*. 弘文堂.
- 木下康仁. (2009). *質的研究と記述の厚み: M-GTA・事例・エスノグラフィ*. 弘文堂.
- 木下康仁. (2020). *定本 M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論*. 医学書院.
- Klein, M. (1932) *The Psycho-Analysis of Children*. WMK 2. (小此木啓吾・岩崎徹也責

- 任編訳, 衣笠隆幸訳: メラニー・クライン著作集 2 児童の精神分析, 誠信書房, 1997.)
- Klein, M. (1948) On the theory of anxiety and guilt. *The Writings of Melanie Klein*, vol.3, pp.25-42. (杉博訳: 不安と罪悪感の理論について. 小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳: メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界. 誠信書房, 1985.)
- Klein, M. (1957) Envy and Gratitude. *The Writings of Melanie Klein*, vol.3, pp.176-235. (松本善男訳: 羨望と感謝. 小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳: メラニー・クライン著作集 5 羨望と感謝. 誠信書房, 1996.)
- 小嶋章吾・寫末憲子. (2015). M-GTA による生活場面面接研究の応用—実践・研究・教育をつなぐ理論. ハーベスト社.
- Kovshoff, H., Cebula, K., Tsai, H-W. J. & Hastings, R.P. (2017) . Siblings of Children with Autism: the Siblings Embedded Systems Framework. *Current Developmental Disorders Reports*, **4**, 37-45.
- 桑山友里. (2017). 発達障害児・者のきょうだいに関する研究と支援の動向. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, **17**(1), 63-72.
- Levy, D. M. (1936). Hostility patterns in sibling rivalry experiments. *American Journal of Orthopsychiatry*, **6**(2), 183-257.
- Levy, D. M. (1939). Sibling rivalry studies in children of primitive groups. *American Journal of Orthopsychiatry*, **9**(1), 205-214.
- Lewis, O. (2003). Five families: Mexican case studies in the culture of poverty. New York: New American Library. (高山智博・染谷臣道・宮本勝訳: 貧困の文化—メキシコの〈5つの家族〉. 筑摩書房.)
- Mates, T. E.. (1990). Siblings of autistic children: Their adjustment and performance at home and in school. *Journal of Autism and developmental Disorders*, **20** (4), 545-553.
- Mascha, K. & Boucher, J. (2006). Preliminary investigation of a qualitative method of examining siblings' experiences of living with a child with ASD .*The British Journal of Developmental Disabilities*, **52**(1), 19-28.
- Mayer, D. J. & Vadasy, P. F. (1994) . Sibshops: Workshops for siblings of children with special need; Revised. *Paul H. Brookes Pub Co.*
- McHale, S. M. & Gamble, W. C. (1989) . Sibling relationships of children with disable and

- nondisabled brothers and sisters. *Developmental Psychology*, **25**(3), 421-429.
- McHale, S. M., Sloan, J. & Simeonsson, R. J. (1986) . Sibling relationships of children with autistic, mentally retarded, and nonhandicapped brothers and sisters. *Journal of autism and developmental disorders*. **16**(4), 399-413.
- Meaden, H., Stoner, J. B., & Angell, M. E.. (2010). Review of literature related to the social, emotional, and behavioral adjustment of siblings of individuals with autism spectrum disorder. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, **22**, 83-100.
- Meltzer, D. (1967). *The Psycho-analytical Process*. The Roland Harris Trust Library, London. (松木邦裕監訳, 飛谷渉訳. 精神分析過程. 金剛出版, 2010.)
- Meltzer, D. & Harris, M. (2013). *The Educational Role of the Family : A Psychoanalytical Model*. Karnac Books Ltd. (木部則雄・池上和子他訳. こどものこころの環境 現代のクライン派家族論. 金剛出版, 2018)
- 三原博光. (2000) . 障害者ときょうだい. 学苑社.
- 宮本知香. (2007) . 障がい児・者のきょうだいの心理的变化と課題. *立正大学福祉研究*, **9**, 53-62.
- 西村辨作. (2004) . 発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題. *児童青年精神医学とその近接領域*, **45**(4), 344-359.
- 西村辨作・原幸一. (1996) . 障害児のきょうだい達 (1) . *発達障害研究*, **18**(1), 56-67.
- 沖潮 (原田) 満里子. (2016). 障害者の兄弟が抱える揺らぎ：自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し. *発達心理学研究*, **27**(2), 125-136.
- 小此木啓吾・北山修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之. (2002). *精神分析辞典*. 岩崎学術出版社.
- 大瀧玲子. (2011) . 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観：きょうだい担う役割の取得に注目して. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, **51**, 235-243.
- 大瀧玲子. (2012). 軽度発達障害児・者のきょうだいが体験する心理プロセス—気持ちを抑え込むメカニズムに注目して—. *家族心理学研究*, **26**(1), 25-39.
- 大瀧玲子. (2012). 成人期にある知的障害を伴わない発達障害者のきょうだいの体験に関する一考察—ある姉妹の「羅生門」的な語りの分析からきょうだいの多様性を捉える試み. *質的心理学研究*, **17**, 143-163.
- Rosenberg, M. S. (2000) . Everything you need to know when a brother or sister is autistic.



*Rosen Publishing Group.*

Salomone, E., Shephars, E., Milosavljevic, B., Jhonson & M. H. Charman. (2018). Adaptive Behaviour and Cognitive Skills: Stability and Change from 7 Months to 7 Years in Siblings at High Familial Risk of Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **48**, 2901-2911.

清水溪介・板倉憲政. (2021). 障害児・者のきょうだいの子ども時期における家族内役割と青年期における過剰適応との関連. *家族心理学研究*, **34**(2), 142-156.

白佐俊憲. (2004). きょうだい関係とその関連領域の文献集成Ⅲ 研究紹介編. 川島書店.

Shivers, C. M., Jackson, J. B. & McGregor, Casey, M. (2018). Functioning Among Typically Developing Siblings of Individuals with Autism Spectrum Disorder: A Meta-Analysis. *Clinical Child and Family Psychology Review*, **22**, 172-196.

Sibs org UK. (2021). Sibs For brothers and sisters of disabled children and adults. (<https://www.sibs.org.uk/>) 2023年3月31日.

Stampoltzis, A., Defingou, G., Antonopoulou, K., Kouvava, S. & Polyshoronopoulou. (2014). Psycho-social characteristics of children and adolescents with siblings on the autistic spectrum. *European Journal of Special Needs Education*, **29**(4), 474-490.

杉岡良彦. (2018). 生物社会-スピリチュアルモデルと精神的人格. *医学哲学 医学倫理*, **36**, 32-41.

Sulmasy, D. (2002). A Biopsychosocial-Spiritual Model for the Care of Patients at the End of Life. *Gerontologist*, **42**(3), 24-33.

橘 英弥・島田有規. (1998). 障害児・者のきょうだいに関する一考察—障害をもったきょうだいの存在を中心に. *和歌山大学教育学部紀要教育科学*, **48**, 15-30.

高野恵代・岡本裕子. (2011). 障害者のきょうだいに関する心理学的研究の動向と展望. *広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部*, **60**, 205-214.

高野恵代・岡本裕子 (2015). 重度障害者家族のきょうだい・母親・障害者の関係性の類型化：きょうだいからみた母子関係・同胞関係に着目して. *家族心理学研究*, **29**(1), 19-33.

高瀬夏代・井上雅彦. (2007). 障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性. *発達心理臨床研究*, **13**, 65-78.

高津春繁 (訳) (1973) コロノスのオイディプス. 岩波文庫.

- 竹下 浩. (2020). 精神・発達・視覚障害者の就労スキルをいかに開発するかー就労移行支援施設および職場における障害者支援を探る. 遠見書房.
- 田倉さやか. (2007). 兄弟姉妹と障害者同胞との関係ー母親の養育態度と兄弟姉妹関係との関連ー. *児童青年精神医学とその近接領域*, **48**(1), 39-47.
- 田倉さやか. (2008). 障害者を同胞にもつきょうだいの心理過程ー兄弟姉妹関係の肯定的認識に至る過程を探るー. *小児の精神と神経*, **48**(4), 349-385.
- 田倉さやか. (2012). 障害児者のきょうだいの心理的体験と支援. *障害者問題研究*, **40**(3), 18-25.
- 田中真理. (2016). 障害児支援を考えるモノサシとは：多義性と合理的配慮. *発達心理学研究*, **27**(4), 312-321.
- 谷川友子. (2008). 障がい児を同胞にもつきょうだいの家族観に関する探索的検討. *弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要*, **5**, 7-15.
- 竜野航宇・山中冴子. (2016). 障害児のきょうだい及びきょうだい支援に関する先行研究の到達点. *埼玉大学紀要教育学部*, **65**(2), 81-89.
- Tinneke, M. & Herbert, R.. (2011). The Quality of Life of Siblings of Children With Autism Spectrum Disorder. *Exceptional Children*, **78**(1), 41-55.
- Tomeny, T. S., Barry, T. D. & Fair, E. C. (2017). Parentification of Adult Siblings of Individuals with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Child and Family Studies*, **26**, 1056-1067.
- 富永恵美子・松永しのぶ. (2013). 自閉症者の成人きょうだいー同胞との関係の変遷ー. *小児の精神と神経*, **53**(3), 245-257.
- Toseeb, U., McChesney, G. & Wolke, D. (2018). The Prevalence and Psychopathological Correlates of Sibling Bullying in Children with and without Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **48**, 2308-2318.
- Tozer, R., Atkin, K. & Wenham, A. (2013). Continuity, commitment and context: adult siblings of people with autism plus learning disability. *Health and Social Care*, **21**(5), 480-488.
- Winnicott, D. W. (1948) Paediatrics and Psychiatry. In: *Collected Works: Through Paediatrics to Psychoanalysis*. London: Karnac, 1992. (北山修監訳：小児医学から児童精神分析へーウィニコット臨床論文集Ⅰ. 岩崎学術出版社, 1999.)

Winnicott, D. W. (1953) Transitional objects and transitional phenomena. *Int. F. Psychoanal.* 34: .89-96; republished (1971) in D. W. Winnicott, *Playing and Reality*. Tavistock. (橋本雅雄訳：移行対象と移行現象. 橋本雅雄訳：遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, 1979. ) Winnicott, D. W. (1956) Primary Maternal Preoccupation. In: *Collected Works: Through Paediatrics to Psychoanalysis*. London: Karnac, 1992. (小坂和子訳：原初の母性的没頭. 北山修監訳：小児医学から児童精神分析へーウィニコット臨床論文集. 岩崎学術出版社, 2005.)

山本美智代・金 壽子・長田久雄. (2000). 障害児・者の「きょうだい」の体験－成人「きょうだい」の面接調査から－. *小児保健研究*, **59**(4), 514-523.

柳澤亜希子. (2004). きょうだいの自閉性障害の概念発達に関する研究－その他の障害との比較を通して－. *広島大学大学院教育学研究科紀要*, **53**, 103-109.

柳澤亜希子. (2012). 自閉スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性. *特殊教育学研究*, **50**(4), 403-411.

依田 明. (1990). きょうだいの研究. *大日本図書*.

## 要約

本論文は、自閉スペクトラム障害児・者（以下、ASD 児・者）の兄弟姉妹（以下、きょうだい）に焦点をあて、発達プロセスを含んだ ASD 児・者のきょうだいが抱く同胞葛藤の全体像を明らかにすること、きょうだいが生きる環境としての家族全体の関係性を明らかにすること、ASD 児・者のきょうだいの心理社会的発達を明らかにすることを目的とした。

きょうだいが持つ家族の中の第三者性と当事者性という視点から、きょうだいが生きる文脈を①きょうだいから見た ASD 児・者－両親、②きょうだい－両親、③きょうだい－ASD 児・者、④きょうだい－社会という関係性に分類し、4つの研究を行った。まず①きょうだいから見た ASD 児・者－両親では環境としての家族の関係性を検討することを目的とした。続く②～④では各関係性できょうだいが体験する葛藤を捉え、どのような心理社会的発達を遂げているのかを検討することを目的とした。

上記の目的を達成するため、本論文は質的研究として社会構成主義的存在論及び解釈主義的認識論に依拠し、データの分析方法を M-GTA で統一した。M-GTA は人間の社会的相互作用を捉えてディテール豊富なデータを緻密に分析する方法であり、1つの研究テーマに対して複数の分析テーマを設定可能であることから、本論文に適していると判断した。さらに M-GTA の臨床適用への限界を踏まえ、M-GTA で得られた概念・結果図を臨床理論である精神分析理論を用いて再解釈した。これにより、4つの研究で得られた知見の統合を可能にし、きょうだいの語りを複層的かつ多角的に検討し、より臨床に近い理解の枠組みを提示することを試みた。なお精神分析理論はクライン派家族論である Meltzer & Harris(2013)の個人と家族とコミュニティ（社会）の相互作用によって生じる家族と個人の心の在り方に関する精神分析的なモデルと「精神分析過程」(Meltzer, D., 1967)を中心に用いた。

研究協力者は、研究 I では ASD 児・者の青年期以降のきょうだい 9 名（男性 3 名、女性 6 名、平均年齢 27.6 歳）であり、研究 II～IV では 9 名の内 3 名に二度目のインタビューを行い、さらに 2 名を加えた 11 名（男性 4 名、女性 7 名、平均年齢 28.1 歳）であった。インタビュー内容は過去から現在における家族内・家族外の他者との関係性についてであった。

第一に、きょうだいから見た ASD 児・者－両親の関係性に着目し、M-GTA によってインタビューデータを分析した。その結果、「ASD 児・者のきょうだいから見たカップル性を中心とした ASD 児・者と両親の関係性」が見出され、きょうだいからは〈両親のカップル性〉と〈母親と ASD 児・者のカップル性〉を中心とした家族内力動によって【一体感のある家族】と【分断している家族】が生み出されていることが明らかとなった。さらにクライン派家族論により再解釈した結果、I.一体感のある家族、II.分断している母権的家族、III.分断している父権的家族、IV.解体している家族、V.凝集している家族の 5 つの家族像に類型化された。

第二に、きょうだい－両親の関係性においてきょうだいが体験する葛藤に着目し、M-GTA によってインタビューデータを分析した。その結果、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが両親との関係性において体験する葛藤を通して本当の気持ちを出していく

プロセス」が見出された。きょうだいは両親に対して[関心を向けてほしい]が[しょうがない][迷惑をかけられない]という葛藤を体験し、その結果〈良い子でいる〉という偽成熟 (Meltzer, 1967) が生じやすいことを指摘し、真の成熟に向かうために必要な両親の関わりを論じた。また研究 I で類型化された家族像におけるきょうだい-両親の関係性の特徴を整理した。

第三に、きょうだい-ASD 児・者の関係性においてきょうだいが体験する葛藤に着目し、M-GTA によってインタビューデータを分析した。その結果、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが ASD 児・者との関係性において体験する葛藤を通して巻き込まれた関係から脱却を試みるプロセス」が見出された。きょうだいは ASD 児・者の特性という理不尽さに対して[寂しさからくる攻撃性]などを向けるが[特性に反発しても変わらない]ので[しょうがない]とそれを飲み込もうとする葛藤を体験し、きょうだいの主体性が脅かされ自己感が弱まる〈巻き込まれた関係〉に陥ることが推察され、この関係性から抜け出ようと試みるために必要な俯瞰的な視点を得ていく過程を論じた。また研究 II と同様に、研究 I で類型化された家族像におけるきょうだい-ASD 児・者の関係性の特徴を整理した。

第四に、きょうだい-社会の関係性においてきょうだいが体験する葛藤に着目し、M-GTA によってインタビューデータを分析した。その結果、「ASD 児・者がいることによってきょうだいが社会との関係性において体験する語りの葛藤を通して昇華への向かうプロセス」が見出された。きょうだいは社会との間で「語りたけれど語れない」という〈語りの葛藤〉や【本当はわかってほしい】という葛藤を体験し、社会に受け止められていると感じられれば ASD という障害があっても人であるという[多様性の理解]や社会から受けた恩を返そうと[昇華]へと向かうか、受け止められていないと感じた場合に出てくる「なぜ受け止めてくれないのか」といった攻撃性を[昇華]へと向けていく在り方を示した。また研究 II・III と同様に研究 I で類型化された家族像におけるきょうだい-社会の関係性の特徴を整理した。

総括として、Sibling Rivalry から Sibling Complex へと展開させ、その定義を「ASD 児・者への敵意などの攻撃性と両親への依存愛情欲求を向ける。また社会の理解度によって動く家族との関係性に巻き込まれる。そこから両親・社会によるコンテイン及び両親カップルへの同一化を経て、ASD 児・者との心理的な距離をとって自分らしさを形成し昇華へと向かう一連の心理社会的発達プロセス」とした。また I. 一体感のある家族、II. 分断している母権的家族、III. 分断している父権的家族、IV. 解体している家族、V. 凝集している家族を、父性・母性、家族の中の良性機能/悪性機能という観点からきょうだいが生きる環境としての家族の在り方を示した。

さらに家族像の連続性ときょうだいの発達プロセスに着目して「精神分析過程」(Meltzer, D., 1967) に沿って考察し、きょうだいがいかにして抑うつポジションへと歩みを進め、自立へと向かうのかについて論じた。さらにきょうだいが体験する特異性にも触れ、きょうだいだからこそ引き起こされる罪悪感の在り方等についても述べた。

## 付記

### 業績一覧

#### ・きょうだい研究

(原著) 根本泰明. (2017). ASD 児・者のきょうだいからみた家族像：M-GTA を用いて. *白百合女子大学発達臨床センター紀要*, **20**, 3-16.

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、まず初めにインタビューにご協力してくださったきょうだいの方たちへ深く御礼申し上げます。みなさまの体験、思いの語りがなければ、本論文は成り立ちませんでした。本当にありがとうございました。

指導教官の木部則雄先生には幾度となく助けていただきました。それは論文の内容についてだけではないように感じています。論文執筆に迷い、沈みそうになる私に手を差し伸べ、進むべき方向性を示してくださいました。なかなか稿が進まなくとも見放さずにいてくださったこと、心より感謝申し上げます。

堀口康太先生には論文全体を通して細やかにご指導いただきました。また、博士号を持つことの意味についてや、博士論文とは如何なるものなのかについても教えていただきました。その御指導がなければ、博論としての最低限の体裁すら整っていなかったように思います。重ね重ね感謝申し上げます。

涌井恵先生にもとても丁寧にご指導いただきました。拙い私の論文をお読みくださり、研究の構成や伝わりにくい部分について、いつもの確かなコメントを下さいました。改めて感謝申し上げます。

波多江洋介先生にも大変貴重なご指導をいただきました。主に臨床的な観点から、本論文がどのように活かせるのか、活かすためには何が必要なのかをご指導いただけたように思っています。厚く御礼申し上げます。

また、論文審査委員会の委員長の労をお引き受けくださいました水間千絵先生にも御礼申し上げます。細部まで読み込んでくださったおかげで、論文としての精度を底上げすることができました。

このテーマに取り組み始めて、気づけば長い年月が経っていました。決して平坦な道のみではなく、辛く、苦しい時期もありました。それでも、この過程で体験し、得たものが私の今後の人生の糧となることは間違いありません。

最後に、問いへ向き合う場を整え続けてくれた父に、陰に日向に支えてくれた母に、得難い感覚を得る機会を与えてくれた妹に、深く深く感謝します。本当にありがとう。

2023年12月14日

## 付録

【フェイスシート】

【インタビューガイド】

研究協力依頼書及び誓約書

研究参加同意書

研究協力同意撤回書

- ◆ 研究Ⅰ分析ワークシート
- ◆ 研究Ⅱ分析ワークシート
- ◆ 研究Ⅲ分析ワークシート
- ◆ 研究Ⅳ分析ワークシート



【フェイスシート】

年齢      性別      職業

・ 家族構成

・ 同居 or 別居    (→ \_\_\_\_\_ 頃から)

・ 障害のあるきょうだいの性別・年齢

・ 障害名（診断名）

## 【インタビューガイド】

(研究倫理についての説明→誓約書への署名→インタビューの実施)

「本日は貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございます。これよりインタビューを始めさせていただきます。インタビュー中、録音を避けたい箇所等ございましたら、その都度、あるいはインタビュー後いつでもお申し出ください。また、お答えになりたくない質問等につきましては、その旨もお申し出ください。インタビューはICレコーダーで録音させていただきます。またメモもとらせていただきますが、気になる場合にはインタビュー終了後にご覧いただき、必要な箇所を削除いたします。」「それでは、最初の質問です。質問をお聞きになってその内容についてお答えいただくのと同時に、それをどのように感じ、またどのようなところからそう感じたのか、またそこから思いついたことなどご自由にお話してください。適宜質問を挟ませていただこうと思います。何かご質問はございますか？」

以下の質問項目は、1.以降は順不同で提供者の話の流れに沿ってうかがう。

### 現在の親・同胞・周囲の人との関係

1. 現在、障害のある同胞とどのように過ごしているか
2. 母親・父親は自分と同胞にそれぞれどのように関わっているか
3. 同胞・母（父）・自分の3人でみたときの関係性はどのようなものか
4. 両親の関係性はどのようにみえているか
5. 周囲の親しい人（友人やパートナー）とどのように関わっているか

### 過去の親・同胞・周囲の人との関係

6. ○○の頃、障害のある同胞とどのように過ごしていたか
7. ○○の頃、母親・父親は自分と同胞はどのように関わっていたか
8. ○○の頃、同胞・母（父）・自分の三人でみたときの関係性はどのようなものだったか
9. ○○の頃、両親の関係性はどのように見えていたか
10. きょうだいへの見方が変わったなと感じることがあるか→もしあれば、いつ頃、どのような変化があったか
11. ○○の頃、周囲の親しい人（友人やパートナー）とどのように関わっていたか

### その他

12. 自分にとって、障害のある同胞はどのような存在か
13. 今後についてどのように考えているか

※5., 11.は2021年度のインタビュー時のみ

様

**「きょうだいからみた家族関係ときょうだいの体験についての研究」への協力依頼及び同意書**

本日はお忙しいところお時間を割いていただきありがとうございます。以下の「研究の背景」「研究の趣旨」「研究倫理に関する誓約について」をご一読の上、インタビューにご協力していただきたくお願い申し上げます。

**【本研究の背景】**

現在、私は白百合女子大学大学院文学研究科発達心理学専攻に在籍しており、博士論文の作成に取り組んでいます。本研究はその一環として行われるものです。研究テーマにおきましては、指導教員である木部則雄教授、及び白百合女子大学倫理審査委員会の承諾を得ております。

**【研究の趣旨】**

本研究では、障害のあるお子さんがいらっしゃるご家族の中でも「きょうだい」が、ご家族との関わりを通してどのようなイメージを抱いているのかといったことについて、インタビューを通してお聞きしたいと思っております。このインタビューを通じた研究から、「きょうだい」についてのより深いレベルの理解を広げること、「きょうだい」への支援が必要な場合に、その一助となることを目指しております。インタビューは1時間～1時間半程度を予定しております。またインタビューに際し心ばかりではございますが謝礼をご用意しております。

**研究倫理に関する誓約について**

本研究は以下の研究倫理に沿って実施いたします。

- 1) 匿名性を担保し、お名前が公開されることは一切ありません。また研究が公開される際にも人物が特定される可能性のある表現を用いることはありません。
- 2) 研究への協力は、インタビューの最中、事後に関わらずいつでも拒否することができます。また、部分的に発言箇所を削除したい等のご希望がありましたら遠慮なくお申し出ください。
- 3) インタビューの内容は録音・メモをさせていただきますが、録音データはテキスト（文字）化した後、保管の必要がなくなった時点でメモと合わせて完全に破棄します。また昨今の情勢を鑑みて、Zoom等のオンラインでのインタビューも可能ですが、その際も画面録画等はせず、音声のみ録音させていただきます。
- 4) インタビュー内容を分析した結果、改めて伺いたい内容が出てきた場合には、再度インタビューの機会をお願いする場合がございます。また分析の結果がご本人の意識していないものとなる可能性も否定できません。結果にご納得いただけない場合には、別紙の「同意撤回書」にご記入いただくことで、該当データを削除いたします。なお、「同意の撤回」は研究ご参加の自発性ゆえに研究協力が先験的に有する権利となっております。お話しいただく内容の重要性を軽んじているわけではございません。
- 5) インタビューの内容は分析した後、以下の範囲で使用させていただきます。白百合女子大学において提出される博士論文、学会・研究会での発表、学会論文誌等です。
- 6) 研究結果は、ご希望がございましたら2022年3月以降、文書、あるいは実際にお会いしてご報告いたします。研究結果をご希望の方は、「同意書」内の口にチェックを入れ、送付先をお知らせください。

ご不明な点などは研究者にご確認ください。以上研究趣旨や倫理的誓約を読んだ上でご協力いただける方は別紙の同意書へのご記入をお願いいたします。

年 月 日

研究者  
連絡先  
指導教員

白百合女子大学 発達心理学研究室

## 研究参加同意書

研究責任者

白百合女子大学大学院文学研究科

発達心理学専攻博士課程後期

根本 泰明 殿

私は、「きょうだいからみた家族関係ときょうだいの体験についての研究」について、研究趣旨や倫理的誓約についての説明を受けました。研究の目的、方法等について理解し、研究に協力することを同意いたします。なお、協力依頼書及び誓約書・研究参加同意書は2部作成し、研究者と研究協力者で1部ずつ保管することにも同意します。

西暦 年 月 日

ご住所

ご氏名

(自著してください)

研究結果を知りたい。

## 研究協力同意撤回書

研究責任者

白百合女子大学大学院文学研究科

発達心理学専攻博士課程後期

根本 泰明 殿

私は「きょうだいからみた家族関係ときょうだいの体験についての研究」に協力することに同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回すること担当研究者に伝えました。ここに同意撤回書を提出いたします。

西暦 年 月 日

ご住所

ご氏名

(自著してください)

---

本研究に関する同意撤回書を受領したことを証します。

西暦 年 月 日

所属

氏名

◆ 研究 I 分析ワークシート

概念	ASD 児・者による家族成員の使い分け
定義	ASD 児・者が状況に合わせて家族成員の誰とコミュニケーションをとるか主体的に決めているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん (女性・兄) p.5・・・<u>母親がいない時は、その場にいる誰の言うことを聞けば良いのかっていうのは判断してるみたいで、どうしても私しかいなかったら、私の言うことを聞くっていうのは選んでいるみたいで。</u></li> <li>• D さん (男性・弟)・・・弟の中で、これは母とやる、これは父とやるっていうのが決まってて。例えば3人で行っても、父さんと映画を見る。そしたら母は自分の時間だと言ってショッピングモールをふらふらしてみたり。反対に、母と、弟で何かをするっていう時は、父がウロウロするっていう。で、買い物3人で行ったり。</li> <li>• E さん (男性・弟) p.5・・・結構、いろいろ連れて行ってもらえるのが父なので、何かあるとお父さん、お母さん。だから弟はある意味父親と母親を使い分けている。だからなんかこうお買い物行って何かねだりとかは母親。どっか連れて行ってもらえる時は父親。だからあの、弟はたぶんその家族の中でどうやって自分が立ち位置を変えていけば良いのかって言うのは熟知している。これはもう野生の本能じゃないですけど。</li> <li>• H さん (女性・弟) p.4・・・ただ、別に父が弟に関心がないというわけではなくて、休みの日とかそういう遊びの面では一緒になにかお店に行ったりとか、けっこう休みの日は二人で出かけたりとかしてるので、<u>なんか遊びは父と、実際の将来のことだったりっていうのは母とみたいな。感じですね。</u></li> </ul>
理論的 メモ	<p>- ASD 児・者と家族の関係性</p> <p>- 使い分けができていて、ということはある側面ではバランスがとれていると考えられるのではないだろうか。この使い分けができていない、ということで母親ばかりに傾いてしまっているという状況を説明することができる？</p> <p>* 対極例：使い分けができていない→直接的な該当データはなし。→母親との結びつきのみが強い？</p>

概念	ASD 児・者による家族を繋ぎとめる力
定義	ASD 児・者がいることによって家族の離散が防がれている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん（女性・兄） p.10・・・もし障害がなくて普通の子だったら、<u>普通の子って言い方はしないですけど、障害がなかったら、私が二十歳になったら離婚したかったなっていうのを言ってる</u>。なので兄がまあ、そうだったから今離婚しないんだなって思うと、その関係というか。関わりが大きかったのかなって感じがしますね。</li> <li>● E さん（男性・弟） p.15・・・家族に与えてる影響としては、<u>やっぱり一個に、一つになるっていう意味ではあの子がいないと、うーん、なんだか。あの子がいることによって、多分家族がそこに一回戻ってくるっていうことが十分にある</u>。でも誰も弟を気にしてないって人はいないのでうちの家は。そういう影響力があるのかなとは思いますがね。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 家族全体の関係性。</li> <li>- きょうだいからみて、ASD 児・者がいることによって、家族がバラバラにならずに済んでいる。ただし、これはまとまりがある、一体感があるというプラスの極の話でもあれば、なんとかバラバラにならずに済んでいる、というどちらかと言えばなんとか繋ぎ止めている、というマイナスの極の話でもある。連続している？</li> <li>- 爆発と一体感の連続体の中のギリギリ爆発手前？→爆発というかバラバラ</li> </ul> <p>* 対極例：家族をバラバラにしている。ただし、母親とのつながりは堅持されている。むしろ、バラバラになることで母親とのカップル性が際立っている？母親とのカップル性が際立つがゆえにバラバラになる？→母親と ASD 児・者・者の過度なカップル性</p>

概念	お世話を振り分ける
定義	母親が状況によっては ASD 児・者の世話を自分以外に任せているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）・・・だからいつもお目付役で、友達と遊びたいのに、今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると、え、良いよ。って言って。一緒に外で遊んで待ってるとか。</li> <li>• D さん（男性・弟）・・・あとは、母が怒っている時の弟の逃げ、る場所になるとか。まあ二人で怒っちゃう時もあったんですけど。一方で僕が怒ってる時には母が逃げる場所になる、っていう。っていう風には、できていたかなと思いますね。</li> <li>• E さん（男性・弟）・・・うちの母親は…うーん、なんだろう、でも割とこう、彼（弟）の扱いに苦労してはいたけれども、でもなんかまあどこからどっかまでは許容できるし、どこからどこまではきょうだいに任せてるっていうのははっきりしている。例えば、買い物に連れて来た時は、公園で遊ぶのはこうきょうだいに任せて良いとか。っていうのはたぶん、うん。</li> <li>• F さん（男性・弟）・・・だからあの一本当に僕も多分、多分確か直接言われたと思うんですけど、ちょっと弟のこと気にかけてやってくれて。で、あの一例えば弟のクラスに遊びに行ったりもしましたし。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 母親自身の時間の確保を促進？</li> <li>- 母親が他の家族成員にうまく役割を任せている</li> <li>- 母親と ASD 児・者のカップル性をマイルドにする？</li> <li>- 次なるカップル性につながりやすくなる？</li> <li>- 母親の負担はこれでうまく軽減されうるのでは。</li> <li>- いわばきょうだいを「うまく使う」</li> <li>- ただしきょうだいの生活のリズムの中で無理のない範囲。行き過ぎはまた問題になる？</li> </ul> <p>* 対極例：母親のみに負担がかかること。母親と ASD 児・者のカップル性</p>



概念	障害を否認する
定義	父親が ASD 児・者を障害のない子として扱っているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん (女性・弟) p.15・・・ただ父親は、でもそんなことないな、父親はほらあの多分あまり接し方がわからないけど、やっぱり可愛いから抱っこおんぶしたり、高い高いしたり。そう父親高い高いして落っことしちゃって、前歯折れちゃったんですよ。で、差し歯なんだよって聞いて大変だなって。</li> <li>• C さん (女性・兄) p.3・・・んーっと、何か昔の写真とか見たりとか、小さい時の録音のカセットテープとかがあって、そういうのを見ると、その頃はなんていうんですかね、普通、というか、普通っていうとあれですけど、<u>多分そこらへんの子と同じような感じで関わってるんですけど、多分兄が中学か高校くらいでパニックが酷い時があって、その頃からはなんとなくパニックになられるのが怖いというか、そういう印象を持ってたんじゃないかなって、思いますね。</u></li> <li>• I さん (女性・妹) p.7・・・もういたって普通の、覚えてないな…母親…結構手を焼いていた感じだと思うんですけど、まあやっぱり障害があるってわかったのが、たぶん妹が 3 歳とか 2 歳くらいのころだったと思うので、直後はやっぱり難しいですよ。だと思んですけど。<u>父親はいたって普通の、ホントにちっちゃい子の父親って感じで遊んでたと思うんですけど、妹も懐いててって感じなんですけど。</u></li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ASD 児・者と父親の関係性</li> <li>- 父親は、ASD 児・者が幼い時、障害がある子とは考えずに関わりを持っている？ここから成長し、障害の特性が顕著になってくると関わり方がわからなくなるのだろうか。</li> </ul> <p>* 対極例：初めから障害のある子として関わる？いずれにしても、早期か積極的に関わるかどうかということは別問題か？ →障害があっても一対一で関わる父親</p>

概念	障害特性によって関わりが難しい
定義	ASD 児・者がもつ障害の特性によって、両親が接し方に難しさを感じているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん（女性・弟） p.8・・・（母親は）すごい疲れてましたね。うん。本当に泣くたびにヒステリーっぽくなってる時もありましたね。…その頃は父もなんか母，兄に対して怒る母に対して怒るっていう感じで。もう中学校の頃は<u>家族全員，なんだかなんとなくギクシャクしてましたね。</u>母も兄には関わりたくないけど，でも静かにさせようとする母にまた怒ってっていう感じで。ちょっと嫌な，嫌な時期でした。</li> <li>● E さん（男性・弟） p.5 うん，悩んでますね。で，やっぱり，あの，精神年齢がすごい幼いんですよ。だからどうしてもこう自分，気持ちが通らないと「やっぱりダメ」っていうのがあるので。<u>よく駄々こねるんですよ。</u>だから，そこがちょっと悩んでるのかなって気はしますけどね。</li> <li>● G さん（女性・弟） p.6・・・養護学校に通ってたんですけど，途中の駅までは，バスで行って，そこから送迎バスが出てたので。なのでその送り迎えが大変だって話はしてました。<u>なんかバスの中で急に笑い始めたりするんですね，そういう心配とかはしてたと思うんですけど。</u></li> <li>● I さん（女性・妹） p.5・・・妹が強迫性の障害とプラス自閉症でちょっとやっかいになってる，余計にひどくなってる。自閉症の傾向も？強迫性障害が発症する前も，結構強めの自閉的な傾向が見えてて，でその結果，発症したみたいな形になってるので。最近でなくても，ここ1年くらいですかね。母親になんかこう不安を覚えたらすぐ聞く，すぐ助けを求めるっていう相手が母親なんですね。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 障害の特性によって感じる大変さは，カップル性の高い母親が一番ダイレクトに受ける。そしてそれを共に引き受けようとすることなく，非難せざるを得ない父親，それを側から見きょうだい？</li> <li>- ここでの母親以外の家族成員の動きが大きな役割を担う？</li> <li>- 障害特性も細かく分けられないのか？こだわり，常同行動 etc..→今回の質問項目からは捉えきれない。＝細かく分けると概念として成立しない。自閉症枠の中の障害の特性としてみれば概念が成立すると考えられる。→他の発達障害をもつ家族に話を聞くと，障害特性が故の困難感がより際立つかもしれない。</li> </ul> <p>* 対極例：ASD 児・者の障害によってでは両親は困惑していない，両親の困惑は障害の特性によるものではない？→該当データなし。概念不成立。</p>

概念	一対一で関わる
定義	父親が主体的に ASD 児・者と一対一の関わりがあるように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟） p.3・・・で、父親も定年退職してからは、送迎の方、朝の送りの方？をやってるって言ってたかな。で、迎えは母親がっていう形になってるので。</li> <li>• D さん（男性・弟） p.2・・・弟と父は仲良くて。で、週末はよく散歩に出かけたり。週末の夜ご飯は全部弟のリクエストでうちは決まるので。で、それを父が作るっていう。</li> <li>• E さん（男性・弟） p.6・・・<u>父親はどちらかといううちの弟と一緒に</u>出かけてあげるのがメインなのかな。出かけてあげるとあとは、特撮関係の話？例えばスターウオーズとか、ゴジラとか、そういうのはうちの父親も得意なので。それはうちの弟が全部把握していて判断するんですよ。この話は母親に降る、この話は父親にふる。そうすれば、ちゃんとコミュニケーションが取れるしボクも楽しい。だから、そういう関係は全部父親に行って、ゴジラを見る時はも、父親何見る？って聞いたりとか。</li> <li>• H さん（女性・弟） p.4・・・ただ、別に父が弟に関心がないというわけではなくて、休みの日とかそういう遊びの面では一緒になにかお店に行ったりとか、けっこう休みの日は二人で出かけたりとかしてるので、なんか遊びは父と、実際の将来のことだったりっていうのは母とみたいなの。感じですね。</li> <li>• I さん（女性・妹） p.19・・・3人は、まあ悪くなかったんじゃないですかね。その大学、私の3年くらいまでの記憶だと。そんな悪くなかったと思うんです。<u>やっぱ父親と妹で、まあ父親がだいたい連れ出すんですけど、出かけたとかしたり、母と妹でどっか行ったりとか。してたみたいです。うんうん。</u></li> </ul>
理論的メモ	<p>- ASD 児・者と父親の関係性。2016/10/27</p> <p>- きょうだからみて、父親が ASD 児・者と一対一で関わっている様子。これは相対的に母親とのカップル性を緩和しているのかもしれない。なぜ父親が一対一で関わるようになるのか？パーソナリティ、価値観の問題になってしまうのか？なぜだろう。単純だが、肝心のポイントかもしれない。</p> <p>- 父親の積極的な関わり→父親の ASD 児・者との一対一の関わり に定義名変更。一対一で付き合うのと、家族全体のイベントの中で接するのでは異なるのでは。</p> <p>Ex.* どうだったかな。こうやってパッと出て来ないってことは、たぶん終始あんまりそこまで介入しないというか、干渉、すごいしてる感じは見受けられないですね。ただその妹の、に、話しかけられたらちゃんと接するし、ち</p>

ちゃんと可愛がっているし、たとえばその妹の部活の試合とか見に言ったりとか、バレエの発表会とかも見に言ったりとか、結構積極的に行くようになっていうのは、ずっとそうですね。ずっとですね。前々からそうです。なので、表向きは結構その良い父親ですね、みたいな感じに母親が言われることが多いで、でも家ではあだしこうだし、みたいのはあったみたい、ですね。うん。ホントに、なんかその手を焼く問題があったりとか、その妹が、その時に父親が出てきて、なんとかせんといかんみたいな感じで、その私たちとの話に、入ってくるっていうのはあんまり記憶がなくて。Jさん

- ポジティブな状況にのみ参加することとして概念は成立するのか？→本データからでは概念として成立しなかった。

\* 対極例：一対一でなく、父親が家族全体のイベントには参加している？

概念	障害の理解が難しい
定義	父親は障害を理解することが難しいと感じているのであろうと捉えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Bさん（女性・弟） p.12・・・父親に対して反発したことがあって私自身が。あの、弟以外の障害者の方を、やっぱりなんか世間と、世間っていうか、同じように小馬鹿にするっていうのが当てはまるのかな。昔の悪い言い方だと、カタワって言葉があったじゃないです、あるんですけど。あいつはカタワだって言葉を聞いた時には、<u>この人はなんて人なんだろうって</u>。高校くらいの時に思ったかな。で、父親よりも母親とタッグを組むじゃないけれども、<u>父親がこれなら私がその代りをしないと思ってますます思うのがありました。</u></li> <li>• Cさん（女性・兄） p.10・・・私と母親は、兄はこれはできるっていうことがわかっていて。その、将来兄だっずっと家にいられるわけじゃないんで、いつかはあの、ホームとかに入ると思うんですけど、その時に、自分で少しでも何かできるようにと思って、これはできるっていうのを私たちが判断してるんですけど、<u>父はその、何でやってやらないんだ、いじわるするなって言って、そういうことを言っていて。たとえば兄がおかわりが欲しいって仕草をするんですね。で、私たちはおかわりくださいって言えるのがわかってるので、言えるまで待つんですけど、母親は、あ、父親は仕草してるんだからおかわりやれよって、そういうことがあって。どこで結構口論ではないですけど。できるんだからやらせてよっていう私と母と、やってやれっていう父と。で兄も仕草してるのにももらえないと、まあイライラしちゃうので、父はイライラされるのが嫌だから、早くおかわりやれっていうそういう…。）</u></li> <li>• Iさん（女性・妹） p.2～3・・・<u>うーん、なんか父親が妹を100%理解してなかったんじゃないかって私も母親も思っていて</u>。っていうのを、うん、わかって、この細めの線にしました。きっと愛情はあったと思うんですけど、ただその理解をしようとしているかっていうところとかは、私、健常児の私に対する熱意の方が強かった、気がしますね。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ASD 児・者と父親の関係性</li> <li>- きょうだいからみても、父親が ASD 児・者に対して理解をしていくことは難しいようだ、ということがある。これは今回のデータからでは、母親には見られなかった。母親はそういったことに難しさを感じていても“長時間接しざるを得ない”が故の違いなのだろうか。</li> <li>- 父親は母親に比べても接触時間が短い分、その場その場での対応になりがちになってしまう？</li> </ul>

	<p>* 対極例：理解し、接することにむずかしさを感じていなさそうな父親。 ASD 児・者と関わっている父親？2016/10/27→概念成立。この父親の違いは何だろうか？</p>
--	---

概念	ASD 児・者に対して困惑する
定義	父親が ASD 児・者とどのようにかかわれば良いかわからず困惑しているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• C さん（女性・兄） p.3・・・多分、私の予想では、<u>父親は兄と関わりづらい</u>というか、兄がパニックになったりする時に<u>多分扱い方がわからない</u>と思うんですよね。…あの、母親が出かけてしまって、兄と二人になるとどうしたら良いのか多分わかってない、というか。</li> <li>• E さん（男性・弟） p.6・・・うーん…F は戸惑ってましたね、まだ。うん。どんな風に怒ったら良いかわからないとか、あとはどっか連れて行ったら、弟勝手に結構どっかいっちゃう人なので、だからそれでいなくなっちゃったりとか、そういうのはあったかな。だから多分、F は多分、戸惑ってた。どうしたら良いんだろうって。</li> <li>• I さん（女性・妹） p.11・・・ただその、うーん、対処の仕方というか、妹の理解できない時の泣いたり怒ってたりした時の、への対処の仕方がやっぱり、母はどうまくはなかった。母と私はどうまくはなかった、かもしれないですね。それはその後にも言えることなんですけど。うん。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ASD 児・者と父親の関係</li> <li>- きょうだいからみて、父親は母親と違い、ASD 児・者に対してどのように関われば良いのか困惑している。この違いは接する時間の長さによるものなのかもしれないが、であれば母親と情報を共有するといったことで解消されないだろうか？そういった働きかけをする父親も当然いるだろう。なぜ困惑するのか？いや、困惑は母親もするだろう。ではなぜそこから一歩踏みでないのか。父親役割？</li> </ul> <p>* 対極例：困惑せず自然と関わる父親？ないしは困惑しても関わろうとする父親？→父親と ASD 児・者の一対一の関わりとして概念成立。</p>

概念	母親と ASD 児・者の安定したカップル性
定義	母親と ASD 児・者の特別な結びつきが過度ではないが、依然として強いように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん (女性・弟) p.3・・・母親の方も本当は孫が生まれた時には孫に可愛いねってやりたかったところにこう、多分ぐっと抑えてたんだなって思うですけど、<u>私が一番可愛いのは弟だからって</u>いうことで、<u>頑張</u><u>って生きてましたね。</u></li> <li>• D さん (男性・弟) p.19・・・弟は、弟は結びつきは強いですが、母が絶対なので、母の言うことは絶対なので、気持ちは母にあるかなと、思いました。</li> <li>• G さん (女性・姉) p.3・・・基本身の回りの世話はしてるんですが、結構それこそ気をつけてると思います。…<u>ただ多分母が姉の一番の理解者だとは思っています。</u></li> <li>• H さん (女性・弟) p.4・・・うーん…<u>基本的には、母が面倒を見てるって感じ</u>です。…<u>面倒</u>といますか、まあ進路だったり、いろんなその支援だったり一通り母がやって、父には報告だけする、もし何か疑問があれば父が何か提案するんですけど、<u>基本的には全部母が見てるって感じ</u>です。</li> <li>• J さん (女性・妹) p.4・・・まあ話はもちろんしてて、<u>一番多分家族で妹と話をできている人だ</u>と思います。うんうん。<u>一番妹の状態もわか</u><u>っている。</u>…理解というか把握してる感じですね。…やっぱり今妹が心を開けているのがたぶん母親だけですね家族の中では。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 同胞と母親の関係性</li> <li>- きょうだいの目にも、持続して同胞と母親が密着しているように映っている。</li> <li>- 他の家族成員とのカップルは成立するのか？→将来的にはきょうだいと同胞がつながる？</li> <li>- 健常児との母子関係もカップル性は当然あるが、そこはどうか質が違うのか？</li> <li>- 長期間にわたる、乳幼児期～現在にまでいたるもの。</li> <li>- 乳幼児期～と現在と分けて概念化できる</li> <li>- 行き過ぎた積極性につながる？</li> <li>* 対極例…母親だけに限定されない場合、母親との接触頻度が低い場合は？ →該当データなし。概念不成立。</li> </ul>



概念	母親と ASD 児・者の過度なカップル性
定義	母親が ASD 児・者との関係に埋もれてしまい、過度な結びつきがあるように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟） p.13・・・あの年代のお母さんたち見てると<u>こっちが苦しくなっちゃうくらい遊ばない，遊ばないって</u>いうか子供に<u>一生懸命になりすぎて</u>て。で，その子供を置いて自分がリラックスする時間を作るのを，なんだろうな，悪いものだと思ってて，申し訳ないとか。自分が産んでしまったっていう責任をずっと，もうないって言いながらもでも底の方に感じるんですよね。</li> <li>• C さん（女性・兄） p.4・・・母も全部自分で大丈夫，大丈夫って感じで。私が何かやるよって言っても，いいよいいよ，平気平気って言ってくれる人なので，自分としてはもっと何か手伝いたいなあって思うんですけど。</li> <li>• F さん（男性・弟） p.19・・・僕が高校生の時にうちの母が倒れたことがあって。で，その時まああの生死に関わる状況ではなかったんですけど，どっかに石ができちゃって，で，それで内臓かなんかにできて。そういうなんかなんだろうな，えっと尿石？そういうので，うちの弟がいる時に，母が痛みで倒れちゃって，でもうちの弟ではどうにもできないことだったので 119 にかけるでもない。ましてや救急車と一緒に乗れるでもない。で，結局家族みんなに電話して繋がらなくて，最後に電話したのが僕で，で，あのーそれで家に駆けつけた時に弟と苦しんでる母親，っていう状況で。で母親が自分で 119 で救急車呼んでたみたいで，あとは救急隊員の到着を待つだけ。で，でもあのーその時僕もかなり焦ってたので，あのうちの弟と話す暇もなく。なんかまあ弟は多分，驚きすぎて焦りすぎるとスッと冷静になったような，スッと冷静になったような顔をするんです。で，母親にどうしたの？って聞くんです。僕はわかんない！わかんないけど痛いんだよ！って言って。で，救急隊員到着して，とりあえず僕が付き添って行く，救急車乗って行きますって言って，で，弟に救急車と一緒に乗って行くか？って聞いたら，その途端に泣き出して。で，もう救急車に乗るのが怖かったみたいで，いやだ，乗らないって言って。まあビャービャー泣いてるのを家に押し込んで，救急車に僕が乗って行っちゃったんですけど，そういう経験もあって。そういう病院とかになんていうんだろうそのかなり焦ったりびっくりしたりする状況だと自分がコントロールできなくなるんだなあっていうのは，かなり自分の感情をコントロールが効いてきた頃だったので。中三とかかなり落ち着いてる時の頃だったので，その彼がこうなるのかあって思ったんですよね。<u>やっぱり母親がいないと生きていけないと思ってるんだなあって感じたのがそのエピソード</u>ですね。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Iさん（女性・妹） p.20・・・そうですね…。今となってはすごい一生懸命で、妹のためについていうか、私が妹を育てるんだ、守るんだっていう意思がすごい現れてたと思いますね。まあそれは今も。うんうん。私が、っていうのがすごい強い。私が、<u>こ</u>う大変だからみんなも助けてね、っていう感じよりも、自分がやるっていうところが結構強い、と思いますね。結構だからたぶん周りを頼って、っていうタイプじゃないかも、元々の性格上ではない、なのかなっていうのは思うんですけど。ですね。…やっていきたいっていう感じがしてます。はい。<u>それが時にやり過ぎなんじゃないかっていう風には私は思ってるんですけど。</u></li> </ul>
<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 同胞と母親の関係性</li> <li>- 母親が同胞との関わりに埋没してしまい、あたかも自分を捨ててまで関わっているように見えることがある。ここにまで至ってしまう前に、当然であるが他の家族成員、それが父親であれきょうだいであれ、祖父母であれ、サポートすることが大事であると考え。また、これはその渦中にいる当事者（母親・同胞）からは気づきづらいであろう。実際の臨床場面で出会うことが多いこの組み合わせの背後に今一度ど目を向ける必要に気づかされる。</li> </ul> <p>* 対極例：カップル性が成立していない、ということがあり得るのか？このカップル性はある種の連続体として捉える必要がある？</p> <p>父親とのカップル性が成立する？→該当データなし。概念不成立。</p> <p>カップル性がない状態は本データから見えることはなかったが、母親と ASD 児・者の安定したカップル性を対極として位置付けることができるのではないか。</p>

概念	母親と ASD 児・者の早期のカップル性
定義	ASD 児・者が幼いころから、母親と ASD 児・者の間に特別な結びつきが成立しているのとらえている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん (女性・弟) p.5・・・でも、多分寂しいんだと思うんですよね。お母さんが弟のものになって、羨ましい、っていうのももちろんあるし、いいなあって。私も本当は抱っこしてほしいとか思ったはずなんですけど。</li> <li>• C さん (女性・兄) p.6・・・今思えば、両親とも私にもすごい関わってくれてたと思うんですけど、<u>当時どうしても両親が兄にばかりかまってるみたいに感じてしまって、不貞腐れたりとかしてましたね。本当今思うと全然なんですけど。…うーん、なんか…ずるいなあって思うことが結構ありましたね。</u></li> <li>• E さん (男性・弟) p.5・・・母親、でも…ある一種の、<u>昔からやっぱりもう母親と弟は結構一対一。</u>で付き合ってきた関係なんで、あの一、なんだろう。心理学で言う、こう、反射的な言葉をこう投げかけると、弟はそれに反応して、ああこれやんなきゃダメなんだとか、あれやんなきゃダメなんだなって、ある一種の弟の諦めがあって。だから<u>まああの、たぶんは母親が一番扱いやすい。</u>扱ってるというか。扱ってる。だからその反射的な一言によって何種類かたぶん種類があるんですけど、その種類によって、あ、やばいこれをやらないと、こうなっちゃうな、とかっていうのがまあ入ってる。パターンで入ってるんですよね。</li> <li>• F さん (男性・弟) p.1・・・<u>まあちっちゃい頃は特に、まあ今もそうですけど母なしでは生きられない子</u>なんで。ちっちゃい頃からもう、かかりっきりだったっていうことはないですけど、常に困らせてたのは弟、かなー。</li> <li>• G さん (女性・姉) p.4・・・なんか、<u>やっぱ姉につきっきりみたいなイメージはあったので、なんかそれもしょうがないなって。</u>それも心の中で思っていましたし。その幼稚園生の頃は、ずっと自分が面倒みなきゃみたいな感じにたぶん思ってたので、あんまりそんな、不満、母が姉につきっきりってことに関して、嫉妬したりとかそういうのはたぶんなかったと思います。</li> <li>• I さん (女性・妹)・・・わりとでも母親がずっとべったり、だった気がしますね。たぶんまだそのころは妹がママっこだった。パパよりママみたいな感じだったんですよね。ただでもその抱っこして待ってるみたいな時は F がでてくる。ってなって。うん、だったかな。でも基本的に母親がいつも手を焼いて、あああの子どもいった？みたいな感じだったりとかしてたのは記憶にあります。</li> </ul>

<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 母親と ASD 児・者のカップル性を分解。</li> <li>- ASD と母親の関係性</li> <li>- 幼いころにある母子の密着。健常の子であってもみられるであろうカップル性？→どこか違うところがある？</li> <li>- 対極例：ASD 児・者に両親が同程度関わっている。母親との関わりが際立っていない。→今回のデータからは概念不成立。また、想定しがたい。</li> <li>- このカップル性が偏りを持ち、維持されることが問題？</li> </ul>
-------------------	---

概念	柔軟に関わる
定義	母親が ASD 児・者に対して、自分にも ASD 児・者にも無理のない範囲で接しているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• D さん（男性・弟） p.10・・・根気強くやってたと思います。なので弟も、自分で頑張れる時は頑張るって言うてみたり、ちょっと今日は、って言う日も。そしたらわかったって言うて。迎えに行く。…<u>柔軟に、やってみました。無理はさせない。なんでも自分から入ってこないとやらない、って言うのが母のモットー</u>というか。なので、<u>自分からやるって言うたらやらせるし、できないんだったらじゃあ助けるよって形でやってたので。</u></li> <li>• E さん（男性・弟） p.13・・・でも、母はもう、<u>とにかく辛いんだったらやりたいことはじゃあやらせてあげようってことで、例えば、あの子結構お風呂とか好きなので、近くの銭湯とか連れてってあげたりとか。</u>休みの日はもう海出かけるよって言うて、例えばあの子ヨーカドー好きなのでヨーカドー連れて行ったりとか。そんなの、でしたかね。だから別に解消法がないって言うよりは、うーん、<u>あの子にもちょっとじゃああの一楽になるように付き合っ</u>てあげようかっていう方だったので。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 母親の積極的なかわりと近しい概念か。</li> <li>- ASD 児・者と母親の関係性。</li> <li>- 母親が ASD 児・者に対して、あまり過干渉になるのではなく、適度な距離をもって関わっている？</li> <li>- 定義を「きょうだいからみて、母親が ASD 児・者に対して柔軟に対応しているということ」から変更。</li> <li>- 概念名：母親の柔軟性から母親の柔軟な関わりへ概念名変更。</li> </ul> <p>* 対極例：関わらない、という極ではなく、関わりすぎる、という極ではないだろうか。</p>

概念	日々大変さが溢れる
定義	母親が ASD 児・者との日常的な関わりの中で様々な大変さが生じているように見えている
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん (女性・兄) p.16~17・・・時々帰ってくれば、兄も色々親にだからできるというか、言いたいこととか、こだわりとかがあって、<u>結構しつこいんですよ。だから、今はもう面倒くさい面倒くさいみたいな感じでも、どっか出かせないと気が済まない。で、必ず形式的に出かけて、疲れて帰ってきてみたいな週末を過ごしているの、まあ熱心というよりはこなす、みたいな。通院をこなすっていう。出かけをこなして。まあこだわりをこなして。であとはやっど平日は自分の時間みたいな。…身内としても、まあこれくらいの距離感になってホーム入って、でちょうど良いんじゃないかって思いますね。(A さん, p.16~17)</u></li> <li>• D さん (男性・弟) p.4・・・当番とかも小学校だとあるので、母は弟を連れて行って。でも弟は自分勝手にどこか行っちゃうので。自分勝手というか興味本意で？どっか行っちゃって、それについていく母とかあったんで、まあ、大変だったんだろうなって、思います。(D さん, p.4)</li> <li>• G さん (女性・姉) p.2・・・あとちょっと姉がその不安定になってるっていうので、<u>母も、二人で一緒にずーっといると辛いみたいで。そこはちょっと気を使うようになりました。はい。(H さん, p. 2)</u></li> <li>• I さん (女性・妹 p.8)・・・たぶん今と比べると障害者への認識は薄いというか。その時代は。だったの、<u>まあ色々大変そうだったな一っっていうのは感じますね。泣いてる妹抱えてあーどっか行かなきゃ、とか。っていう風なのが見られたしたのかな？でもホントにそれくらいだったので、話さない、うん。おっきい赤ちゃんみたいな感じで。うんだからあんまりそんな今ほど手を焼いてる感じはしなかったですね。ホントにちっちゃい頃のお母さん。(J さん, p. 8)</u></li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ASD 児・者と母親の関係性</li> <li>- 当然と言えば当然だが、母親は ASD 児・者と日々接している時間が長く、その世話に追われていて非常に大変そうにしている。この日々の大変さを、いかに家族全体で抱えていけるかという点が一つの鍵？</li> <li>- 母親と ASD 児・者のカップル性と関連していると考えられる。おそらく、この大変さがなくなることはないが、うまくバランスをとることで軽減され得る。具体例の中にもあるように、この大変さからくる悪循環がある。このような大変さを緩和するために関わる時間の減少？（そしてその選択としてグループホーム？）</li> <li>- カップル性が強すぎるとそこにとらわれてしまい、窮屈さに埋もれてしまう？</li> <li>- ここに他の家族成員はどのように関わっているのか？</li> </ul>

	<p>- 母親の大変さ→母親の日々溢れる大変さ 母親の大変さは、日々の生活の中にあふれている。</p> <p>* 対極例：大変そうでない→該当データなし。概念不成立。</p>
--	---

◆ 研究Ⅱ分析ワークシート

概念名	当然の世話係
定義	きょうだい ASD 児・者のお世話係として見なされていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん（女性・兄）59～61：<u>母親の方は私の方を姉みたいなの、世話係みたいな感じで見てたと思います。でなんかこう、兄が泣いたら私が真っ先に疑われる、っていう。「絶対あんたでしょ」「バレてる…」みたいな。〈実際どうだった？〉実際にイタズラして泣かせた時もある(笑)でもそうじゃない時もある。こっちは全然納得いかないんですけど…って思いましたね。</u></li> <li>● F さん（男性・弟）59：だからあの一本当に僕も多分、多分確か直接言われたと思うんですけど、ちょっと弟のこと気にかけてやってくれて。で、あの一例例えば弟のクラスに遊びに行ったりもしてましたし。ただ、その弟まあ当然支援学級に行ってたんですけど、僕がお兄ちゃんてわかってると、そのクラスにも支援学級の子が来てるんですよ。僕のクラスで支援学級の子が来てるので、その子がなんかできないこととかがあると頼みやすいんで、僕のトコに回ってくるので。だから当時は、なんで毎回俺がやらなきゃいけないだと思ってた節もあるという。小五ですかね。あの一多分顔には出てないです。いいよって行ってやってたと思うんですけど、内心はなんで俺がやらなきゃいけないんだっていうのは思っていましたね。</li> <li>● H さん（女性・男性）52：そうですね。たとえばちっちゃなことだと、これとこれどっちが良い？で弟から選ばせるだったり、弟がわがまま言った時も、言って好きなどこ行っちゃったりしても、なんでちゃんと見なかったんだっていう感じ。責任の所在が全部私に。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 出生順位、性別に関わらず「世話係」になりやすい。この役割にもスペクトラムがある。「世話役」をあくまで自身の一部分とするか、「世話役」そのものであるとするか。後者の場合には ASD 児・者を介して体験される理不尽さ。「障害」そのものが理不尽であるが、そこに家族としてどう向き合うのか、その姿勢の表れの一つ？</li> </ul>



概念名	迷惑をかけられない
定義	きょうだい親に迷惑をかけまいと思っていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Aさん（女性・兄）61：そうですね。やっぱり、私はそんなですけど、母が毎日兄がいると疲れる。で、精神的にやっぱりイライラするんですよ。どうしても。ちょっと家の中の空気感が悪くなって、私が色々喋れなくなったりして。テレビ見てちょっと笑ったら嫌な顔されそうだな、とか。しないとしてもですよ？だからそういうのもあるんで、結構顔色を見て生きてきてるんで。</li> <li>• Bさん（女性・弟）36：あ、わかる。<u>うんと一番、すべては母親のためだ</u>と思います。<u>あの、母親に苦勞をかけたくないとか、母親を悲しませたくないとか、そういう気持ちから出てた行動なんじゃないかなって思いますね。</u>あとそうだ、あとはね、授業参観に来てくれた時に、弟いなくなっちゃたんですよ。で○号線、がありますよね。○号線って大きい通りなんですけど近くにあって、そこ沿いの、電話ボックスで見つかったんですけど、轢かれなくてよかったーとか。本当になんかそういうのが、結構いなくなっちゃうのがあったんですよ。今の彼からすると考えられないんですけど。だからいつもお目付役で、友達と遊びたいのに、今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると、え、良いよ。って言って。一緒に外で遊んで待ってるとか。</li> <li>• Eさん（男性・弟）16-1：私自身の話で言うと、やっぱり妹がやっぱりもう妹が今こんな状態だから「お姉ちゃんちょっと我慢して」みたいなのは、ちっちゃい頃から本当に多くって。なんかそういうネガティブな意味だけじゃないんですけど、やっぱりその妹のお姉ちゃん、っていう感じで、特にそういう障害を持つ子の家族のコミュニティみたいなのに結構うち顔を出すタイプだったので、母親って。なので、お姉ちゃんお姉ちゃんって呼ばれることがすごい多くて。今も家帰るとお姉ちゃんって呼ばれるんですよ家族全員から。ちなみにそれは私がちょっと嫌でちょっとやめてって言うてるんですよ。長年そんな感じだから妹以外にお姉ちゃんって呼ばれるちょっと嫌だみたいにして。でもちょっとそういうふうに習慣づいてますけど、なんかそういうふうにやっぱり見られると、<u>その「しっかりしなくちゃ」みたいなふうには多分言ったことあんまないですけど、思うことが多かったかなというふうに思いますね。</u>「お姉ちゃんできなくちゃいけない。」って思って。何かそういうふうに「自分、頑張らなくちゃ」とか「言われたからこれしなくちゃ」みたいなふうな、すごいそこそこ真面目に捉えがちで。</li> <li>• Hさん（女性・弟）50：色々あるとは思いますが、やっぱり基本的に弟にどうしてもかかりっきりになってしまう分、<u>私はあのできるだけ</u></li> </ul>

	<p>早く自分で自立して手のかからない子に育ててほしい、し、私の将来のことも考えてだと思っんですけど、将来的にも色々トントン拍子じゃないですけど、あんまり動じないでスムーズにいくようにしようっていうのがあって、勉強でも何に関しても結構厳しく妥協を許さず、という感じで育てられました。あとその弟と比較する、っていうのでうん。なんていうんですかね。私に強くあたりたかったっていうわけではないと思うんですけど、お姉ちゃんだからっていう理由でいろいろ制限されてた部分はありましたね。</p>
<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいは意識的・無意識的に親に迷惑をかけないように「しっかりしなくちゃ」という感覚を抱きやすい。親との関わりの中で一定程度普遍的に生じる感覚？「自分が手を煩わせるわけにはいかない」という感覚？</li> <li>• きょうだいの子どもの部分が奥に引っ込んでしまうことにつながる。</li> <li>• [自分の時間]が確保しにくく、[自分の思いを主張する][不安をぶつける]が生じにくい。</li> </ul>

概念名	関心を向けてほしい
定義	きょうだいが自分のことも見てほしいと感ずること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Aさん（女性・兄）47-1：なんか…うーん。本当に昔は、兄っていうかからかひの対象でしかなかったのて。っていうのがあって。からかひすぎで嘔み付かれたりとかしましたし。なんだろうまあ、寂しいんですかね。なんかよくきょうだひの本とか、話とか、そのかかりつきりで自分ひ関わってもらえない寂しさに襲われる、みたいな聞くんてすけど、そこは別に感ずたことはなくて。だけど、やっぱ…なんだろう一緒に見てもらいたひって。うん…からかう事て私も注目してっていうのが自然に出たのてかなって。</li> <li>• Bさん（女性・弟）32：でも、<u>多分寂しいんだと思ひんてすよね。お母さんが弟のものになてて、羨ましい、っていうのももちろんあるし、いいなあって。私も本当は抱っこしてほしいとか思ひたはずなんですけど。</u>ただ、父親も結構、なんだろうな、家にはあんまりいないタイプなんですけど、父親も小さい頃ひ私からするとおじいちゃんてすかね、父親の、父親？をお父さんを亡くしててるので、お休みの日にはみんなでお出かけしようっていうのがあったんで。本当になんか休みになるとどこかひ出かけてるって記憶があて。母親て満たされなひ部分を父親がこう帰てくると膝の上に乗けてくれたりとか。</li> <li>• Hさん（女性・弟）35：<u>母は結構、うーん、昔、私に対してあんまりあの一関心がないわけではなかったんてすけど、面倒見なかった、甘えさせてなかった、みたいなあの一っていうのがあったのて、そういう部分て今になて気にかけてくれたり、</u>はい。結構気を使ててくれたり。私自身も、昔は完全に親子だったんてすけど、今は相談を持ちかけられたり家のこととか。色々まあ抱えてるものもあると思ひるので、そういうのの相談にのてあげたり。なんか、対等じゃないんてすけどそういう話もできるよになてきました。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 親がASD児・者に関わる時間が長いことて、きょうだひは「一緒に見て欲しい」という寂しさを感ずており、それを直接言葉にするよりも「からかう」という形で注意を引こうとしてる。そして語りの中に見られるよにな、「寂しさを抱いてる」ということ自体に葛藤的であり、そうした気持ちを抱くことそのものにブレーキがかかてしまう可能性もある。</li> </ul>

概念名	しょうがない
定義	親の関心が ASD 児・者に向いていることや、自分が世話役になることについて折り合いをつけようとしているきょうだいの気持ちのこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）36～37：うんと一番，すべては母親のためだと思います。あの，母親に苦勞をかけたくないとか，母親を悲しませたくないとか，そういう気持ちから出てた行動なんじゃないかなって思いますね。あとそうだ，あとはね，授業参観に来てくれた時に，弟いなくなっちゃたんですよ。で○号線，がありますよね。○号線って大きい通りなんですけど近くにあって，そこ沿いの，電話ボックスで見つかったんですけど，轢かれなくてよかったーとか。本当になんかそういうのが，結構いなくなっちゃうのがあったんですよ。今の彼からすると考えられないんですけど。<u>だからいつもお目付役で，友達と遊びたいのに，今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると，え，良いよ。って言って。一緒に外で遊んで待ってるとか。〈そういう時はどんな気持ちだったんでしょうか〉しょうがないかなって。でも，うん，それで，なんか考えたんでしょうね。団地に住んでたんで，友達を団地の公園に呼んじゃって。そうすると一緒に遊べるじゃないですか，で遊んで。で，ただ，あの友達で弟が嫌だっていう子いるかなって前もって言って。いや実はねって。ってみんな良いよーって。もうそこも困らなかったですよ。</u></li> <li>• C さん（女性・兄）63～64：私が怒るのがその…勝手にものを破られたとかそういうのがあるとどうしても「出してるあなたが悪い」ってなっちゃったりして…うーん…そうですね…なんだろう，兄の方を注意するっていうのはなかったと思いますね。〈そのことについてはどのように感じられますか？〉昔から…仕方ないと思ってましたね。</li> <li>• G さん（女性・姉）16：あんまり覚えてないですけど，なんか，やっぱ姉につきっきりみたいなイメージはあったので，なんかそれもしょうがないなって。それも心の中で思っていましたし。その幼稚園生の頃は，ずっと自分が面倒みなきゃみたいな感じにたぶん思ってたので，あんまりそんな，不満，母が姉につきっきりってことに関して，嫉妬したりとかそういうのはたぶんなかったと思います。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだい ASD 児・者や親のために自分の時間を使っていることがある。それは意識的に使っている場合と，無意識的に使っている場合がある。そこに親が入ることできょうだいのための時間を作ることができる。その時間を保証されることそのものに意味がある。</li> </ul>

概念名	親の思い・考えがわからなくて不安
定義	きょうだい ASD 児・者に対する親の考え・思いについてわからず、将来に不安を抱えていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）64：やっぱりきょうだいの最終的なところって親亡きあとじゃないですか私も、自分しかきょうだい、身内、母がいなくなったら身内私だけなんで、多分担うことにはなる。<u>ただ親にはまだ何も言われてない。どうなるんだろうっていう。ただグループホームに入ってるので、そこがちゃんとずっといる場所になればそこに中心で置かせてもらって私は仕事に行ける。で、まあ帰る、帰る、みたいなことでも良いのかなって思ってるんですけど、まあ親ほどのことはできないし、自分がやりたいまあ何も別にビジョンがないですけど自分の将来考えた時にどこまでできるかなとか、遠くへはいけないとか、そういうのは時々考えますね。それは親が何か緊急事態になってみたいときとわからないだろうし。正直ほとんど知らないんで兄のことを。で、そういうと何か緊急で倒れた時にこれがあれば全部私ができるみたいのを作っておいてっていうのは言って、ちょっと作ってくれてるんですけど。なんかそういうところも含めて、もう考えていかないといけないのになって。まだ60過ぎて親も若い部類ですけど、急にどうなるかは全くわからないので。そういうところもある h しだから兄には信頼してもらえないようにならないといけないなっていうのはあるんで、まあきっと関係性を急に急に変えることは無理だと思うし。将来的にはそういうところも含めて考えていかないといけないのになって感じです。</u></li> <li>• C さん（女性・兄）104：両親もずっと元気だとは思いながらも 60 代中頃だし、兄も 40 歳なんです。なので、なんかずっと家にいるわけにもいかないだろうし。かといってグループホームを探してる気配も今のところ私には感じられなくて。なんか少し先の未来が本当に見えなくて。私が何かした方がいいのか動いた方がいいのか、何かその辺が全然読めないのが不安というか。母は母で何か自分で抱え込むというか、自分がやんなきゃみたいな感じなんで。私に何かをしてっていう特に何かもないし、どうしよう、先が見えないっていう漠然とした不安が。</li> <li>• C さん（女性・兄）107：恥ずかしながら何にもわかってないので、そういう何か制度とか仕組みとかも何もわかってないし、正直その兄の今の状態というか、うん。健康ではあるんでしょうけど、その辺も何にもわかってないので。でも、今更そういうことを何か聞きづらい、母親に聞きづらいっていう。1 回だけ、T くんって今後どうする、グループホームとかどうするのってちょっと勇気出して聞いたんですけど。「急にどうしたの」って言われて、それ以上何か聞けなくて。もう 1 回聞く勇気はな</li> </ul>

	<p>くて。今に至ってるんですけど…。〈聞きづらい？〉今さら聞きづらいんですよね。またその「急にどうしたの」って言われちゃうと「いや、別に」みたいになっちゃって。〈それはどうして？〉今までそんなに聞いて来る機会がなかったんですよね。何て言うか、考えようともしてなかったというか。いつか親が高齢になってとかそういうことはあまりすぐ考えてなかったみたい。両親はずっと元気で、ずっと兄と暮らしてるみたいになんか思っちゃって。なんか急にふと気づいたら、「あれ、なんかすごい不安」ってなっちゃって。</p>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいと親の間で対話が生まれておらず、きょうだいが ASD 児・者について将来的にどう関わると良いのか不安になっている。</li> </ul>

概念名	将来についての不安をぶつける
定義	きょうだいを抱える将来への不安を親に直接ぶつけていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Cさん（女性・兄）107：恥ずかしながら何にもわかってないので、そういう何か制度とか仕組みとかも何もわかってないし、正直その兄の今の状態というか、うん。健康ではあるんでしょうけど、その辺も何にもわかってないので。でも、今更そういうことを何か聞きづらい、母親に聞きづらいっていう。1回だけ、Tくんって今後どうする、グループホームとかどうするのってちょっと勇気出して聞いたんですけど。「急にどうしたの」って言われて、それ以上何か聞けなくて。もう1回聞く勇気はなくて。今に至ってるんですけど…。</li> <li>● Hさん（女性・弟）99：一回母と話したんですけど、うーん…。母の考えとしては、私には私の人生があるんだから、そんな弟にかかる必要はないから、いまのうちから弟ができるだけ1人で自立してできるように、そのなんていうんですかね、グループホームみたいなところで1人で自立できるようにみんなできていこうって。完全に関係を断つっていうのは私も考えてないので、時々顔出したりとか。関わりは続けていきたいなって。</li> <li>● Iさん（女性・妹）9：今後もその親が元気じゃなくなったときとか、いなくなったときに、私は今度は妹の一番歳が近いので面倒見なければいけないのかな？とか。まあ金銭的な部分では、金銭的にまだサポートはできて、物理的っていうのをしなければいけないのか、みたいなところを結構最近まで心配してたんですけど。なんかそこはあの親と話したことがあったんですね。それはこの間1年ぐらい前にうちの祖父が亡くなったんですけど、そのときに、何て言うんでしょう、うちの母とかが、自分の兄弟と一緒に何かその相続のことやったりとか、協力してたのを見て、私協力できる兄弟いないなと思って。っていうのを親に話したんですね。でその話から、続いて今後妹がどんどん何でしょう、もっともって大人になったとき、かつ親がどんどんお年寄りになったときに、私はどうしたらいいのか、ってところを知っておきたいな話をした。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだいの多くが感じる「将来への不安」について、直接的に親とやり取りができている。やり取りができるーできないにはどんな違いがあるのか。</li> <li>● これまで自らの不安を主張することが難しかったきょうだいでも、成人期を迎え「親亡き後問題」が以前よりもリアルに感じられると必要に迫られてぶつけることができる。家族関係、きょうだいの主体性に変化が訪れるチャンスでもある。</li> </ul>

概念名	自分の思いを主張する
定義	きょうだいが自らの気持ちや考えについて主張する言動をすること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Bさん（女性・弟）30：<u>一番覚えているのは、えっと、まずは、どのくらいからなんでしょうね。考えてみたんですけど、やっぱり一番自分で覚えているのが、幼稚園くらいに、母親に、やっぱり弟の方が可愛いんだろってことを言った、んですよ。で、その時にごまかさずに母親もきちんと答えてくれて、多分弟がこういう子だから、誰かが助けてあげたりしないと、あの、他の人とコミュニケーションが取れないとかそんな難しい言葉は言われてないんですけど、とにかく助けてあげないと困っちゃうから、多分私、あなたよりも弟の方に色々手をかけてしまうけれども、あなたが可愛くないとかそういうわけじゃなくってって話を一対一でしたんですね。で、幼稚園生ながらになるほどって思ったみたいで、それから一切言わなくなったのよっていうのを小学生くらいに、何か話した時にそんなことを言って、そういえばそんなこと言われた気がするって話を母親として。と、そうですね。それから多分、あ、守るんだーっていうのがずっとあったと思って。</u></li> <li>• Dさん（男性・弟）24：<u>あんま覚えてないんですけど、意識レベルで動いているわけじゃないんですけど、結構そういう表情することが多かったっていうのは前に聞いたことあります。その、「あ…今は怒っちゃダメなんだろうな」とか、「しょうがないって思わないとダメなんだろうな」っていうふうに思ってるんだらうなっていうのを、僕は覚えてないんですけど、そういう顔してたとかは言われた。だからそれできているから、別にこうそういうのに合わせるのが苦痛じゃないし、何かを我慢しているっていう感覚もそんなにないです。</u></li> <li>• Dさん（男性・弟）34：<u>なんか…僕の母親は引かない人なんで、それ（「それはあなたたち親の目線でしょ」）を言ったからシュンとすとかないんですよ。「いやそうだけどさ」みたいな。「そうだけど、そこはこうでしょ」とか「何あんた今更そんなこと言ってんの」みたいなことありますし。キャッチをしようとしてるんだと思います。そこで多分、僕も曲げないので、そのことじゃなくても「俺こう思う」みたいなのを、引かないんで…話が前に進まないんですよ。だから「そうなんだね」って感じなんじゃないですか？(笑)…なんかありますよね、無条件の肯定、みたいな。なんかそんな感じかな、みたいな。</u></li> <li>• Eさん（男性・弟）37：<u>いや多分、自分にかまってなんで。だからあの、何いつまで寝てんだよっていうそっちですね。あと寝てる時ニク投げられたりとか、普通にありましたけどね。何か投げるとか壊すとかあいつ</u></li> </ul>



	<p>の専売特許で。だから例えばプラレールとか俺らが作ると、壊すのが弟。まあ、それぐらいですかね、困ったのは。まあ困ると言うよりはそれはもう何か俺らの中では、<u>ああ壊しちゃったねえで終わり。でも多分怒ってたとは思いますがよ。</u>怒ってたとは思うんですけど、でもそれ以上言ってもしょうがないっていうのを母に言われてたので。〈お母様がそういうことを?〉「もう言葉が分からないんだからそんなこと怒ってもしょうがないでしょ」って。また作れば良いでしょって。常にです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• I さ n (女性・妹) 11 : 母も、その時母なんですけど、なんか私の不安がどのあたりから来てるかというのは察知した感じがあって。なので喧嘩みたいなのにはならなかったんです。例えばお金はどうなのとか。こういうときの私、何て言うんでしょうまだ結婚とかもしてないので、何かこういうふうにサポートが妹に大きなサポートが必要になったときに、すぐ動けるかわかんないとか一抹の不安があり、それが何か全部受け止めてくれた感じはしました。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいが自分の主張 (aggression?) を親に向けて出すことができているのと同時に、母親がそれを逃げることなく受け止めようとしている。こうしたやりとりが生まれている家族と、生まれていない家族があるのではないか。</li> <li>• 自分を主張することができるようになること自体はきょうだいに限らず重要である。ただし ASD 児・者が家族内にいると、親の負担が必然的に増え、それを間近で見ると自分が主張すると迷惑になるのではないかと感じるようになる (迷惑をかけられない)。これによりきょうだいの主体性の発達にブレーキがかかってしまう可能性。→主体性の発達にブレーキがかかると、家族の中では「世話役」になることが多くなり (理不尽な世話係, 受け止めの逆転), そこにしか自己を見いだせなくなる。きょうだいのなかに福祉職や心理職, 教職を選択する割合が多いが、そこに内実を伴った自己の選択なのか、あるいは「それしか知らないから」選択せざるを得なかったのか。</li> <li>• [主張-受け止め] では二つの意味を含んでしまうため, [自分の思いを主張する] と [きょうだいの気持ちを受け止める] に分割した。</li> </ul>

概念名	きょうだいへの関心
定義	きょうだいをひとりの子どもとして父親が気にしていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Bさん 32 (女性・弟)：でも、多分寂しいんだと思うんですね。お母さんが弟のものになってて、羨ましい、っていうのももちろんあるし、いいなあって。私も本当は抱っこしてほしいとか思ったはずなんですけど。<u>ただ、父親も結構、なんだろうな、家にはあんまりいないタイプなんですけど、父親も小さい頃に私からするとおじいちゃんですかね、父親の、父親？をお父さんを亡くしてるので、お休みの日にはみんなで出かけしようっていうのがあったんで。本当になんか休みになるとどこかに出かけてるって記憶があって。母親で満たされない部分を父親がこう帰ってくると膝の上に乗っけてくれたりとか。</u></li> <li>● Dさん (男性・弟) 37～40：めっちゃくちゃ黙ってますけど、多分僕がどこで何してるかとか、母親以上に気になってると思います。多分。僕がいない日とかに、僕に直接は聞いてこないんですけど、母親にどこ行ってんだ今、みたいな。母親は「知らない」って。父親は、気持ちをまっすぐに伝えたりしないんですよ。例えば、うーんと…本当は僕と一緒にサーフィンやりたいんですよ。でも僕はあんまり興味持たないんで。けど、今年ちょっとサップを買ったんですよ。割と時間があってサップやったりしてたんですけど、で「サーフィンもいいなあ」とか言っとくと、こう、僕がいつでもサーフィン行くって言ってもいいような状態にボードがなるんですよ。初級者用の、ファンボードっていうスポンジで浮力があるボードがあるんですけど、それが置かれてるんですよ廊下にずっと。スタンダードに。で、こう立て替える場所があるんですけど、それは父親が自分のやつと、俺がいつかやるって言った時用のボードが置いてあったりとかして。そういうのを見ると「あ、一緒にやりたいんだな」って。で僕が1人サップ行って、父親は海行って帰ってきて、僕の方の海きてちょっと一緒にやったりとか。言葉が足りないので教え方下手なんですけど。言語化が苦手な人だなって思ってます(笑)</li> <li>● Hさん (女性・弟) 10：なんでかっていうと、父と母は全体的に弟の方に関心が向いていたんですけども、父の考えとしては、弟がこういう病気になるっていうわかりかけてきたら、多分私を強く育てたいっていうのがあって。弟を支えられるようになっていうのもありますし、こっちに関心が言っちゃ分私にはしっかりしてほしい、できるだけ手間がかからないって言いかたしたらあれなんですけど。自分の事は自分でしっかりできる子に育てて欲しいっていうのがあって、けっこう僕は厳しかったので、そういう意味では結構私にもすごい関心があったんじゃないかって思いました。</li> </ul>

理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"><li>父親がきょうだいに関心を向けている。父親が家族へ目を向けている状態。ただし、その関心の向け方には質の違いがある。[対極例：関心のない父親，自分にしか関心がない父親（ある意味特性としての ASD もあるかもしれない?）]</li></ul>
-----------	---

概念名	無関心な父親
定義	父親がきょうだいをはじめ家族に対して無関心であること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Cさん（女性・兄）19：<u>（父親は）家族に興味がない。一番兄に興味がなく、私にも母にもそんなには興味がなさそうな感じがしますけど。定年退職をして、今はずっと家にいて自分の部屋にこもってPC見てるみたいな感じで。結構母親も参ってるみたいなんですけど。〈参ってる〉ほぼ…呆れて諦めてる感じではあるんですけど、時々私に愚痴メールをしてくる、っていう感じです。こっちがちょっとたまに様子どうかなって思ってメールすると、それに対してぶあーっと返ってきたりして。私からメール送ると「待ってました」みたいな感じで返ってくるというそんな感じですね。〈ここぞとばかりに〉はい。溜まってんだなーって。</u></li> <li>● Iさん（女性・妹）20：なんか私はなんかあんまり器の広い人だと思ってなくて。いや、なんか常に自分が、自分や周りの人より自分の人。もちろん自分のことをまず大事にすることで周りの人に思いやりが持てるって私はそう思うんですけど、それとまた違う感じ。違うレベルが違う次元で自分が一番な感じでっていうふうに思うので。私もあんまり話していて楽しく話ができたって最近思わなくなっちゃったんですね。</li> <li>● Jさん 89（女性・弟）：<u>なんか元々なんか父はなんか自分勝手というか、なんか自分のことしかしない感じだったんですけど、ただ弟がいることで、それなんか普通にそれで弟と一緒に出かけたりとか、その家族と関わる形になったという感じですね。</u></li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 父親もASD的な人物なのかもしれない。そうした気質を持っている可能性は十分にある。しかし、そこには「父親」としての機能が求められているが、それに応えられていないという問題がある。きょうだいと母親は辟易し、母親とASD児・者のカップル性はより強まってしまう。</li> <li>● ただし、ここから変化する可能性も十分にある。それは両親の関係性によって左右されてくる。</li> </ul>

概念名	関心を向けてもらえている感覚
定義	きょうだいが“自分に関心を向けてもらえている”と感ずること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• D さん（男性・弟）41：（父親が）気にしてくれてるんだな、みたいな。幼稚園から小学校 6 年生までは、ほぼほぼ自分のサッカーに来てくれてたんですよね。だからその時は逆に弟との関係、っていうのは希薄だったんですけど、僕が部活とかんなくてコーチもうやらなくなったくらいから弟と父親が結構仲良くなった感じ。僕としては 8 年間付き添ってもらった、で、こう何かすごい怒ったりとかするひとじゃないので。ずっとこうだまーって良い日も悪い日もいてくれる人っていう感じだから、何かこう、言わないこととか、うんってなったりしますけど、それはそれだな、じゃないですけど、そういう人だ、みたいに思うし。「なんかこういうふうに思ってるの?」とか聞いてみたりとか。</li> <li>• E さん（男性・弟）54：まあ自由にやらせたが故にあの、中 3 の頃はもう自由にやらせてもらえなかったんですけど、逆に。まあそれが良かったんですけど僕にとって。だからうーん、まあ僕からしたら父も母もちゃんと見てくれてたんで。やるべきところはちゃんと道を正してくれたのかなって気がします。</li> <li>• H さん（女性・弟）35：母は結構、うーん、昔、私に対してあんまりあの一関心がないわけではなかったんですけど、面倒見なかった、甘えさせてなかった、みたいなあの一っていうのがあったので、<u>そういう部分で今になって気にかけてくれたり、はい。結構気を使ってくれたり。</u>私自身も、昔は完全に親子だったんですけど、今は相談を持ちかけられたり家のこととか。色々まあ抱えてるものもあると思うので、そういうのの相談にのってあげたり。なんか、対等じゃないんですけどそういう話もできるようになってきました。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発達的に「主体性」を育んでいく上で重要な概念。「1 人の人として親（父親＝社会）から関心を向けてもらえるだけの価値がある」と感じられるかどうか。これがないと、周囲に合わせるしかない。特に男性のきょうだいの場合はそうなのかもしれない。女性の場合は？</li> </ul>

概念名	頼りにならない
定義	きょうだいが父親に対して抱く頼りにならないという印象のこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Bさん（女性・弟）45：父親が不在の、不在っていうか、夜帰ってこないんですよね飲んで。はい。元気よく。でもお家は好きなので、帰ってくると今何してるの？みたいな普通の会話があって、で、弟に対し、なんだろうただねおとう…父親に対して反発したことがあって私自身が。あの、弟以外の障害者の方を、やっぱりなんか世間と、世間っていうか、同じように小馬鹿にするっていうのが当てはまるのかな。昔の悪い言い方だと、カタワって言葉があったじゃないです、あるんですけど。あいつはカタワだって言葉を聞いた時には、この人はなんて人なんだろうって。高校くらいの時に思ったかな。で、父親よりも母親とタッグを組むじゃないけれども、父親がこれなら私その代りをしないとってますます思うのがありました。うんうん。</li> <li>• Cさん（女性・兄）36～38：完全に母と兄がセット、で父親はそこに何かこう置き物のようにいる感じ。視界には入るけど…特にそれが何かの役にも立たないし、処分に困っている置物ですかね。ただ目には入るなあっていう。何にも使えないしな、でも使えないしな、っていう。いつかは使えるんじゃないかなって思ってとってはああるけど、どうしても使い道がわからないなっていういつか使えるんじゃないかなって思うんですけど。今のところはまだ…。</li> <li>• Iさん（女性・妹）19：それ以外にも、そうですね父親がやっぱり元からそんなに妹と、すごいセンスのあるって言ったら失礼ですけど、すごくつかんでっていうか、すごいツボを心得た関係性を妹と今まで築いてきたかっていうと、本当にちっちゃい頃はそうだったんですけど、やっぱりちゃんと本当にちっちゃい時はもちろん仲良かったみたいなんですけど、やっぱり思春期から本当に今大人になって、っていう頃はあんまり父親が出てきてすごい頼りになった記憶は私はなくて。やっぱり父も何かもう20いくつにもなるのになんかまだ何かこんなに手がかかってみたいふうに思っていてイライラしている。それを見て妹は余計イライラして、それを見た母はもっとイライラしてました。</li> <li>• Jさん（女性・弟）151：けど、でも基本的には父の方が優しいっちゃあ優しいんですけど。でも機嫌によりますね、その時の。競馬の結果ですよ競馬の結果。競馬の結果で結構気分がそれで何か悪いときに機嫌が。何か弟の面倒とかみたいな、弟のことを蔑ろにするので母と揉めてることが結構ありました。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいからみた父親のひとつの在り方。使えない「置き物」のような。捨てるに捨てられない。でもどこかで期待もしている。[対極例：生</li> </ul>

	<p>きている父親, 生き生きとした関わり]</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• より汎化した概念として [処分に困る置き物] → [頼りにならない] へ変更。</li></ul>
--	--

概念名	丁寧な説明
定義	ASD 児・者の特性とその対処について母親が丁寧に説明すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）30：一番覚えているのは、えっと、まずは、どのくらいからなんでしょうね。考えてみたんですけど、やっぱり一番自分で覚えているのが、幼稚園くらいに、母親に、やっぱり弟の方が可愛いんだろってことを言った、んですよ。で、<u>その時にごまかさずに母親もきちんと答えてくれて、多分弟がこういう子だから、誰かが助けてあげたりしないと、あの、他の人とコミュニケーションが取れないとかそんな難しい言葉は言われてないんですけど、とにかく助けてあげないと困っちゃうから、多分私、あなたよりも弟の方に色々手をかけてしまうけれども、あなたが可愛くないとかそういうわけじゃなくって話是一对一でしたんですね。で、幼稚園生ながらになるほどって思ったみたいで、それから一切言わなくなったのよっていうのを小学生くらいに、何か話した時にそんなことを言って、そういえばそんなこと言われた気がするって話を母親として。と、そうですね。それから多分、あ、守るんだってというのがずっとあったと思って。</u></li> <li>• D さん（男性・弟）16：そのルーティンができたのがずっと前なわけではないんですよ。社会人になってから。家にいる時間が短くなってからそういう時間が増えたから。僕が最初全く知らなかったんですよそういう時間が、行われてるっていうことが。で、ちょっと家にいるときに「ええ？」みたいな。そんなのやったの？みたいな。「その時間は黙ってなきゃいけない」ってうわめんどくさ！みたいな。なにそれ！って思って。<u>でもそれで、1人でこう1人で電車の中とかで聞いたりとか。要は音楽聞くと、まあ色々やってたらしいんですよそれも。音楽聞くでやってると、もうノッちゃうらしいんですよ。だからそれとかを防ぐ、とか。でも1人で電車乗ってる時になんかこうしている時に、ムービーを聴いてたりとか、見たりとかすると、一番それが母親遠くから見ていて、変じゃない、みたいな。違和感なかった、みたいな話から始まったから、「それを頑張るためにこれをやってる」っていうのを言われたので、「しょーがねーんだな」っていう感じで入ってたけど…。でもイライラする時はイライラするし。嫌な時は嫌だし、待ってくれって思った時は待ってくれって時なんで。それは普通に言ってる。だからそのなんか、このルーティン壊すと怒るとか、だからこうピリピリしてる感じではない。</u></li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 母親がきょうだいに対してASD児・者の特性とその対処方法について説明している。「ルーティンだから」で済ませているわけではない。[対極例：丁寧な説明がない?] → [刷り込み] が該当</li> <li>• [丁寧]には、知的な説明だけでなく、情緒的な距離の近さも含まれてい</li> </ul>



	ると考えられる。単に説明をすれば良いというわけではない。
--	------------------------------

概念名	刷り込み
定義	きょうだい ASD 児・者の特性やその対処について「そういうもの」と受け入れるよう詳細な説明がなく言われること、あるいはそもそも言われないこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）48・・・なん…カチッとか言われた記憶は…ないんで。やっぱりそういう療育センターとかそう行ったりとかして、いろいろカードのお勉強とか練習とかしたりとか。そういうのを知ってて「普通じゃない」というか。多分自然と思っていて。でもなんでですかね、わかんないです、なんで「自閉症」って言葉に自分が繋がったのか。親に言われたからっていうわけではないと思う。あなたの兄は自閉症よって改めて言われた記憶は私の中でないので。自然と、そういう言葉をどこかで学んだってことなんですかね自分が。だと思っんですけど。</li> <li>• C さん（女性・兄）66・・・だいぶ昔から保育園の頃から兄はそういう、わかりやすく言うとそういう病気、病気？だから、「ちょっと考えるのは難しい子だから」、っていうのを刷り込まれてたというか、そう思うようにずっと言われてたので、「あ、そういうものなんだな」って思うようになって。私の方がお姉ちゃんっぽいようにしなくちゃいけないんだっていうのを昔から刷り込まれてたっていうのがあります。</li> <li>• E さん（男性・弟）37・・・いや多分、自分にかまってなんで。だからあの、何いつまで寝てんだよっていうそっちですね。あと寝てる時ニンニク投げられたりとか、普通にありましたけどね。何か投げるとか壊すとかあいつの専売特許で。だから例えばプラレールとか俺らが作ると、壊すのが弟。まあ、それぐらいですかね、困ったのは。まあ困ると言うよりはそれはもう何か俺らの中では、<u>ああ壊しちゃったねえで終わり。でも多分怒ってたとは思いますが。怒ってたとは思っんですけど、でもそれ以上言ってもしょうがないっていうのを母に言われてたので。〈お母様がそういうことを？〉「もう言葉が分からないんだからそんなこと怒ってもしょうがないでしょ」</u>って。また作れば良いでしょって。常にです。</li> <li>• G さん（女性・姉）44～45・・・はい。そういうもんだと、接してたと思います。むしろ知的障害とか、なんかはっきり理解できたのは小学校くらいなのかな。やっぱり個別級にいましたし。説明されたわけではないと思っんですけど。</li> <li>• H さん（女性・弟）55・・・私の中で弟は守るもの、ってなって。もう自動的に弟を中心に考えて、とにかく弟がどっか行かないか、迷子に</li> </ul>

	<p>ならないかって感じで。きょうだいって言うよりかは親みたいな感じで、すごい見守ってました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Jさん（女性・弟）130・・・そうですね…。<u>私はそんな小さかったって何にも考えてなかったんですけど、子どもだったのでもなんか割とその弟に付き合うっていうのは当たり前になってきてました。弟に合わせてその休日の予定とかも結構。私が何かそもそも結構インドアであんま出かけたいタイプでもなかったっていうのもあるんですけど、でも今日弟が行きたい場所に行くみたいなのが多かったですね。あれだ父もなんか私みたいになんかインドアというかなんか全然本当は休日とか外でないタイプなので。だから弟がいなかったら本当に何か引きこもりの家族みたいになっちゃったかなとは思いますが。</u></li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 〈丁寧な説明〉とは少し違う水準の関わり方。「ただそうである」とだけ理解させられるため、理不尽さを感じやすくなっている？</li> <li>● こうした刷り込みをした方が親としては楽だからなのか？それとも親の方に障害を受け止めきれていないのか？「障害だから」と思っていた方が、割り切りやすいのかもしれない。ただ現実的には、障害を持っていても子どもは子どもで発達もする。「障害だから」で片付けてしまうと、発達するはずの部分（特に心理的な発達）が発達しないままになってしまう可能性がある。</li> </ul>

概念名	同じひとりの子ども
定義	きょうだいも ASD 児・者も特別扱いせず，1 人の子どもとして平等に扱われていると感じること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• D さん（男性・弟）24：親もそうだし，祖母とかもそうですけど，<u>平等にものは与えられてたし，時間とかも平等に，みたいな。お兄ちゃんなんだからって言われたことない。</u></li> <li>• F さん（男性・弟）49：あー…弟特別っていうのはないですね。多分 3 人平等に。あの特別手がかかったと思いますけど，あの S に特にこうかかりきりになってるようなことはなかったんじゃないかなあとは僕個人的には思っています。ただ僕は昔からこう，そういうのに疎い方なので，疎い，鈍い，ので，あの多分自分が別段見られてなくても気にしなかったんだろうなって。たぶん小さい頃はお得な性格だった。</li> <li>• K さん（男性・兄）46：あとはちょっとそうですね具体的な年代がちょっと小学生のときだったか…あ，でも小学生のときですね。それは小学生のときなんですけど。自分と同級生がいて，その同級生と仲良かったのでよく遊んだりもしてたんですけど，その自分が 2 個上に兄がいて，その 2 個上にその同級生のお姉ちゃんもいたんですけど。お姉ちゃんは特に障害があるとかそういうわけじゃないんですよ。その時自分の兄と同級生の姉が，ちょっと揉めたみたいで。それについて何か一旦同級生の方から，自分の方にちょっといろいろ言われてしまって。自分もその同級生とちょっと，一旦そのことが原因でちょっと揉めてっていうことがありましたね。<u>そこで母がやっぱり上の子たちの喧嘩を下の子たちまでしわ寄せするのは違うだろうっていう話をちょっとしてくれたみたいなんですよ。</u></li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 親がきょうだいは，きょうだい，ASD 児・者は ASD 児・者としてきょうだいも ASD 児・者も特別扱いせず，1 人のこどもとして関わっている状態。</li> <li>• [強引な平等]，[理不尽な世話係] との関連について要検討。</li> </ul>

概念名	強引な平等
定義	親が ASD 児・者との平等を意識しながら関わってくれていることに気づきながらも無理矢理さを感じる
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• C さん（女性・兄） 99：（母親は）多分私のことも兄のことも...平等に見てくれてると思うんですけど、どうしても平等って言っても、兄のことに普段かますぎているから、それを補うための平等さ、強引な平等さというか。そういうのはちょっと感じはするんですけど。子供の頃はそんなことに気づかないんで、平等に見てくれてるって思ってたんですけど、ちょっと大人になって何かそういうことを感じ取ってしまって。これは多分補うための平等さだなと感じ取ってしまってからは、私もなんかあんまり大人になったってこともありますけど、あんまり「私のことを見て」みたいなそういうのは本当にますます減ったっていうか。どうぞ兄のことを頑張ってくださいって私は勝手に引きますって感じで。</li> <li>• H さん（女性・弟） 74：（H さんへの指導と弟への教育の質は）もしかしたら一緒かもしれないですね。子どもにたいして教育をしようって思って、もともと厳しかった私にはもっと厳しくしようって感じですかね。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「平等」にもスペクトラムがあるということ。ただ単に関わる時間を増やせば良い、というわけではない。きょうだいは、その違いに敏感に気づく。[同じ 1 人の子ども] と似て非なるもの？</li> </ul>

概念名	きょうだい自身の時間
定義	きょうだいが自分の時間を過ごせるように親が配慮していること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Aさん（女性・兄）46：大学も含めあるし、アルバイトもしてたので、割と家にいない時間の方も多かったし。卒業の時なんかは丸々ヶ月くらいは旅行、海外旅行とか行っちゃって。まだおばあちゃん家にいたんですけど結構な状態で。なんかすごいひどいことしたなって。でもそれも、親はまあ、ね、あなたの最後の大事な大学生活だから、好きなことしときなさいっていう話をもらったんで、じゃあってそのまま行かせてもらったりとかはしたんで。まあ私は本当に自由に、やってたなって。今もそうですけど、思いますね。手伝ってるつもりでも大して手伝ってなかったのかもしれないですけど、かなって思います。時々やって、あとは本当に自分の好きな大学生活を送って、サークルもやってとか、合宿も行って、とか。特に不便感じたことはなかったですね。</li> <li>• Eさん（男性・弟）26：いやでもいつも通りですね。あの一、基本的にうちの親はあの一、やりたいことをやれば良い。もう自由に遊んでらっしゃいってという家庭だったので、特にそう人間関係とかその辺りは言われたこともないし。まあ接しかたとしては、怒る時は怒るし。それ以外でなんか特段怒られてことってあんまりなくて。よく寄り道をするやつだったので私は。それでは怒られましたな。</li> <li>• Jさん（女性・弟）137：何かそんなに何か本当に大学に行ってからとはそんななんかもう自由にしていって感じになっちゃうんです。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいがASD児・者や親のために自分の時間を使っていることがある。それは意識的に使っている場合と、無意識的に使っている場合がある。そこに親が入ることできょうだいのための時間を作ることができる。その時間を保証されることそのものに意味がある。</li> </ul>

概念名	反転された受け止め
定義	きょうだい親の気持ちを汲んで受け止めていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Aさん（女性・兄）61：そうですね。やっぱり、私はそんなですけど、母が毎日兄がいると疲れる。で、精神的にやっぱりイライラするんですよ。どうしても。ちょっと家の中の空気感が悪くなって、私が色々喋れなくなったりし。テレビ見てちょっと笑ったら嫌な顔されそうだな、とか。しないとしてもですよ？だからそういうのもあるんで、結構顔色を見て生きてきてるんで。</li> <li>• Bさん（女性・弟）60：で、彼が就職、作業所に入ってから、休みののが嫌なんです。だから熱とかもしょうがない時は休むんですけど、ちょっとの咳とかだど行くって言ったりとか。じーっとしてて、それがここ2、3年あたり、疲れちゃったのか、今日休む？って聞くと休むって、休んじゃうんだよって母親が言ってたので。とうとうおじさんに足を踏み入れましたねとか。そういうなんだろう、日常のこととかも実家に行くと母から聞いたり。ただ私が行く時間が、弟が作業所に行ってる時間に行くことが多いので、夕方は自分の家切り盛りしないといけないので。そういう話を聞いて、良かったねとか、こうなんじゃないとか。今度はね母親のたまったものを癒させに行く時間、その時は。で、あとはなんかケースワーカーさんに、施設に宿泊訓練に来て欲しいって言われるんだけど、本人は行きたくないんですよ、一回行かせたんですけど、帰ってきて、また行くー？ってやだーって、言ってて。やっぱり合わなかったんだよって言って。でも、今年も宿泊させない？って言われちゃって母は言っていて。行かせたくないのよね、どう思う？とか、そういう話を日々してますね。</li> <li>• Cさん（女性・兄）19：（父親は）家族に興味がない。一番兄に興味がなく、私にも母にもそんなには興味がなさそうな感じがしますけど。定年退職をして、今はずっと家にいて自分の部屋にこもってPC見てるみたいな感じで。結構母親も参ってるみたいなんですけど。〈参ってる〉ほぼ…呆れて諦めてる感じではあるんですけど、時々私に愚痴メールをしてくる、っていう感じです。こっちがちょっとたまに様子どうかなって思ってメールすると、それに対してぶあーっと返ってきたりして。私からメール送ると「待ってました」みたいな感じで返ってくるというそんな感じですね。〈ここぞとばかりに〉はい。溜まってるんだなーって。〈そうしたメールが来たときはどう思われる？〉やっぱりか、みたいな感じの内容ばかりなんで。まあでも私がなんかアドバイスとかをいう立場でもないんで、まあ、そうなんだ、やだね～みたいな。そんな感じで同意というか、受け止めるくらいしかできないんですけど。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• H さん（女性・弟）35：M は結構、うーん、昔、私に対してあんまりあの一関心がないわけではなかったんですけど、面倒見なかった、甘えさせてなかった、みたいなあの一っていうのがあったので、そういう部分で今になって気にかけてくれたり、はい。結構気を使ってくれたり。私自身も、昔は完全に親子だったんですけど、今は相談を持ちかけられたり家のこととか。色々まあ抱えてるものもあると思うので、そういうのの相談にのってあげたり。なんか、対等じゃないんですけどそういう話もできるようになってきました。</li> <li>• K さん（男性・兄）23：そうですね。小学生だとか、今は結構もう年齢が上がって結構落ち着きがあるんですね。小学生のときとかはちょっと怒られただけでも結構癩癩を起こしてちょっと揉めちゃったりするのをしてたので。その時にはやっぱお互いストレスじゃないですけど、ちょっと怒りのはけ口じゃないですけど。そういうときになるとちょっと自分が宥めたりして。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ある種の逆転が生じている。母親が吐き出し、それをきょうだいを受け止めている。マクロな、日常レベルで生じている現象。その質、程度、頻度が問われるか。☆コンテイン [対極例：母親の受け止め？]</li> </ul>



概念名	気持ちを受け止める
定義	きょうだいが自らの気持ちや考えについて主張する言動を親も正面からキャッチしようとしていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Bさん（女性・弟）30：<u>一番覚えているのは、えっと、まずは、どのくらいからなんでしょうね。考えてみたんですけど、やっぱり一番自分で覚えているのが、幼稚園くらいに、母親に、やっぱり弟の方が可愛いんだろってことを言った、んですよ。で、その時にごまかさずに母親もきちんと答えてくれて、多分弟がこういう子だから、誰かが助けてあげたりしないと、あの、他の人とコミュニケーションが取れないとかそんな難しい言葉は言われてないんですけど、とにかく助けてあげないと困っちゃうから、多分私、あなたよりも弟の方に色々と手をかけてしまうけれども、あなたが可愛くないとかそういうわけじゃなくって話を一対一でしたんですね。で、幼稚園生ながらになるほどって思ったみたいで、それから一切言わなくなったのよっていうのを小学生くらいに、何か話した時にそんなことを言って、そういえばそんなこと言われた気がするって話を母親として。と、そうですね。それから多分、あ、守るんだ一っていうのがずっとあったと思って。</u></li> <li>● Dさん（男性・弟）34：<u>なんか…僕の母親は引かない人なんで、それ（「それはあなたたち親の目線でしょ」）を言ったからシュンとするのかないんですよ。「いやそうだけどさ」みたいな。「そうけど、そこはこうでしょ」とか「何あんた今更そんなこと言ってんの」みたいなこともありますし。キャッチをしようとしてるんだと思います。そこで多分、僕も曲げないので、そのことじゃなくても「俺こう思う」みたいのを、引かないんで…話が前に進まないんですよ。だから「そうなんだね」って感じなんじゃないですか？(笑)…なんかありますよね、無条件の肯定、みたいな。なんかそんな感じかな、みたいな。</u></li> <li>● Eさん（男性・弟）11：母も、その時母なんですけど、<u>なんか私の不安がどのあたりから来てるかというのは察知した感じがあって。なので喧嘩みたいなふうにはならなかったんです。例えばお金はどうなのかとか。こういうときの私、何て言うんでしょうまだ結婚とかもしてないので、何かこういうふうサポートが妹に大きなサポートが必要になったときに、すぐ動けるかわかんないとか一抹の不安があり、それが何か全部受け止めてくれた感じはしました。</u></li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● [主張-受け止め] では二つの意味を含んでしまため、[自分の思いを主張する]と[きょうだいの気持ちを受け止める]に分割した。</li> <li>● きょうだい率直に出してくる言動に対してはぐらかす、蔑ろにすることなく、正面から向き合っている状態。</li> </ul>

◆ 研究Ⅲ分析ワークシート

概念名	お目付け役として守る
定義	きょうだいが ASD 児・者のお世話係を担っていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）36,37・・・あ、わかる。うんと一番、すべては母親のためだと思います。あの、母親に苦勞をかけたくないとか、母親を悲しませたくないとか、そういう気持ちから出てた行動なんじゃないかなって思いますね。あとそうだ、あとはね、授業参観に来てくれた時に、弟いなくなっちゃたんですよ。で○号線、がありますよね。○号線って大きい通りなんですけど近くにあって、そこ沿いの、電話ボックスで見つかったんですけど、轢かれなくてよかったーとか。本当になんかそういうのが、結構いなくなっちゃうのがあったんですよ。今の彼からすると考えられないんですけど。だからいつもお目付け役で、友達と遊びたいのに、今日は母親がお買い物に行っている間見ててねって言われると、え、良いよ。って言って。一緒に外で遊んで待っていると。〈そういう時はどんな気持ちに？〉しょうがないかなって。でも、うん、それで、なんか考えたんでしょね。団地に住んでたんで、友達を団地の公園に呼んじやって。そうすると一緒に遊べるじゃないですか、で遊んで。で、ただ、あの友達で弟が嫌だっていう子いるかなって前もって言って。いや実はねって。ってみんな良いよーって。もうそこも困らなかったですよ。</li> <li>• C さん（女性・兄）80・・・たまにですけど、こう兄と家族で出かけたりすると、どうしても私が母が目を離す時はどうしても私が見てないといけない、みたいな、まあお節介もあるんですけど、自分がちゃんとしなきゃ、みたいなのが勝手に芽生え始めてて、って感じですかね。</li> <li>• D さん（男性・弟）57・・・親。親なんじゃないですかね。親の関係がでかいのかなって思いますけど。親が弟にめちゃくちゃ怒ってる時とかに、なんでそんなに怒るの、って思う時もあるんすよ。だからめちゃくちゃ怒られてるから俺がケアしなきゃみたいなのも結構あって。親との関係が前後じゃないのかなって思いました。上下の関係じゃなくて、横の関係で割と。で、まあでも親だっていくら息子だからと言ってもムカつく時はムカつくよな、みたいな。じゃあそうなってるなら逃げ道を俺が作らなきゃな、みたいなのは小学校の中学年くらいから。なんで中学年くらいからかなって思ったかという、弟が…僕が小 3 で小 1 なんです。だから学校生活の時は全て俺が守る、みたいな。僕も調子いいんで、味方が多いんですよ。敵に、僕の味方だから、弟からしても味方な</li> </ul>

	<p>んですよ。そこがくっついていたりとか、でコミュニティができて。でも同学年とかに嫌なことしてくる奴がいて、僕の1学年上とか。は、僕の2個上が成敗してくれたりするんですよ。っていうふうに、なんかこうそこらへんが一番守んなきゃって意識が強かったですね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Gさん（女性・姉）57・・・ふふふ（笑）なんだろう。よく夢をみるんですけど、なんか追っかけられてる夢とか。怖いじゃないですか。姉がいるんですよだいたい。逃げるのおそいんですよ。で一生懸命引っ張ってるんですよ。それは高校の頃とかから変わらず時々見る夢で。やっぱり自分の中でどっかですごい守んなきゃじゃないんですけど、そういうのが中学校とか高校の時はそんなに関わりなかったと思うんですけど、そういう意識があったのかな。家族として大事だとは思ってたので、それ変わらずあるかなーって。</li> <li>● Hさん（女性・弟）55・・・私の中で弟は守るもの、ってなってる。もう自動的に弟を中心に考えて、とにかく弟がどっか行かないか、迷子にならないかって感じで。きょうだいていうよりかは親みたいな感じで、すごい見守ってました。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 出生順位，性別に関わらずきょうだいがASD児・者と行動を共にする際に体験しやすいこと。</li> <li>● この概念の対極例は見られない。</li> <li>● [守る]と同様の内容のため統合。</li> </ul>

概念名	きょうだいだから分かる
定義	きょうだいだからこそ ASD 児・者と通じていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● B さん（女性・弟）39・・・でも、弟が大好きだったんだと思うんですね、ちっちゃいながらに。あの言葉が、出ないって言っても、単語は言うんですよちっちゃいころからね。その、やっぱりきょうだいだったからなのか、母親よりも分かる率が高くて、で、なんとかって言ってるよって母親に言うと、あ、そうなんだって。で、その言葉がわかった時の弟の笑顔がすごい良かったんですよ。それが多分見たかった、っていうのが理由、なのかな。</li> <li>● F さん（男性・弟）46・・・そうですね。まあ多分僕が物心ついた頃にはうちの弟がいる、というかいたと思うので。しかももう自分が記憶にあるのはビエビエ泣いてる姿、なので。うーん、ただ多分、自分の中で、こう弟と一緒にいる中で、このことこれをこう言ってる時は、何か、彼の独特の言葉があって、独特の言葉とか仕草なのかな。があって、それ、が何なのかなって一緒に考えてたのかな。なんかそのよくうちの母とかからは「あんたらは昔から通じあってたからね」とか言われて。でもそう言われれば多分嬉しかったんですよ。</li> <li>● I さん（女性・妹）8・・・多分、わからないんですよ、私はずっと多分障害を持ってる妹とかいう言い方は、してたときもあったけど、それを認識する以前、つまりだいぶ幼少期からかなりずっと仲が良かったので、すごいもう波長がすごい合う。であってやっぱり大きくなってくると、やっぱり周りのね視野も広がって、いろんなことの付き合いが増えて、自分の何て言うんでしょう、そのポジションというか社会的なポジションみたいなのを意識するようになったりしてとか。いろんな人の家族の話とか、状況を耳にすることが増えたりとかすると、やっぱりなんか隣の芝が青く見えるんだよね。うちではできないな～とか思うことは多くて。ですね。それは折に触れてありますけど。でもなんか結果的には今はすごくまた戻ってきている感じで。なんか今も健常のきょうだいがいればいいのにみたいなふうには、今はもうあまり思わなくなりました。でも本当に折りに触れてありますね、ありました。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 親子、でなくきょうだいだからこそ通じる部分がある？それは単純に年齢が近いからとか、そういう生物学的な理由として捉えるのか。あるいは無意識的な距離が近いからという心理的な理由として捉えるのか。ただ漠然と「それはありそう」という感覚にはなるけれど。</li> <li>● 当然、さっぱりわからない、というのもあるだろう。ただ特性的にはむしろ「わからない」ことの方が多いのでは？現に、概念としては成立しないまでも、「言葉でやり取りできないから、本当のところはわからな</li> </ul>

	い」という語りは見られていた。この「わかる－わからない」にも何かきょうだい関係の特質が反映されているのか？
--	---

概念名	思春期にかけて一緒に出かけると周りの目を気にする
定義	きょうだいが思春期の頃に ASD 児・者と一緒に出かけることで ASD 児・者の障害特性について周りの目を気にすること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）28：なんか…怒ったりとか，手を叩くんですね。なのですごいこう破裂音とかだして声を出して，みたいのが多かったのので，そういう時は周りのサって，シーンとする感じが確かに思春期の頃はやだなっているのはありましたね。そこはまあだんだん慣れてったのか薄れてったのかっていう感じもあるんですけど，周りの目みたいのは当時は確かに気になりましたね。</li> <li>• B さん（女性・弟）34・2・・・で，1年生の頃は本当に泣き虫で，男の子によくランドセルとか蹴られてたから，いやこのままじゃいけないって言い返して。何かエイってやったら，あくる日から何もやられなくなって。あいつこええぞ，みたいな感じになってくれたので。そうですね。そういう関係でも楽で。なので，あとは良かったことになるのかな。やっぱり弟ができないんだったら，自分ももっと頑張らなきゃって思っ。本当にもうこの歳になると，あああの時あんなに頑張らなくて良かったのにな，って振り返ると思ったり，するんですけど。うん。なんかね，この歳になって，改めちっちゃい時の自分に会ったら，頑張ってるねって声をかけてあげられるのになって。でも周りもそれを認めてくれている人が何人かいたの。で，一番，一番？うーんとね，小学校の3，4，5と担任を持ってくれた先生と未だに手紙のやり取りをしているんですけど，その先生がとても気にかけてくれていて。で，そうですね，思春期の時とかにもすごい相談相手になってくれた気がするんですよ。そういう方達にも恵まれたっていうか，うん。本当になんか困ってないんですよ，自分自身が。で，悪いことっていうか，小学校の高学年になって，だんだん分かってきますよね，こう自分のきょうだいは違うって。で，ちょうど，近所にも同じ年で，そのこのごきょうだいがやっぱり肢体不自由，の方だったのかな。で，知的にもあって。で，うちの弟は肢体不自由がないので，あの逆に言うと恥ずかしがり屋さんねというか，周りの人が気づいてくれないところがあって。でもあの奇声を発してしまうので，ちょっとそういうのがあると，え?!って感じで。恥ずかしいなっていうのがまずあったかな。で，<u>ちょっと高学年から中学生くらいは一緒に電車に乗るのを，親の前だから平気なふりをしているけど，やっぱりちょっと離れ…られるものならちょっと距離おいちゃおうかなっていう心と戦ってました。あの，恥ずかしくってっていう。でもその恥ずかしいって思う自分も嫌なんですよ。そこで葛藤してた感じです。</u></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Eさん（男性・弟）78・・・ありますよやっぱり。あの一特にやっぱり大学生とか高校生くらい。まあそれくらいになってくるとやっぱりそういうのがよりあったり、周り気にするようになりましたからね。ただ、だから気にしたからどうすんのかって話でもないんですけど、例えばこいつには話さない方が良くないってというのは結構ありますよ。</li> <li>● Gさん（女性・姉）23・・・私、それこそ試合、とかだけじゃなくても、親と一緒にいるだけでも、一緒に居る時に友達に会うのもすごく嫌だったんで。姉が、というより、家族とはもう一緒にでかけることがなかったと思う。</li> <li>● Jさん（女性・弟）32・・・本当にたまにしかないんですけど、なんか弟と一緒に外に出たときに、でかい声で独り言とか言われるとちょっとアレです、困ります。〈困る？〉何だろう。なんかつつい周りを気にしてしまうというか、人がいるときだと周りに。</li> <li>● Kさん（男性・兄）12・・・そうですねどんな…まあ普通に昔は確かに小学生のときとか、中学生ぐらいまではちょっと気にしたりするのもあったんですけど。今は別にそんなに特に関わり…なんかその周りの人とかにやっぱりその中学生ぐらい、小学生ぐらいだとちょっと言われることも。ある可能性もあったので、あんまりお互いに話してるところを学校で見られたくないとかあったんですけども。今はそこまで別に話してて、特に普通の感じでは関われるんで。いやとかそういうのはないです。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 思春期の頃にしばしば見られるきょうだいの感覚。恥の感覚？</li> <li>● 「気にならない」という概念は出てこないが、それは自然と「気になっていない」からかもしれない。</li> </ul>

概念名	療育施設等への付き添い
定義	きょうだい ASD 児・者の集まり（訓練会、療育施設等）について行くこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）37：そうですね・・・中学校の時は・・・。養護学校に兄が行って・・・まあでもその養護学校の学校祭とかに行ったりとかはしてましたし。中学校の時は・・・訓練会ってそのさよちゃんも、すずな会っていうんですか？とかも小学校、中学校くらいまでは私も兄も行って。あたしもそこはずーっと一緒に行って、そこで調理実習とか。楽しいじゃないですか。だからいろいろ私もやって一緒に楽しんでたし。そこでそのきょうだいの友達とかも作って。その時代はまだそれで結構楽しかった。けど、そこで旅行も行ったりするし、っていう仲間みたいのは作ってたかなって感じはしますね。</li> <li>• D さん（男性・弟）82・・・そう、「弟の業界」（笑）例えば 1 人で全然知らない子が見たら、いて、バス停で 1 人でジャンプしてる子がいたりすると、「先輩いたぞ！」って言うてみたりとか（笑）って言うてもよくわかってないから「うん」って言うてたりとか。「お友達だね」とか。まあそういう話を家でもするんですけど、その小学校の頃から〇っていう塾じゃないですけどそこに行って。で、ようはそういう子たちがたくさんいて、なんか 1 人で怒ってる子がいたり泣いてる子がいたり…すごい関わろうとしてくる子がいたりとかして。で、僕その弟が幼稚園の頃から通ってたので、その迎えとかは一緒に行くことが多くて。小学校 2 年生の時とかだと、最後の 30 分くらいの遊びに入れてもらったりとかして。で、こうなんだろうな、同じようで同じじゃないっていう感覚がわかってきた。こいつはこうだ、この子はこんな感じなんだろうなっていう。</li> <li>• H さん（女性・弟）57・・・経緯は、そうですね、なんかきっかけがあったというよりは、普通の子とはちがうんじゃないかなって私自身が感じて、たぶん自分のちっちゃかったころと比較して、このくらいの年になったら私は落ち着いてたな、とか、自分と比較したところから始まったと思います。<u>療育センターとかに M と一緒に行って、なんか弟と似た雰囲気の子がその施設に集まっていたので、弟は普通の子とは違うのかなって感じてました。</u></li> <li>• J さん（女性・弟）58・・・なんか普通になんか結構センターにいっぱいいたんですけど、普通に一緒に遊んでましたね。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 多くのきょうだいが体験するであろう出来事。ASD 児・者が通っている施設等への付き添い。そこで何を感じていたのか、何を体験したのか。具体例からは、「障害を持つ人の理解」を深めているような。それは巡り巡って ASD 児・者の理解そのものにつながっている、ということか。</li> </ul>



- |  |   |
|--|---|
|  | <ul style="list-style-type: none"><li>• 付き添わない, という概念は成立しにくい。</li></ul> |
|--|---|

概念名	こだわりに対して反発しても変わらない
定義	きょうだい ASD 児・者のこだわりに対して反発しても ASD 児・者が意に介さないこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>A さん（女性・兄）24：そうですね～なんか笑い話的に言ってますけど、私は下に見られてるので、妹ですからね。扱いが年々雑になってきて。なんかちょっとこれ持ってってお願いって言ったりすると無視したりとか。なんか目を合わせなかったり。おおいて突っ込みたくなるような態度とか、なんか最近増えてますね。まあ会う機会もやっぱり減ったので、時々会ってなんだかんだ言われるのがうるさいみたいで。私もからかい半分で接したりもするので。そこでまあ私がいけないんだらうなって思いながらもやばこうだいぶ雑に、私に対して雑になったなって。信頼関係があまりもうないのかなって。本当になんか笑っちゃうようなことも、私が料理してても横でずーっと見てきたり。一回手を出されたことが、炒めてたら奪われて炒められたことがあって。それまでそんなことする人じゃなかったんですけど。それ母親に言ったら美味しいものができないって心配だったんじゃないって。言われたりとかして。まあそれはそれで面白いんですけど。まあそれ以外特に何もやってこないの。こっちがやらなければ基本的に何もしてこないっていうのはあるので。まあとはちょっと、<u>自閉なので、こだわりが強く、靴下を部屋で履いてると強制的に脱がされたりとか、リモコンがちょっとずれてたら戻すとか。そういうのはあるんですけど、人間とし重ねてくるとそれがエスカレートというか、きっちりきっちりしないといけないっていうのがあってこっちが脱ぎたくないっていうのは無視で、引っ張って取ったりとか。まあそういう時だけちょっと怒ったりはしますけど。まあそれが怒られようがなんだろうが、っていうのがあるので。伝わらないなっていう。くらいですかね～。関係性はなんか同じですね。昔と変わらないです。舐められてる感じもずっと変わらない。ただ母親がいない時は、その場に誰の言うことを聞けば良いのかっていうのは判断してるみたいで、どうしても私しかいなかったら、私の言うことを聞くっていうのは選んでいるみたいで。まあ心配は心配みたいのは感じますね。面白いんですけど。</u></p> </li> <li> <p>D さん（男性・弟）10-11, 15・・・どう思う？どう思うって難しいですね…。それは、こう、日によります。僕が帰ってきた瞬間に撮ってたりすると、わかっちゃいるけどイライラしたり。はあ～…みたいな感じだったり。ちょっと待ってくれて思ったりもしますし。まあでもこうルーティンだから、など…。どう思うとかないというか…。〈どう思うとか</p> </li> </ul>

	<p>ない〉そういうもの、みたいな感じで。～それはもう「自分は納得してないから黙っててくれ」と（笑）うるさい、と。曲げないっすね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• E さん（男性・弟）21：困ることは...うーん...やっぱり、いろいろ困ることはあるんですけど、別にそれを客観的に見ると多分困ってるんですけど、困ってるっていう風には思っなくて普段は。だから例えばすごいクセがあるので、あの一例えば、これはここになきゃいけないとか、そういうのがあるんですね。こだわり、強いですからね。だから例えば風呂場一つにしても、椅子の位置がすんげえ端の方に移動してたりとか、もう鬱陶しなあとかいつも思うながらやってますけど、でもそういうのはやっぱりあるんで、まあそれはもう持病なん...治らないものだと思うんで、それはもう今さら治そうと誰も思っないの。ただあの一、そのこだわりが強すぎるがために、いろいろその順応できない、彼が。それが多分困るのかなあっていうのはありますけど。ただあの一、あいつがすごいなって思うのは、さっきもちょっと言いましたけど、その使い分けをしたりするので。例えば、今俺に何か頼ってくるといえば、何か欲しいとドライブ連れてって欲しいとか。あとは困った時、何か腹が減った時とか、あとはどっかに何か食べに行きたいとか。そういう関連のことは僕なので基本的に。そういうのは、もう、おにいちゃん。それこそもう、次男が帰ってくると、もう次男一筋なので。もう俺なんかそっちのけで、っていうのがあるので。で、まあそういうところがこいつ面白いなあとかっていつも思うんですけどね。うん。あいつのことはそれくらいですかね。</li> <li>• J さん（女性・弟）80・・・なんかもうルーティン化してたんだと思います。何か幼稚園の頃とか、特にそういうその日常、なんかそのルーティン化されたことからちょっと外れたりすると、なんかもうなんかそういうことは受け入れられないというか。今よりも何か柔軟な対応とかできてないかも、できなかったんだなと思います。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいは ASD 児・者の特性に理解は示しつつも、その背後には面倒だと感じていながらもどうしようもない、と諦観しているニュアンスが含まれているように思われる。</li> <li>• こうした特性に対して反発を全くしない、という場合も当然考えられ、その方が事態は深刻かもしれない。</li> </ul>

概念名	特性を通じた関わり
定義	きょうだいが ASD 児・者の特性を通して関わっていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）23・・・一緒にいるって言うのが一番自然な形なんですかね。で、何か困ったことが、何かやってほしいこととか、ほしい、やっぱり自閉的なので、こうそこの実家から帰ってくるときに、必ず、幼稚園のときにいただいたあの、キリスト系のイエス様の絵本があったんですよ。12ヶ月こう1冊ずつ。あれを何を思うのか、1冊ずつ自分であるんでしょうね、その日の気分が。それを開いて読めと。でそれを読まないと返してもらえないっていうのがありますね。</li> <li>• C さん（女性・兄）②7・・・昔からずっと変わらないのが、洗濯バサミとかカンカン音が鳴るものが好きなのがずっと変わらなくて。なんかそれをちょっと意地悪して取ったりすると、「返せ」って言ってきたり。</li> <li>• D さん（男性・弟）②7・・・ルーティンあります。家帰ってきて、まずシャワー浴びて、撮り溜めをしているアニメを見ながら横になってスマートフォンをいじって。で、なんか撮影タイムがあるんですよ。自分の好きな場面とかを、自分のスマホで録画するんですよ。で、それをするにあたって、光の反射とか音とか、外界の音とか一切ない状態じゃないとダメなんですよ。だから家の前にバイクが通ると、撮り直したりするんですよ。だからその間は全員家の中で無の状態でいなきゃいけない。</li> <li>• E さん（男性・弟）37・・・<u>いや多分、自分にかまってなんで。だからあの、何いつまで寝てんだよっていうそっちですね。あと寝てる時ニンニク投げられたりとか、普通にありましたけどね。何か投げるとか壊すとかあいつの専売特許で。</u>だから例えばプラレールとか俺らが作ると、壊すのが弟。まあ、それぐらいですかね、困ったのは。まあ困ると言うよりはそれはもう何か俺らの中では、ああ壊しちゃったねえで終わり。でも多分怒ってたとは思いますが。怒ってたとは思いますが、でもそれ以上言ってもしょうがないっていうのを母に言われてたので。</li> <li>• F さん（男性・弟）52・・・たぶんうちの兄からも出てると思うんですけど、一回、うちの弟が、川にあるモニュメントに登ったことがあって。あの一僕が小学校に通ってた頃って、大通りがあって、で、その横にまあ歩道があって、ちょっと隔てて小さい川があって、そのこの川に水が吹き出る岩のオブジェクトがあったんですね。で、結構な高さで、たぶん子供の頃でも自分の頭2個分、3個分くらいはあるようなところだったと思うんですよ。それに水がジャーっと出てるので、彼がかなり水が好きなので。で、あの自分は当然、困難ところで靴と服を濡らして帰ったら、お母さんに怒られるってわかってる。ただ、うちの弟には常識が通じないので、だーっとその水に近づいてって、まあいつも通りの</li> </ul>

水好きだなあと思っていたら、だーっと登って行ってしまって、で、まああの子供ながらにどうしようですよ、お金も持ってない、テレホンカードも持ってないから、とりあえず M に電話するのは無理。でもこいつを 1 人置いて家に帰るわけにもいかない。で、すごい困った時に通りがかりのジョギングしてたお兄さんがあの一さーっと上がって抱えて戻ってきてくれて、一件落着だったという。たぶん自分の中で美化されてそういう風になってるのかもしれないのですが、30分~1時間くらいは悩んでたんじゃないかなあっていうくらい、自分の中では長かった事件です。あれは事件ですね。うん。

- I さん (女性・妹) 17・・・妹、そうですねその妹がその私が素直に発した発言とかをきっかけに何かパニックになるとか。ようは收拾つかなくなるんで、つかなくなるみたいな状況が結構あって。だから「こういうふうにあなたが言えば、今こんなことにならなかったのに」みたいな声を親から言われることが結構本当であって。親はもう本当に妹の対応がもうなんかかなりもうなんか染みついているというか。もうそれありきで生活している。そんな感じで何か対応の術というか、わかっているみたいな感じがあって。私は私できようがないのでまた親とは違う存在なので。なので親と同じようななんて言うんでしょう、包み込むような包容力で対応できないときばかりで。なんか私なんかもう普通のなんかこの人しか妹いないし、何かこういうもんでしようと思って話したりすることが「何でお母さんはこういうふうに言ってくれるのにお姉ちゃんがこんなに厳しい言い方するの」みたいな感じですよみたいな感じでわーってなって。それを見て親がもうなんか「だからこういう言い方して」っていつも言ってるのにみたいな感じで私は責められるっていう構図が本当にもうよくできていて。なので、こう押さえるみたいなことですね。ことが結構私は求められる。その妹が抑えられない分、私が押さえないきゃいけないと、私は感じてたんですけど。抑えろと言われてたわけではなかったかもしれないですけど、こういうふうに例えばその妹がこういうことを話題にしたら、あなたはこういうふうに何か振舞ってみたいなこととかも結構。うちの母がしんどかったんだと思うんですよ。予期せぬタイミングで妹が結構崩れたりとかするので、それをいかにして收拾つけるかみたいなところを普段から考えたと思うんですけど、そその一環で私もそういうことが求められていたっていう感じだったんですかね。なので、はい影響は大きいと思います。
- J さん (女性・弟) 96・・・でも今とそんな変わらないというか。なんかすごい重いわけでもなかったのが弟の場合。なんか普通になんか弟が何かどうしても出掛けるのに付き合ったりとか、そのぐらいで。ただな

	んか弟が結構料理とか服とかを何か曜日で決めてて。それには必然的に合わせる感じにはなりますよね。
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいは ASD 児・者のこだわりを介しても付き合っている。家庭で生活しているからこそ、当然のように生じてくる関わり。こだわりを介さない関わりや、そもそも関わらない、というのもあるか。</li> <li>• 対極例：特性を通さない関わり？そもそも関わらない？→ [思春期・青年期にかけて距離ができる] として概念成立。</li> <li>• [きょうだいが ASD 児・者のこだわりと付き合っていること] → [きょうだいが ASD 児・者の特性を通して関わりが生まれていること] へ定義変更。具体例を見るとこだわりだけでなく、ASD 児・者それぞれが持っている特性は特性として、ASD 児・者個人と関わっていると考えられたため。</li> <li>• こうした特性を通した関わりにおいて、きょうだいは何を感じ、それに対してどのように向き合っているのだろうか。→ [特性に反発しても変わらない] との関連。</li> </ul>

概念名	一緒にいると恥ずかしい
定義	きょうだいが ASD 児・者の障害特性から一緒にいることを恥ずかしいと思うこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）34・2・・・小学校の高学年になって、だんだん分かってきますよね、こう自分のきょうだいは違うって。で、ちょうど、近所にも同じ年で、そのこのごきょうだいがやっぱり肢体不自由、の方だったのかな。で、知的にもあって。で、うちの弟は肢体不自由がないので、あの逆に言うと恥ずかしがり屋さんねというか、周りの人が気づいてくれないところがあって。<u>でもあの奇声を発してしまうので、ちょっとそういうのがあると、え?! っていう感じで。恥ずかしいなっていうのがまずあったかな。</u>で、ちょっと高学年から中学生くらいは一緒に電車に乗るのを、親の前だから平気なふりをしているけど、やっぱりちょっと離れ…られるものならちょっと距離おいちゃおうかなっていう心と戦ってました。あの、<u>恥ずかしくってっていう。</u>でもその恥ずかしいって思う自分も嫌なんです。そこで葛藤してた感じです。</li> <li>• H さん（女性・弟）66・・・直接なんか嫌と言うよりは、うーん、たとえば学校で見かけた時に大声で名前呼ぶのが恥ずかしいとかっていうのはありました。やっぱり根は良い子なのであんまり嫌なことはなかったです。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Kさん（男性・兄）15・・・小学生の時のきょうだい関係ですか。そうですね…。そうっすね，お互いちょっと距離がやっぱり自分もまだ幼かったんで，やっぱ友達からとかもそういうふうに言われたりするのが，やっぱ全員が全員子どもに障害について理解があるっていうわけではなく，どうしてもそれは難しいので，そういうことでからかわれたりしたり言われたりするのちょっと嫌だっというのもあったんで。あまり自分の方から兄の話をしたり関わりに行ったりっていうのはちょっと小学生のときはなかったですね。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだい ASD 児・者といえる中で抱く気持ちのひとつ。</li> <li>● ここに説明があるかないかで受け止め方が変わってくる？</li> <li>● 何も感じない，という対極例は存在するのか？</li> </ul>

概念名	寂しさからくる攻撃性
定義	家族の関心が ASD 児・者に向いていることできょうだいが家族の中で寂しさを感じるが故に攻撃性を発露すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）47・・・なんか…うーん。本当に昔は、<u>兄っていうかからかいの対象でしかなかったの</u>で。っていうのがあって。からかいすぎて噛み付かれたりとかしましたし。<u>なんだろうまあ、寂しいんですかね</u>。なんかよくきょうだいの本とか、話とか、そのかかりっきりで自分は関わってもらえない寂しさに襲われる、みたいな聞くんですけど、そこは別に感じたことはなくて。だけど、<u>やっぱ…なんだろう一緒に見てもらいた</u>いって。うん…からかう事で私も注目してっていうのが自然に出たのかなって。と思うんですけど、そういうことばかりずっとやってきて。で、今は、昔から、兄の方が冷静なので。精神的になんか、なんだろう、軽くあしらうってところは昔から変わってないんですけど。そこに伴って私もこんなことばかりやってしまう。いけないなってそういう意味では、兄もそういう出来る部分とか冷静な部分を見て、ちゃんとしっかりしようって思ったし、こういう仕事をやって障害のある人と関わって、きょうだい目線でどうしても見ちゃうことがあって。あつたりもするんですけど、まあそういう、からかうわけじゃないんですけど、そういう意味でしっかり人対人でやらなきゃ、ぶつからなきゃ相手もわかんないし、なめられたりこっちもなめちゃったり、そういうのがあるんだなってことも仕事してわかったから、兄に対しても、ちゃんとトーン変えて、ただからかうんじゃないで、伝えたいことはパーっと言ったりとか、そういう接し方はちゃんとしなきゃなっていう、感じに、大人としてはしっかりしようっていう風には仕事してから思いましたね。ちゃんと接すればわかるんで。態度とか声のトーンとかで本当にわかるので。同じこと言ってもビシッとといえば伝わるとかもあるんで。</li> <li>• D さん（男性・弟）②87・・・どんな小学生だったか…お調子者で、クラスは俺が中心に回ってる、みたいなふうに思ってた。でも自分で自分的には人に嫌なことはしないやつだって思ってたんですけど、でも今振り返ってみると、トロくて口が達者なやつめちゃくちゃ嫌いだったんですよ。鈍くて鈍臭くて、なのに口だけめちゃくちゃいうやつともう本当に嫌で。よくわーって言ってて怒られたなっていう記憶があります。</li> <li>• F さん（男性・弟）59-2・・・だからあの一本当に僕も多分、多分確か直接言われたと思うんですけど、ちょっと弟のこと気にかけてやって。で、あの一例えば弟のクラスに遊びに行ったりもしましたし。ただ、その弟まあ当然支援学級に行ってたんですけど、僕がお兄ち</li> </ul>



	<p>やんてわかってると、そのクラスにも支援学級の子が来てるんですよ。僕のクラスで支援学級の子が来てるので、その子がなんかできないこととかがあると頼みやすいんで、僕のトコに回ってくるので。だから当時は、なんで毎回俺がやらなきゃいけないだと思ってた節もあるという。小五ですかね。<u>あの一多分顔には出てないです。いいよって行ってやってたと思うんですけど、内心はなんで俺がやらなきゃいけないんだっていうのは思っていましたね。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hさん（女性・弟）77・・・其の頃にはそうだったと思います。このころだったと思うんですけど、弟にたいしてちょっと嫉妬してしまうことがあって、今まではなんかその自分も面倒を見てあげなきゃって感じだったんですけど、そんな面倒見なくても大丈夫だってなってきた、それでも弟に対して両親が私よりも甘く接してるのでうらやましく思いました。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだい体験する感覚の一つ。恥とは異なるベクトルで、それでも[「普通じゃない」]から[守る]と葛藤する？</li> <li>● 親がここにどのように関わるのかがポイント？ [平等] や [説明], [関心を向ける] などか。</li> <li>● Dさんの語りは転移だろう。</li> <li>● 定義：「きょうだいが ASD 児・者に抱いたが家族外の他者へ向ける攻撃性のこと」→「家族の関心が ASD 児・者に向いていることできょうだいが家族の中で寂しさを感じるが故に攻撃性を発露すること」に変更。攻撃性の背後には寂しさがある。また必ずしも外に向かうわけではないと思われるため。</li> </ul>

概念名	障害がなければという思い
定義	きょうだい ASD 児・者の障害がなかったらと思うこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）49・・・ああ…自閉症かもしれない、とか？うーん…。なん、だろう、やっぱりその普通の人と違うところでの、なんだろう、悲しさみたいな。悲しさ、うーん、違うんだっていう寂しさ、かなあ…。まあやっぱり会話ができないので、そういうところでみんながきょうだい喧嘩をしているとか、そういう話を聞くと羨ましさ見たいのは多分、はありましたかね。それはやっぱり私が一方的に怒ることしかできない、っていう悲しさ、寂しさみたいなのはあるんで。それが自閉症っていう病気だからってのを理解したとしても、ずっと寂しさはあると思います。急にしゃべり出さないかな、とか、もう喋ってもおかしくないような態度をとるんですけど、そこだけではできないので。なんかそういう想像したりしますけど。喋ったらなんていうんだろうとか、実はわかってるんじゃないかとか。っていう風に考えたりとか、します。</li> <li>• B さん（女性・弟）34・1・・・はいはい。小学校の時はえっと、入りました。で、ずっと未だに言うんですけど、弟に喋って欲しかったんだなって。おしゃべりしたかったのかなって。で、あの毎年の初詣とか行くと、初詣とかなんか機会があって神社とか行くと、弟が喋れますようになって本当に毎回お願いしてて。何で叶わないんだろうって、それを覚えてて。で、作文とかもあるじゃないですか。その時も、平気で弟のことを書いていて、それに先生とかがしゃべれると、しゃべれるようになると良いねってコメントの作文が出てきた時は、あ、って思っ。うん。で、あとはそうだな断片的にしか思い出せないんですけど、あとはもう自分が守らなきゃっていうのがたぶん、多分にあったみたいで。例えば、あの一お買い物に行って屋上のなんか乗り物とかあるじゃないですか、そういうの彼大好きだったので、後ろに乗ってたりとか。で、その時に一回だけ覚えてるのが、なんかいじめっ子みたいな男の子が来て、何か言われたんですよね。で、すごい怖かったんだけど、こっち守らなきゃって思って言い返して、で、どつかれて、すごい覚えてて。でも何か最後には勝ったぞっていうのがあるからたぶん勝ったんだとは思うんですけど。そういうのとか、やば弟がいてくれたから鍛えられた感があったなあって。</li> <li>• C さん（女性・兄）111・・・だから途中でどうしても何か意地悪したくなるというか、「T くんがこうじゃなかったらもっと違ったのに」と思ったことが途中であって、なんか子供の頃と今との間であって。今なんかそんなこと全然本当に問題ないですけど。その途中にちょっとありました一時期だけ。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Fさん（男性・弟）66・・・そう，かなあ。どちらかというと…僕としては，むしろこう言う言い方が良いのかはわからないけど，逆に，その障害がなかったら彼ではないですから，それを持つてることによって今の彼がある。そうするとまああいう風なキャラクターになって。うん。<u>なかったらなかったで良いなとは思いますが，あつて悪いなとは思わない。</u>むしろ別にそういう風に生まれてきた，来てくれたことで，今のうちの家族のそういう結びつきがあるわけですし。それを考えると彼には感謝するべきかなと。</li> <li>• Iさん（女性・妹）7・・・苦しさは…もうそうですね…その当時のことを…もう多分自分が…苦しかったのは…何だろう。多分そのいろんな私はプレッシャーを元から受けやすいタイプで，資質的にあるんですね多分。自分が意識しないところでも結構その社会的な，「就職しないと」みたいな「4年で卒業しない」とみたいなもの思っていて。なんかその感情の逃げ場があんまりなかった，ように思いますね。そういうことを本当は，本当はって言ったらあれですね，何か普通，普通の？普通のって，普通のも違うか。健常のきょうだいで，かついろんな健常の兄弟がいますけど，何かいいタイプのきょうだいとか姉妹だったら，何かそういうのを話せたりとかしたのかなと思うんですけど。まあその真反対というか，その影響を2人ともネガティブに受けて，しかもぶつかる，みたいな感じで。状況的にはしょうがなかったとも思うんですけど，そういう…あれ質問なんでしたっけ。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいなら多くは頭をよぎる考え。先行研究でもしばしば指摘されている。</li> <li>• [寂しさからくる攻撃性]との関連。幼い頃から感じているもの。</li> </ul>

概念名	しょうがない
定義	きょうだい ASD 児・者の言動や ASD 児・者中心に家族が動くことに対して、「しょうがない」と飲み込んでいること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• D さん（男性・弟）23・・・しょうがないなは…ずっとあります。そのそれこそ 5 歳とか。僕仮面ライダーの人形とか集めてたんすけど、こう尖ってるんすよ。でもそれ全部噛まれて無くなるんすよ。なんかそれとかも、しょうがないな、怒ってもしょうがないな、みたいな。感じだったし…。あとは二人で一個、みたいのがなかったんすよ。大体二人ずつ買ってもらってたんですよ。例えばゲームにしても、ゲームボーイアドバンスとかあったじゃないですか。あれとかも二つあるし、その次の SP とかも二つあって、DS とかも二つあって。DS とかは、怒って壊したんすよあいつが。僕はもうやんなくなってた時期だったんでそれを渡したりとか。だからある程度こうなんだろうな、許容できる、許容できない範囲のしょうがないやが、日常的に起こらなかつたかもしれないです。</li> <li>• E さん（男性・弟）33-34・・・〈弟さんの学校のための転校と知ってどう思いましたか？〉いや、別に、あの俺の中では別にそんなもう割り切っていましたかね。嫌でしたけど。もうちっちゃい頃からの場所だったんで。嫌だったんですけど、でも結局はまあ…。まあ別に逆らうとかそんなのはなくて。うちはもう基本弟中心なんで。別に、良いのかなと。〈別に良い？〉そんなに…もう、なんだろうな。割と雑な性格なんで、そこはもう簡単に割り切れたというか。まあ、じゃあしょうがないねってというような気持ちだったかな。</li> <li>• G さん（女性・姉）16・・・あんまり覚えてないですけど、なんか、やっぱり姉につきっきりみたいなイメージはあったので、なんかそれもしょうがないなって。それも心の中で思っていましたし。その幼稚園生の頃は、ずっと自分が面倒みなきゃみたいな感じにたぶん思ってたので、あんまりそんな、不満、母が姉につきっきりってことに関して、嫉妬したりとかそういうのはたぶんなかったと思います。</li> <li>• I さん（女性・妹）7・・・苦しさは…もうそうですね…その当時のことを…もう多分自分が…苦しかったのは…何だろう。多分そのいろんな私はプレッシャーを元から受けやすいタイプで、資質的にあるんですね多分。自分が意識しないところでも結構その社会的な、「就職しないと」みたいな「4年で卒業しない」とみたいなもの思っていて。なんかその感情の逃げ場があんまりなかった、ように思いますね。そういうことを本当は、本当はって言ったらあれですね、何か普通、普通の？普通のって、普通のも違うか。健常のきょうだいで、かついろんな健常の兄弟がいますけど、何かいいタイプのきょうだいとか姉妹だったら、何かそういう</li> </ul>

	<p>のを話せたりとかしたのかなと思うんですけど。まあその真反対というか、その影響を 2 人ともネガティブに受けて、しかもぶつかる、みたいな感じで。状況的にはしょうがなかったとも思うんですけど、そういう...あれ質問なんでしたっけ。</p>
<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ASD 児・者の言動に対して、きょうだい小さい頃から抱いている感覚。抱いていておかしくない aggression をどうしているのか？</li> <li>• 「ASD 児・者の言動」だけでなく、ASD 児・者を巡った家族の動きに対して抱く感覚と考えられる。[きょうだいが ASD 児・者の言動に対して、「しょうがない」と飲み込んでいること] から定義を変更。</li> </ul>

概念名	“普通じゃない”
定義	きょうだい ASD 児・者に対して抱く「普通とは違う」という感覚のこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）48・・・なん…カチッと言われた記憶は…ないので。やっぱりそういう療育センターとかそう行ったりとかして、いろいろカードのお勉強とか練習とかしたりとか。<u>そういうのを知ってて「普通じゃない」というか。多分自然と</u>思っていて。でもなんでですかね、わかんないです、なんで「自閉症」って言葉に自分が繋がったのか。親に言われたからっていうわけではないと思う。あなたの兄は自閉症よって改めて言われた記憶は私の中でないので。自然と、そういう言葉をどこかで学んだってことなんですかね自分が。だと思っただけです。</li> <li>• B さん（女性・弟）31・・・でも、やっぱり、何だろう。普通のきょうだいの子たちを見てると、おしゃべりができるじゃないですか。でも、一生懸命しゃべっても返ってこないし、様子が違うな、と思いますよね。で、でもお母さんはすごいかわいがってるけど、あれ？って。私も頑張ってるけどなっていうのは多分思ってたのかな。結構人見知りな子だったんですよ小さいころ、で、幼稚園の時もよく泣いていたらして。あんまり覚えてないんですけど。で、あと、お弁当が食べれないって泣いてて、で、なんかね、毎日同じお弁当を作ってたんだよお母さんっていう話を聞いたことがあって。へー、ありがとうございますって大きくなってから言いました。で、幸運なことに、幼稚園の先生も弟の様子を見て、ちょっと、って思ったださったみたいで、そこから多分あの、兎相に行った方が、っていう話を母親にしてくれたようで。そこからこう母親も動き始めて、わかっていたけどどうしたら良いいっていうのがわからなかったと思うんですよね。で、母親本人はなるほどなるほどって動くタイプの人なので、で、やっていったのかな。ちょうどね、母親も育つ頃で。</li> <li>• D さん（男性・弟）26・・・普通…普通っていい方がベストかわからないんですけど、「違うな」っていうのがわかるんですよね。5 歳だろうが何歳だろうが。言葉の教室に通うとか。付いていくわけじゃないですか。よく泣いてるとか。会話ができないとか。でもちっちゃい頃から僕のことめっちゃ好きなんですよ。だからそういうのがわかるから、かな。</li> <li>• H さん（女性・弟）57・・・経緯は、そうですね、なんかきっかけがあったというよりは、普通の子とはちがうんじゃないかなって私自身が感じて、たぶん自分のちっちゃかったころと比較して、このくらいの年になったら私は落ち着いてたな、とか、自分と比較したところから始まったと思います。療育センターとかに M と一緒に行って、なんか弟と似た</li> </ul>

	<p>雰囲気の子がその施設に集まっていたので、弟は普通の子とは違うのかなって感じてました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Jさん（女性・弟）67・・・いやなんか普通じゃないんだなって思ったら、なんか人とは違うんだよなって思ったら言いづらいなっていうふうに思っちゃいますね。</li> <li>● Kさん（男性・兄）95・・・やっぱそうですね、そのちょっとした事で家の中だとちょっとしたことでやっぱり兄が気に入らなかったりするとちょっと声を荒げる、大きい声出しちゃうとか。ちっちゃい頃だったらそういうこともあるかもしれないんですけど誰でも。でも成長するにつれて、そこがなくなっていくと思うんですけど。やっぱりどうしてもまだ大きくなっててもやっぱちょっと気に入らなかったり、うまくいかないってときにちょっと大きな声出しちゃうので、そういうところですかね。そういうことがあるっていうので、ちょっと普通とはちょっと違うんじゃないかなって。そこうまく付き合っていってるんじゃないかなと思うんですけど。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだいが普遍的に抱く感覚だと思われる。きょうだいは幼いながらに自分のきょうだいが周りの人と違うことを敏感に察知し、その謎に付き合うことになる。</li> </ul>

概念名	思春期・青年期にかけて距離感ができる
定義	きょうだいがライフステージによって ASD 児・者と接点が少ない時期があること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）60・・・そうですね。私も本当に前より会う時間が減って、一週間に一回や二回みたいになって、まあいる時はしつこくしようみたいな時はあるんですけど、コミュニケーションですね言い方あれですけど。まあそれくらいの距離感の方が、向こうは良いみたいですね。私は別に。もともと仕事でいないんで。どうしようもない。時々あって、ちょっとコミュニケーション取るくらいの方が、多分あっちもしつこくされなくて良いんだろうし、私もずっと毎日いるのも、やっぱりうるさいってなる、こだわりがあるので細かいってなるけれども、週1，2だったらまだ許せるか。ってなって、まあ距離感はちょうど良いかなって思いますね。時々会うっていう。で、時々旅行に行って、みたいな。感じがちょうど良いですね。</li> <li>• B さん（女性・弟）64・・・<u>薄い</u>と思います。私よりも濃いのは主人であったり。やっぱりこう一緒に住んでる両親との絆が濃いかなって。私は、もう外部の人、扱いになりつつある。存在として。で、そう、行く<u>とちょっと寂しいときがありますね。</u>なんか、あ、なんか違うでしょって言って。でも隣に座って握手したりとか、そういうのをやっているとニヤニヤ笑ってるので、それはあるんだらうけども、でも、私には違う場所ができたんだなっていうのをわかってるんじゃないかなって感じる時はあります。で、そう、その代わり息子たちがワーワー言い。またこう、良い関係がね。息子たちのことも心配をしていて、どうやって受け入れるのかなって。ちょっと楽しみでもあり、見ていたら、本当に自然に。自然なんですよ。いて当たり前だったの。あそこの家行くといえるよね。子供たちもヒロくんとか呼んだりして。ただ、通るところがやっぱり小学生くらいになると、お母さんヒロくんってどうしたの？って。いう質問がやっぱり飛んできて。説明するんです。あの、わかるかなあって言いながら。でも今小学校になるとね、障害っていうのを淡々と説明して行って、わからないことは？って質問あったらなんでも聞いてっていうとふーん、大変だね。大変なんだ、あんまり大変そうじゃないけどねって言って。そうすると。3人ともやっぱり質問して、で、なんか本人なりに納得して、あ、ふーんって。ただイライラしてたよとかわかるので。なんかね今日怒ってたよって、そういう報告があったりとか。なんか両親がやりあってうるさかったよとか、いろいろと教えてくれるので、ありがたくって。で、主人も主人で、1人で実家に行けちゃう人なので、私がこう子供で精一杯の時とかは、よく連れ出して</li> </ul>



くれて、あの、弟を。本当に感謝していて。で、そういう意味でうまく回ってる。これが父親とか母親とかがいなくなった時にまた本人が変わると思うので、これからが心配。その時にどうやって弟をうちまで連れてきて、ここがあなたのいる場所だよって説明して、で、そこを受け入れるか、それともそこを拒否して、施設に行っちゃうのかとか、いろんな選択肢があるので。うん。そうですね。

- Cさん（女性・兄）86・・・中学校よりは、ちょっと家族関係も少しはマシになったって感じで。で、また高校も私も遊びに行ったりとか、塾行ったりとかで。家も好きでしたけど、中学校の頃と同様兄とはそんなには関わりはなかったかなあって感じですかね。
- Dさん（男性・弟）49・・・長いスパン見た時に、同居人っぽい時期もあるし。ほとんど喋らない時もあるんすよ。朝はしゃべりますけどちょっとは。おはようとか。でも帰ってきたら寝てたりとか。もう彼の睡眠までのルーティンが始まっていたりとか。
- Eさん（男性・弟）53：そうですね。だいぶ変わってきましたね。僕はもう中1の頃、てか小学校の頃からずっと野球だったんで。だからもう中学生の頃はほとんど、普段何かを一緒にやったりとかがなくなっちゃったんで。だから離れちゃっても変わってきましたよね。でも中二の頃は僕はもう勝手なことやってたんで。だからうん、こう関わる時間というのはそんなになくて、そこにそういう意味じゃ思い出はないですね。あんまり。
- Fさん（男性・弟）36・・・〈就職を機に離れたのですか？〉そうです。僕が家出るときに、かなり弟は、あの一、心の整理がつかないでフラフラしてたみたいです。
- Gさん（女性・姉）21・・・あんまり覚えてないですけど、なんか、やっぱり姉につきっきりみたいなイメージはあったので、なんかそれもしようがないなって。それも心の中で思ってたし。その幼稚園生の頃は、ずっと自分が面倒みなきゃみたいな感じにたぶん思ってたので、あんまりそんな、不満、母が姉につきっきりってことに関して、嫉妬したりとかそういうのはたぶんなかったと思います。
- Hさん（女性・弟）32・・・会う時間が本当に少ないんですけど、会う時には弟の話を聞いたりとか、ポケモン、とか、けっこうそういうゲーム好きなのでいまどういうことやってるの、って聞いたり。聞く側ですね。ただ仕事忙しくてくたびれてる時もあるので、そういう時は気を使ってくれるので。
- Iさん（女性・妹）1・・・そうですね。うん、最後にお話したの2017年とかですかね。そのときから5年経って、うん、だいぶ変化したような

	<p>気がする。そうですね。多分、2016年。確か妹が自閉症の他に強迫性障害を発症した年なんですけど多分。うん。あれ、多分そうなんです。そこから結構家族もだいぶ何て言うんでしょうか、分離したりとかして。っていう時を経て今5年たってようやく彼女の症状が落ち着きつつあるんですけど。まだ薬は手放せなくって、うん。からあの家を出られる状態ではないんですけど。5年間の間、割と私自身も家族から離れてたり、今も離れて住んでいますけど、本当に心理的にも離れていた状況が続いたんですけど。2000多分18年、17年遅めぐらいかなからようやく妹とちょっと話ができるようになって。今はそうですね、あんまりそのすごい、何て言うんでしょう、密にいつでも連絡取って、何でも共有し合うみたいな感じの仲ではないんですけど、あの誕生日のときに電話するとか。あんまり今までしなかったんですけど。なんかあんまり彼女自身も何か何の用かわからないのに連絡もらうのは嫌いで、というか苦手で。わかっていただいていると思うんですけど、はい。なので、あんまり突然の連絡は私から今もなくって。ですけど、こないだ誕生日だったときに連絡してた時ね、なんか普通に話が30分ぐらいできたかなっていうのは結構な快挙なんですけど。そうですねそういったことが最近はあるとか「いつ帰ってくるの」みたいなふうに言ってたこともあって。彼女の誕生日今週だったんですけど、い、電話したらなんか「年末は帰ってくるのか」みたいな。だいぶ先だよみたいな。話ししたんですけど。そういう感じで気にかけてくれるようになって。私もどうかなっていうふうに気になるようになったっていうのはだいぶ大きかなと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Jさん（女性・弟）93・・・あ、でもそうですね、中学のときもなんか私が高校に入って結構私遠い高校だったので、何かそこでも関わる機会が減った気がします。</li> <li>● Kさん（男性・兄）8・・・今ですか。今はですね。あまり…そうですね、兄弟、やっぱり男の同士の兄弟っていうのもあるので、結構自分が高校入る、入ったぐらいから結構あんまり交流があんまり、お互い干渉しなくなっていったので。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ライフステージの変化により、家族外の関係性が増えていくに従って、相対的にASD児・者との関係は薄くなる。ただし、そこにはきょうだいが「意図的に」避けているケースも存在する。その場合の背景の要因は？</li> <li>● ライフステージの変化が生じてても距離感が変わらない場合があるのか？ ずっと離れているか、ずっと一緒にいるかの両極端？</li> <li>● [関係性が薄い] → [距離感がある] に変更。具体例を見ると、物理的</li> </ul>

	にも心理的にも「離れている」という感覚のほうが近いと考えられるため。
--	------------------------------------

概念名	信頼関係
定義	きょうだい ASD 児・者との間に信頼関係があるように感じていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>A さん（女性・兄）24：そうですね～なんか笑い話的に言ってますけど、私は下に見られてるので、妹ですからね。扱いが年々雑になってきて。なんかちょっとこれ持ってってお願いって言ったりすると無視したりとか。なんか目を合わせなかつたり。おおい突っ込みたくなるような態度とか、なんか最近増えてますね。まあ会う機会もやっぱり減ったので、時々会ってなんだかんだ言われるのがうるさいみたいで。私もからかい半分で接したりもするので。そこでまあ私がいけないんだろなって思いながらもやばこうだいぶ雑に、私に対して雑になったなって。<u>信頼関係があまりもうないのかなって。本当になんか笑っちゃうようなことも、私が料理しても横でずーっと見てきたり。一回手を出されたことが、炒めてたら奪われて炒められたことがあって。それまでそんなことする人じゃなかったんですけど。それ母親に言ったら美味しいものができないって心配だったんじゃないって。言われたりとかして。まあそれはそれで面白いんですけど。まあそれ以外特に何もやってこないの。こっちがやらなければ基本的に何もしてこないっていうのはあるの。まあとはちょっと、自閉なので、こだわりが強くて、靴下を部屋で履いてると強制的に脱がされたりとか、リモコンがちょっとずれてたら戻すとか。そういうのはあるんですけど、人間とし重ねてくるとそれがエスカレートというか、きっちりきっちりしないといけないっていうのがあってこっちが脱ぎたくないっていうのは無視で、引っ張って取ったりとか。まあそういう時だけちょっと怒ったりはしますけど。まあそれが怒られようがなんだろうが、っていうのがあるので。伝わらないなっていう。くらいですかね～。関係性はなんか同じですね。昔と変わらないです。舐められてる感じもずっと変わらない。<u>ただ母親がいない時は、その場に誰の言うことを聞けば良いのかっていうのは判断してるみたいで、どうしても私しかいなかったら、私の言うことを聞くっていうのは選んでいるみたいで。</u>まあ心配は心配みたいのは感じますね。面白いんですけど。</u></p> </li> <li> <p>D さん（男性・弟）46・・・「何時に行くからね」って言うておくと、支度ができてるんですよ。父親と行く時とかは支度できてないんですよ。で、怒られてるんですよ。母親にも「良い加減にきなさい！」って言われて。でも僕の時もできてるんですよ。一番こう、怒らせてはダメって思ってるのかなって。っていう姿を見ると、気を遣ったりする、こっちが気にしてあげることが、まあ「あげる」っていう表現をしましたがけど</p> </li> </ul>

	<p>今、気にしてあげることが苦じゃない，みたいな。気にかけてよう，って思う。このくらいの時間に帰ったら，多分今やってんな～みたいな感じで家に入るから，「ですよ～」みたいな。やりましたよね～みたいな。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• F さん（男性・弟）95：そうですね。あの一僕が完全にいなくて良いとは言わない，ですよ。やっぱり多分自分で言うのもなんですけど，彼にとっては大切な存在で。あの一多分，今から予約した番組を次に僕が帰ってきた時に見ようねとか言ってるので。だからもうあの一この頃は結構ひどくて，なんで帰るんだって言われるんですよ。だからまあ確かに彼にとっては精神を安定させるためというか，自分を保つために必要存在ではあるけれども，でもやっぱり母がいないと，それも。</li> <li>• K さん（男性・兄）15・・・そうっすねそういったあは，障害を持つっていうのもあったんですけど，なんで自分もしっかりしなきゃと思ってたんですけど，やっぱりその上で兄なんだ，兄であるっていうのをちょっとやっぱり障害を持ってても，あ，兄は兄なんだって。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• これまでの「守る－守られる」というある種の上下関係とは異なり，より並列的な，対等な存在として映っている。</li> <li>• あくまでこうした変化は，同胞関係に着目した場合，ライフステージの移行が大きいように思えるが，研究Ⅰ・Ⅱを見れば，事はそう単純ではないことが理解できよう。</li> </ul>

概念名	成長の気づき
定義	きょうだい ASD 児・者の成長に気づくこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>A さん（女性・兄）46：うーん。本当に変わらないですね。その時はやっぱりまだおばあちゃんのことがあったので、そんなにみんなでどこか行こうってこともなかった、できないこととは覚えてますね。だから、まあ、家にいることも多くて。で、そういう母が祖母につきっきりだったりする、と、<u>やっぱり普通ヤキモチ焼いて怒ったりとか不機嫌になったりするんですけど、すごい我慢して。</u>で、おばあちゃんとか認知症だと、まあ孫なんだけど施設の職員さんみたいに結構思ってた、「いつもありがとね～」とか言いながら顔触ったりとか。<u>自閉の人ってそういうの嫌い、接触は嫌いなんですけど、ニコニコして。まあ耐えてたとは思ってますけど、やっぱおばあちゃんだから。なんかそれ見てこういうのできるんだ、我慢とか、気を使ったりとかできるんだって、すごいそこで新しい発見はありました。</u>私でもちょっとやめてってなるところを、ちゃんと聞いてるっていう、そういうフリみたいな。結構やってたりとかしてたから、ちょっとすごいなって尊敬みたいな。した記憶はありますね。ちゃんと我慢してたな、とか。うんそのくらい…。まあ時々爆発もしてましたけどね。結構大変でしたけど。おばあちゃんにだけはちゃんと優しくする。っていうのが見ててなんか、家族思いの一面があったんだなっていうのは感じたかな。でもおばあちゃんの件が落ち着くというか、入院みたいなことになったので、その頃はもうまあ家も少し落ち着きはしたんですけど。そしたら少しまあ穏やかになって。で、私はまあある程度手伝ってはいましたけど家のこととか。大学も含めあるし、アルバイトもしてたので、割と家にいない時間の方も多かったし。卒業の時なんかは丸々一ヶ月くらいは旅行、海外旅行とか行っちゃって。まだおばあちゃん家にいたんですけど結構な状態で。なんかすごいひどいことしたなって。でもそれも、親はまあ、ね、あなたの最後の大事な大学生活だから、好きなことしときなさいっていう話をもらったんで、じゃあってそのまま行かせてもらったりとかはしたんで。まあ私は本当に自由に、やってたなって。今もそうですけど、思いますね。手伝ってるつもりでも大して手伝ってなかったのかもしれないですけど、かなって思います。時々やって、あとは本当に自分の好きな大学生活を送って、サークルもやってとか、合宿も行って、とか。特に不便感じたことはなかったですね。</p> </li> <li> <p>F さん（男性・弟）40：あー...うーん、それはそうですね...。家族全体にも言えることなんですけど、この彼がいることで話題が彼のことで話題ができるので。些細なことでもできるようになると言いたくなっちゃうん</p> </li> </ul>

でしょうね。だから割とそれが他のところと比べると、あの一甘やかして  
るっていう風にきっと見える部分なのかなとは思いますが。そんな  
ちっちゃいことでできるようになったすごい、えらい。って、言うの  
か、みたいな。うちでは普通なんです。うちでは普通なんですけど、  
うちでは普通に彼がこれができるようになったのはすごいことなんで  
す。褒めてあげなきゃいけない、ってなるんですけど、それで良し良し  
すごいなって言うと、やっぱりこう甘やかしているように見えるのかなあ  
という風には思います。

- Gさん（女性・姉）33・・・そうですね。あとはやっぱり精神的に成長  
したのかわからないですけど、でもちょっと周りが見えるように変わっ  
てきたかなっていうのはありますね。
- Hさん（女性・弟）95・・・（ASD 児・者への見方が変わった理由）そ  
うですね・・・やっぱり弟自身の成長があったんじゃないか。な最初は手  
をつないで、監視しなきゃっていうのがあったんですけど、成長して普通  
にコミュニケーション取れるようになったり、一緒にゲームしたりして  
たので、きっかけというよりはじわじわと徐々に増えてきたかなと。
- Iさん（女性・妹）②-1・・・そうですね。うん、最後にお話したの  
2017年とかですかね。そのときから5年経って、うん、だいぶ変化した  
ような気がする。そうですね。多分、2016年。確か妹が自閉症の他に強  
迫性障害を発症した年なんですけど多分。うん。あれ、多分そうなんで  
すね。そこから結構家族もだいぶ何て言うんでしょうか、分離したりと  
かして。っていう時を経て今5年たってようやく彼女の症状が落ち着き  
つつあるんですけど。まだ薬は手放せなくて、うん。からあの家を出  
られる状態ではないんですけど。5年間の間、割と私自身も家族から離れ  
てたり、今も離れて住んでいますけど、本当に心理的にも離れていた状  
況が続いたんですけど。2000多分18年、17年遅めぐらいかなからよう  
やく妹とちょっと話ができるようになって。今はそうですね、あんまり  
そのすごい、何て言うんでしょう、密にいつでも連絡取って、何でも共  
有し合うみたいな感じの仲ではないんですけど、あの誕生日のときに電  
話するとか。あんまり今までしなかったんですけど。なんかあんまり彼  
女自身も何か何の用かわからないのに連絡もらうのは嫌いで、というか  
苦手で。わかっていただいていると思うんですけど、はい。なので、あん  
まり突然の連絡は私から今もなくて。ですけど、こないだ誕生日だっ  
たときに連絡してた時ね、なんか普通に話が30分ぐらいできたかなっ  
ていうのは結構な快挙なんですけど。そうですねそういったことが最近  
あったりとか「いつ帰ってくるの」みたいなふうに言ってたこともあっ  
て。彼女の誕生日今週だったんですけど、い、電話したらなんか「年末

	<p>は帰ってくるのか」みたいな。だいぶ先だよねみたいな。話したんですけど。そういう感じで気にかけてくれるようになって。私もどうかなっていうふうに気になるようになったっていうのはだいぶ大きかなと思います。</p>
<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 些細なことかもしれないが、きょうだい（と家族）は ASD 児・者が出来るようになることが増えると、そのことに気づく。それは本当に些細な、当たり前のことであるが、そのことに気づけるかどうか=良い体験に目を向けられるかどうかは、心理的な健康を左右するのかもしれない。</li> <li>● 当然、そうした変化がないように感じられる、成長していない、という捉え方もあるかもしれない。</li> </ul>



概念名	きょうだいでもわからない
定義	きょうだいであっても、ASD 児・者のことについてわからない部分があること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）64・・・やっぱりきょうだいの最終的なところって親亡きあとじゃないですか私も、自分しかきょうだい、身内、母がいなくなったら身内私だけなんで、多分担うことにはなる。ただ親にはまだ何も言われてない。どうなるんだろうっていう。ただグループホームに入ってるので、そこがちゃんとずっといる場所になればそこに中心で置かせてもらって私は仕事に行ける。で、まあ帰る、帰る、みたいなことでも良いのかなって思ってるんですけど、まあ親ほどのことはできないし、自分がやりたいまあ何も別にビジョンがないですけど自分の将来考えた時にどこまでできるかなとか、遠くへはいけないとか、そういうのは時々考えますね。それは親が何か緊急事態になってみたいときとわからないだろうし。<u>正直ほとんど知らないんで兄のことを。</u>で、そういうところ何か緊急で倒れた時にこれがあれば全部私がわかるみたいのを作っておいてっていうのは言って、ちょっと作ってくれてるんですけど。なんかそういうところも含めて、もう考えていかないといけないうのかなって。まだ60過ぎて親も若い部類ですけど、急にどうなるかは全くわからないので。そういうところもあるし。だから兄には信頼してもらえないようにならないといけないうのはあるんで、まあきつと関係性を急に変えることは無理だと思うし。将来的にはそういうところも含めて考えていかないといけないうのかなって感じです。</li> <li>• B さん（女性・弟）64-2・・・<u>一番彼に聞けるのが、彼の気持ちかわかるのが良いんですけど、彼の気持ちは永遠にわからないので。そこがね、もどかしいところなので。うん。それがねわかるようなね、機械があれば良いねとか、今コンピューターとかができてるじゃんって。そういうのがわかれば良いのにねってよく話したりして。なので、そうですね。ただ、あの自分が彼よりも早く死んじゃった後は心配になるんですけど、なんかどういいうわけか、次男くんが、ある日、実家の母にあのさあ、俺がさあ、大きくなって働けるようになったらさ、この団地に引っ越してきて、おじいちゃんおばあちゃん死んだら俺ここに住んでヒロくん見てあげようかって言ったことがあったんですよ。で、なんか母親が涙ながらにそれを言っていて。なんかね、嬉しくってって言って。あ、何にも言っていないけどそれが育ったんだって。それを聞いた時は嬉しかったですね親として。あ、ちゃんとこうやって繋がっていけるんだなって。無理なく？まあ生まれつきであったとしてもそうやって言ってくれるなら嬉しかったなって思って。で、運が良いのか悪い</u></li> </ul>

	<p>のか、男の子を3人産めたので、でもどうしてもやってほしいとも思わないし、もしそういう気持ちがある子が出てきてくれたら嬉しいし。で、それでも死ぬ時にダメだったら、施設かなんかにどうにか手続きを取った後に、会いに行って、って一言言って死のうと。思ってるので。そのくらい簡単な気持ちで。なんか、うん、世の中に対して、思春期の頃は不信感がいっぱいあったんですけど、35くらいまではあったかないろんな意味で。でも、なんかそれを過ぎておばさんになったら、ちょっと大丈夫じゃない？って、安心、っていうか。なんか、わかったわけじゃないけど、すべてがわかったわけじゃないけど、周りに良い人が多いので。良い人に恵まれてるので。なんとかなるんじゃないかなって気が。なんとかなるって信じてればなんとかなるよって言って。うん。なんかね。そうですね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Cさん（女性・兄）53・・・自分の家族とか親戚とか、そういう周りの人のことをどのくらいどういうふうに理解しているのかどうしてもわからないんで…。あんまり見た目に、見た目というか変化は感じはしないんですけど、でも作業所とかの人の入れ替わりとかはちゃんとみているみたいで。まあ家のこともなんかちょっとは感じてるんだと思うんですけど、基本的なスタンスはやっぱり変わらないですね。母親に頼って、母親の言うことはなんでも聞く、って言うのは変わらないです。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 実際には分からないことが多いはずである。他者であるし、障害もあるためである。しかし、しばしばきょうだいは「自分がASD児・者のことをよくわかっている」と感じやすい。「母親が一番分かっている」と語りながらも、心理的な距離の近さから“あたかもよくわかるように”感じられている。</li> <li>● そこからある程度は脱錯覚（Winnicott, 1953）していくことがきょうだいの心理的な発達にとって大事なのかもかもしれない。ここにはきょうだいのポテンシャルだけでなく、両親の関わりが大きな影響を与えていると考えられる。</li> </ul>

概念名	自分を形作るひとつ
定義	きょうだいが、ASD 児・者がいることも今の自分の一部を形作っていると感じていること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>B さん（女性・弟）60-1・・・<u>なくてはならない</u>というか、あの、同じ空間には今はいないけれども、<u>やっぱりずっと一緒に心の中にはいつでもあるし、ありますね。彼がいて、いなかった人生って想像できない、寄りかかっているわけではないんですけど、なんかいてくれたから流れて流れてここまできたのかなっていうのがあって。</u>で、うん、でも自分で全部選んできたんで、何も後悔もないし、果たして自分が結婚したことが弟にとって良かったのかなって、っていうのはちょっとまだありますけど。でも、弟も、寂しくないし、後、あの息子たちが生まれた時に、すごいお兄さんにまた成長したなっていうか。今まではお姉さんと弟だったので、こう二つのものがあるって食べたそうにしてたら、良いよってみんなあげちゃうみたいなのがあるんですけど。それが、子供が容赦なくて俺の分もとるのかみたいなのがあって、初めて欲張ることを覚えたみたいで、一本、ここに置いてあったら一本食べたら別にぼーっとしてた彼が、息子たちが来ると2個くらい持ってるんですよ。凄くない？って言って。そういうことを母親とか主人とかと一緒に面白いねって。で、あとは体力的には衰え始めたのか、お昼寝することが多くて、気がつけば寝てる、とか。お昼寝してるねーとかいうのを見て。彼を見てると、本当に暖かい気持ちになれるので。そう、いてくれてありがどうって感じの人なので。そのなんだろうな、作業所でも、実習に来た方が、すごい図体がすごいでかいんですよ、石塚さんくらい、すごい太ってるんですよ。体いかついで、はじめみんな引くんですよ、怖そうって。で、結構なんか半日一緒にいるとみんなファンになるわよって職員さんも言ってくださって。良かったねって。で、実習に来た方でも弟に会いに来たって言って来てくださる方がいるよーとか。どこまで本当なの、っていうんですけど。なんか言うてくださるから、良かったねって。彼は彼なりにそういう世界ができてるんだなって。私がいらない世界でもちゃんと居場所があって、すごいなって。</p> </li> <li> <p>D さん（男性・弟）119・・・うーん…。…そういうの（家族との関係）を意識したことがあまりないんですよ。意識的にその…うーん…でも例えばその「人だ」とか、「同じような人間だ」とかっていう部分が家族からもらったなっていう。っていう感覚は、が、そこがたぶん一番大きいかな。そのどうだから偉いとか、どうだからスゴイ見たいのは、ないっていう感覚はスゴイ入れられったっていうか、今になって生きてるなっ</p> </li> </ul>

	<p>て。だからゼロじゃないですけど、この人のこの部分、この人のこの部分、この人のこの部分、この人のこの部分っていうみたいので出来上がってるなっていう。そのどれだけウェイトが家族があるかは…難しいっすね、自覚ができないっすね。人を受け入れるキャパが広いのとかは、そこは家族だなって思います。その何%くらい、とかは難しいっすね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Jさん（女性・弟）122・・・何かっていうと、あとは何かなんか全然知らずに入ったんですけど大学には。何かその特別支援とかの免許を取る、取れるみたい聞いて、そしたらなんか弟とかもいて、その弟とか何か訓練会とかでもそういう子と関わってきたので、何かそういう経験とかを生かせるような方向に行きたいなと思って。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだいにとって、ASD 児・者がいることも自分を形作る一部であると認めている状態。ポイントは“あくまで一部”という点にあるだろう。</li> <li>● 不思議なことに、福祉関連の職や教員といういわゆるのお世話系の職に就く人、あるいは何かしらの資格や勉強をする人が研究協力者においてほとんどであった。これは何を意味するのだろうか。人によっては意識的に、人によっては ASD 児・者の存在による進路への影響は否定しながら、事実、そうした職を選んでいたりもするのである。</li> </ul>

概念名	親亡き後の不安
定義	きょうだい親が亡くなった後に ASD 児・者とどのように付き合っていけば良いのか悩んでいること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）64・・・やっぱりきょうだいの最終的なところって親亡きあとじゃないですか私も、自分しかきょうだい、身内、母がいなくなったら身内私だけなんで、多分担うことにはなる。ただ親にはまだ何も言われてない。どうなるんだろうっていう。ただグループホームに入ってるので、そこがちゃんとずっといる場所になればそこに中心で置かせてもらって私は仕事に行ける。で、まあ帰る、帰る、みたいなことでも良いのかなって思ってるんですけど、まあ親ほどのことはできないし、自分がやりたいまあ何も別にビジョンがないですけど自分の将来考えた時にどこまでできるかなとか、遠くへはいけないとか、そういうのは時々考えますね。それは親が何か緊急事態になってみたいときとわからないだろうし。正直ほとんど知らないんで兄のことを。で、そういうところ何か緊急で倒れた時にこれがあれば全部私ができるみたいのを作っておいてっていうのは言って、ちょっと作ってくれてるんですけど。なんかそういうところも含めて、もう考えていかないといけないのかなって。まだ60過ぎて親も若い部類ですけど、急にどうなるかは全くわからないので。そういうところもあるし。だから兄には信頼してもらえないようにならないといけないっていうのはあるんで、まあきつと関係性を急に変えることは無理だと思うし。将来的にはそういうところも含めて考えていかないといけないのかなって感じです。</li> <li>• E さん（男性・弟）73・・・いや、こうしようっていうのはなくて、うーん、多分、どうなんだろうな、あの子が入りたがるかわからないけど、G ホームとか、そういうところは機会がもしあればそういうところに預けてみるのも、まあ一つの方法としてはアリなのかなって気はしますし。ただ弟中心でここまで家族が来たので、あの子がいないはいないで、あの一まあちょっと崩れるのかなって。</li> <li>• I さん（女性・妹）10・・・あ、そうですね、私は結構その時不安で。そうですね結構、うちの祖父が亡くなったときにその遺書が書かれてなかったりとか。ちゃんと整えてから旅立つ方って結構多いと思うんですけど、うちの祖父はそれをせずに旅立ってってしまって。結構しっちゃかめっちゃかな状況が続いていて。なんかそれで何か生前にできることとか、こういうふうにした方がいいんだみたいな。私も興味があったので母がやってることとかを見ていて。そういうのとかを見てると、やっぱり家族内でのコミュニケーションが、生きている方の家族間のコミュニケーションがすごくやっぱり密に行われる場とかにいと、なんかそう</li> </ul>

	<p>いう元々私もいとことか稀薄というかほとんどいないに等しいんですね。なので本当に家族だなんて思える存在は本当に妹か親ぐらいで。だから、妹とこういう話絶対無理みたいな感じに思っただけ。全部私が決めなきゃいけないのかと思って、何か困ったことを何か一番近くで相談できるきょうだいいないと思って。結構母がそういうやり方で自分のきょうだいに相談してたのを見て、自分はそれを見ていて、自分はそれができないみたいと感じたときに不安に思ってしまった。それそこから結構なので、話のきっかけとしては割とネガティブな動機だったんですけど。そんな感じでした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Jさん（女性・弟）139・・・これはすごい先なんですけど、なんか両親が先に死んだらもう私が何かその弟のあれをするのかな。多分そういう施設に入ると思うので、具体的になんか何かを面倒見るってわけじゃないと思うんですけど。でも後見人的なものには多分なることになるし、みたいな。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 従来の研究からも指摘されていること。出てくるのは当然のこと。枠組みとして決めておくことも大切だが、それだけではなくそこに抱えている不安についても語れる場所・タイミングがあると良い。</li> </ul>

◆ 研究IV分析ワークシート

概念名	ASD 児・者に関わってくれて感謝する
定義	きょうだいの周囲の人が ASD 児・者に関わってくれて感謝すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>A さん（女性・兄）32・・・<u>小学校の時は、特殊学級みたいのがあって、兄はずっとそこでいて、なんかうちの小学校は割とそこに遊びに行く、特殊学級に遊びに行く、っていう休み方を過ごす人が周りも多くて、私の兄の同学年の人とかにも、しょっちゅう遊びに行く人が多くて、私、大学のバイト先で同じ小学校の二つ上のがいた時に「A です」って言った時は、「お兄ちゃん・・・〇くん？」みたいなこと言われて「よく遊んでた」みたいなことがあって。そういう感じの割と、まああったかい感じに囲まれてくれてたイメージはあって。でまあ私の同学年は言っても下なんで、まあ兄とはそんなに関係はなく、同学年にそういう子がいたりすると、意外に遊びにいたりしてたっていうのがあるんで、そこで何か嫌な思いはしたことなんですけど。なんか小学校って転校生とかっているじゃないですか。転校生ってなんか異質な存在で、特殊学級とかなんだよ、みたいな。私の兄がそこに・・・私の兄をみたら、「お前のお兄ちゃんあんなやつなの？」みたいなことは言われて、私は普通に過ごしてたんだけど、急に転校生からそんなこと言われて、なんかそれで、「え、変なことなの？」ってそれをすごい感じたのは今でも思い出す。なんか・・・それでちょっとなんか・・・感じたのかな。なんか変なんだっていうか。違うんだなって言うのが。今までは普通に遊んでたのが。まあそれも高学年くらいですかね小学校の。まあその辺りちょっといろいろ敏感になってくる年だったので、そういうパツて言われると、すごい傷ついた記憶はありますね。まあ別にそれでいじめられるとか、しつこく言われることはないですけど、そんなに、そういうちょっとした一言とか、ハッとさせられたな～みたいのは覚えています。</u></p> </li> <li> <p>B さん（女性・弟）37・・・しょうがないかなって。でも、うん、それで、なんか考えたんでしょうね。団地に住んでたんで、友達を団地の公園に呼んじゃって。そうすると一緒に遊べるじゃないですか、で遊んで。で、<u>ただ、あの友達で弟が嫌だっていう子いるかなって前もって言って。いや実はねって。ってみんな良いよーって。もうそこも困らなかつたですよ。</u></p> </li> <li> <p>D さん（男性・弟）②100・・・<u>ようは、弟が楽しく学校生活を送れた、それがなんかありがたかったなあ。でもそれ、弟じゃなく、それは支援級で「支援級の子」として見ってもらってた、から優しくしてもらってた。でも学校の中には支援級じゃなくても支援が必要な生徒って、まあその緘黙の子だったりもあると思うんですけど、たくさんいて。その子</u></p> </li> </ul>

	<p>たちが楽しかったって思える学校生活に、を、作りたいな見たいのが最初でした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Eさん（男性・弟）42・・・えー多分幼稚園生の頃はそんな多分、こう人とこう接してナンチャラカンチャラっていうのはなかったんですけど、<u>逆に俺の友達とかみんな接してくれるんで、あの子も喋りやすい。</u> <u>で、例えば、歯医者がすごい嫌いで。もう一年生の頃ずっと母が送り向かい、っていうか送りはまあ集団登校で一緒だったからしなかったんですけど、迎えだけはどうしても行かなきゃいけなかったんで、その後歯医者行く、とかになったら駄々こねてるのを、校門の前で駄々こねてるのを、例えば友達に見つかっても、弟どうしたの、歯医者がいやで泣いてるの、ってお母さんが言うとはら行くぞって言ってくれたりとか。だから弟はその小学校一年生の時は周りに育てられたのかなって。父と母がもう何も変わってないと思うんですけど、ただ、一応弟が破天荒だったんで、いろいろなことをしていたので、それで困ったことは多々あったと思うんですけど、ただ俺もなんかそんな風になってから弟のことを外に連れ出すようになったので、例えば一緒に遊びに行くってなったら弟も連れて行くとか、結構多かったですね。</u></li> <li>● Fさん（男性・弟）70・・・そうですね、その辺は一緒に関わってはない、ような感じかなー。高校の頃はたぶん薄かったと思います。でも、えっと文化祭には連れてきてたから、で、文化祭でも、<u>高校の友達もみんな理解のある人だったので、文化祭に行ってもうちの弟だよっていうと、まあ結局彼の持ち前の愛嬌があるので。まああの一割とすぐにあの、人と、人をこうまあかわいい弟だね、ってできる、彼の特技なんです。</u> <u>それがあって一年め連れて行って、2年め3年めとか同じクラスの子とかも、お、Sくん覚えてるー？</u>とか言ってもらえたりしてたので。そう思うと、あー兄としては弟が可愛がられることで、あの悪い気はしないので、多分あの一あんまり関われないとしても日常の中では喋ったりはしてたと思いますし、そういうことであれば、あんまりなんだろう、うちの弟のことは嫌いではなかった。嫌い、嫌という感情はなかった。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ASD 児・者に家族外の人が肯定的に関わってくれることが、きょうだいの葛藤解消に向けて大きな原動力となる可能性。</li> <li>● きょうだい求めることでそうなるには勇気がある。学校・地域の雰囲気から自然と受け入れられるような状況であると、ありがたいが…。</li> <li>● 定義を「きょうだいの友達が ASD 児・者にも関わってくれること」→「きょうだいの家族外の人が ASD 児・者にも関わってくれて感謝すること」へ変更。単純に関わってくれる、というよりも、そこに感謝する気</li> </ul>



	持ちがうかがえるため。こうした良い体験が積み重なると、きょうだいとしては葛藤をワークスルーしやすいのかもしれない。
--	---

概念名	どのように思われるか心配
定義	きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人に話そうとする時に理解してくれるかどうか心配すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）41-1・・・中学校の時でもう一つ引っかかり始めたのが、昔は今みたいにあの、うちでは〇〇級って言うんですけど、特別支援学級ってというのが、各学校にあたわけじゃなかったの。小学校の時に弟が一度、私弟と一緒に学校通いたかったんですよ。でも別の学校じゃないとしょうがないじゃないですか。本当に羨ましくて。で、一時期、同じ学校ではなくて、ちょっと離れたところの市内の学校にその支援級があつて。母親と通ってたことがあったんですね弟が。もしかしてって思ったんですけど、でも合わなかったみたいで結局やめてしまって。で、<u>中学に入ったら支援級が自分の中学校にあつて、そこに 1 人の男の子が来てたんですけど、彼があんな嫌なことがあると周りに唾を吐いてしまうタイプの子で。そうすると嫌がられちゃうじゃないですか。みんなわーとか言って逃げちゃうんですよ。大丈夫なのに、って思いながら見てて。唾吐いちゃダメじゃんとか言うんだけどそうすると唾を吐かれて。で、そういうのが当たり前だと思ってたのが、周りは当たり前じゃないから、白い目で見られるっていうのを初めてこう、初めてじゃないけれども、あ、やっぱり世間ってこんなもんなんだなっていうのを勉強して。そこから人の目を気にするようになったのかなって思いますね。こう世間が思っているのと自分が思っている思いは、こう合っていないんだなっていうのを知ることになって。でも一生懸命お友達とかに説明するとわかってくれる人も中にはいるっていうのもわかっていたから、じゃあ諦めないで周りから攻めれば良いのかって。うん。そうねえ。そこが中学生の時。</u></li> <li>• C さん（女性・兄）②72・・・一般人、兄のことを知らない人に話す時って彼らの元々の障害者に対する印象っていうのが決まってるんですよね、「電車の中で奇声をあげる」みたいな。なんかそういう固定観念、イメージがあつて、そういうのをイメージされているところに自分の兄のことを話そうとすると、どう言ったらわかってくれるのかなって話し方がやっぱりわかんないですね。</li> <li>• J さん（女性・弟）72・・・あんまり弟が自閉症とかいうことは人に知られたくないってことではあつたんですけど。なんか仲いい子だったら話してもいいかなっていう気持ちにはだんだん。そのことについて言われたりとかはないかなと思ったので。でも実際それで誰かに嫌なこと言われたりとかしなかったんですけど、今までも。</li> </ul>
理論的	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ASD 児・者がいることによって生まれるきょうだいの体験。きょうだい</li> </ul>

メモ	<p>特有の体験と言える。ただし、これは ASD に限らない可能性も十分に考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 対極例は「心配しない」？→「自分がどう思われるかには関係ない」が成立＝きょうだいが ASD 児・者との境界線を引けている状態</li></ul>
----	--

概念名	関わりの広がり
定義	ASD 児・者との関係が起点となり、きょうだいと社会の関わりが広がっていくこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>B さん（女性・弟）64・2・・・一番彼に聞けるのが、彼の気持ちがわかるのが良いんですけど、彼の気持ちは永遠にわからないので。そこがね、もどかしいところなので。うん。それがねわかるようなね、機械があれば良いねとか、今コンピューターとかができてるじゃんって。そういうのがわかれば良いのねってよく話したりして。なので、そうですね。ただ、あの自分が彼よりも早く死んじゃった後は心配になるんですけど、なんかどういいうわけか、<u>次男くんが、ある日、実家の母にあのさあ、俺がさあ、大きくなって働けるようになったらさ、この団地に引っ越してきて、おじいちゃんおばあちゃん死んだら俺ここに住んで弟見てあげようかって言ったことがあったんですよ。で、なんか母親が涙ながらにそれを言っていて。なんかね、嬉しくってって言って。あ、何にも言っていないけどそれが育ったんだって。それを聞いた時は嬉しかったですね親として。あ、ちゃんとこうやって繋がっていきけるんだなって。無理なく？まあ生まれつきであったとしてもそうやって言ってくれるなら嬉しかったなって思って。で、運が良いのか悪いのか、男の子を3人産めたので、でもどうしてもやってほしいとも思わないし、もしそういう気持ちがある子が出てきてくれたら嬉しいし。で、それでも死ぬ時にダメだったら、施設かなんかにどうにか手続きを取った後に、会いに行って、って一言言って死のうと。思ってるので。そのくらい簡単な気持ちで。なんか、うん、世の中に対して、思春期の頃は不信感がいっぱいあったんですけど、35くらいまではあったかないろんな意味で。でも、なんかそれを過ぎておばさんになったら、ちょっと大丈夫じゃない？って、安心、っていうか。なんか、わかったわけじゃないけど、すべてがわかったわけじゃないけど、周りに良い人が多いので。良い人に恵まれてるので。なんとかなるんじゃないかなって気が。なんとかなるって信じてればなんとかなるよって言って。うん。なんかね。そうですね。</u></p> </li> <li> <p>D さん（男性・弟）②62・・・特別なことはなくて、同じ空間に一緒にいるみたいな。<u>で、他の友達の親も気にかけてくれるから、その友達も気にかけてくれる。でうちの母親は隠さない。みんなの前でもダメなことはダメで怒られてる、怒られてるのでかわいそう、他の友達が助ける。でやられっぱなしじゃないんですよ弟も。やられて「ビエ～！嫌い！」みたいな言ったりすんですよ。その時とか。一番怒られてた時は「雲の上飛んでっちゃえ」って言って超キレられた。超キレられてた。</u></p> </li> </ul>

「死ねってことか！」みたいな。ってなあって、そういうやりとりを友達が見てて、めっちゃ笑ってる、みたいな。で、それが何かこう友達ができたかっていうと、僕との関係を見てて、そうすればいいんだ、みたいな。めちゃうちゃちっちゃん頃からの友達、2歳くらいからの友達とかは、同じ、ではないけど、優しくしたい対象っていうふうに見てくれて。で、そうするとめちゃうしゃわかるから、好きになるんすよ。なにになになになに、みたいに擦り寄ってくるので、友達も「お？」ってなる子もいるし。でその友達の友達にはこうやって関わるといいんだよっていうのを教えてくれてその子も関わるようになったりとか。で、支援級があって、僕が顔見に行ったりしてたんで、友達もついてきて関わったり。で脱走したって聞いたら僕も「探してきます！」とか言って。僕の教室に来るってこともあったんですよ。僕の教室に弟が来て遊んでるとかも多かったですね。僕の小学校の同級生の女の子の服で鼻水拭いちゃったことがあって。「拭かれたんだけど！」って言われて「めちゃうちゃごめん！」みたいな。代わりに謝ったり。でもその親も「あ、全然いいよ！鼻水でもうんちでも拭いて！」みたいな感じの親だったんで大丈夫だった。でそれをきっかけに、そういうときは弟と一緒に行って「ほら謝って」っていうんすよ。で、また関わる、みたいな。

- Gさん(女性・姉) 19・・・結構低学年のころは個別級に遊びに行ったりしてて。で個別級の担任の先生とも仲良くしてもらえて、結構可愛がってもらってて。遊びに行ったりしてたんですけど、高学年くらいからは、なんか男子にからかわれたりとかあって、たぶんちょっと嫌だなっていうのは出てきてて。そこらへんくらいからたぶん遊びに行ったりとかしなくなった。
- Iさん②16-2(女性・妹)・・・なので自分がいわゆる大多数の家族の構成の中で育ったわけじゃないっていう認識は多かったのと。あとは妹のなんか今もですけど、普通にこうやって大人の方とお話をするよりも、もう少しどうやったら妹の、彼女の何か少ないボキャブラリーでわかってもらえるかとか、言い方はちょっと彼女仕様に変えるとか、あと何でしょう。その妹がいて妹が今ちょっと状態良くないなみたいな、1日に何回かそういう時間がやってくるんですけど、それがやってきたときになんか今私家でこれしたかったけど妹がこうだから我慢、みたいなふうなのは今も本当にあって。だから何て言うんでしょう、結構周りの人ありきの自分みたいなふうに、自分の振る舞いを考えることが本当に前からあったのは思いますね。なんか結構そういう私なんですけど、それでもなんか多分それは後天的なというか、家族がこうだったから自分がそういう気質を持ったっていうふうな気持ち、そういう感覚でいるんですけど

	<p>ど、多分もしかしたら私はそうじゃなかったら、かなりかなりフリーダムなというか、かなりやりたいことしかやらない。なんか結構わがままなタイプの自分の要素もあるんですね。なので、そこを尊重、大いに尊重して、何か大いにやりたいことばかりをやって大満足みたいな感じの人生もあったかもしれないんですけど。でももしかしたら本来の自分はそうだったのかもしれないなっていうふうに離れて思うんですけど。離れて生活するようになって、なんか妹のことを気にせずに生活できてる時に、なんかそこんとこ結構今出てきてる感じがして。だからそれはその今まで結構気を使って近しい友達でもですし、仕事場の方とかに対しても本当に気を使ってこの人の顔色見て言葉を選ぶみたいな、悪い意味でも。だからあんまり私が今まですごく人に嫌な思いをさせるっていうことは多分、今よりちょっと前までの方があんまなかったと思って。結構いい人みたいな感じで思われることが多かったと思うんですけど、<u>最近本当離れて住んでだいぶ自分のライフスタイルも自分のものとして変わってきて、自分が好きなことを優先的にできるとか自分が心地いい生活が優先的にできてるみたいなことが割とかなり気持ちがよくって。そうすると、自分の交友関係はだいぶ変わってきたんですよ。移転してからなんですけどはい。今までちょっと我慢して付き合っ、何か我慢して、「ま、いっかこの人根ははいい人だし」とかいうふうに私が頑張っと思って、合わせるようにしてきた友達だったりお付き合いする人とかあったりそういう人はなんかもうどんどん離れていくみたいな。私からも離れるし、っていうふうなことはこんなにダイナミックに人間関係が変わって、今も本当に変わる人が多いんですけど。そういう自分の周りの人の付き合い方とか付き合いの内容が変わってきたことって多分今までの自分の人生がなかったんですね。っていうことが、だいぶ大きな変化なんですけどこのこの数年間でっていうのがありますね。</u></p>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 定義：きょうだいの友達が起点となって、さらにきょうだいと ASD 児・者の関わりが広がること→ASD 児・者との関係が起点となり、きょうだいと社会の関わりが広がっていくこと きょうだいの友達が起点になっているのではなく、きょうだいと ASD 児・者の関係性が起点になり、きょうだいと社会との接点が増えていることが具体例から導き出されたため、定義を変更した。</li> <li>● 対極例：関わりが窄まることはないが、「関わりが広がらない」というところに固着する可能性？</li> </ul>

概念名	顔色を見て合わせる
定義	家族内での関係からきょうだいや周囲の人の顔色を見て合わせること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>Aさん（女性・兄）61, 62・・・そうですね。やっぱり、私はそんなですけど、母が毎日兄がいると疲れる。で、精神的にやっぱりイライラするんですよどうしても。ちょっと家の中の空気感が悪くなって、私が色々喋れなくなったりして。<u>テレビ見てちょっと笑ったら嫌な顔されそうだな、とか。しないとしてもですよ？だからそういうのもあるんで、結構顔色を見て生きてきてるんで。</u>〈お母様の顔色を？〉とか、ですね。まあそこから派生して、他の友人関係にしても、周りがどうなんだろう、<u>どういふ顔してるんだらうっていうのを気にし始めちゃったんで、今の自分、家族関係をオープンにできないのも一つ顔色を伺いすぎてるところからリンクしてるので。</u>まあそれは今は、母も余裕があるってことは家の空気は落ち着いてるってことなので、私も色々なことをしゃべれるし、仕事が、とかっていう話もするし。なので正解だったとおもいます、兄がグループホーム入れて。で、私も夜勤はたいへんですけど、まあ母が1人の時間もあつた方がきっと良いんだらうし。それは多分良いと思います。円滑なんだと思います。ちょっと、お盆とかって、兄が一週間に帰ってくるじゃないですか。毎日出かけなければならぬっていう疲労、同じこと繰り返し言われるイライラとか感じるだらうし、あんまり長く帰ってきてほしくないって私は思いますけど。そういう時に母と兄がずっと二人とかいって煮詰まる、ので、私が入って適当にあんなこと言ってからかたりすれば、少し空気変わるとは思うんで。まあわざとやってるわけじゃないですけど。なんか思ったりはします。</p> </li> <li> <p>Iさん（女性・妹）②16-2・・・なので自分がいわゆる大多数の家族の構成の中で育ったわけじゃないっていう認識は多かったのと。あとは妹のなんか今もですけど、普通にこうやって大人の方とお話をするよりも、もう少しどうやったら妹の、彼女の何か少ないボキャブラリーでわかってもらえるかとか、言い方はちょっと彼女仕様に変えとか、あと何でしょう。<u>その妹がいて妹が今ちょっと状態良くないなみたいな、1日に何回かそういう時間がやってくるんですけど、それがやってきたときになんか今私家でこれしたかったけど妹がこうだから我慢、みたいなふうなのは今も本当にあつて。</u>だから何て言うんでしょう、結構周りの人ありきの自分みたいなふうな、自分の振る舞いを考えることが本当に前からあつたのは思いますね。なんか結構そういう私なんですけど、それでもなんか多分それは後天的なというか、家族がこうだったから自分がそういう気質を持ったっていうふうな気持ち、そういう感覚でいるんですけど。<u>多分もしかしたら私はそうじゃなかったら、かなりかなりフリーダ</u></p> </li> </ul>

ムなというか、かなりやりたいことしかやらない。なんか結構わがままなタイプの自分の要素もあるんですね。なので、そこを尊重、大いに尊重して、何か大いにやりたいことばかりをやって大満足みたいな感じの人生もあったかもしれないんですけど。でももしかしたら本来の自分はそうだったのかもしれないなっていうふうに離れて思うんですけど。離れて生活するようになって、なんか妹のことを気にせずに生活できてる時に、なんかそこんとこ結構今出てきてる感じがして。だからそれはその今まで結構気を使って近しい友達でもですし、仕事場の方とかに対しても本当に気を使ってこの人の顔色見て言葉を選ぶみたいな、悪い意味でも。だからあんまり私が今まですごく人に嫌な思いをさせるっていうことは多分、今よりちょっと前までの方があんまなかったと思って。結構いい人みたいな感じで思われることが多かったと思うんですけど、最近本当離れて住んでだいぶ自分のライフスタイルも自分のものとして変わってきて、自分が好きなことを優先的にできるとか自分が心地いい生活が優先的にできてるみたいなことが割とかなり気持ちがよくなって。そうすると、自分の交友関係はだいぶ変わってきたんですね。移転してからなんですけどはい。今までちょっと我慢して付き合って、何か我慢して、「ま、いっかこの人根ははいい人だし」とかいうふうに私が頑張って、合わせるようにしてきた友達だったりお付き合いする人とかあったりそういう人はなんかもうどんどん離れていくみたいな。私からも離れるし、っていうふうなことはこんなにダイナミックに人間関係が変わって、今も本当に変わることが多いんですけど。そういう自分の周りの人の付き合い方とか付き合いの内容が変わってきたことって多分これまでの自分の人生がなかったんですね。っていうことが、だいぶ大きな変化なんですけどこのこの数年間でっていうのがありますね。

- Hさん（女性・弟）9・・・という感じを、感じてましたね当時は。当時、ものごころついた頃なんですけど、弟が体弱かったっていうのもあって結構みんなそっちにかかりきりになっていた中で、多分自分っていうのは、とりあえず迷惑をかけないようにとりあえずまず自分がしっかりしないとっていうこと。はい。たぶん親もそういうの望んでいたと思うんで。そういう中で自分の主張とかはしてなかったんで、それで存在が薄くなっちゃってたかなって感じはありますね。
- Kさん（男性・兄）79・・・意図した事はあんまり別にはないんですけど、多分潜在的に思ってることはあるかもしれないですね。やっぱり面倒くさいことが嫌いだったのでちっちゃい頃から。そうですね、やっぱり何か言い返せば10帰ってきて。帰ってきて結局終わらない。だったらもう素直にはいはい聞いてれば、一番早く終わるっていう考えにはなって



	たりもしたかもしれないです。
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ASD 児・者がいることによって、きょうだいや両親やきょうだいとの関わりの中で顔色を伺いながら生活する姿勢が身についてしまい、社会との関わりにおいてもそのような姿勢を取りやすくなってしまっている状態か。</li> <li>• 顔色を見て合わせない、という概念は成立しないが、研究Ⅳの主体性を発揮する段階以前の姿勢とも考えられる。</li> </ul>

概念名	気を遣われるのを避ける
定義	きょうだい ASD 児・者のことを周囲の他者に話して嫌な空気・気持ちになることを避けること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん（女性・兄）②88・・・なんか…あんまり知られるのもめんどくさいっていうのがあって。向こうもそんな突っ込んではこないと思うんですけど、会話が続いたらめんどくさいなっていうか。あんまりなんか知られたくない、嫌だから知られたくないんじゃないかって、その後の話してる人たちの空気が微妙になるのが嫌で話したくない、っていうのですね。</li> <li>● J さん（女性・弟）99・・・特に話す必要もないかなって思ったんですけど。なんかそれで変に気を使われても嫌だしなっていうのもあって。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 嫌な空気， の解像度をあげたいところ。他の概念との関連で見えてくるか？→具体例より [嫌な空気を避ける] → [気を遣われるのを避ける] に変更</li> <li>● 対極の具体例としては [素直に話す] [人は人] あたりか？</li> <li>● 投影同一化。周りの人が必ずしも「嫌な空気を醸し出す」とは、本来はそうは限らない。巻き込まれている状態， と言える。</li> </ul>

概念名	経験を活かす
定義	きょうだい ASD 児・者がいるからこそその経験を通してそれを活かそうと動くこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>A さん（女性・兄）50・・・そう、だと思えますね～。<u>うーんなんか本当に、気付いたら選んでたっていったらあれですけど。なんでですかね、やっぱり多いじゃないですか、きょうだいってこう言う仕事って。私の周りでも何人か知ってるんで。だからと言って仲が良いからやっただけではないと思って。嫌いって言う人もいたりとかして、それでもやってたりとか。だから、やっぱり結局自分の身近にそういう人がいて、知ってるから、それが身近だから仕事としてもできるんじゃないかって思ったりとか、やってみようって思うのかなって。多分私はそうだったので、自然とやってたし。</u> <u>だけど逆に身内にも誰もそういう人がいないのに目指してるってどういうモチベーションなんだろうって、すごいなって。本当に尊敬する。得体の知れないね、何考えてるかわからない人を、接するってかなり難しいことだと思うんで。うちの職場に学生が、女子学生が実習とかくるんですけど、まあそこに身内がって子が何人かいたりして。まあけど何故なのかって聞いてみたいなって思ったんですけど。だいたいやっぱり、自分が、こういう状況なのを生かして仕事をしたいっていうところです。</u></p> </li> <li> <p>B さん（女性・弟）41・2・・・で、高校に行く時は、良かったこと、多分良かったことに入ると思うんですけど、弟がそうだから頑張んなきゃできて、勉強も頑張ろうってやってたら、やっぱり成績も上がりますよね。で、そうすると母親にとってはあんまり自慢とかしない人なんですけど、まあ悪いより嬉しいらしくて。こうお母さん同士でお話するとき、なんとかって言ってたよって入ると、あ、嬉しいんだなって、頑張んなきゃって思って。高校まではなんとか勉強もしないで結構まあまあで、行けたんですけど、高校入るとみんな同じように頑張ってるから、頑張らないと落ちていくじゃないですか。やばって初めてそのときになって。ああ、あの時はやばいな私って思いました。で、あの、高校生としては、なんかねいつからかわからないんですけど、ずっと弟の面倒を見ようって決めてた節があって、そのためには、何が必要かとか、うん。思ってたんですよね。で、高校の時に養護学校とかも見に行ったりしてるから、養護学校の先生も良いなって安易な気持ちで思ってたら、この成績ではいけないってはたと気づいて。方向転換しないとなってじゃあどうしようかなっていろんな学校見てた時に、福祉とかとくと、施設とかで働けるじゃないですか。で、そうするとなんだろう、養護学校の先生は高校止まりだけど、その先が見れるんだ、そ</p> </li> </ul>

の先の世界を知れるんだなって思ったらそっちに興味が湧いてきてしま  
って。ちょっと調べてみたらいけそうなところが一杯ある、とか思っ  
て。安易に楽な方へ流れちゃったとも言えるんですけど。

- D さん②102, 103・・・家の中でどういう扱いを受けてるとか、それ  
を見るから、自分もそういう扱いをするわけじゃないですか。蔑ろにさ  
れてるんだったら、自分だって「あ、この子は蔑ろにしていいんだ」っ  
て思うから、すると思うんですけど、そういう扱いをされていないから  
自分もそういう扱いをしていないし、それでよかったと思うから、他に  
還元しようって、思うのかな～みたいな。〈還元しよう、ですか〉そう、  
そうだ、その還元していく場所に、何が適しているのかを考えた時に、  
その時に「先生」っていう職業しかわからなかったんだ。もしかした  
ら、もっと調べれば、色々あったのかもしれないですけど、その時には  
わかんなくて。身近なところを見たときに、そういうふうのできる職業  
って、教員だなって思ったから、じゃあ塾とか、そういう教室とかはど  
うかって思ったけど…「いやでも行かなきゃいけない場所」じゃないで  
すか学校って。義務教育だし。でなおかつ長い時間を過ごす場所。だか  
らその学校外に居場所を作るっていう考え方もすごく大切に良いんだろ  
うなって思うんですけど、そこには経済的な事情で通わせることができ  
なかつたり、知らない、そういう場所があるっていうのを知らないって  
いう可能性もある。無条件でいる場所って学校だから、学校にしようっ  
て思った、んでした。
- E さん（男性・弟）65・・・E さん：えっと、最初の頃はあったんです  
よ。やっぱりあの音楽もやってたんで、小学校の頃はホントは音楽の  
道進みたいとかもあったんですけど、僕が結局中学か高校うーん、。そう  
だな、大学の最初の頃はあの教育の現場に立とうと思ってたんです  
よ。だから公務員の勉強とかしてたんですけど、残念ながら、勉強があ  
んまり好きじゃなくて、あのへこたれてしまうんですねすぐに。別に  
多分やってしまえば、多分苦はないと思うんですね。あのできないわ  
けじゃないんで。ただそのやるのがめんどくさい。っていうので、あ  
のまあの道は閉ざしてしまった。自分で閉ざしてしまっただので、  
その分あの何に向いたかという、多分大学の活動とかそっちで、あ  
の自分に力をつけたっていう方なんで。だから弟が何か影響したって  
いうのは、うーん、例えばなんですけど、教育学を学んだりもしてたん  
ですよ。だから俺教職の課程は一応全部持ってるんですよ。ただ教育実  
習とかは行ってないんで。うん。そのままになっちゃってるんですけ  
ど。一応教職をある程度課程を全部とって、例えば、えーっと発達学と  
か、そういうのは全部とってたんで、だからいろいろな本とかもとって

えず読んで、だからその頃にあの一、あ、弟ってこうなんだなって言うのを照らし合わせながら考えたっていうのはありますけどね。

- Fさん（男性・弟）74・・・Fさん：うん。おそらく実質話についているのが僕しかいない状況で、で、あの一彼と一緒にいろんなところに行くのが楽しいと思える。楽しいと思えないと、途中でイライラしてくると思うんです。で、イライラしてくると彼が気を使うんですよ。楽しめないんですよ。僕も、あの一結構多分高校あたりは彼と一緒にいるとイライラすることがあって。で、あの一僕の方が大学に入ってから、その子ども会サークルに入ってた。で、子どもサークルのあの一障害を持った子と遊ぶっていうクラスのある子ども会サークルで、そこでいろんな障害を持った子と関わりを持ったりとかして。まあなんか多分そういうふうなことをして、まあ他の子に手を焼いてると自然と自分の弟が可愛く見えてくる。っていうのをひしひしと思ってたりして。だからなんかこう障害を持ってる子っていうのを、割と客観的に、いろんな人と関わっていくことによって、見ていって、実際、あの一そのやっぱり自分が障害を持ってる弟と関わってるから、そういう子との関わり方って、できちゃうんですよ。できちゃうから、あの一すごいねって言われたりするじゃないですか。そんな悪い気分じゃないですよ。で、もうそういう風に言ってもらえるのって、弟のおかげだから。うん、それはああやっぱりそういう経験をさせてくれた弟のおかげなんだなあって思うと、こうそう言われたら確かに、自分しかいないし、むしろ同じ年代で同じ趣味で、楽しめるのは自分しかいないから、まあこれだったら、自分がなんとか遊んであげなきゃいけないなあっていうのも思いますし。大学の頃は多分そのくらいに思って。で、うん。
- Gさん（女性・姉）41・・・あとは、採用試験一発で合格できなくて、社会人1年目は非常勤で、2年目3年は臨時採用。3年間ちょっと次の日どうなっちゃうかわからないみたいな感じだったんですけど、その臨任の2年間の時は、個別級もたせてもらってたんですけど、別に姉がとか全く関係ないんですけど。そういったところにポンっと入った時も、全然抵抗はなかったです。
- Hさん（女性・弟）93,94・・・あんまりそこは考えたことなかったですね。自分のその振り返ってみると、弟のことにに関して学ぼうっていうのはなかったとおもんですけど、大学4年のことを考えて、自分から学ぼうって思うってことなかったなって思って。弟たぶん軽度で、よくわからない子ではありましたが、普通の子って思ってたので。あんまり考えたことなかったな一って思って。ガイドヘルパーの資格をとって。その勉強を母と一緒にして、資格をとってっていうことがありました。

	<p>まあ就職とかっていうのには特に関係なく、弟が何かっていうのはなかったと思います。〈大学で気づいたのはどうしてですか?〉先にガイドヘルパーっていう資格があるって母から聞いてから考えたので、そういえば逆でしたね。そういうのあるけどどうするーって聞かれて、そういうええあんまり向き合ったりっていう機会なかったの、良い機会だなって思って資格を取りました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Jさん(女性・弟) 122・・・何かっていうと、あとは何かなんか全然知らずに入ったんですけど大学には。何かその特別支援とかの免許を取る、取れるみたい聞いて、そしたらなんか弟とかもいて、その弟とか何か訓練会とかでもそういう子と関わってきたので、何かそういう経験とかを活かせるような方向に行きたいなと思って。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● [還元していく] の具体例であった Dさんとも統合。概念名を「経験を活かす」→「還元していく」に変更した。→具体例とのバランスから「経験を活かす」に再変更した。</li> <li>● 定義を「きょうだいが ASD 児・者がいるからこそ方向性を決めること」から「きょうだいが ASD 児・者がいるからこそその経験を通してそれを活かそうと動くこと」と変更した。</li> <li>● 精神分析的に言えば「昇華」のプロセスに近いもののように思われる。きょうだいのなかのリビドーが社会に対して開かれていくイメージ。Dさんは情緒的にも安定している人で、教師として子どもたちのことをよく見ているし、行動の背後にあるものに自然と目を向けることができていた(Dさん 104・・・授業中に寝ている子への対応のエピソード)。ただし、最終的な到達点としてこの概念がある、というわけではないように思われる。これができる時と、そうでない時を揺れ動きながら進んでいくのではないだろうか。</li> </ul>

概念名	嫌な思いをする
定義	きょうだい ASD 児・者をめぐって周囲の人との間で嫌な思いをすること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>A さん（女性・兄）32・・・小学校の時は、特殊学級みたいのがあって、兄はずっとそこでいて、なんかうちの小学校は割とそこに遊びに行く、特殊学級に遊びに行く、っていう休み方を過ごす人が周りも多くて、私の兄の同学年の人とかにも、しょっちゅう遊びに行く人が多くて、私、大学のバイト先で同じ小学校の二つ上のがいた時に「A です」って言った時は、「お兄ちゃん・・・ヒロトモくん？」みたいなこと言われて「よく遊んでた」みたいなことがあって。そういう感じの割と、まああったかい感じに囲まれてくれてたイメージはあって、でまあ私の同学年は言っても下なんで、まあ兄とはそんなに関係はなく、同学年にそういう子がいたりすると、意外に遊びにいたりしてたっていうのがあるんで、そこで何か嫌な思いはしたことなんですけど。<u>なんか小学校って転校生とかっているじゃないですか。転校生ってなんか異質な存在で、特殊学級とかなんだよ、みたいな。私の兄がそこに・・・私の兄をみたら、「お前のお兄ちゃんあんなやつなの？」みたいなことは言われて、私は普通に過ごしてたんだけど、急に転校生からそんなこと言われて、なんかそれで、「え、変なことなの？」ってそれをすごい感じたのは今でも思い出す。なんか・・・それでちょっとなんか・・・感じたのかな。なんか変なんだっていうか。違うんだなって言うのが。今までは普通に遊んでたのが。まあそれも高学年くらいですかね小学校の。まあその辺りちょっといろいろ敏感になってくる年だったので、そういうパツて言われると、すごい傷ついた記憶はありますね。まあ別にそれでいじめられるとか、しつこく言われることはないですけど、そんなに、そういうちょっとした一言とか、ハッとさせられたな～みたいのは覚えています。</u></p> </li> <li> <p>B さん（女性・弟）・・・はいはい。小学校の時はえっと、入りました。で、ずっと未だに言うんですけど、弟に喋って欲しかったんだなって。おしゃべりしたかったのかなって。で、あの毎年の初詣とか行くと、初詣とかなんか機会があって神社とか行くと、弟が喋れますようにって本当に毎回お願いしてて。何で叶わないんだろうって、それを覚えてて。で、作文とかもあるじゃないですか。その時も、平気で弟のことを書いていて、それに先生とかがしゃべれると、しゃべれるようになると良いねってコメントの作文が出てきた時は、あ、って思って。うん。で、あとはそうだな断片的にしか思い出せないんですけど、あとはもう自分が守らなきゃっていうのがたぶん、多分にあったみたいで。例えば、あの一お買い物に行って屋上のなんか乗り物とかあるじゃないですか、そういうの彼大好きだったので、後ろに乗ってたりとか。で、その時に一</p> </li> </ul>

回だけ覚えてるのが、なんかいじめっ子みたいな男の子が来て、何か言われたんですよね。で、すごい怖かったんだけど、こっち守んなきゃって思って言い返して、で、どつかれて、すごい覚えてて。でも何か最後には勝ったぞっていうのがあるからたぶん勝ったんだとは思んですけど。そういうのとか、やば弟がいてくれたから鍛えられた感があったなあって。

- Cさん（女性・兄）②113・・・なんかやっぱ思い返してになっちゃいますけど子供の頃とか、どうして私が家に友達を呼ぶように先に言っておかなくちゃちゃいけなかったんだろうとか。ただきょうだいの話をしてるだけなのに、どうしてこんな空気になるんだろうみたいなこと思ったり、あとさっき話したその兄弟のことを話したらちょっと付き合った人との関係がちょっと変わっちゃったなみたいな、そういうことを何かポツリポツリと、なんでだろうって。そのことが直接の原因ではないと思いたいけど、どうしても何か結び付けたくなっちゃうみたいな。感じでポツポツ思い出してました。
- Dさん（男性・弟）②57・・・親。親なんじゃないですかね。親の関係がでかいのかなって思いますけど。親が弟にめちゃくちゃ怒ってる時とかに、なんでそんなに怒るの、って思う時もあるんすよ。だからめちゃくちゃ怒られてるから俺がケアしなきゃみたいなのも結構あって。親との関係が前後じゃないのかなって思いました。上下の関係じゃなくて、横の関係で割と。で、まあでも親だっていくら息子だからと言ってもムカつく時はムカつくよな、みたいな。じゃあそうなるなら逃げ道を俺が作らなきゃな、みたいなのは小学校の中学年くらいから。なんで中学年くらいからかなって思ったかという、弟が…僕が小3で小1なんですよ。だから学校生活の時は全て俺が守る、みたいな。僕も調子いいんで、味方が多いんですよ。敵に、僕の味方だから、弟からしても味方なんですよ。そこがくっついていたりとか、でコミュニティができて。でも同学年とかに嫌なことしてくる奴がいて、僕の1学年上とか。は、僕の2個上が成敗してくれたりするんですよ。っていうふうに、なんかこうそこらへんが一番守んなきゃって意識が強かったですね。
- Gさん（女性・姉）19・・・結構低学年のころは個別級に遊びに行ったりしてて。で個別級の担任の先生とも仲良くしてもらえて、結構可愛がってもらってて。遊びに行ったりしてたんですけど、高学年くらいからは、なんか男子にからかわれたりとかあって、たぶんちょっと嫌だなんていうのは出てきてて。そこらへんくらいからたぶん遊びに行ったりとかしなくなった。
- Kさん（男性・兄）46・・・あとはちょっとそうですね具体的な年代が



	<p>ちょっと小学生のときだったか…あ、でも小学生のときですね。それは小学生のときなんですけど。自分と同級生がいて、その同級生と仲良かったのでよく遊んだりもしてたんですけど、その自分が 2 個上に兄がいて、その 2 個上にその同級生のお姉ちゃんもいたんですけど。お姉ちゃんは特に障害があるとかそういうわけじゃないんですよ。その時自分の兄と同級生の姉が、ちょっと揉めたみたいで。それについて何か一旦同級生の方から、自分の方にちょっといろいろ言われてしまって。自分もその同級生とちょっと、一旦そのことが原因でちょっと揉めてってということがありましたね。そこで母がやっぱり上の子たちの喧嘩を下の子たちまでしわ寄せするのは違うだろうって話をちょっとしてくれたみたいなんですよ。</p>
<p>理論的 メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 嫌な思い、の解像度を上げたいところ。要は嫌がらせ、いじめを受けるといったところか。</li> <li>● きょうだい ASD 児・者がいることによって恐れていることの一つ。必ずしも嫌な思いをするわけではないが、嫌な思いをする可能性もある。この嫌な思いには、具体的ないじめなどの行動の他にも、空気感として気まずいものも含まれるだろう。</li> <li>● 対極例は「受け止められている」などか。</li> </ul>

概念名	語りづらくてはぐらかす
定義	きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人に語りづらいつ感じてはぐらかすこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん (女性・兄) ②87・・・大学ではもう家に友達が来ることもないので、兄のことは周りにはほとんど言っていないですね。兄のことはほとんどはぐらかす。なんとなく嘘は言わないけど、そこまでは話を濁す、みたいなの。</li> <li>● E さん (男性・弟) 78・・・ありますよやっぱり。あの一特にやっぱり大学生とか高校生くらい。まあそれくらいになってくるとやっぱりそういうのがよりあったり、周り気にするようになりましてからね。ただ、だから気にしたからどうすんのって話でもないんですけど、例えばこいつには話さない方が良くないってのは結構ありますよ。</li> <li>● J さん (女性・弟) 66,67・・・本当にその時は、何か別にあんまり外との繋がりもなかったんで。友達とかと自分を比較することもなかったんで、別に思わなかったんですけど。なんだろう。何かそれ小さいながらに、人には言いづらいつなつて思うことがありましたね。友達とかも。〈どんなところが言いづらいつのですか?〉いやなんか普通じゃないんだなつて思ったら、なんか人とは違うんだよなつて思ったら言いづらいつなつていうふうに思っちゃいますね。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだいあるある。きょうだいのことを聞かれると、どう思われるのか不安になり、素直には話せなくなつてしまう。</li> <li>● 対極例は [自分から語る]? [自分からは語らない] は近しい概念か。ただ、「語らない」と「はぐらかす」は違う。全く語りたくない、というわけではないのではないか。</li> </ul>

概念名	自ら ASD 児・者のことを語る
定義	きょうだいが ASD 児・者について周囲の人に対して説明すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）41-1・・・中学校の時でもう一つ引っかかり始めたのが、昔は今みたいにあの、うちでは〇〇級って言うんですけど、特別支援学級ってというのが、各学校にあったわけじゃなかったの。小学校の時に弟が一度、私弟と一緒に学校通いたかったんですよ。でも別の学校じゃないとしょうがないじゃないですか。本当に羨ましくて。で、一時期、同じ学校ではなくて、ちょっと離れたところの市内の学校にその支援級があって。母親と通ってたことがあったんですね弟が。もしかしてって思ったんですけど、でも合わなかったみたいで結局やめてしまっ。で、中学に入ったら支援級が自分の中学校にあって、そこに 1 人の男の子が来てたんですけど、彼があんな嫌なことがあると周りに唾を吐いてしまうタイプの子で。そうすると嫌がられちゃうじゃないですか。みんなわーとか言って逃げちゃうんですよ。大丈夫なのに、って思いながら見て。唾吐いちゃダメじゃんとか言うんだけどそうすると唾を吐かれて。で、そういうのが当たり前だと思ってたのが、周りは当たり前じゃないから、白い目で見られるっていうのを初めてこう、初めてじゃないけれども、あ、やっぱり世間ってこんなもんなんだっていうのを勉強して。そこから人の目を気にするようになったのかなって思いますね。こう世間が思っているのと自分が思っている思いは、こう合っていないんだっていうのを知ることになって。<u>でも一生懸命お友達とかに説明するとわかってくれる人も中にはいるっていうのもわかっていたから、じゃあ諦めないで周りから攻めれば良いのかって。うん。そうねえ。そこが中学生の時。</u></li> <li>• D さん（男性・弟）②74・・・「自閉症って障害があってね、物とか勝手に触ると怒るから気をつけてね」みたいな（笑）「まあうまくやって～」とか。そんなになんて言うんすかね、「こうだからこうだから」ってシリアスな感じにならないで、「こんな感じだからよろしくね～」とか。「こんな感じで関わって～」とか。</li> <li>• E さん（男性・弟）80・・・うーん例えばこいつとこれから長く付き合うって時に、自分が、あのーやっぱり、弟がいてできないことっていうのがやっぱりたまにあたりするんでうよね。この日は親がいなくて弟見てなきゃいけないとか。それはもう理解してもらわなきゃいけない。それは、そういう時くらいですかね。だから例えば、僕の今付き合ってる彼女が結構長いんで、それでも最初の頃からずっと言ってたりする。だから自分の彼女学校の先生やってるんで。だから結局はそういうところ理解してもらいながら付き合ってもらわないと。将来は絶対一緒にな</li> </ul>

	<p>った時に苦労するので。いなかったものがあるようになっちゃうんで。だからそれはもういくらどんなにあの一例えば人間の心っていうんですかね、付き合いきれない部分が絶対あるんですよ。家族じゃないと。うん。だからそれは常にあの一意識はしてますね。あの子ありきの自分なんで。切ってもきれないですからね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• F さん（男性・弟）63, 64・・・同級生とか。例えば僕が中学の頃とかも、別に弟だよって言ったら僕がいないところでも、あ、F の弟じゃんって挨拶してくれるし、そういう感じだから、僕もうちの弟が障害を持ってることを苦慮したりしないですし。割とこうサラッとさえちゃう。〈サラッとですか〉聞かれたらスッと話せますし、今で言うと、聞かれなくてもスッと話しちゃいますね。</li> <li>• G さん（女性・姉）54・・・私はお付き合いしてる頃から、姉のこととか家族のこと話してたので、結構会ったりとかもしてたので、割と理解とかも、どこまで理解してるかもわからないですけど。正直その家族じゃないとわからないこととかって、大変さとかもあると思うんですけど。結婚する人は姉に対しての理解がないと結婚は無理だなあと私は思ってたので。もうそこは理解はしてもらえてるかなっていうのはありますね。</li> <li>• J さん 132（女性・弟）・・・はい、やっぱりなんかゼミは本当にそういうゼミなので。なんか弟の話とかも。そのちょうど自閉症の研究とかしてたので、その前弟の話とかしてました。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだい ASD 児・者のことを自発的に語るができるかどうかは、きょうだいの ASD 児・者との向き合い方の一つのパラメーターになる？</li> <li>• 自己開示、とも近いが、「自分はきょうだいである」とするのが自己開示で、あくまで「自分のきょうだいには ASD がある」と語っているため、上記の定義、概念名とした。</li> <li>• 対極例は「自分からは語らない」。</li> <li>• 「語りづらいからはぐらかす」も対極に近いが、ニュアンスが「自分からは語らない」とは異なるか。</li> </ul>

概念名	自分がどう思われるかには関係ない
定義	きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人に語っても、自分がどう思われるのかにはさほど影響を及ぼさないと気づくこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● J さん（女性・弟）100・・・なんかそれまでの経験から何か別にその自閉症とか、カミングアウトしてもべつにそんなその人間関係とかであればないよなっていうことには気づいて。でもだからといって、何かやっぱりやっぱ「普通の子とは違う」っていう感じには思われるじゃないですか。なんかそこまで偏見とかなかったとしても。何かそれで気を使われたりするの嫌だなと思ったので、うん何か聞かれない限りは答えなくてもいいかなみたいな気持ちでありました。</li> <li>● K さん（男性・兄）84・・・そうですね、中学のときの経験であんまり人から言われることないな、ないっていうのがあって。まあ別に兄のことを知ってても、別にそれについて何か言われたりとかもなかったんで。そこから別に言われることがないっていう安心感が出たんですかね。そこから気にしなくなって。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● きょうだい巻き込まれていると、周囲の評価に過敏になり、ASD 児・者がいることによって被害的になってしまいやすい？語ってみて気まずい雰囲気になればさらに口を閉ざしていきたくらうし、逆に特に何も変わらないのであれば、</li> <li>● ASD 児・者、あるいは ASD というものに対する嫌悪感・攻撃性をスプリットさせ投影し、それが被害感として返ってきているパターンが、気にしすぎているということ。この概念の存在は、そこから次のステップに進む可能性があることを示唆している。</li> <li>● 対極例は既出の [どう思われるのか心配] だろう。</li> </ul>

概念名	自分からは語らない
定義	きょうだい ASD 児・者のことを自分から語ることに抵抗感があること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A さん（女性・兄）39・・・訓練会でできた友達、きょうだいの友達は、割とオープンな人たちが多くて、まあそんな話したことないんですけど、全然年賀状とかみんなの家族の写真を載せるとか、全然友達とかに言ってるしって言って。そうなのかな？私だけか？とか思って。まあそれは元々の性格とかの違いだと思いますけど、そういう人たちにしか会ってなかったの、自分おかしいとか、感覚はあったなあと思って。まあ別に隠すことが、うん、別にそれでいったところで友達が嫌いになるとかではないんですけど、そんなオープンに言えるのすごいな。プリクラ撮ってそれを自分の手帳に貼って見せたりとか。もうすごいなあ、そういう人もいるんだなあ。そういうのはちょっとびっくりしましたね。逆に。自分だけこもってんなあみたいな。でもなんかこれは本当無理ですね。最近そういう考えが出ちゃったんで、やっぱり私も今もそういうのが継続してます。この人は言って良い人かなみたいな。いざ言うと「あ、ごめん」てなってああダメだ、とか。結構覚えてないもんじゃないですか。一回言っても「あれ？そうだったっけ？」みたいな。二回目言ってとか。割とそんなもんなんですけどね。自分が気にしすぎなだけなんだと思うんですけど。みんな大人だから。いろんな家族関係ある、し。とは思ってもやっぱり…。うん。堂々と紹介はやっぱりしないですね。</li> <li>• C さん（女性・兄）②91・・・ほぼ言っていない、言っていないです。今の職場も、うん。面接のときなんか家族構成の話になって、そんなときの面接時にいた人には言いましたけどうん、覚えてるかどうかわかんなくともよくわかんないです。で同僚にも言っていないです。極力言わない。聞かれたら別に答えることは全然やぶさかではないんですけど。自分からは絶対話さないし。</li> <li>• J さん（女性・弟）98・・・自分が中学のときは、私中学の友達は多分ほぼ中学から一緒になった友達って弟のこと知らないんですけど。家とかに遊びに来てた子は知ってるんですけどほぼ多分知られてなくて。まあ特に自分から話すこともなかったの。</li> <li>• K さん（男性・兄）69・・・そうですね、突っ込まれた場合は自分の友達もそこまで、あまり自分はそういう偏見をしそうな人とは別に付き合ってたので…。まあ突っ込まれたら多分言ってたかもしないですけど、そこまで突っ込まれることが今まであんまり高校とかでは高校、大学となかったんで。大学でも兄弟いるか聞かれた時も兄が 1 人いるって言って。大学行ってんの？と聞かれるんですけど、高校卒業して</li> </ul>

	働いてるよっていう感じ。ぐらいしか言わないんで。
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいには、自ら語る人と、基本的には語らない人がいる。それは「どう思われるか」という心配があるから。対極例として [自ら ASD 児・者のことを語る] が成立した。また、[語りづらいからはぐらかす] や [絶対に語りたくないわけではない] も成立した。</li> <li>• [自分からは語らない] が、[絶対に語りたくないわけではない] という葛藤。</li> </ul>

概念名	受け止めてくれる
定義	きょうだいが周囲の人に受け止められていると感じること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li> <p>Bさん（女性・弟）34・2・・・で、1年生の頃は本当に泣き虫で、男の子によくランドセルとか蹴られてたから、いやこのままじゃいけないって言い返して。何かエイってやったら、あくる日から何もやられなくなって。あいつこええぞ、みたいな感じになってくれたので。そうですね。そういう関係でも楽で。なので、あとは良かったことになるのかな。やっぱ弟ができないんだったら、自分をもっと頑張らなきゃって思っただけ。本当にもうこの歳になると、あああの時あんなに頑張らなくて良かったのにな、って振り返ると思ったり、するんですけど。うん。なんかね、この歳になって、改めちっちゃい時の自分に会ったら、頑張ってるねって声をかけてあげられるのになって。でも周りもそれを認めてくれている人が何人かいたの。で、一番、一番？うーんとね、<u>小学校の3, 4, 5と担任を持ってくれた先生と未だに手紙のやり取りをしているんですけど、その先生がとても気にかけてくれていて。で、そうですね、思春期の時とかにもすごい相談相手になってくれた気がするんですよ。そういう方達にも恵まれたっていうか、うん。本当になんか困ってないんですよ、自分自身が。だで、悪いことっていうか、小学校の高学年になって、だんだん分かってきますよね、こう自分のきょうだいは違うって。で、ちょうど、近所にも同じ年で、そのこのごきょうだいがやっぱり肢体不自由、の方だったのかな。で、知的にもあって。で、うちの弟は肢体不自由がないので、あの逆に言うと恥ずかしがり屋さんねというか、周りの人が気づいてくれないところがあって。でもあの奇声を発してしまうので、ちょっとそういうのがあると、え?!っていう感じで。恥ずかしいなっていうのがまずあったかな。で、ちょっと高学年から中学生くらいは一緒に電車に乗るのを、親の前だから平気なふりをしているけど、やっぱりちょっと離れ…られるものならちょっと距離おいちゃおうかなっていう心と戦ってました。あの、恥ずかしくってっていう。でもその恥ずかしいって思う自分も嫌なんです。そこで葛藤してた感じです。</u></p> </li> <li> <p>Dさん（男性・弟）63②・・・幼稚園も一緒だったんですよ。だからずっと知ってくれる友達がいる、っていう強さ。あとは浅はかですけど、その時のこと考えると、学校っていろんな子がいる中で、わちゃわちゃするグループと静かにするグループがあって、僕はもうお調子者なのでわちゃわちゃしてる方で中心にいたいっていう小学校中学校生活…幼稚園から。なので僕の仲間は、自然とそういう奴なんです。そいつらが味方でいると、嫌なことをする奴がいないんですよ。で、なんかしたや</p> </li> </ul>



	<p><u>つに対して僕がめちゃくちゃキレるから、でそれもなんだろうな…うーん…別に俺がお前に嫌われたところで、俺の学校生活何も変わらないって思っ</u> <u>て言うので、向こうが引くんですよ。「ごめん」みたいな感じになるし。だから周りがよかった。僕の友達が理解してくれたから、いやす</u> <u>かった。で弟がいることで僕に不利益が生じてないっていうところも。</u> <u>お前の弟こうなんだろ、みたいな感じでなったら…もしかしたら僕も</u> <u>感覚が違ってたかもしれないですけど。そんなふうに言ってくる友達はい</u> <u>なかったです。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● J さん (女性・弟) 159・・・でも大学に入ってからですね。大学だと何かそういう教育系だったので、なんかそういうのに理解ある人も多かったっていうのもあって。なんかそういう人人といた方が楽かなっていうふうには思いましたね。</li> <li>● K さん (男性・兄) 70・・・中学も同じ学校だったので、基本的にはもう知られてるわけなんで。三つの小学校から一つの中学にみんな来てるので。ある特定の小学生の出身の人たちと、兄も結構その普通クラスの人たちと仲良くよかったみたいなんです。で、その特定の小学校の人たちもその弟に障害を持った人が実はいた、みたいなことも後から知って。なんで小学校の人たちは結構その障害についての理解がある程度あったりする人たちも結構多かったんで、別にその障害が理由でからかわれたりとかそういうのはなかったですね。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 当初, [理解してくれる] と概念名を定めていたが, 具体例からは知的な理解というよりも, 情緒的な理解=受け止めてもらっている感覚のニュアンスが適していると考えられたため, 概念名を変更した。[理解してくれる] → [受け止めてくれる]</li> <li>● 対極例は, 理解をしてくれない, 嫌がらせを受けるなど? → 〈嫌な思いをする〉概念成立。</li> </ul>

概念名	受け止めがなければ切り捨てる
定義	きょうだい ASD 児・者のことを社会に受け止められていないと感じたら切り捨てること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• F さん（男性・弟）65・・・別にあの一障害を持っていようが持っていないが、別に僕にとってはものすごい良い弟なので。あの一まあ隠す必要もないし、それでとやかく言われたら、その人とは終わりなのかなって。逆にたぶんそのくらい弟は大事に思ってます。弟をバカにするならこっちから。</li> <li>• G さん（女性・姉）55・・・結構面倒見ないといけないことは増えるっていう風には伝えてはいますが、G ホームに入れなかったら、一緒に住む、住まなきゃいけないっていうそういうことはまだ話してない。あとはやっぱりその経済的なところも出てくるじゃないですか。なので、そこはやっぱり教員っていうのがあって、なんとかできるかなって勝手に自分の中では思ってる。どうなるかわからないですけど。そこまではあんまり話は詰めてないです。ただやっぱり面倒みたりとか助けなきゃいけないことが、多くなるっていうのは理解してもらってるので。理解はないと無理かなっていうのは思います。</li> <li>• J さん（女性・弟）157・・・でもなんか弟のことを話してなんか別に受け入れてくれない人なら、うん、別に全然切り捨てますね。今はそういうスタンスになりました。</li> <li>• K さん（男性・兄）69・・・そうですね、突っ込まれた場合は自分の友達もそこまで、あまり自分はそういう偏見をしそうな人とは別に付き合ってたので…。まあ突っ込まれたら多分言ってたかもしないですけど、そこまで突っ込まれることが今まであんまり高校とかでは高校、大学となかったんで。大学でも兄弟いるか聞かれた時も兄が 1 人いるって言って。大学行ってんの？と聞かれるんですけど、高校卒業して働いてるよっていう感じ。ぐらいしか言わないんで。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• きょうだいの決意。「そういう人はこちらから願い下げ」と aggression を起点とした「関係性を切る」という動き。ある程度までは必要な部分があるが、やりすぎるとおそらく孤立していく。</li> <li>• 対極例：関わりの広がり がニュアンスとしては近いが、完全な対極例と言えるのか…？</li> </ul>

概念名	完全に話したくないわけではない
定義	きょうだい ASD 児・者のことを周囲の人に完全に話したくない、というわけではないこと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん（女性・弟）②115・・・元々話すの好きではないし人の話を聞ければいいなと思っていったんですけど。なんかいざ何かワークとかしてみたらうん。自分のビックリするくらい結構いろんな過去のこととか、思ってることとか、何かスラスラ出てきて。なんか話したくないわけではなかったんだなっていうふうに思っ。つかえながらも何か自分の言いたいことをすごく言えたなっていう感じがしてました会の時に。</li> <li>● G さん（女性・姉）62・・・あんまり話題にならないので。自分から話題にもしないですし。友達には話さないかも。姉のことは聞かれば答えますけど、自分から話をしたりとかはないです。結構今後関わりが深そうな人には話したりとかしますけど。そうじゃない人はスルーしちゃいますね。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 理解してくれる人もいれば、理解しない人もいる。それが子どもであっても大人であっても。何を基準に「理解してくれた」と感じたのだろうか？</li> <li>● 多くが大学のクラスやサークルなど。興味・関心が近い人が集まっているから。そこはきょうだいでもなくとも良い。ただ福祉・心理・教育と言った領域に身を置いていると、理解してもらいやすい。</li> <li>● 自ら ASD 児・者のことを話さないきょうだいは、必ずしも語らないことを頑なに維持しようとしているわけではない。どこかで聞いて欲しいし、受け止めて欲しいと感じている。</li> </ul>

概念名	多様性の理解
定義	きょうだいが社会には多様な人がいることを ASD 児・者との体験を通して理解すること
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B さん（女性・弟）44・・・<u>慣れてっちゃったのかな。慣れていちゃった。人の思い…いろんな人にアタックしてみても話をしてみても、人ってあの、障害を持ってる人を受け入れてくれる人と頑なにこう言っちゃう人</u>と<u>いろんなタイプがいるのをその期間に勉強できたって</u>いうか。で、<u>自分の中で蓄積して行って。もうどうしても認めてくれないって</u>いう人も、<u>大人でも子供でもどこにでもいるんだな</u>って<u>いうのを納得できて。</u>でも自分がどうなりたかなって考えるようになって。そしたら、やっぱり弟がいるおかげか、弟以外の障害の方も、おじいちゃんもおばあちゃんもみんな一緒の方が楽しい。それはこう多分弟が暮らしやすい世の中ができてくれれば、誰が暮らししても暮らしよい世の中ができるだろうって短大の時に思いました。勉強しながらその時に思っ。よかったなこの学校に来てって思いました。</li> <li>• D さん（男性・弟）②82・・・そう、「弟の業界」（笑）例えば 1 人で全然知らない子が見たら、いて、バス停で 1 人でジャンプしてる子がいたりすると、「先輩いたぞ！」って言ってみたりとか（笑）って言ってもよくわかってないから「うん」って言ってみたりとか。「お友達だね」とか。まあそういう話を家でもするんですけど、その小学校の頃から〇っていう塾じゃないですけどそこに行っ。で、<u>ようはそういう子たちがたくさんいて、なんか 1 人で怒ってる子がいたり泣いてる子がいたり…すごい関わろうとしてくる子がいたりとかして。</u>で、<u>僕その弟が幼稚園の頃から通ってたので、その迎えとかは一緒に行くことが多くて。小学校 2 年生の時とかだと、最後の 30 分くらいの遊びに入れてもらったりとかして</u>る中で、<u>こうなんだろうな、同じようで同じじゃないって</u>いう感覚がわかってきた。<u>こいつはこうだ、この子はこんな感じなんだらうな</u>っていう。</li> <li>• K さん（男性・兄）80・・・そうですね。言ってもしょうがないなって言う。<u>やっぱり親といえどやっぱり考えることも、価値観とかもだいぶ変わってきますし、子供なんで基本的に別に価値観とかいうあれもないですけれど、今ならあると思うんですけど。基本的にはそうですね。高校とか大学、特に大学ぐらいからは本当に意見が違う人もいっぱいいるけど、やっぱりその人間なんで意見が違うのは当たり前だし。</u>って<u>いうことで自分の意見を主張するって</u>いうことは段々なかったですねそこまで。</li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “障害”と一言と言っても色々あることを体験的に知っている。知れる機会がある。また、ASD 児・者を介して、社会には色々な人がいることも</li> </ul>

	<p>体験的に知ることになる。理解を示してくれるのか、そうでないのか、多様性の理解にも2経路あるということか？</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 対極例：概念不成立</li></ul>
--	---

概念名	知られざるを得ない
定義	きょうだいが ASD 児・者のことを知られたくなくても知られざるを得なくなる こと
具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>● C さん（女性・兄）②74,75・・・学生というか小中高とかそれくらいです ね。家に遊びに来るくらい仲が良い子。には実際まあこういう兄なんだ って見られて、まわざわぎ見せないですけど。家にいてこういう感じ なんだって。〈どのように思われましたか？〉私は別にそんな言わなくても もいいって思ってたんですけど、母親が「家に呼ぶんだったら先に話し ときなさいよ」っていうんですね「急に見たらみんなビックリしちゃう から」って。まあなんで私は「なんで？」って思いながらもこういうち ょっと話ができなくて、家の中ドタドタしちゃうんだ、みたいなことを 軽くしてたんですけど。</li> <li>● E さん（男性・弟）41・・・まあそれほど良い、その周りの子がすごい 影響を持ってる学校なんで、それこそ、特別級の子でも弟のことを知ら ないっていう子はいない。だから学校の中で俺の弟って言ったらもう 弟。で、弟のお兄ちゃんって言ったら俺。っていう、全校で多分知ら ない子いないんじゃないかな。</li> <li>● J さん 74（女性・弟）・・・仲良い子は普通に家とかにも呼んだりする ので、それで、それがきっかけで話したりとかもするし。あと、なんかこ の子なら大丈夫だろうなって信頼もなんとなくあったので。</li> </ul>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小中高の遊び友達に対しての [知られざるを得ない] と、パートナーに 対しての知られざるを得ない]。往々にして前者が学校場面で見られるの ではないだろうか。これは折に触れて出てきそうな概念。</li> <li>● 具体例より、「話す」というところに重きが置かれているよりも、「家族 に ASD 児・者がいる」ということを「知られる」というところに重きが 置かれていると考えられたため、概念名を変更した。[語らざるを得な い] → [知られざるを得ない]</li> <li>● 対極例は概念不成立。</li> </ul>